埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第343集

菖蒲町

九宮1／九宮2

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事に伴う
菖蒲地区埋蔵文化財発掘調査報告

2008

国土交通省　関東地方整備局
財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

１　九宮１遺跡調査区遠景

２　九宮２遺跡調査区遠景

九宮１・九宮２遺跡の紹介

九宮（きゅうみや）１遺跡、九宮２遺跡は、東に久喜（くき）市、南に白岡町（しらおかまち）を望む菖蒲町（しょうぶまち）の東端に位置しています。周辺には水田が一面に広がり、そのなかの縞状に連なる微高地上（わずかな高まり）に遺跡はつくられています。この台地が沈降（ちんこう）して形成されたものであるために、微高地上にある遺跡の発見は遅れていました。

本遺跡は圏央道（けんおうどう）の建設によって発見された遺跡で、調査の結果、縄文時代後期（約3500年前）と、古墳時代前期（約1700年前）の集落跡であることが分かりました。縄文時代では多くの土器や石器が、古墳時代では珍しい祭祀（さいし）跡が発見されるなど、地域の歴史を語るうえで、貴重な資料が追加されました。

序

国土交通省が進めている、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道の建設は、首都圏三環状道路の一翼を担い、国道16号を始めとする首都圏の交通渋滞を解消し、誰もが円滑に移動できる道路網の整備に欠くことのできない重要な施策であります。この通称圏央道の建設にともない、埼玉県では田園環境と調和のとれた産業基盤の整備を進め、周辺地域における産業の活性化を目指しているところであります。

圏央道建設路線内には、菖蒲町九宮1遺跡、九宮2遺跡の存在が知られており、埋蔵文化財の取り扱いについて埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課（当時）が関係諸機関と慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置が講じられることとなりました。発掘調査は国土交通省関東地方整備局の委託を受け、当事業団が実施いたしました。

調査の結果、縄文時代後期を中心として、旧石器時代から古墳時代前期にかけての集落遺跡であることが明らかになりました。特に、縄文時代後期では住居跡の発見とともに、大量の土器・石器が出土し、古墳時代前期ではこの地域で類例の少ない住居跡や、祭祀跡が発見されました。

本書はこれらの成果をまとめたものであります。埋蔵文化財の保護、普及・啓発の資料として、また学術研究の資料として本書を広く活用いただければ幸いであります。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力を頂きました国土交通省関東地方整備局北首都国道事務所をはじめ、埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課、菖蒲町教育委員会並びに地元関係者の方々に深く感謝申し上げます。

平成20年3月

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長　刈　部　博

例　言

1．本書は、南埼玉郡菖蒲町大字台に所在する九宮１遺跡・九宮２遺跡の発掘調査報告書である。

2．遺跡の略号と代表地番及び発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

九宮１遺跡（第１次）（ＫＵＭＹ１）
埼玉県南埼玉郡菖蒲町大字台1096他
平成17年４月26日付け教生文第２－７号

九宮２遺跡（第１次）（ＫＵＭＹ２）
埼玉県南埼玉郡菖蒲町大字台993－２他
平成16年12月22日付け教文第２－61号

九宮２遺跡（第２次）（ＫＵＭＹ２）
埼玉県南埼玉郡菖蒲町大字台992－４他
平成17年５月13日付け教生文第２－15号

九宮２遺跡（第３次）（ＫＹＭＹ２　３次）
埼玉県南埼玉郡菖蒲町大字台992－１他
平成18年11月１日付け教生文第２－94号

3．発掘調査は、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査である。調査は埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課（当時）が調整し、国土交通省関東地方整備局の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4．発掘調査事業は、Ｉ－３の組織により実施した。調査期間、担当者は以下のとおりである。

九宮１遺跡（第１次）
平成17年４月１日から平成17年５月31日まで、新屋雅明・松本美佐子が担当した。

九宮２遺跡（第１次）
平成16年12月15日から平成17年３月31日まで、中村倉司・村端和樹が担当した。

九宮２遺跡（第２次）
平成17年５月11日から平成17年５月31日まで、新屋雅明・松本美佐子が担当した。

九宮２遺跡（第３次）
平成18年11月１日から平成18年12月28日まで、小野美代子・宅間清公が担当した。

5．整理・報告書作成事業は平成17年７月１日から平成18年３月31日まで金子直行が、平成19年１月４日から平成19年３月23日まで礒﨑一が担当して実施し、平成20年３月24日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第343集として印刷・刊行した。

6．遺跡の基準点測量は株式会社東京航業研究所（九宮１遺跡・九宮２遺跡第１次・第２次）、株式会社シン技術コンサル（九宮２遺跡第３次）に、空中写真撮影は朝日航洋株式会社（九宮２遺跡第１次）、中央航業株式会社（九宮１遺跡・九宮２遺跡第２次・第３次）に委託した。

7．発掘調査時の写真撮影は各担当者が行い、遺物の写真撮影は大屋道則が行った。

8．出土品の整理・図版作成は礒﨑が行い、金子直行、西井幸雄、岩瀬譲、福田聖の協力、兵ゆり子、浅見ふみ、山北美穂の補助を受けた。

9．本書の執筆は、Ｉ－１は埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が、Ｉ－２・３は岩瀬、旧石器時代は西井、縄文時代は金子、古墳時代は福田、他は礒﨑が行った。Ｖは文末に記した。

10．本書の編集は礒﨑、金子が行った。

11．本書に掲載した資料は、平成20年４月以降埼玉県教育委員会が管理・保管する。

12．本書の作成にあたり下記の機関・方々から御教示・御協力を賜った。記して感謝いたします。
菖蒲町教育委員会
青木秀雄　赤澤徳明　奥野麦生　松井一明
三ツ木貞夫

凡　例

1．本書におけるX・Yの数値は、世界測地系（新測地系）による国土標準平面直角座標第Ⅸ系（原点：北緯36°00′00″、東経139°50′00″）に基づく座標値を示し、各挿図内における方位はすべて座標北を示している。

2．遺跡におけるグリッドは、前記座標系に基づいて設置し、10ｍ×10ｍを基本グリッドとしている。

3．グリッドの名称は、北西杭を基準とし、東西方向が西から東へＡ、Ｂ、Ｃ…、南北方向は北から南へ１、２、３…とした。呼称は東西－南北の順である。(例　Ｃ－３区)

4．本書における本文・挿図・表に示す遺構の略号は以下のとおりである。

ＳＪ	住居跡	ＳＢ	掘立柱建物跡
ＳＳ	祭祀遺構	ＳＫ	土壙
ＳＥ	井戸跡	ＳＤ	溝跡
Ｐ	ピット		

5．本書における挿図の縮尺は図中に指示したが、以下のとおりである。

遺構図

住居跡・掘立柱建物跡・土壙・井戸跡・

ピット	１：60	
溝跡	１：80	１：100
埋甕	１：30	
祭祀遺構	１：20	

遺物実測図

縄文土器拓影図・土師器・陶器・土製品

１：３

縄文土器	１：４	
石器	２：３	１：３

その他、遺物出土状況図、遺跡位置図、周辺地形図、遺跡全体図等は個別に縮尺率を設定した。

6．遺構断面図等に表記した水準数値は、海抜標高を示す。

7．挿図中下記の部分については網掛けで表現した。

遺構　焼土　黒20％

遺物　赤彩　黒10％

8．遺物観察表については次のとおりである。

口径・器高・底径はcm、重さはｇを単位とする。

・（　）内の数値は復元推定値を示す。

・胎土は肉眼で観察できるものを示した。

Ａ：雲母　Ｂ：片岩　Ｃ：角閃石　Ｄ：長石　Ｅ：石英　Ｆ：軽石　Ｇ：砂粒子　Ｈ：赤色粒子　Ｉ：白色粒子　Ｊ：白色針状物質　Ｋ：黒色粒子　Ｌ：その他

・焼成は、良好・普通・不良の３段階に分けた。

・残存率は、破片の場合、図示した器形の部分に対する割合を示した。

9．本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の１/50,000地形図、菖蒲町発行の菖蒲町全図１/10,000および菖蒲町都市計画図１/2,500を使用した。

10．土層および土器類の色調の表記は『新版標準土色帖』2002年度版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）に従った。

目　次

巻頭図版
遺跡の紹介
序
例言
凡例
目次
Ⅰ　発掘調査の概要 …… 1
1．調査に至る経過 …… 1
2．発掘調査・報告書作成の経過 …… 2
（1）発掘調査 …… 2
（2）整理・報告書の作成 …… 2
3．発掘調査・報告書作成の組織 …… 3
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 4
1．地理的環境 …… 4
2．歴史的環境 …… 9
Ⅲ　九宮1遺跡の調査 …… 11
1．遺跡の概要 …… 11
2．旧石器時代の調査 …… 14
3．住居跡 …… 16
4．掘立柱建物跡 …… 19
5．土壙 …… 20
6．井戸跡 …… 26
7．ピット跡 …… 30
8．グリッド出土遺物 …… 32
（1）縄文土器 …… 32
Ⅳ　九宮2遺跡の調査 …… 34
1．遺跡の概要 …… 34
2．旧石器時代の調査 …… 39
（1）概要 …… 39
（2）石器集中 …… 39
（3）石器 …… 39
（4）グリッド出土の石器 …… 39
3．住居跡 …… 44
（1）縄文時代 …… 45
（2）古墳時代 …… 49
4．祭祀遺構 …… 56
5．埋甕 …… 58
6．土壙 …… 66
7．溝跡 …… 75
8．ピット跡 …… 78
9．グリッド出土遺物 …… 83
（1）縄文土器 …… 83
（2）石器 …… 137
（3）古墳時代の土器 …… 143
Ⅴ　調査のまとめ …… 147
1．縄文時代 …… 147
（1）遺構について …… 147
（2）縄文土器について …… 148
2．古墳時代 …… 150
（1）出土土器について …… 150
（2）祭祀跡について …… 150
（3）口縁穿孔のミニチュア土器について …… 154
写真図版

挿図目次

第1図　埼玉県の地形 …… 4
第2図　遺跡周辺の地形図 …… 5
第3図　周辺の遺跡（縄文時代） …… 6
第4図　周辺の遺跡（縄文時代以降） …… 7
第5図　九宮1遺跡調査区全体図 …… 12
第6図　旧石器時代調査区 …… 14
第7図　旧石器時代遺物分布図 …… 15
第8図　第1号住居跡 …… 17
第9図　第1号住居跡出土遺物 …… 18
第10図　掘立柱建物跡 …… 19
第11図　土壙（1） …… 21
第12図　土壙（2） …… 22
第13図　土壙（3） …… 23
第14図　土壙出土遺物 …… 24
第15図　井戸跡 …… 26
第16図　井戸跡・グリッド出土遺物 …… 27
第17図　ピット（1） …… 28
第18図　ピット（2） …… 29
第19図　ピット（3） …… 30
第20図　グリッド出土土器 …… 33
第21図　九宮2遺跡調査区全体図（1） …… 34
第22図　基本土層 …… 35
第23図　九宮2遺跡調査区全体図（2） …… 36
第24図　九宮2遺跡調査区全体図（3） …… 37
第25図　旧石器時代調査区 …… 40
第26図　旧石器時代調査区出土遺物 …… 40
第27図　旧石器時代調査区遺物分布図 …… 41
第28図　旧石器時代グリッド出土遺物（1） …… 42
第29図　旧石器時代グリッド出土遺物（2） …… 43
第30図　第3号住居跡 …… 44
第31図　第3号住居跡出土遺物 …… 45
第32図　第5号住居跡 …… 46
第33図　第5号住居跡出土遺物 …… 47
第34図　第6号住居跡 …… 48
第35図　第6号住居跡出土遺物 …… 48
第36図　第1号住居跡 …… 50
第37図　第1号住居跡出土遺物 …… 51
第38図　第2号住居跡 …… 52
第39図　第2号住居跡出土遺物 …… 53
第40図　第4号住居跡 …… 54
第41図　第4号住居跡出土遺物 …… 55
第42図　第1号祭祀跡 …… 57
第43図　第1号祭祀跡出土遺物 …… 57
第44図　埋甕出土状況図（1） …… 59
第45図　埋甕出土状況図（2） …… 60
第46図　埋甕1 …… 61
第47図　埋甕2 …… 62
第48図　埋甕3（1） …… 63
第49図　埋甕3（2）・5・6 …… 64
第50図　埋甕4 …… 65
第51図　土壙（1） …… 67
第52図　土壙（2） …… 68
第53図　土壙（3） …… 69
第54図　土壙出土遺物（1） …… 70
第55図　土壙出土遺物（2） …… 71
第56図　土壙出土遺物（3） …… 72
第57図　溝跡（1） …… 76
第58図　溝跡（2） …… 77
第59図　ピット（1） …… 79
第60図　ピット（2） …… 80
第61図　ピット（3） …… 81
第62図　グリッド出土土器（1） …… 84
第63図　グリッド出土土器（2） …… 85
第64図　グリッド出土土器（3） …… 86
第65図　グリッド出土土器（4） …… 87
第66図　グリッド出土土器（5） …… 88
第67図　グリッド出土土器（6） …… 89
第68図　グリッド出土土器（7） …… 91

第69図　グリッド出土土器（8）…… 92
第70図　グリッド出土土器（9）…… 93
第71図　グリッド出土土器（10）…… 95
第72図　グリッド出土土器（11）…… 96
第73図　グリッド出土土器（12）…… 97
第74図　グリッド出土土器（13）……100
第75図　グリッド出土土器（14）……101
第76図　グリッド出土土器（15）……102
第77図　グリッド出土土器（16）……103
第78図　グリッド出土土器（17）……106
第79図　グリッド出土土器（18）……107
第80図　グリッド出土土器（19）……108
第81図　グリッド出土土器（20）……110
第82図　グリッド出土土器（21）……111
第83図　グリッド出土土器（22）……112
第84図　グリッド出土土器（23）……116
第85図　グリッド出土土器（24）……117
第86図　グリッド出土土器（25）……120
第87図　グリッド出土土器（26）……121
第88図　グリッド出土土器（27）……123
第89図　グリッド出土土器（28）……126
第90図　グリッド出土土器（29）……127
第91図　グリッド出土土器（30）……128
第92図　グリッド出土土器（31）……129
第93図　グリッド出土石器（32）……138
第94図　グリッド出土石器（33）……139
第95図　グリッド出土石器（34）……140
第96図　グリッド出土石器（35）……141
第97図　グリッド出土土器（36）……144
第98図　グリッド出土土器（37）……145
第99図　九宮２遺跡出土の古墳時代の土器
……151
第100図　九宮２遺跡周辺の同時期の資料
……152
第101図　ミニチュア壺を用いた祭祀遺構の例
……153
第102図　各遺跡のミニチュア壺 ……154

表目次

第１表　周辺の遺跡一覧表 …… 8
第２表　旧石器時代遺物観察表 …… 15
第３表　第１号住居跡計測表 …… 16
第４表　土壙計測表 …… 24
第５表　井戸跡・グリッド出土遺物観察表 … 27
第６表　ピット計測表（１） …… 30
第７表　ピット計測表（２） …… 31
第８表　旧石器時代調査区出土遺物観察表 … 43
第９表　旧石器時代グリッド出土遺物観察表　43
第10表　第３号住居跡計測表 …… 45
第11表　第５号住居跡計測表 …… 47
第12表　第１号住居跡出土遺物観察表 …… 51
第13表　第２号住居跡出土遺物観察表 …… 52
第14表　第４号住居跡計測表 …… 54
第15表　第４号住居跡出土遺物観察表 …… 55
第16表　第１号祭祀跡出土遺物観察表 …… 56
第17表　土壙計測表 …… 69
第18表　ピット計測表（１）…… 78
第19表　ピット計測表（２）…… 82
第20表　グリッド出土土器一覧表１ ……131
第21表　グリッド出土土器一覧表２ ……132
第22表　グリッド出土土器一覧表３ ……133
第23表　グリッド出土土器一覧表４ ……134
第24表　グリッド出土土器一覧表５ ……135
第25表　グリッド出土土器一覧表６ ……136
第26表　グリッド出土石器観察表 ……142
第27表　グリッド出土土器観察表 ……146

写真図版目次

図版1　1　調査区全景
　　2　第1号住居跡
図版2　1　第6号土壙
　　2　第19号土壙
　　3　第20号土壙
　　4　第21号土壙
　　5　第22号土壙
　　6　第23号土壙
　　7　第1号井戸跡断面
　　8　第2号井戸跡断面
図版3　1　第1号住居跡出土遺物（1）
　　2　第1号住居跡出土遺物（2）
図版4　1　第1号井戸跡・グリッド出土遺物(1)
　　2　グリッド出土遺物（2）
図版5　1　グリッド出土遺物（3）
　　2　グリッド出土遺物（4）
図版6　1　調査区全景（1次　西から）
　　2　調査区全景（1次　南西から）
図版7　1　調査区全景（2次）
　　2　調査区全景（3次）
図版8　1　第3号住居跡
　　2　第5号住居跡遺物出土状況
図版9　1　第6号住居跡遺物出土状況
　　2　第1号住居跡
図版10　1　第2号住居跡
　　2　第4号住居跡
図版11　1　第3号住居跡炉跡
　　2　第5号住居跡
　　3　第2号住居跡遺物出土状況
　　4　第1号祭祀跡遺物出土状況
　　5　埋甕1（1）
　　6　埋甕1（2）
　　7　埋甕2
　　8　埋甕3
図版12　1　埋甕4
　　2　第1号土壙
　　3　第8号土壙
　　4　第9号土壙
　　5　第23・24・25号土壙
　　6　第1号溝跡断面
　　7　第2号溝跡
　　8　第3～5号溝跡
図版13　1　第1号住居跡出土遺物
　　2　第2号住居跡出土遺物
　　3　第2号住居跡出土遺物
　　4　第2号住居跡出土遺物
　　5　第2号住居跡出土遺物
　　6　第4号住居跡出土遺物
図版14　1　第1号祭祀跡出土遺物
　　2　第1号祭祀跡出土遺物
　　3　第1号祭祀跡出土遺物
　　4　第1号祭祀跡出土遺物
　　5　第1号祭祀跡出土遺物
　　6　第1号祭祀跡出土遺物
図版15　1　埋甕1
　　2　埋甕2
　　3　埋甕3－1
　　4　埋甕3－2
　　5　埋甕4
　　6　埋甕5
図版16　1　第64図1（VA群1類2種a）
　　2　第64図2（VA群1類2種a）
　　3　第65図1（VA群1類2種a）
　　4　第65図2（VA群1類2種b）
　　5　第65図3（VC群1類2種）
　　6　第65図4（VB群2類2種a）
図版17　1　第65図7（VA群3類1種）
　　2　第66図3（VC群1類4種）
　　3　第66図4（VB群4類2種）
　　4　第66図2（VB群4類1種）

5　第66図6（ＶＢ群4類2種）
6　第67図2（Ⅵ群1類）
図版18　1　旧石器時代調査区出土遺物表・裏
図版19　1　旧石器時代グリッド出土遺物（1）
2　旧石器時代グリッド出土遺物（2）
図版20　1　第3号住居跡出土遺物
2　第5号住居跡出土遺物
図版21　1　第6号住居跡出土遺物
2　第1号住居跡出土遺物
図版22　1　第2号住居跡出土遺物
2　第4号住居跡・祭祀遺構出土遺物
図版23　1　土壙出土遺物（1）
2　土壙出土遺物（2）
図版24　1　土壙出土遺物（3）
2　土壙出土遺物（4）
図版25　1　グリッド出土土器
（Ⅰ群1～2類、第Ⅱ群1～4類）
2　グリッド出土土器
（Ⅲ群1～2類）
図版26　1　グリッド出土土器
（Ⅳ群1～2類）
2　グリッド出土土器
（Ⅳ群3類）
図版27　1　グリッド出土土器
（Ⅳ群3類）
2　グリッド出土土器
（ＶＡ群1類1種a～c）
図版28　1　グリッド出土土器
（ＶＡ群1類2種a～c）
2　グリッド出土土器
（ＶＡ群2類1種a・b）
図版29　1　グリッド出土土器
（ＶＡ群2類1種c）
2　グリッド出土土器
（ＶＡ群2類2種、3類1～3種）
図版30　1　グリッド出土土器
（ＶＡ群4類1種a・b）
2　グリッド出土土器
（ＶＡ群4類1種c）
図版31　1　グリッド出土土器
（ＶＡ群4類1種d・e）
2　グリッド出土土器
（ＶＡ群4類2種a）
図版32　1　グリッド出土土器
（ＶＡ群4類2種b）
2　グリッド出土土器
（ＶＡ群4類2種c）
図版33　1　グリッド出土土器
（ＶＡ群5類1種、2種）
2　グリッド出土土器
（ＶＡ群5類3種、4種）
図版34　1　グリッド出土土器
（ＶＡ群6類1種a・b）
2　グリッド出土土器
（ＶＡ群6類2種a～c）
図版35　1　グリッド出土土器
（ＶＢ群1類1種a・b）
2　グリッド出土土器
（ＶＢ群1類2種a・b）
図版36　1　グリッド出土土器
（ＶＢ群2類1種、2種a・b）
2　グリッド出土土器
（ＶＢ群3類1種a～c）
図版37　1　グリッド出土土器
（ＶＢ群3類2種a～d）
2　グリッド出土土器
（ＶＢ群4類1種、2種、3種）
図版38　1　グリッド出土土器
（ＶＢ群5類1種、2種）
2　グリッド出土土器
（ＶＢ群5類3種）
図版39　1　グリッド出土土器
（ＶＥ群1類～5類）
2　グリッド出土土器

（ＶＣ群１類１種）
図版40　1　グリッド出土土器
（ＶＣ群１類２～４種、２類１～２種）
2　グリッド出土土器
（ＶＣ群３類１種ａ・ｂ）
図版41　1　グリッド出土土器
（ＶＣ群３類２種、３種ａ～ｃ）
2　グリッド出土土器
（ＶＤ群１類、２類、３類１・２種）
図版42　1　グリッド出土土器
（ＶＦ群１類、２類、３類１～３種）
2　グリッド出土土器
（ＶＦ群４類）
図版43　1　グリッド出土土器
（ＶＧ群１類～５類）
2　グリッド出土土器
（Ⅵ群１類、２類、３類）
図版44　1　グリッド出土石器（１）
2　グリッド出土石器（２）
図版45　1　グリッド出土石器（３）
2　グリッド出土石器（４）
図版46　1　グリッド出土石器（５）
2　グリッド出土石器（６）
図版47　1　グリッド出土石器（７）表・裏
2　グリッド出土土錘
図版48　縄文土器展開写真

Ⅰ　発掘調査の概要

1．調査に至る経過

埼玉県では、『彩の国５か年計画21』に「便利で快適な総合交通体系を整備する」という基本目標を掲げて、「県土の骨格となる高速道路網やインターチェンジへのアクセス道路の整備推進」を重要施策としている。こうした中で、国土交通省関東地方整備局北首都国道事務所が主体となって建設を進める首都圏中央連絡自動車道は県内を東西に結ぶ大動脈としてその完成が待望されている。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課では、このような施策の推進に伴う文化財の保護について、従前より関係部局との事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

本事業にかかる埋蔵文化財の所在および取扱いについては、平成15年８月６日付け北国調第44号で、国土交通省関東地方整備局北首都国道事務所長より照会があった。

文化財保護課（当時）では確認調査を実施し、その結果をもとに、平成16年３月16日付け教文第3567号で、九宮１遺跡、九宮２遺跡の取扱いについて次のように回答した。

１　埋蔵文化財の所在

工事予定地には以下の埋蔵文化財が所在する。

名称（No.）	種別	時代	所　在　地
九宮１遺跡 (No.84-042)	集落跡	縄文	菖蒲町大字台 1096他
九宮２遺跡 (No.84-043)	集落跡	縄文 古墳	菖蒲町大字台 993-2他

２　取扱いについて

上記の埋蔵文化財は現状保存することが望ましいが、工事計画上やむを得ず上記の埋蔵文化財包蔵地の現状を変更する場合には、事前に文化財保護法第57条の３の規定に基づく発掘通知を埼玉県教育委員会教育長あてに提出し、記録保存のための発掘調査を実施すること。

発掘調査については、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施機関としてあたることとし、事業団、国土交通省、文化財保護課の三者により調査方法、期間、経費などの問題を中心に協議が行われた。

その結果、調査は九宮１遺跡については平成17年度、九宮２遺跡については平成16,17,18年度に実施された。

なお、文化財保護法第94条の規定による埋蔵文化財発掘通知が国土交通省関東地方整備局北首都国道事務所長から平成16年４月26日付け北国調第１号で提出され、それに対する保護上必要な勧告は平成16年５月14日付け教文第３－66号で行った。また、第92条の規定による発掘調査届が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。

発掘調査の届出に対する指示通知番号は次のとおりである。

九宮１遺跡

平成17年４月26日付け　教生文第２－７号

九宮２遺跡

平成16年12月22日付け　教文第２－61号

平成17年５月13日付け　教生文第２－15号

平成18年11月１日付け　教生文第２－94号

(埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課)

2．発掘調査・報告書作成の経過

（1）発掘調査

九宮１遺跡第１次調査

平成17年4月1日から平成17年5月31日まで実施した。調査面積は1,625㎡である。

4月当初より事務手続きを行い、中旬に重機による表土除去作業を開始した。並行して補助員による作業に着手し、遺構確認作業後、各時期の遺構精査を実施した。遺構精査の後、土層断面図・平面図等の作成、遺物出土状況や遺構の写真撮影行い、5月31日に空中写真撮影を実施した。

遺構の調査終了後、現場埋め戻し、機材および事務所撤去・事務手続きを行い、調査を終了した。

九宮２遺跡第１次調査

平成16年12月15日から平成17年3月31日まで実施した。調査面積は2,255㎡である。

12月中旬より事務手続きを行い、下旬に重機による表土除去作業を開始した。1月中旬から補助員による作業に着手し、遺構確認作業後、遺構精査を実施した。遺構精査の後、土層断面図・平面図等の作成、遺物出土状況や遺構の写真撮影行い、3月15日に空中写真撮影を実施した。空中写真終了後、旧石器時代の確認調査を行った。

遺構の調査終了後、現場埋め戻し、機材および事務所撤去・事務手続きを行い、調査を終了した。

九宮２遺跡第２次調査

平成17年5月11日から平成17年5月31日まで実施した。調査面積は130㎡である。

中旬より事務手続きを行い、その後重機による表土除去作業を開始した。並行して補助員による作業に着手し、遺構確認作業後、遺構精査を実施した。遺構精査の後、土層断面図・平面図等の作成、遺物出土状況や遺構の写真撮影行い、最後に旧石器時代の確認調査を行った。

遺構の調査終了後、現場埋め戻し、機材および事務所撤去・事務手続きを行い、調査を終了した。

九宮２遺跡第３次調査

平成18年11月1日から平成18年12月28日まで実施した。調査面積は378㎡である。

11月当初より事務手続きを行い、中旬に重機による表土除去作業を開始した。並行して補助員による作業に着手し、遺構確認作業後、遺構精査を実施した。遺構精査の後、土層断面図・平面図等の作成、遺物出土状況や遺構の写真撮影行い、12月15日に空中写真撮影を実施した。最後に、旧石器時代の確認調査を行った。

遺構の調査終了後、現場埋め戻し、機材および事務所撤去・事務手続きを行い、調査を終了した。

（2）整理・報告書の作成

整理・報告書の作成事業は、平成17年7月1日から平成18年3月31日および平成19年1月4日から平成19年3月23日まで実施した。

平成17年7月当初から出土遺物の水洗・註記を行い、続いて遺物の接合・復元作業に移った。また全体図・遺構図面については、図面修正を経て第2原図を作成し、スキャナーで取り込んだものをコンピューターでデジタルトレースを行った。遺物は復元作業が終了したものから実測作業に入り、順次トレース・採拓を開始した。

平成19年1月上旬から遺物の写真撮影、図面・写真の割付、原稿執筆を進め報告書の編集を行った。

平成20年1月に印刷会社を決定し、入稿、校正を経て、同年3月末に報告書を刊行した。入稿後に本報告書で扱った図面類・写真類・遺物等を整理・分類し、収納作業を行った。

3．発掘調査・報告書作成の組織

平成16年度（発掘調査）

理事長	福田陽充	**調査部**	
常務理事兼管理部長	中村英樹	調査部長	宮崎朝雄
管理部		調査部副部長	坂野和信
管理部副部長	村田健二	主席調査員（調査第一担当）	昼間孝志
主席	田中由夫	統括調査員	中村倉司
		調査員	村端和樹

平成17年度（発掘調査・報告書作成）

理事長	福田陽充	**調査部**	
常務理事兼管理部長	保永清光	調査部長	今泉泰之
管理部		調査部副部長	坂野和信
管理部副部長	村田健二	主席調査員（調査第一担当）	昼間孝志
主席	髙橋義和	主席調査員（整理第一担当）	金子直行
		統括調査員（発掘）	新屋雅明
		調査員（発掘）	松本美佐子

平成18年度（発掘調査・報告書作成）

理事長	福田陽充	**調査部**	
常務理事兼総務部長	岸本洋一	調査部長	今泉泰之
総務部		調査部副部長	小野美代子
総務部副部長	昼間孝志	主幹兼整理第一課長（整理）	礒﨑一
総務課長	髙橋義和	主幹兼調査第一課長	金子直行
		主事（発掘）	宅間清公

平成19年度（報告書刊行）

理事長	刈部博	**調査部**	
常務理事兼総務部長	岸本洋一	調査部長	村田健二
総務部		調査部副部長	礒﨑一
総務部副部長	昼間孝志	兼資料活用部副部長	
総務課長	松盛孝	調査監兼調査第一課長	金子直行
		整理第一課長	宮井英一

II　遺跡の立地と環境

1．地理的環境

九宮１遺跡、九宮２遺跡の所在する菖蒲町は、埼玉県東部にあり、商業中心の市街地と、南東部の工業団地からなり、周辺は水田が広がっている。

周辺の地形は、主に大宮台地と加須低地からなり、大宮台地が北方の加須低地に移行する部分で、概して平坦な地形となっている。

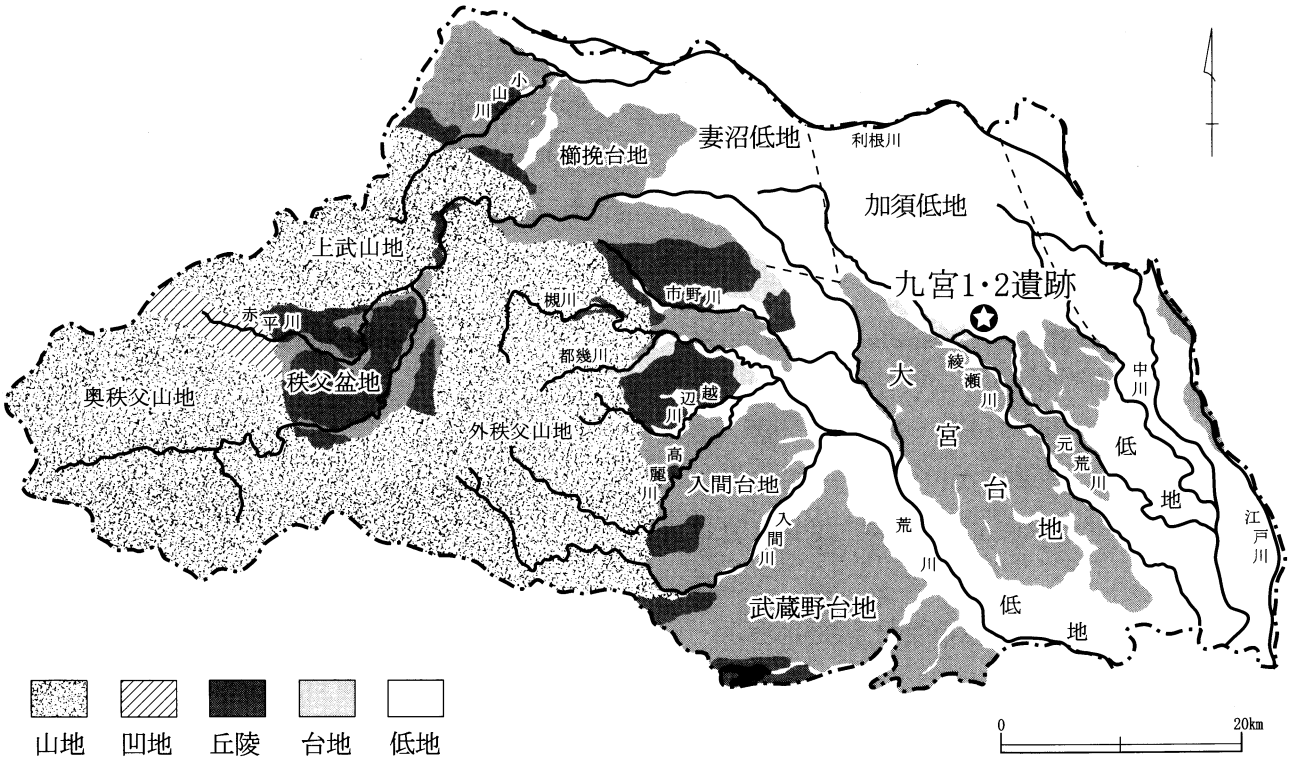
大宮台地は、長さ約30km、幅約８kmの広がりを持つ台地で、標高は西側が高く、北一東一南東方向へと次第に低くなる。台地は、大小の河川の開析により分離した台地群が形成されている。

加須低地は、利根川中流に発達する低地で、南部で次第に大宮台地に変わっていく。また関東造盆地運動による埋没台地が存在し、栢間地区、北東の小林地区、星川左岸の西堀・三箇地区等で認められている。その他菖蒲町周辺では、埋没台地に起因する微高地と低湿地、自然堤防、後背湿地等が認められている。

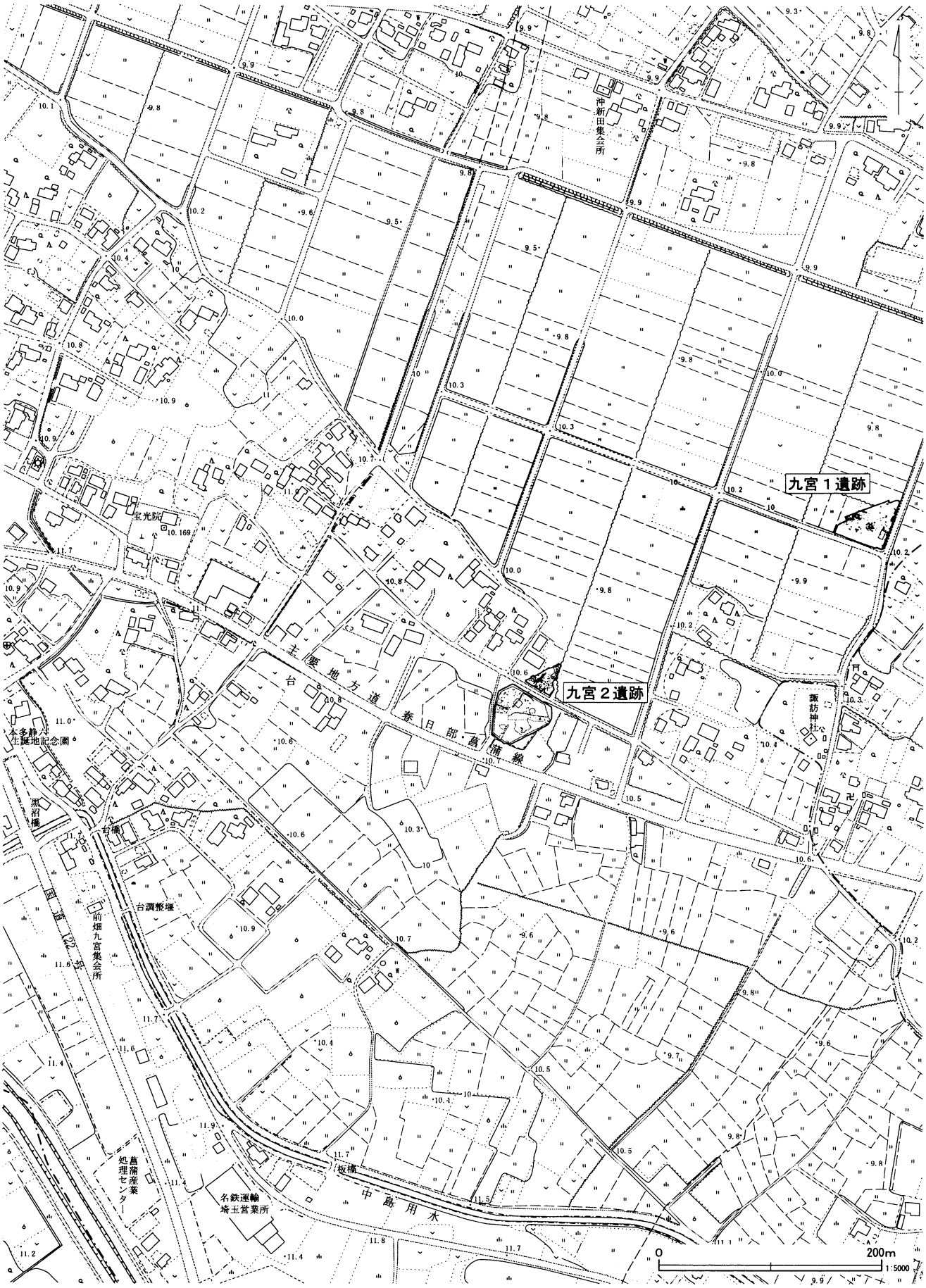
自然堤防は、星川に沿って形成され、標高は、南西部が高く北東部が低い。低地は、微高地の間に広く発達している。その他河川は、元荒川、野通川、備前堀川、庄兵衛堀川、見沼代用水等多くの河川があり、北西から南東方向に流下している。

九宮１遺跡、九宮２遺跡は、菖蒲町の南東、久喜市と白岡町と境界を接する付近に位置し、標高約９ｍ前後の北西から南東方向に延びる台地上に立地し、南側を星川が東流している。

九宮１遺跡では、調査区から四方に緩い傾斜がみられ、極めて小規模な舌状台地に立地していると考えられる。九宮２遺跡は、同じく埋没ローム台地上に立地し、調査区は北東側に傾斜している。



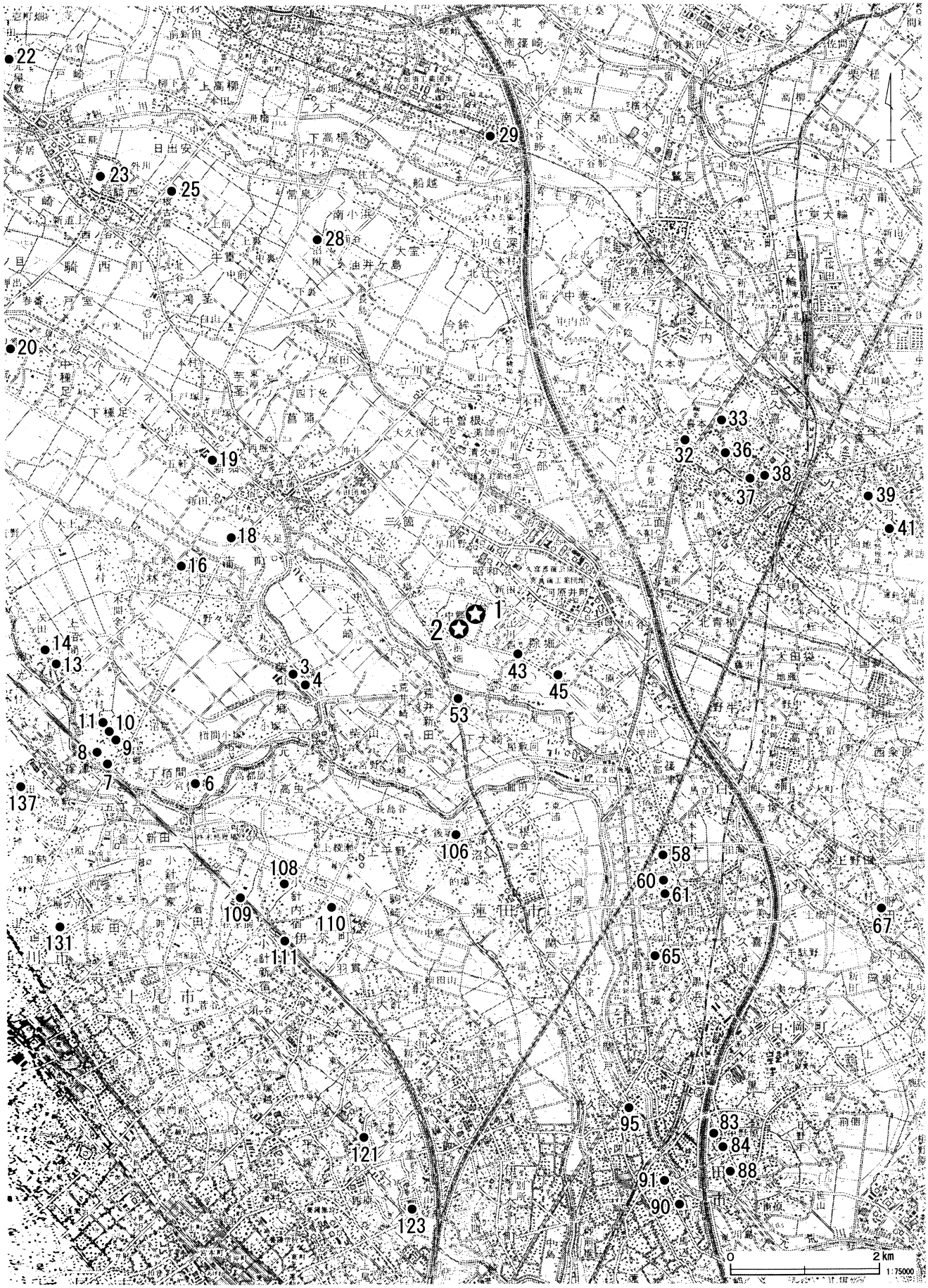
第１図　埼玉県の地形



第２図　遺跡周辺の地形図

第３図　周辺の遺跡（縄文時代）

第３図　周辺の遺跡（縄文時代）



第４図　周辺の遺跡（縄文時代以降）

第１表　周辺の遺跡一覧表

菖蒲町	1	九宮１遺跡	縄(中)
	2	九宮２遺跡	旧、縄(中・後)、古(前)
	3	神ノ木１遺跡	縄(中)、古(後)、奈
	4	神ノ木２遺跡	縄(中)、古(後)
	5	栢間小塚遺跡	縄(中・後)
	6	大日塚古墳	古
	7	富士塚前遺跡・古墳	縄、近/古
	8	下栢間遺跡	縄(早～後)、近
	9	押出塚古墳	古(後)
	10	天王山塚古墳	古
	11	天王山北遺跡	古(後)、中・近
	12	神明神社東遺跡	弥、古
	13	禿塚古墳	古(後)
	14	夫婦塚古墳	古
	15	地獄田遺跡	縄(後)
	16	東浦古墳	古(中)
	17	小林八束遺跡	縄(早・後)、古、近
	18	菖蒲城	縄(早・中)、平、中
	19	物見塚古墳	古
騎西町	20	種垂城・小沼耕地遺跡	縄(前)、古、中
	21	下崎中郷遺跡	旧～平
	22	戸崎城	中
	23	修理山遺跡	縄(早・中～晩)、古(前)、中・近
	24	萩原遺跡	旧～古
	25	騎西城	中・近
	26	町並遺跡	縄
	27	上裏遺跡	縄
加須市	28	鐘撞山遺跡(油井城)	
	29	花崎城	中、近
鷲宮市	30	堀之内	縄(前・後)、古(前～後)
久喜市	31	宮浦遺跡	縄(後)
	32	新堀遺跡	縄(中)、平
	33	足利遺跡	旧、縄(早～後)、奈、中
	34	道合中遺跡	縄(後)、奈
	35	道合遺跡	縄(早・中～晩)
	36	甘棠院西遺跡	縄(前～後)、奈、中
	37	光明寺遺跡	縄(前～後)、奈
	38	御陣山遺跡	縄(早～晩)、奈・平、中・近
	39	高輪寺遺跡	縄(早～後)、弥、古、奈、中
	40	吉羽北遺跡	縄(後)
	41	吉羽遺跡	縄(前)、平
	42	医王院遺跡	縄(中)、中
	43	江川東遺跡	縄(中)
	44	部井遺跡	縄(後・晩)
	45	不動寺遺跡	縄(中)、古
	46	三宝寺遺跡	縄(後)
	47	太田袋遺跡	縄(中)
宮代町	48	西粂原遺跡	縄(早・前)
白岡町	49	嶋岡遺跡	縄(前～中)
	50	上荒井ヶ崎西遺跡	縄(早・中)
	51	柏崎遺跡	縄(中・後)
	52	上荒井ヶ崎遺跡	縄(早・中)
	53	皿沼遺跡	縄(中・後)、古(前)
	54	下荒井ヶ崎遺跡	縄(中・後)
	55	天神山東遺跡	縄(早～中)
	56	天神山遺跡	縄(早)、古(前)
	57	中妻遺跡	縄(早・中)、古、平
	58	神山遺跡	縄(前～後)、古(中)、平、近
	59	白岡東遺跡	縄(早・前・後)
	60	正福院貝塚	縄(早～晩)
	61	入耕地遺跡	縄(中～晩)、古(前)、中
	62	茶屋遺跡	縄(前～後)、古(前)
	63	新屋敷遺跡	縄(早～後)
	64	山遺跡	縄(早～後)
	65	タタラ山遺跡	旧、縄(早～晩)、古(前)、奈・平、近
	66	新田遺跡	縄(中)、中・近
	67	赤砂利遺跡	縄(中)、中・近
	68	鶴ヶ曽根遺跡	縄(後)
	69	清左衛門遺跡	縄(後～晩)
白岡町	70	神台遺跡	縄(早～中)、中・近
	71	下道遺跡	縄(中～晩)
	72	川端遺跡	縄(前・中)
	73	西谷西遺跡	縄(前・中)
	74	前田遺跡	縄(中～晩)
	75	鶴巻遺跡	縄(中)、奈・平
	76	本田下遺跡	縄(早～後)、中・近
岩槻市	77	古ヶ場貝塚	縄(前・後)
蓮田市	78	江ヶ崎貝塚	縄(前)
	79	雅楽谷遺跡	縄(中～晩)
	80	亀の子山遺跡	縄(前・中)
	81	御林遺跡	縄(後・晩)、奈・平
	82	宿上貝塚	縄(前～後)、古(前)、近
	83	宿浦遺跡	旧、縄(前)、古(前)、平、近
	84	宿下貝塚	縄(前・中)
	85	黒浜耕地遺跡	縄(前)、中・近
	86	黒浜寺前遺跡	縄(前～後)、古、近
	87	寺前平方遺跡	縄(前・中)
	88	天神前遺跡	旧、縄(早～中)、近
	89	帆立遺跡	縄(中)、中・近
	90	ささら遺跡	縄(早～晩)、古、中・近
	91	久台遺跡	縄(中～晩)、平、近
	92	堂山公園遺跡	縄(早～晩)、近
	93	炭釜屋敷貝塚	縄(前)
	94	椿山遺跡	縄(前～後)、古(後)、奈・平
	95	荒川附遺跡	古(後)、奈・平
	96	坂堂貝塚	縄(前)
	97	関山貝塚	縄(前・晩)
	98	城西谷遺跡	縄(早～中)
	99	閏戸前田遺跡	縄(早・中・後)、近
	100	閏戸吹上遺跡	縄、古、中・近
	101	閏戸足利遺跡	中・近
	102	綾瀬貝塚	縄(前・中)
	103	上閏戸貝塚	縄(前)
	104	根金大山遺跡	縄(後)
	105	的場遺跡	縄(中・後)、古、近
	106	井沼遺跡・井沼館跡	縄(中～晩)/中・近
	107	榎戸遺跡	縄(中・後)、古(後)、中・近
伊奈町	108	薬師堂根遺跡	縄(早・中)、古(前)、平、中・近
	109	向原遺跡	旧、縄、古(前)、奈・平、中・近
	110	戸崎前遺跡	縄(早～後)、古(前)、奈・平、中・近
	111	相野谷遺跡	縄、古(前)、中・近
	112	八幡谷遺跡	中・近
	113	原遺跡・谷畑遺跡	旧、縄(中)、古、中・近/縄、中・近
	114	大針貝塚	縄(前)
	115	北遺跡	旧、縄(中)、中・近
	116	小貝戸貝塚	縄(前)
	117	氷川神社裏遺跡	縄(後・晩)
	118	久保山遺跡	旧、縄(早～後)
	119	志久遺跡	縄(中)
	120	丸山遺跡	旧、縄(前～後)、平、中・近
	121	小室天神前遺跡	縄(中～晩)、弥
	122	赤羽遺跡	縄(中)、古
	123	大山遺跡	旧、縄(中)、古(前)、奈・平　、近
上尾市	124	谷津下Ⅰ遺跡	旧、縄(早～後)、平
	125	平塚氷川遺跡	旧、縄(早・晩)、平
	126	南前遺跡	縄(中)、古
	127	前通遺跡	古、中・近
	128	中妻三丁目遺跡	旧、縄(草創～後)、近
桶川市	129	稲荷神社境内遺跡	
	130	南遺跡	
	131	堀ノ内Ⅰ遺跡	縄(早・中)
	132	細谷Ⅱ遺跡	
	133	細谷Ⅰ遺跡	
	134	笹原Ⅱ遺跡	
	135	峰遺跡	
	136	後谷遺跡	縄(中～晩)
	137	新田遺跡	縄、弥(後)、古(前)

2．歴史的環境

旧石器時代の遺跡は、九宮２遺跡でナイフ形石器を主体とする石器集中が調査された。

周辺では騎西町前遺跡、下崎中郷遺跡、道上遺跡等がある。

縄文時代の遺跡は、周辺では神ノ木１遺跡（3）、神ノ木２遺跡（4）丸谷下遺跡、地獄田遺跡（15）等がある。

地獄田遺跡は、神ノ木１遺跡、同２遺跡の西約４ｋｍの低地（埋没ローム）上に位置する後・晩期の集落跡で、安行式期の住居跡が５軒検出されている。この他縄文時代の集落は、桶川市の後谷遺跡（後期）（136）、伊奈町では大針貝塚（前期）（114）、北遺跡（115）、原遺跡（中期）（113）、志久遺跡（中期）（119）、戸崎前遺跡（中期・後期・晩期）（110）、蓮田市では関山貝塚（前期）（97）、雅楽谷遺跡（79）、ささら遺跡（後・晩期）（90）などがある。

弥生時代の遺跡は、周辺ではほとんど検出されていない。弥生時代中期の遺跡は、星川を遡った熊谷市の北島遺跡、古宮遺跡、行田市小敷田遺跡等濃密な分布が認められ、池上式並行期に沖積地の開発が進んだことが窺われるが、本遺跡周辺部では久喜市荒鎌遺跡、高輪寺遺跡（39）が知られるに過ぎない。また星川、元荒川を降った蓮田市宿下遺跡（84）で変形工字文が施文された甕形土器が出土している。大宮台地でも中期中葉以前の遺跡はそれほど多くはない。後葉宮ノ台式並行期になると、多くの遺跡が大宮台地上で確認されている。弥生時代後期の遺跡も、現状では中期と同様の状況である。

古墳時代になると、前期の集落は比較的多いが、中期、後期の集落は概して少ない傾向がある。

古墳時代前期の竪穴住居跡は、本遺跡で３軒が検出された。星川を挟んだ対岸の白岡町皿沼遺跡（53）では、五領式期の土師器が出土している。星川を遡ると、熊谷新扇状地上に北島遺跡、田谷遺跡、古宮遺跡、中条条里遺跡、天神東遺跡、小敷田遺跡等大、小の遺跡が展開している。その他同流域には行田市池守遺跡、騎西町小沼耕地遺跡（20）などが調査されている。星川、元荒川を降ると白岡町から蓮田市にかけて、本遺跡と同一台地上となる白岡町正福院貝塚（60）で竪穴住居跡１軒、方形周溝墓１基が、入耕地遺跡（61）では竪穴住居跡２軒、タタラ山遺跡（65）では五領式期の竪穴住居跡4軒が検出されている。蓮田市では元荒川左岸に宿上遺跡（82）、天神前遺跡（88）がありそれぞれ竪穴住居跡が調査されている。右岸の蓮田市ささら遺跡（90）、久台遺跡（91）でも竪穴住居跡が調査されている。

綾瀬川流域では桶川市加納地区、伊奈町北部で該当期の遺跡が調査されている。

下栢間地区の元荒川を挟んだ対岸では、桶川市加納入山遺跡、新田遺跡（137）、宮ノ脇遺跡、天神北遺跡などがあるが、桶川市東部に比較して遺跡分布は少ない傾向にある。

伊奈町に入ると薬師堂根遺跡（108）、戸崎前遺跡（110）、向原遺跡（109）などがあり、向原遺跡からは方形周溝墓も検出されている。

古墳時代中期の遺跡は丸谷下遺跡で、住居跡が検出されている。本遺跡と同一台地上では久喜市不動寺遺跡（95）で古墳時代土師器片が採集されてた他、高輪寺遺跡が知られている。

周辺の古墳、古墳群は、菖蒲町以北及び以西に広がりをみせており、大宮台地東辺部ではほとんど未確認で、前期古墳も知られていない。

元荒川流域では左岸に栢間古墳群、東浦古墳群、柴山枝郷古墳群がある。栢間地区に「栢間七塚」と呼ばれる９基の古墳が点在し、いずれも６世紀中頃から７世紀初期にかけて築造されたと考えられている。

埼玉県指定史跡の前方後円墳天王山塚古墳は全長107ｍ、後円部径55ｍ、前方部幅62ｍで、円筒

埴輪片や須恵器凸帯付甕片から６世紀後葉の築造と推定されている。その他押出塚古墳（９）、禿塚古墳（13）、大日塚古墳（６）などの円墳や、全長約30mの夫婦塚古墳（14）、本村１号古墳などの前方後円墳がある。

東浦古墳（16）は前方後円墳とされ、全長約60m、後円部径30m、高さ2.5m、周溝幅約15mで、周溝内より、円筒埴輪片、朝顔形埴輪片、鳥形埴輪片や人物埴輪片が出土した。６世紀中葉の築造と考えられている。注目されるのは白色を帯びた円筒埴輪が出土していることで、白色の埴輪は、行田市稲荷山古墳や鴻巣市新屋敷遺跡などのこの付近における後期初頭の古墳から徐々にみられるようになってくるものである。

神ノ木遺跡では円墳と見られる古墳跡１基が調査されている（昼間他2000）。また平成17年から19年にかけて当事業団による神ノ木２遺跡（４）の調査で、古墳跡が３基調査された。

菖蒲町では、夫婦塚古墳、東浦古墳が比較的古い時期に築造され、次第に天王山塚古墳のある栢間地域へ中枢部が移っていったものと推定されており、白色の埴輪の特徴から埼玉古墳群との関係も考えられている。

奈良・平安時代の遺跡は、丸谷下遺跡で平安時代の竪穴住居跡1軒、菖蒲城跡（18）で平安時代の竪穴住居跡2軒が調査された。本遺跡と同一台地上では白岡町タタラ山遺跡（65）で平安時代の住居跡が2軒調査された。久喜市では新堀遺跡（32）、足利遺跡（33）、光明寺遺跡（37）、御陣山遺跡（38）、高輪寺遺跡（39）、吉羽遺跡（41）などがある。その他、伊奈町戸崎前遺跡（110）、向原遺跡（109）、神明神社東遺跡、騎西町小沼耕地遺跡（20）などがあげられるが、相対的に遺跡の数は少ない。

中世以降では、菖蒲城跡（18）、加納城跡、天王山塚北遺跡（11）、薬師堂根遺跡（108）、閏戸足利遺跡（101）などがある。

菖蒲城跡は康正２（1447）年に金田式部則綱によって築かれたとされ、天正18（1590）年徳川家康の関東入部、後北条氏滅亡とともに廃城になった。菖蒲城跡の立地は、星川によって形成された自然堤防（新堀地区）の後背湿地で、城の立地としては極めて特異である。

加納城跡は、元荒川を挟んで、菖蒲城の南西約4.5ｋｍに位置する。青磁・白磁の碗類、瀬戸美濃産の碗・皿・鉢類、常滑産の鉢・甕類が出土した。薬師堂根遺跡では方形に巡る溝で囲まれた区画内から建物跡、墓壙などが検出された。戸崎前遺跡でも土橋を伴う方形に巡る溝跡が検出されている。薬師堂根遺跡は14世紀、戸崎前遺跡は13世紀と考えられている。また相野谷遺跡（111）では柱穴群と中世瓦が出土した。

天王山塚北遺跡は中世寺院跡と推定され、堀跡が検出されている。地獄田遺跡では、近世の集落跡も認められている。また下栢間遺跡（８）も近世以降の遺跡である。丸山下遺跡でも中・近世の遺構が検出されている。その他武蔵七党の野与党である道智氏、多賀谷氏、久下塚氏の館跡が伝承として伝えられているが、明確に遺構を確認することはできない。

江戸時代の菖蒲は、江戸から近く「菖蒲領」に属していた。戸ヶ崎村、新堀村、小林村、栢間村、三箇村の５ヶ村は、旗本内藤氏の知行地で、旗本内藤氏陣屋跡が知られている。

Ⅲ　九宮１遺跡の調査

１　遺跡の概要

九宮１遺跡はＪＲ東北本線新白岡駅の北西約４ｋｍに位置し、久喜市との境界近く、菖蒲町大字台に所在する。当遺跡の南西約350ｍには九宮２遺跡が立地している。遺跡周辺は元荒川の支流が北西から東南方向に流れる水田地域であり、古い街道や集落は水田面より僅かに高い微高地上に立地している。

縄文時代以降の関東造盆地運動と呼ばれる沈降化現象に伴う沖積土の流入によって、起伏に富んだローム台地は現在の水田下にあり、埋没ローム台地と呼ばれている。九宮１遺跡とその周囲も水田として利用されていた場所であり、平坦な景観を示している。重機によって水田の耕作土をローム面まで掘削し、調査を行った。

遺跡は標高9.5m前後のローム台地に立地する。調査区内の標高は四方に向かって緩く傾斜を示しており、きわめて小規模な舌状台地上に遺跡が立地していることがうかがえる。

検出された遺構は、縄文時代の住居跡１軒のほか、土壙36基、掘立柱建物跡１棟、井戸跡２基、ピット跡120基である。総じて出土遺物は少なく、土壙、掘立柱建物跡、ピットについては出土遺物がほとんどなく、遺構の時期は明確ではない。しかし、井戸跡や遺構外から中世の遺物が出土していることから、土壙やピット跡の大半、掘立柱建物跡１棟、井戸跡２基については中・近世の所産と考えている。これらの遺構の調査終了後、ロームを掘り下げて、旧石器時代の調査を実施したところ、石核１点が出土している。

旧石器時代の遺物である石核１点はＤ－３区北西端のⅨ層から出土した。やや厚みのあるチャート製である。

周辺を拡張して調査を行ったが、石核１点のみの出土であり、石器集中等の検出には至らなかった。

九宮２遺跡では立川ロームの堆積が薄かったのに対し、当遺跡では約１ｍの堆積を確認し、立川ロームの各層序も確認し得た。至近距離にある２つの遺跡であるが、立川ロームの遺存状況には相違が認められた。

縄文時代の遺構・遺物は中期末のものが主体をしめ、わずかに後期前葉の遺物が出土している。

住居跡１軒は中期末の時期である。竪穴自体の掘り込みは残存していなかったが、近接した２つの炉跡を中心にして同心円上にピットが巡ることから住居跡と認定した。炉のひとつは焼土ブロックが顕著であり、フラスコ状の土壙（第25号土壙）を埋めて構築されていた。硬く引き締まった底面は、確認されなかった。

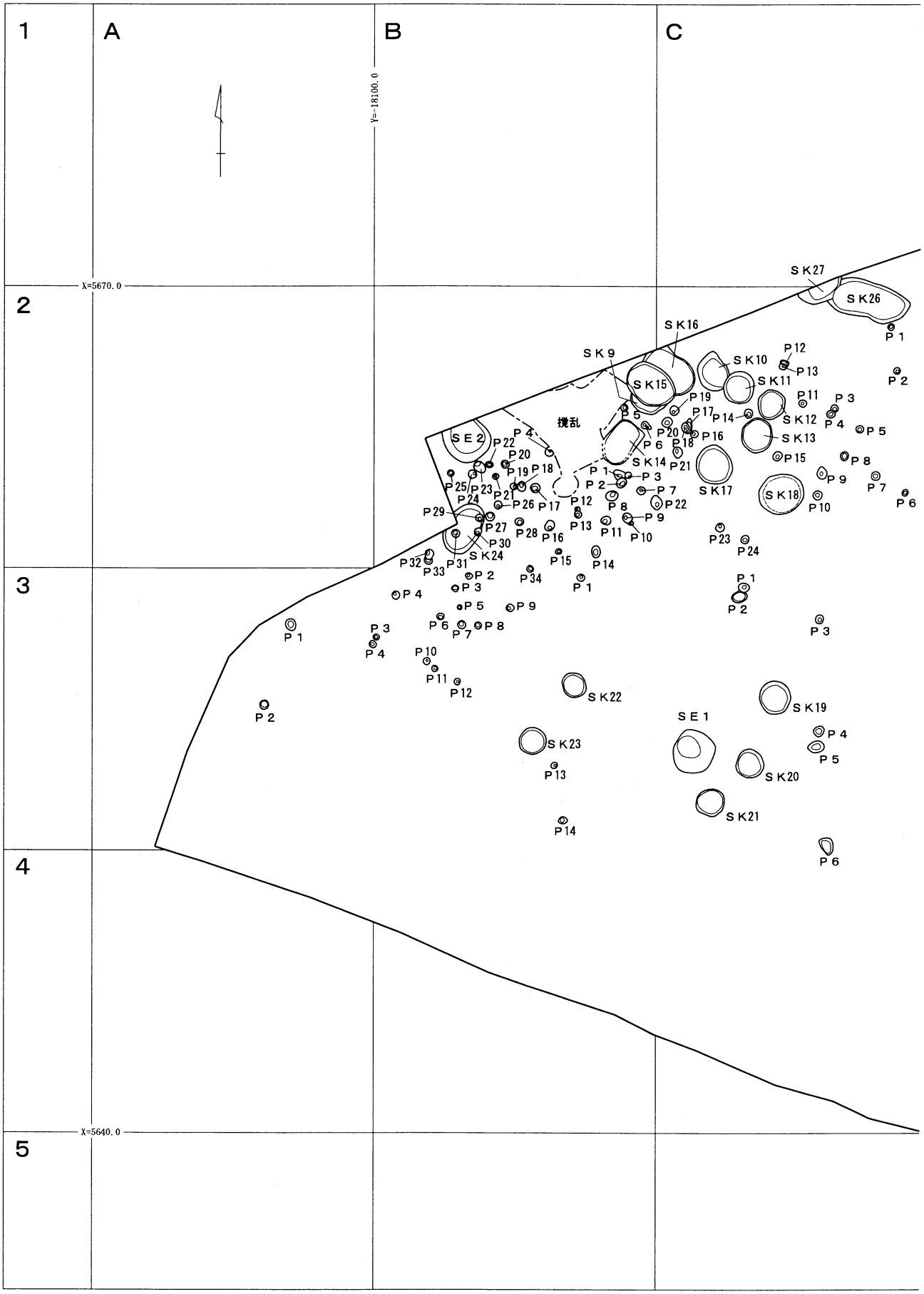
縄文時代の土壙は、覆土の色調などの特徴から数基を数える。これらの遺構は調査区の東側に集中して分布している。

縄文時代の遺物の分布は１軒の住居跡が検出されたＤ－３区からＤ－４区の北側にかけて顕著であった。Ｄ－４区では遺物は分布していたが、遺構は検出されなかった。

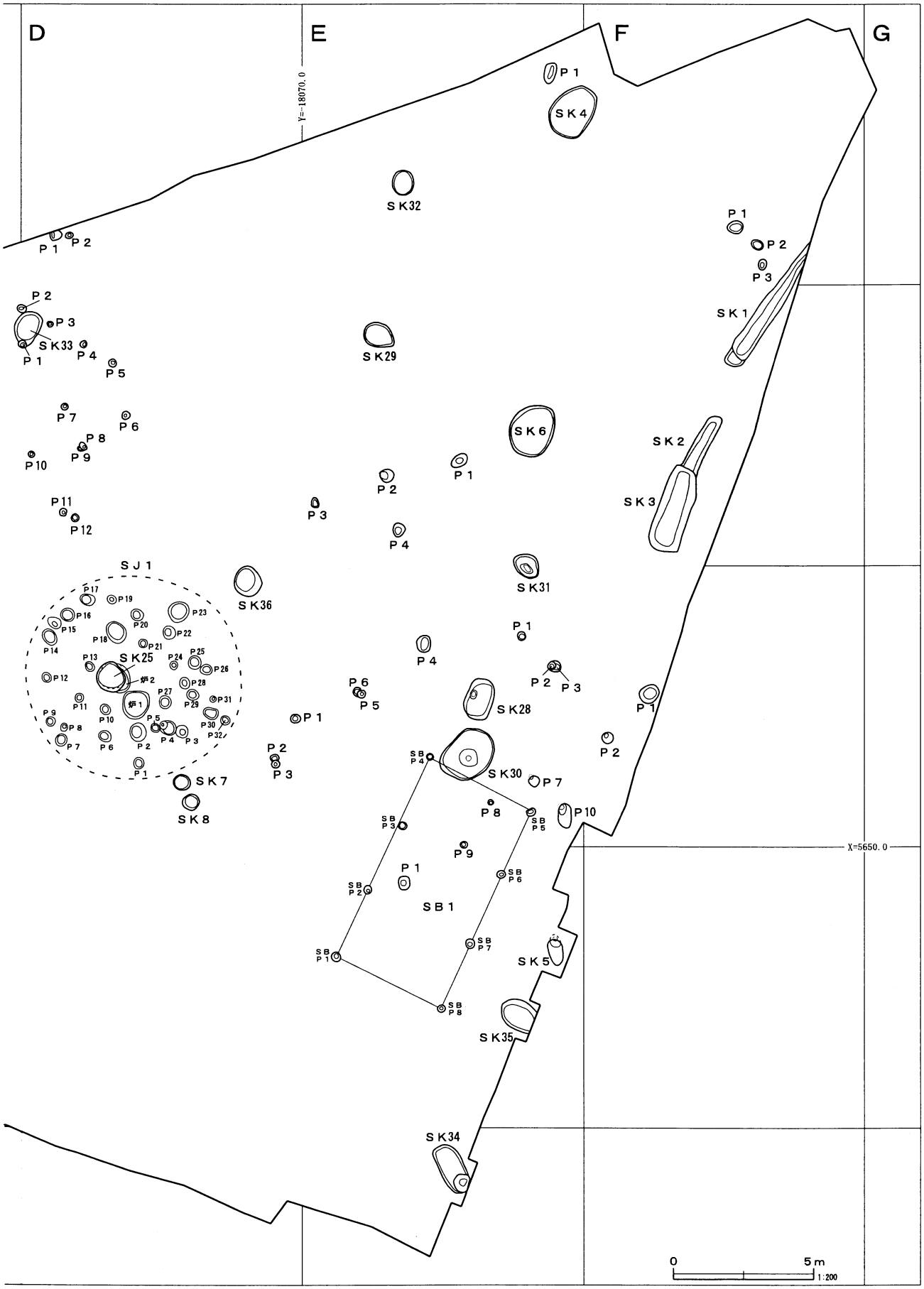
中・近世の遺構は掘立柱建物跡１棟、土壙21基、井戸跡２基、ピット多数を数える。

これらの遺構からの出土遺物は少なかった。他の遺跡との対比から近世の所産と考えられる土壙も認められたが、出土遺物に乏しかった。井戸跡２基は遺構確認面から擂鉢状に掘り込まれ、１ｍほどの深さからは垂直に掘り込まれていた。

今回の調査によって出土した遺物総量はコンテナにして５箱である。縄文時代中期末の土器が大半を占めている。



第５図　九宮１遺跡調査区全体図


D
E
F
G
Y=-18070.0
X=5650.0
SK4
SK32
SK1
SK29
SK6
SK2
SK3
SK31
SJ1
SK36
SK25
SK28
SK30
SK7
SK8
SK5
SK35
SK34
SB1
0
5m
1:200

2　旧石器時代の調査

九宮２遺跡の発掘調査において、菖蒲町で始めて旧石器時代の遺跡が確認された。その後、九宮１遺跡の発掘調査においても、埋没台地上であることから、旧石器時代の遺物が検出される可能性が高いと考え、調査を行った。

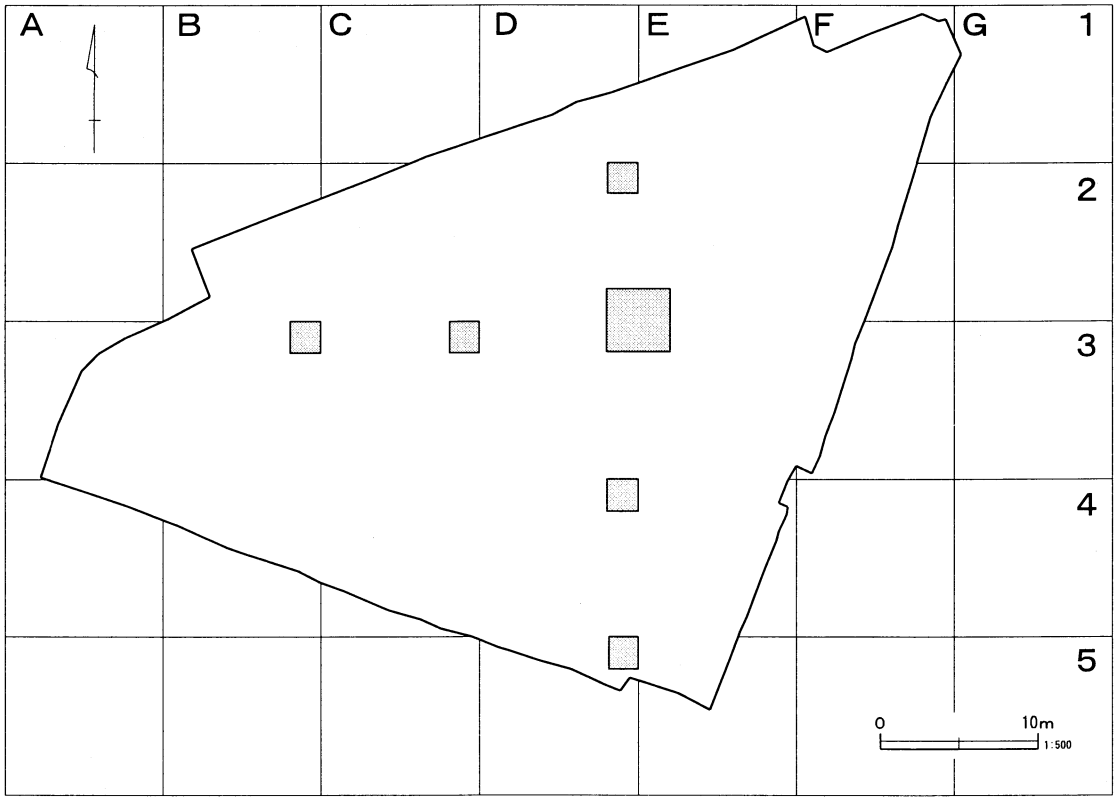
旧石器時代の調査は、調査区全域をカバーする10mグリッドの北東コーナーに２m四方の区画を設定して、ローム層の掘り下げを実施した。

設定した区画は全体で６ヶ所である。そのうちＤ－３区から遺物が１点出土した。遺物が出土した区画を中心に北東側４m四方の範囲を拡張し、旧石器時代の調査を行った。

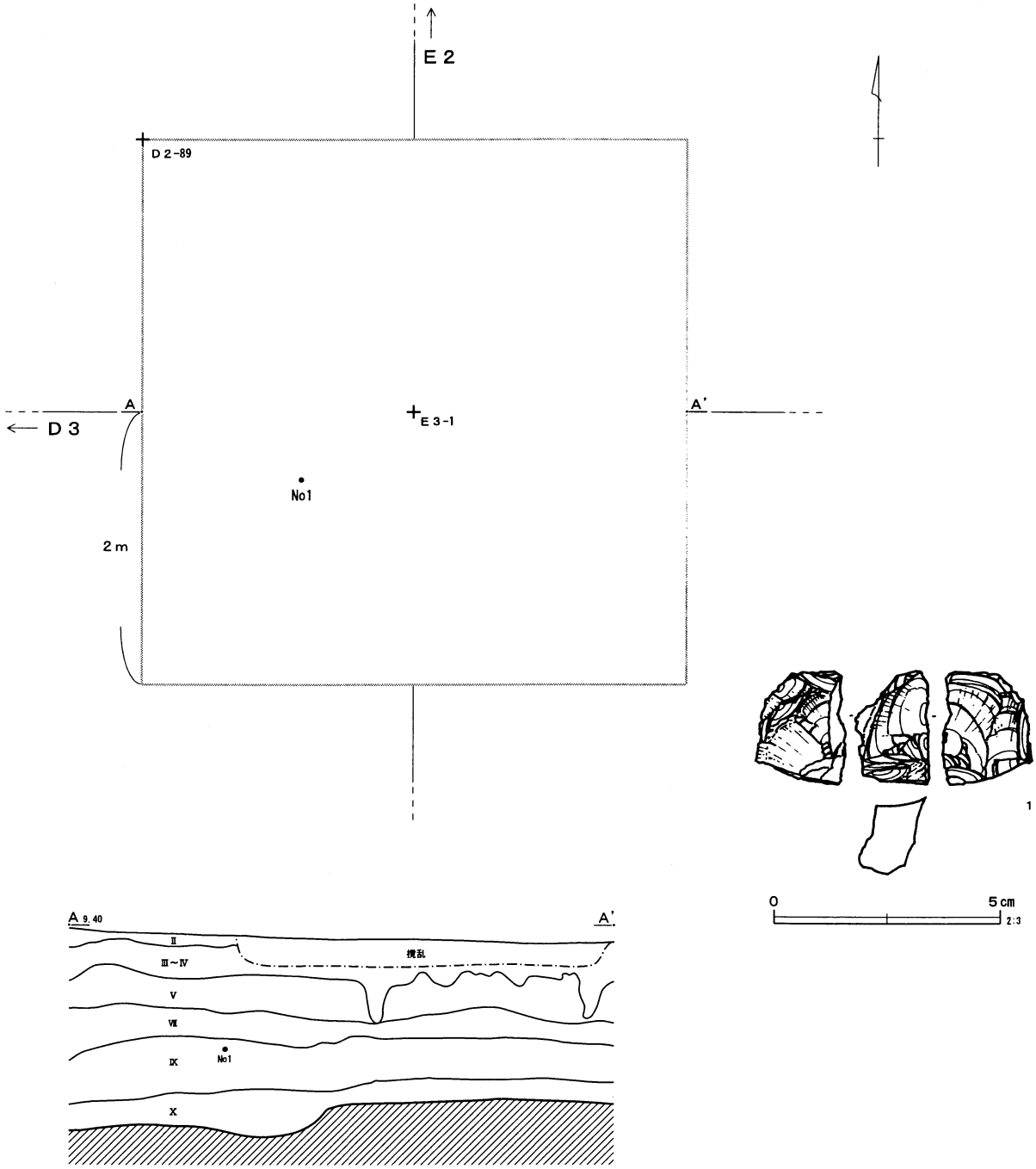
ロームの堆積は当該地域では厚く、遺構の確認面（ほぼローム層上面）から約1.5mを測る。ローム層の状況は地下水の影響によるためか、全体に汚れた感じである。第Ⅴ層と第Ⅸ層は色調が暗く暗色帯である。第Ⅴ層が武蔵野台地の第１暗色帯、第Ⅸ層が武蔵野台地の第２暗色帯に対応すると思われる。

遺物の出土層位は、第Ⅸ層で武蔵野台地の第２暗色帯の上半部である。深掘区の拡張を行い分布の広がりを確認したが、他には出土しなかった。

出土した石器はチャート製の小形の石核である。節理が多く剥離面に規則性があまりみられないことから、人工品なのか疑問である。イモ石等自然礫の破損の可能性も考えられ、台地の形成過程でローム層に礫が含まれる場合のあり方などを含めて、検討する必要がある。



第６図　旧石器時代調査区



Ⅱ層　灰黄褐色土　漸移層　ソフトローム多量
Ⅲ～Ⅳ層　黄褐色土　白色粒子の火山灰含む　赤色スコリア少量　ソフトローム
Ⅴ層　暗褐色土　白色粒子の火山灰含む　第１黒色帯相当か　しまり有り
Ⅶ層　褐色土　Ⅴ層よりやや明るい色調　黄褐色ロームブロック含む　赤色のスコリア少量　しまり有り
Ⅸ層　暗褐色土　粘質有り
Ⅹ層　黄褐色土　粘質有り

0　2 m　1:50

第７図　旧石器時代遺物分布図

第２表　旧石器時代遺物観察表(第７図)

取上No.	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	出土位置	挿図番号
1	石核	2.0	2.5	1.5	7.1	チャート	D3　No.1	1

3　住居跡

第１号住居跡（第８図、第９図１～46）

Ｄ－３区に位置し、炉と多数のピットが検出された住居跡である。炉とピットの配置からプラン等はおよそ円形を呈するものと思われるが、出土遺物からは張り出しを持つ柄鏡形を呈することが推測される。しかし、入り口部の対ピット、入り口部の埋甕等の施設が不明瞭で、積極的に柄鏡形住居跡とする証左はない。

炉は地床炉で、ピット群の中央部に２箇所検出され、炉１は長径0.98m、短径0.96m、深さ0.1m、炉２は第25号土壙と重複し、炉の方が新しく、長径1.19m、短径1.04m、深さ0.26mを測る。炉の新旧関係は明瞭にし得ないが、出土遺物からは炉１の方が古いと思われる。

遺物は１・２が炉1の出土である。加曽利Ｅ式の口縁部文様帯を持つキャリパー系統の深鉢形土器の胴部破片で、磨消懸垂文を施文する。地文縄文は１が単節ＲＬ、２がＬＲの充填縄文である。加曽利ＥⅢ式に比定される。

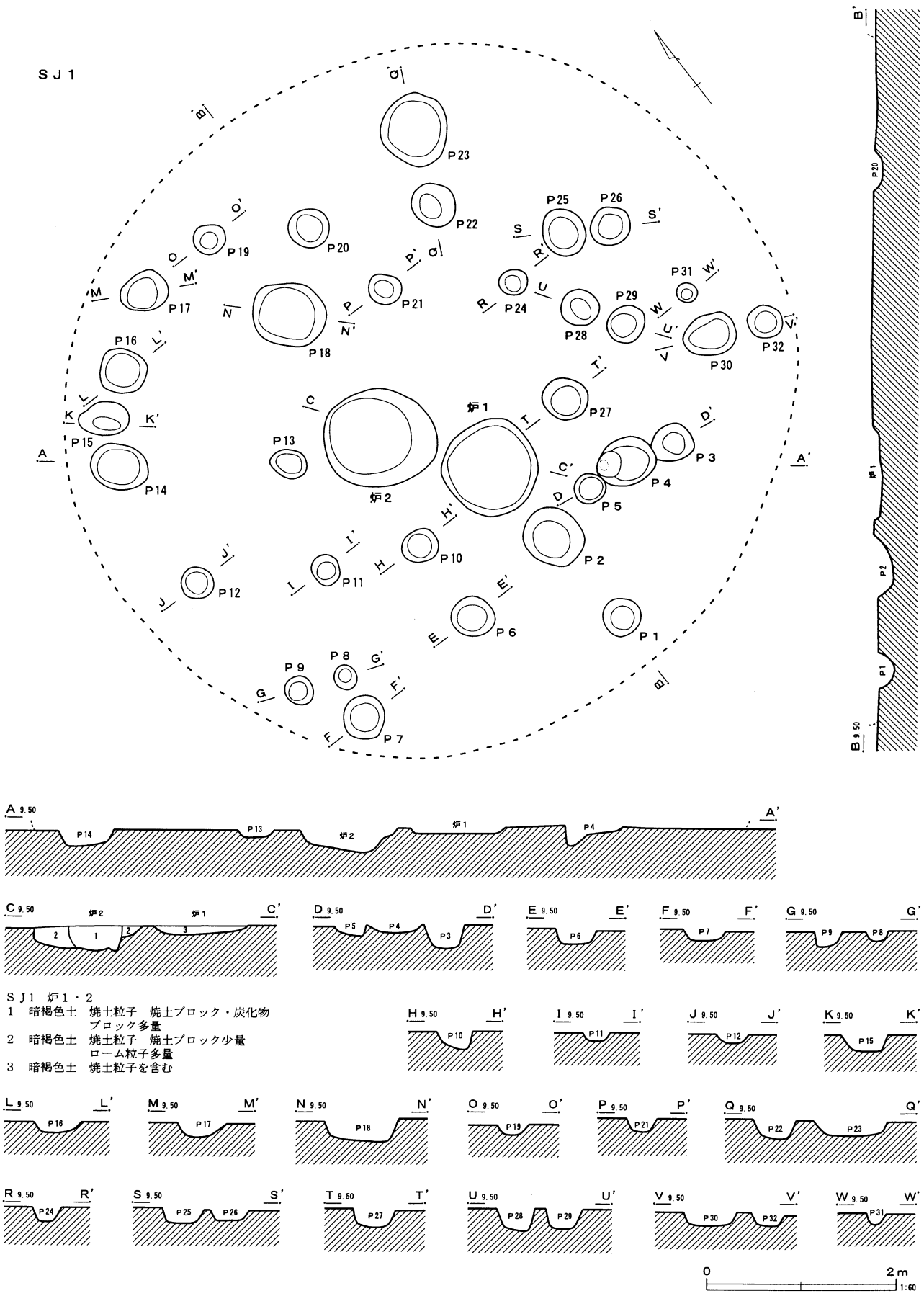
３～22は炉２の出土である。口縁部文様帯を持たないキャリパー形深鉢で、３の口縁部は内湾する口縁部無文帯を沈線の伴う刻み隆帯で区画する。４～６は磨消縄文で渦巻文を描くもので、７～10は沈線区画の磨消懸垂文を施文するもの、11・12は指頭状の磨消縄文を垂下するもので、磨消縄文の両サイドが微隆起線状化する。13は隆起線を放射線状に施文するもので、区画内に縄文を充填施文する。14は沈線を伴う隆帯で区画するもので、単節ＲＬを充填施文する。15～21は地文縄文のみ施文するもので、単節ＲＬを施文方向を変えつつ施文する。22は細かな条線文を施文するものである。これらの土器群はおおよそ加曽利ＥⅢ式新段階から、ＥⅣ式古段階に比定される。

23～34はピット内出土のもので、23・24＝Ｐ5、25・26＝Ｐ10、27＝Ｐ20、28＝Ｐ21、29＝Ｐ26、30・31＝Ｐ27、32＝Ｐ28、33＝Ｐ29、34＝Ｐ30からの出土である。23・24・28は直線的な磨消縄文を垂下するもので、26・33は曲線的なモチーフを磨消縄文で描くものである。25・32は内湾する口縁部破片で、25は沈線で、32は微隆起線で口縁部文様帯を区画する。30は凹みを持つ磨石で、縦10.5cm、横7.2cm、厚さ4.5cm、重さ502.0ｇを測る。

35～46は住居跡覆土からの出土で、35は加曽利Ｅ式キャリパー系深鉢の口縁部破片、36～38は磨消懸垂文を施す胴部破片である。39～43はキャリパー形の深鉢で、曲線的な磨消懸垂文を施文するものである。44・45は単節ＲＬ縄文を、46は細かな条線文を施文する。

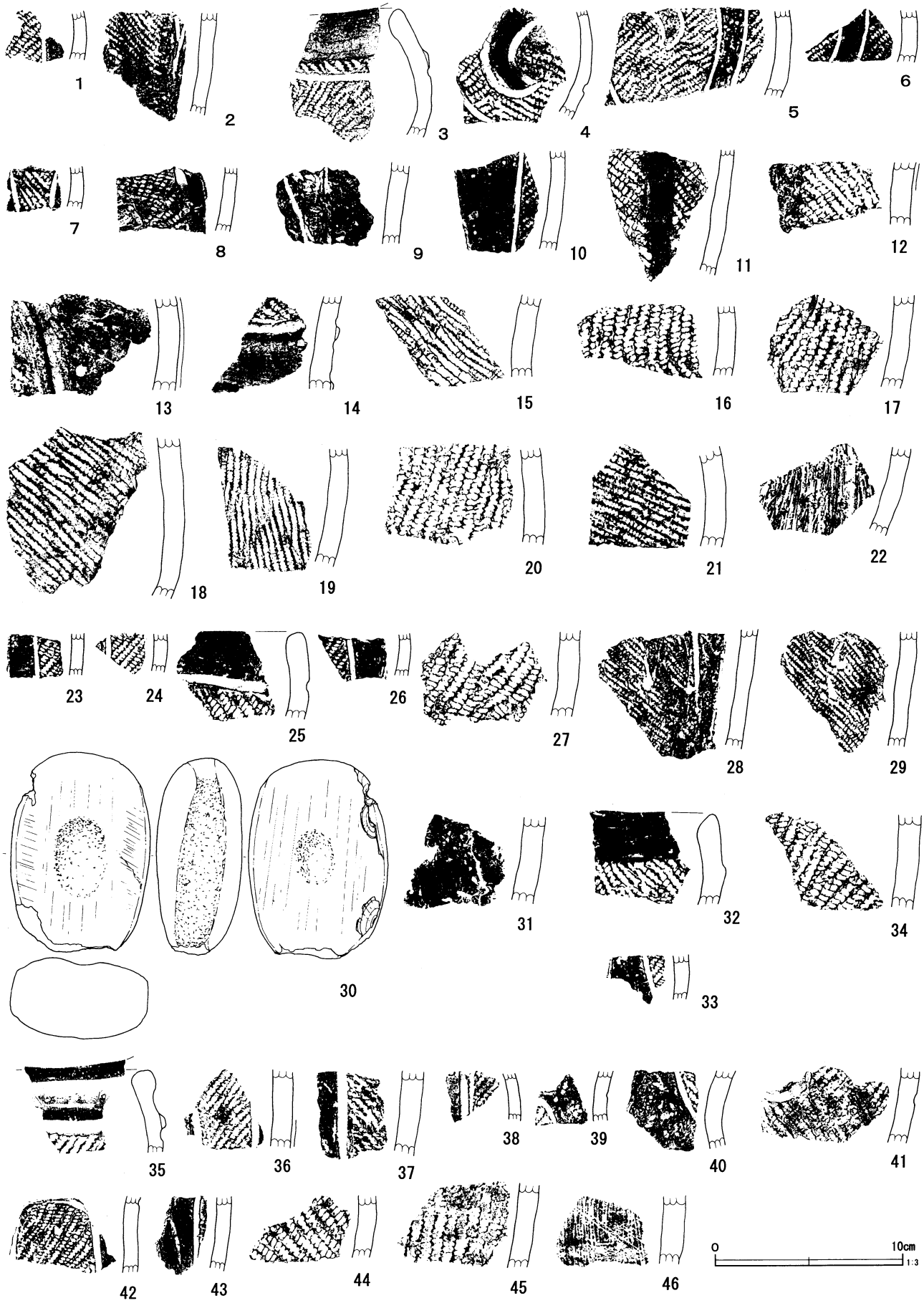
第３表　第１号住居跡計測表

グリッド	遺構内	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)
D-3	P 1	0.40	0.40	0.16
	P 2	0.64	0.57	0.21
	P 3	0.42	0.38	0.24
	P 4	0.64	0.50	0.21
	P 5	0.34	0.33	0.11
	P 6	0.46	0.42	0.14
	P 7	0.46	0.42	0.10
	P 8	0.28	0.24	0.11
	P 9	0.32	0.30	0.16
	P10	0.40	0.35	0.19
	P11	0.34	0.30	0.10
	P12	0.34	0.32	0.10
	P13	0.40	0.30	0.07
	P14	0.60	0.48	0.14
	P15	0.54	0.36	0.17
	P16	0.52	0.50	0.11
D-3	P17	0.52	0.40	0.15
	P18	0.78	0.66	0.24
	P19	0.34	0.30	0.12
	P20	0.44	0.40	0.08
	P21	0.36	0.30	0.14
	P22	0.48	0.44	0.19
	P23	0.78	0.69	0.16
	P24	0.30	0.26	0.15
	P25	0.52	0.44	0.16
	P26	0.44	0.36	0.11
	P27	0.48	0.42	0.19
	P28	0.42	0.38	0.24
	P29	0.42	0.38	0.19
	P30	0.56	0.44	0.16
	P31	0.22	0.20	0.12
	P32	0.36	0.35	0.15

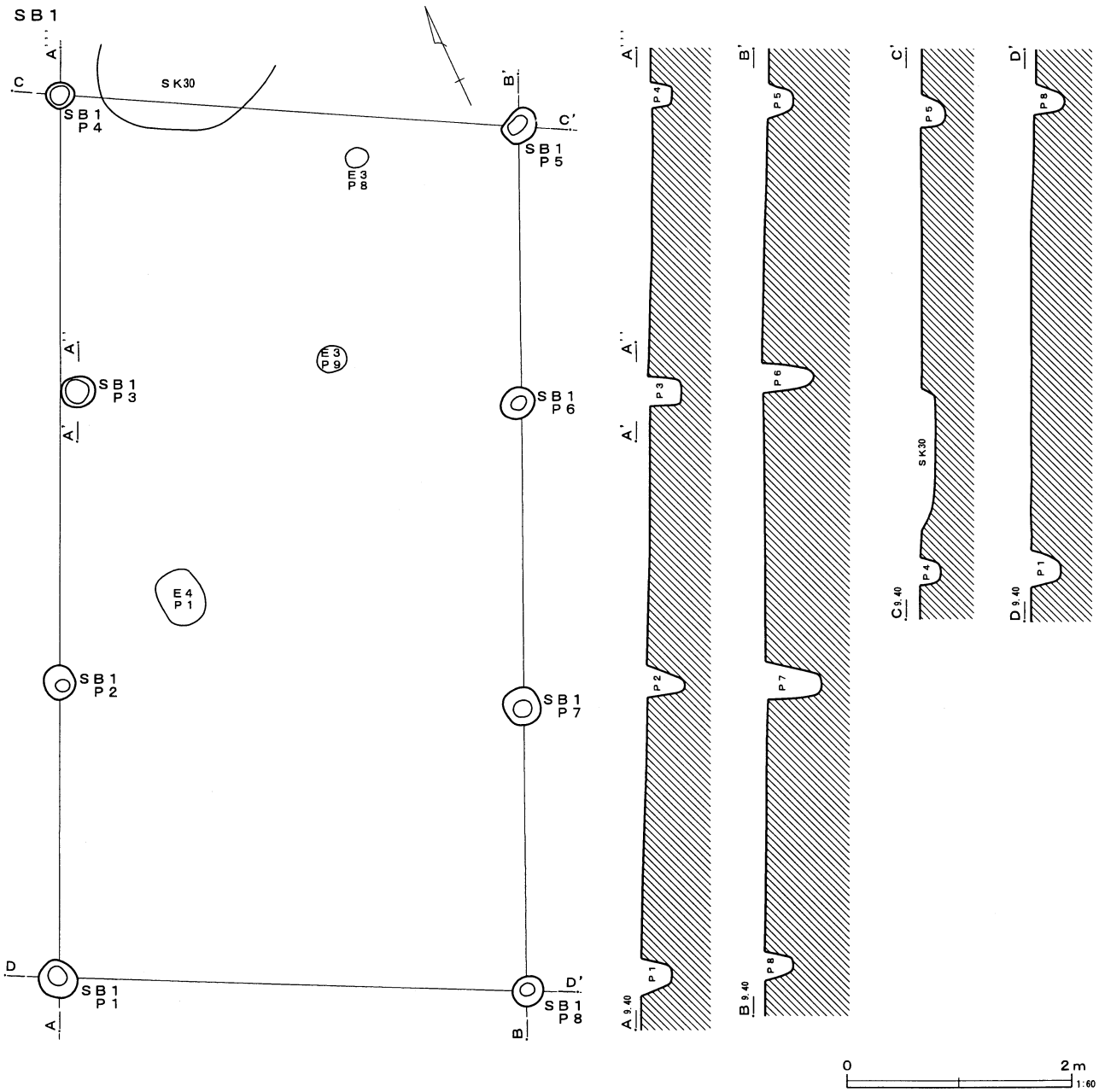


ＳＪ１　炉１・２
1　暗褐色土　焼土粒子　焼土ブロック・炭化物
　　ブロック多量
2　暗褐色土　焼土粒子　焼土ブロック少量
　　ローム粒子多量
3　暗褐色土　焼土粒子を含む

第８図　第１号住居跡



第９図　第１号住居跡出土遺物



第10図　掘立柱建物跡

4　掘立柱建物跡

第１号掘立柱建物跡（第10図）

Ｅ－３・４区に位置する。平面形は南北に細長い長方形で、規模は桁行３間(7.75m)、梁行１間(4.15m)の側柱建物である。主軸はＮ－25°－Ｅである。ピットの形態は円形または楕円形で、規模は直径0.24～0.36m、深さは0.18～0.49mである。柱痕は確認されなかった。遺物は出土していない。

ピットの規模は以下のとおりである。Ｐ１＝長径0.36m×短径0.32m×深さ0.27mＰ２＝長径0.31m×短径0.27m×深さ0.34mＰ３＝長径0.31m×短径0.27m×深さ0.28mＰ４＝長径0.25m×短径0.24m×深さ0.18mＰ５＝長径0.34m×短径0.26m×深さ0.21mＰ６＝長径0.32m×短径0.28m×深さ0.45mＰ７＝長径0.35m×短径0.34m×深さ0.49mＰ８＝長径0.28m×短径0.26m×深さ0.26m。

5　土壙

第１号土壙（第11図）

Ｆ－１・２区に位置する。平面形は長楕円形を呈し、長径（5.23）m、短径0.68m、深さ0.26mを測る。遺物は、出土していない。

第２号土壙（第11図）

Ｆ－２区に位置する。第３号土壙と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は長楕円形を呈するものと思われ、長径2.14m、短径0.55m、深さ0.20mを測る。遺物は、出土していない。

第３号土壙（第11図）

Ｆ－２区に位置する。第２号土壙と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は長楕円形を呈し、現存の長径3.10m、短径1.10m、深さ0.46mを測る。遺物は、出土していない。

第４号土壙（第11図、第14図１）

Ｅ・Ｆ－１区に位置する。平面形は楕円形を呈し、長径1.92m、短径1.41m、深さ0.14mを測る。遺物は土器片が出土している。１は加曽利Ｅ式キャリパー系土器の無文破片である。

第５号土壙（第11図）

Ｅ－４区に位置する。平面形は楕円形を呈し、長径0.94m、短径0.50m、深さ0.76mを測る。遺物は、出土していない。

第６号土壙（第11図）

Ｅ－２区に位置する。平面形は楕円形を呈し、長径1.96m、短径1.54m、深さ0.21mを測る。遺物は、出土していない。

第７号土壙（第11図、第14図２・３）

Ｄ－３区に位置する。平面形は円形を呈し、長径0.62m、短径0.55m、深さ0.15mを測る。遺物は土器片が出土している。２・３は内湾する口縁部破片で、２は隆起線で、３は沈線で口縁部無文帯を区画する。

第８号土壙（第11図、第14図４・５）

Ｄ－３区に位置する。平面形は円形を呈し、長径0.62m、短径0.58m、深さ0.31mを測る。遺物は土器片と石器が出土している。４は両耳壺の口縁部破片で、無文の口縁部が外反する。５はチャート製の石鏃で、長さ1.9㎝、幅1.6㎝、厚さ0.6㎝、重さ1.1ｇを測る。

第９号土壙（第12図）

Ｂ・Ｃ－２区に位置する。第15号土壙と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は楕円形を呈するものと思われるが、第15号土壙と重複しているため詳細は不明である。現存の長径1.33m、短径0.30m、深さ0.29mを測る。遺物は、出土していない。

第10号土壙（第11図）

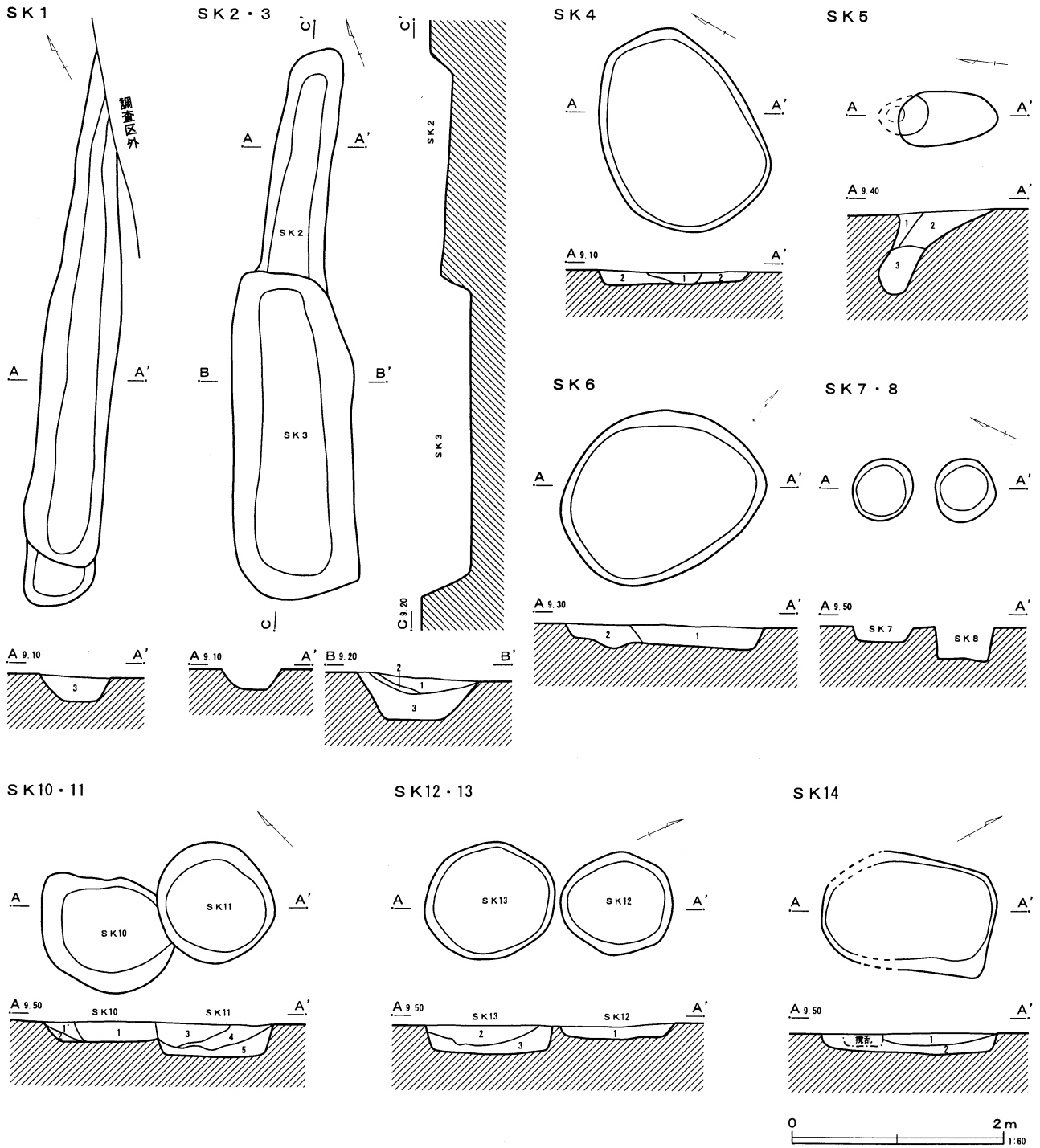
Ｃ－２区に位置する。第11号土壙と重複するが、本土壙の方が古い。平面形は不整形を呈し、現存の長径1.14m、短径1.07m、深さ0.20mを測る。遺物は、出土していない。

第11号土壙（第11図）

Ｃ－２区に位置する。第10号土壙と重複するが、本土壙の方が新しい。平面形は円形を呈し、長径1.12m、短径1.05m、深さ0.32mを測る。遺物は、出土していない。

第12号土壙（第11図）

Ｃ－２区に位置する。平面形は円形を呈し、長径1.04m、短径0.99m、深さ0.12mを測る。遺物は、出土していない。



SK１・２・３
1　暗灰色土　２層の灰白色粘土粒子少量　しまりなし　粘性有り
2　灰白色土　３層の土が少量混入　しまりなし　粘性有り
3　暗灰色土　色、土質ともに１層と同じ　ローム粒子少量
しまりなし　粘性有り

SK４
1　暗灰色土　酸化鉄少量　しまり･粘性有り
2　暗茶灰色土　ロームブロック中量　しまり･粘性有り

SK５
1　暗茶灰色土　暗茶褐色ローム中量　しまり・粘性有り（壁崩落土）
2　暗灰色土　暗茶褐色ロームブロック少量　しまり・粘性有り
3　暗灰色土　しまりなし　粘性有り

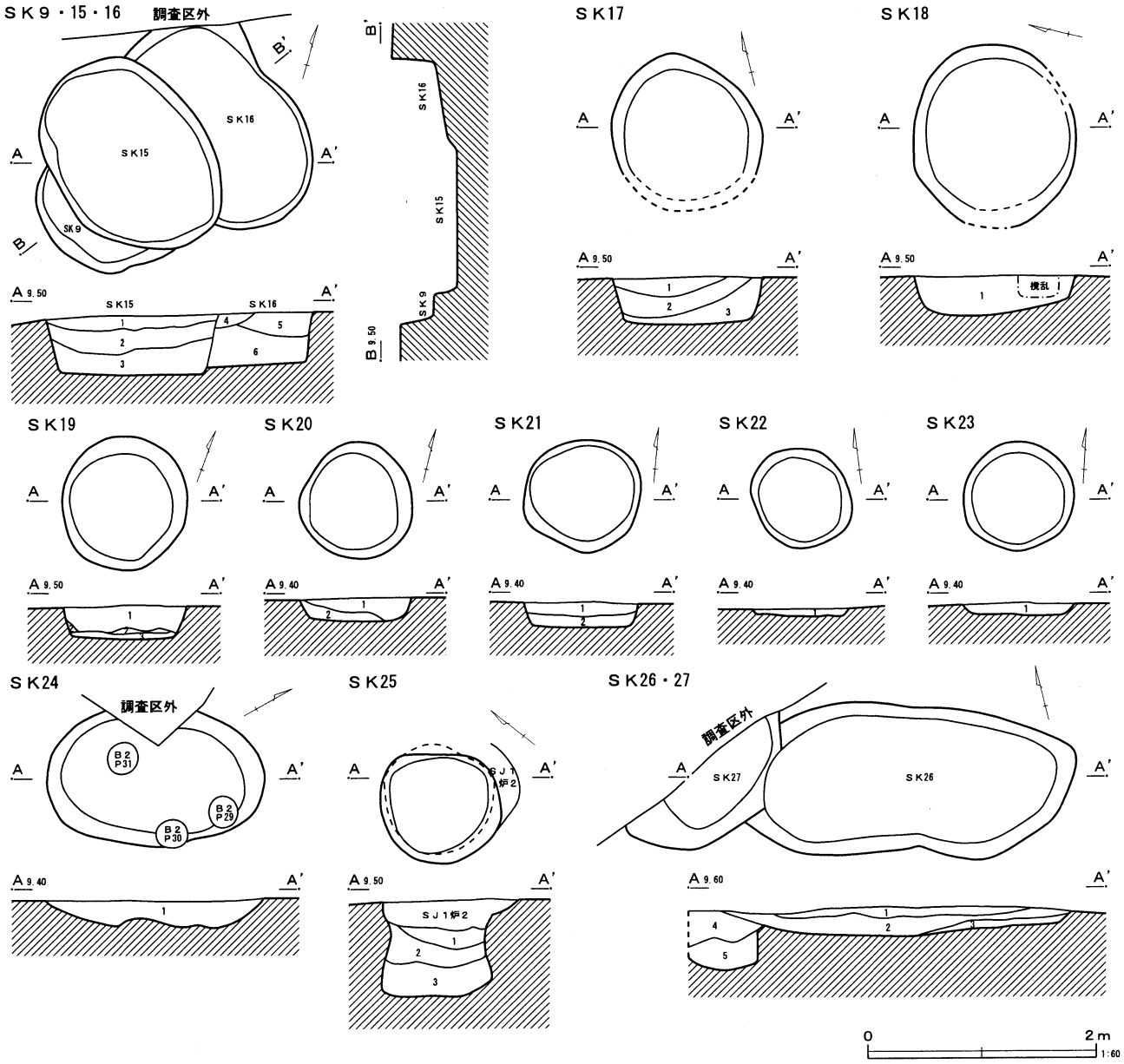
SK６
1　暗茶褐色土　ロームブロック中量　しまり・粘性なし
2　黒褐色土　しまり・粘性なし

SK10・11
1　暗灰色土　暗灰色の粘質土　ローム粒子少量　しまり・粘性有り
1'　暗灰色土　１層とほぼ同じでローム粒子を1層よりやや多めに含む
しまり・粘性有り
2　暗灰色土　黄褐色ロームブロック多量　しまり・粘性有り（壁崩落土）
3　暗茶灰色土　ローム粒子中～多量　しまり・粘性有り
4　暗茶灰色土　ローム粒子中量　しまり・粘性有り
5　暗茶灰色土　ローム粒子中～多量　しまり・粘性有り

SK12・13
1　暗茶灰色土　ＳＫ10の１層とほぼ同じ　ローム粒子極少量
2　暗茶灰色土　ＳＫ11の５層と同じ（一括埋土）
3　暗灰色土　しまりなし　粘性有り

SK14
1　暗茶灰色土　黄褐色ローム粒子少量　しまり・粘性有り
2　暗灰色土　黄褐色ローム粒子少量　しまりなし　粘性有り

第11図　土壙（１）



SK15・16
1　暗灰色土　しまり有り　粘性なし
2　暗灰色土　酸化鉄中量　黄褐色ロームブロック極少量　しまりなし　粘性有り
3　暗灰色土　酸化鉄少量　しまりなし　粘性有り
4　暗褐灰色土　黄褐色ローム粒子多量　しまり有り　粘性なし
5　暗茶灰色土　SK11の5層とほぼ同じ　黄褐色ロームブロック中量（一括埋土）
6　暗灰色土　黄褐色ロームブロック多量　しまり・粘性有り（一括埋土）

SK17
1　暗灰色土　SK15の2層とほぼ同じ　黄褐色ローム混入　しまり有り　粘性なし
2　暗灰色土　黄褐色ロームブロック中量　しまりなし　粘性有り（壁崩落土）
3　暗茶灰色土　黄褐色ローム中量　しまりなし　粘性有り

SK18
1　暗茶灰色土　SK11の4層とほぼ同じ　黄褐色ロームブロック中量　しまり・粘性有り（一括埋土）

SK19
1　暗茶灰色土　黄褐色ローム粒子・ブロック中量　しまり・粘性有り
2　黄褐色土　黄褐色ローム土　しまり・粘性有り（壁崩落土）
3　暗黒灰色土　しまり・粘性有り

SK20
1　暗茶灰色土　SK19の1層と似ている　黄褐色ロームブロック中量　しまり・粘性有り
2　暗茶灰色土　SK19の1層と同じ　しまり・粘性有り

SK21
1　暗黒灰色土　黄褐色ローム粒子少量　しまりなし　粘性有り
2　暗黒灰色土　しまりなし　粘性有り

SK22
1　暗茶灰色土　SK19の1層とほぼ同じ　黄褐色ローム粒子少量　しまりなし　粘性有り

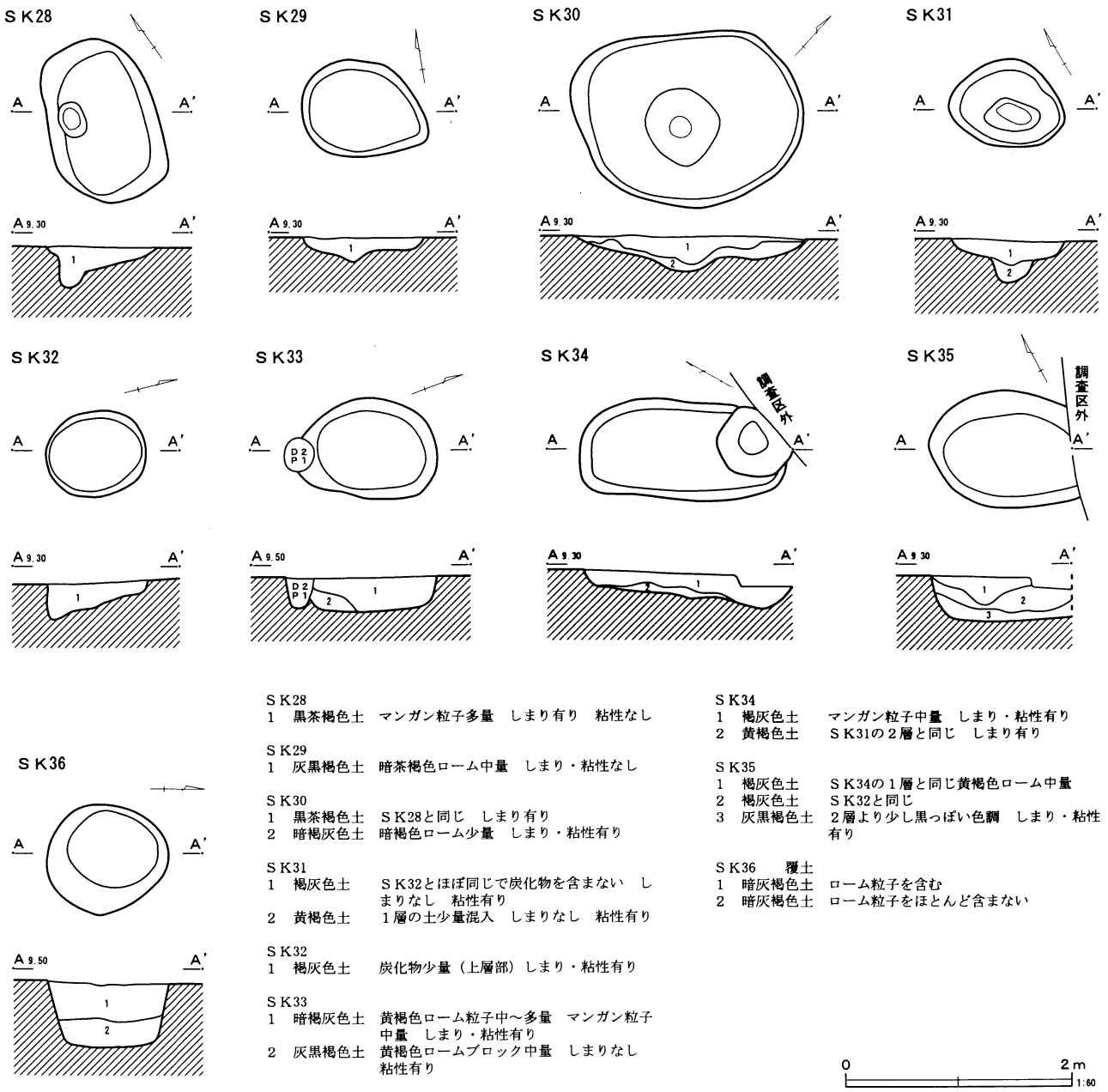
SK23
1　暗灰色土　暗灰色の粘質土　灰色粘土粒子・酸化鉄少量　しまり・粘性有り

SK24
1　暗灰色土　黄褐色ローム中量　マンガン粒子多量　しまり・粘性有り

SK25
1　黒褐色土　焼土ブロック含む
2　暗褐色土　焼土ブロック・炭化物ブロック・ロームブロック含む
3　暗褐色土　ローム粒子・ロームブロック含む

SK26・27
1　暗灰色土　暗灰色の粘質土　黄褐色ロームブロック少～中量　しまり・粘性有り
2　暗黒灰色土　しまり・粘性有り
3　暗茶灰色土　黄褐色ローム粒子多量　しまり・粘性有り
4　暗黒灰色土　2層と同じ土　マンガン粒子中量　しまり・粘性有り
5　暗黒灰色土　マンガン粒子多量　黄褐色ローム土少量　しまり・粘性有り

第12図　土壙（2）



第13図　土壙（３）

第13号土壙（第11図）

Ｃ－２区に位置する。平面形は円形を呈し、長径1.25m、短径1.09m、深さ0.29mを測る。遺物は、出土していない。

第14号土壙（第11図）

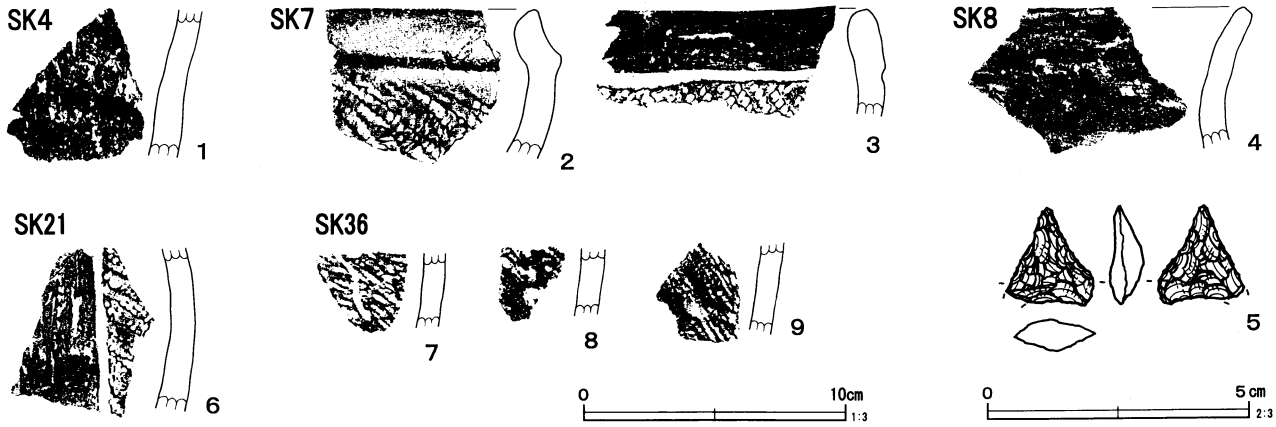
Ｂ－２区に位置する。一部に床面にまで届かない撹乱を受けているが、平面形は楕円形を呈し、長径1.60m、短径1.08m、深さ0.20mを測る。遺物は、出土していない。

第15号土壙（第12図）

Ｂ・Ｃ－２区に位置する。第９号土壙、第16号土壙と重複するが、第16号土壙より新しく、第９号土壙との新旧関係は不明である。平面形は楕円形を呈し、長径1.79m、短径1.35m、深さ0.50mを測る。遺物は、出土していない。

第16号土壙（第12図）

Ｂ・Ｃ－２区に位置する。第15号土壙と重複するが、本土壙の方が古い。平面形は不整楕円形を



第14図　土壙出土遺物

第４表　土壙計測表

グリッド	遺構番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	形態
F-1・2	ＳＫ１	(5.23)	0.68	0.26	長楕円形
F-2	ＳＫ２	(2.14)	0.55	0.20	長楕円形
	ＳＫ３	3.10	1.10	0.46	長楕円形
E・F-1	ＳＫ４	1.92	1.41	0.14	楕円形
E-4	ＳＫ５	0.94	0.50	0.76	楕円形
E-2	ＳＫ６	1.96	1.54	0.21	楕円形
D-3	ＳＫ７	0.62	0.55	0.15	円形
	ＳＫ８	0.62	0.58	0.31	円形
B・C-2	ＳＫ９	(1.33)	(0.30)	0.29	楕円形？
C-2	ＳＫ10	(1.14)	1.07	0.20	不整形
	ＳＫ11	1.12	1.05	0.32	円形
	ＳＫ12	1.04	0.99	0.12	円形
	ＳＫ13	1.25	1.09	0.29	円形
B-2	ＳＫ14	1.60	1.08	0.20	楕円形
B・C-2	ＳＫ15	1.79	1.35	0.50	楕円形
	ＳＫ16	1.96	(0.70)	0.47	不整楕円形？
C-2	ＳＫ17	1.25	(1.08)	0.42	楕円形
	ＳＫ18	1.60	1.39	0.34	楕円形

グリッド	遺構番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	形態
C-3	ＳＫ19	1.17	1.07	0.29	円形
	ＳＫ20	1.01	0.98	0.22	円形
	ＳＫ21	1.00	0.97	0.24	円形
B-3	ＳＫ22	0.88	0.80	0.06	円形
	ＳＫ23	0.98	0.92	0.10	円形
B-2	ＳＫ24	1.90	(1.10)	0.24	楕円形
D-3	ＳＫ25	1.10	0.94	0.83	不整円形
C-1・2	ＳＫ26	(2.71)	1.22	0.26	長楕円形
	ＳＫ27	1.66	(0.60)	0.50	楕円形？
E-3	ＳＫ28	1.45	0.97	0.36	長方形
E-2	ＳＫ29	1.18	0.86	0.20	楕円形
E-3	ＳＫ30	2.03	1.54	0.35	楕円形
E-2・3	ＳＫ31	1.02	0.78	0.36	楕円形
E-1	ＳＫ32	0.89	0.76	0.32	楕円形
C・D-2	ＳＫ33	1.24	0.87	0.32	楕円形
E-5	ＳＫ34	1.85	0.86	0.28	長方形
E-4	ＳＫ35	1.25	1.02	0.43	楕円形
D-3	ＳＫ36	1.06	0.93	0.59	円形

呈し、現存の長径1.96m、短径0.70m、深さ0.47mを測る。遺物は、出土していない。

第17号土壙（第12図）

Ｃ－２区に位置する。平面形は楕円形を呈すと思われ、現存の長径1.25m、短径1.08m、深さ0.42mを測る。遺物は、出土していない。

第18号土壙（第12図）

Ｃ－２区に位置する。平面形は楕円形を呈し、長径1.60m、短径1.39m、深さ0.34mを測る。遺物は、出土していない。

第19号土壙（第12図）

Ｃ－３区に位置する。平面形は円形を呈し、長径1.17m、短径1.07m、深さ0.29mを測る。遺物は、出土していない。

第20号土壙（第12図）

Ｃ－３区に位置する。平面形は円形を呈し、長径1.01m、短径0.98m、深さ0.22mを測る。遺物は、出土していない。

第21号土壙（第12図、第14図6）

Ｃ－３区に位置する。平面形は円形を呈し、長

径1.00m、短径0.97m、深さ0.24mを測る。遺物は土器片が出土している。６は磨消懸垂文を施文する胴部破片である。

第22号土壙（第12図）

Ｂ－３区に位置する。平面形は円形を呈し、長径0.88m、短径0.80m、深さ0.06mを測る。遺物は、出土していない。

第23号土壙（第12図）

Ｂ－３区に位置する。平面形は円形を呈し、長径0.98m、短径0.92m、深さ0.10mを測る。遺物は、出土していない。

第24号土壙（第12図）

Ｂ－２区に位置する。Ｐ29・30・31と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は楕円形を呈し、長径1.90m、短径1.10m、深さ0.24mを測る。遺物は、出土していない。

第25号土壙（第12図）

Ｄ－３区に位置する。第１号住居跡の炉２と重複するが、本土壙の方が古い。平面形は不整円形を呈し、長径1.10m、短径0.94m、深さ0.83mを測る。遺物は、出土していない。

第26号土壙（第12図）

Ｃ－１・２区に位置する。第27号土壙と重複するが、本土壙の方が新しい。平面形は長楕円形を呈し、現存の長径2.71m、短径1.22m、深さ0.26mを測る。遺物は、出土していない。

第27号土壙（第12図）

Ｃ－１・２区に位置する。第26号土壙と重複するが、本土壙の方が古い。平面形は楕円形を呈すると思われるが、約半分が調査区外に位置するため詳細は不明である。調査した範囲内では長径1.66m、短径0.60m、深さ0.50mを測る。遺物は、出土していない。

第28号土壙（第13図）

Ｅ－３区に位置する。平面形は長方形を呈し、長径1.45m、短径0.97m、深さ0.36mを測る。遺物は、出土していない。

第29号土壙（第13図）

Ｅ－２区に位置する。平面形は楕円形を呈し、長径1.18m、短径0.86m、深さ0.20mを測る。遺物は、出土していない。

第30号土壙（第13図）

Ｅ－３区に位置する。平面形は楕円形を呈し、長径2.03m、短径1.54m、深さ0.35mを測る。遺物は、出土していない。

第31号土壙（第13図）

Ｅ－２・３区に位置する。平面形は楕円形を呈し、長径1.02m、短径0.78m、深さ0.36mを測る。遺物は、出土していない。

第32号土壙（第13図）

Ｅ－１区に位置する。平面形は楕円形を呈し、長径0.89m、短径0.76m、深さ0.32mを測る。遺物は、出土していない。

第33号土壙（第13図）

Ｃ・Ｄ－２区に位置する。Ｄ－２、Ｐ１と重複するが、本土壙の方が古い。平面形は楕円形を呈し、長径1.24m、短径0.87m、深さ0.32mを測る。遺物は、出土していない。

第34号土壙（第13図）

Ｅ－５区に位置する。平面形は長方形を呈すと思われ、長径1.85m、短径0.86m、深さ0.28mを

測る。遺物は、出土していない。

第35号土壙（第13図）

Ｅ－４区に位置する。平面形は楕円形を呈すと思われ、長径1.25m、短径1.02m、深さ0.43mを測る。遺物は、出土していない。

第36号土壙（第13図、第14図７～９）

Ｄ－３区に位置する。平面形は円形を呈し、長径1.06m、短径0.93m、深さ0.59mを測る。遺物は土器片が出土している。７・８は単節ＬＲ地文上に、蛇行沈線を垂下する。９は単節ＬＲ縄文を施文する。

6　井戸跡

第１号井戸跡（第13図、第16図１）

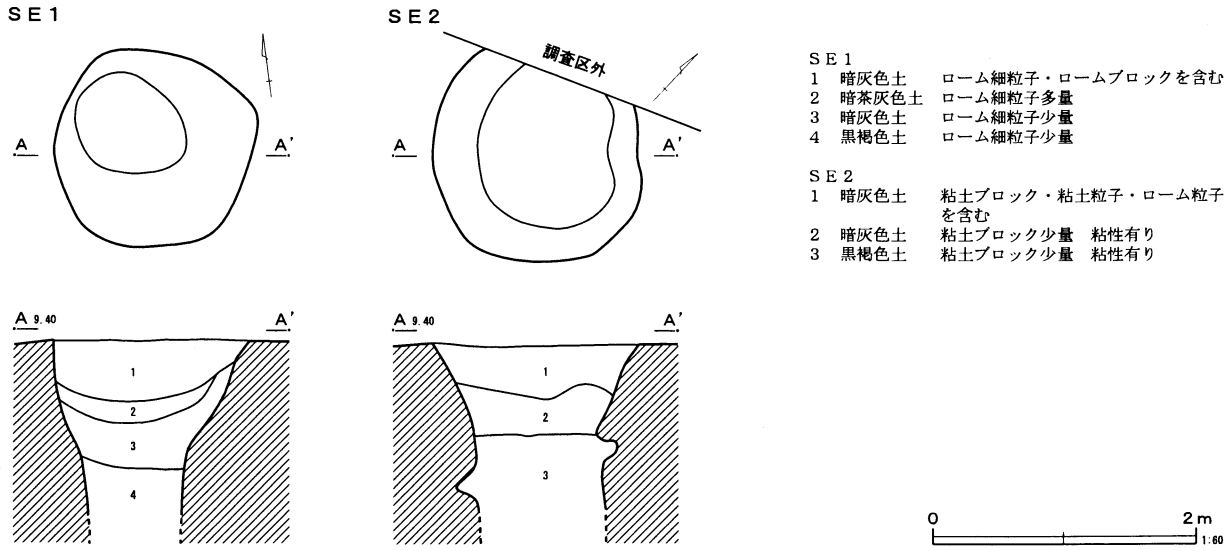
Ｃ－３区に位置する。周囲にピットが存在しない地域にあり、平面形は円形を呈し、長径1.57m、短径1.50mを測る。1.5mほど掘り下げたが底には至らず、湧水が著しく、危険防止のためそれ以上の掘削を行わなかったため、深さは不明である。開口部がラッパ状に開く形態で、開口部より約0.9mの深さから、径0.67mの筒状を呈する。

覆土は自然堆積のレンズ状堆積を呈し、１層の暗灰色土、２層の暗茶灰色土、３層の暗灰色土、４層の黒褐色土が堆積していた。

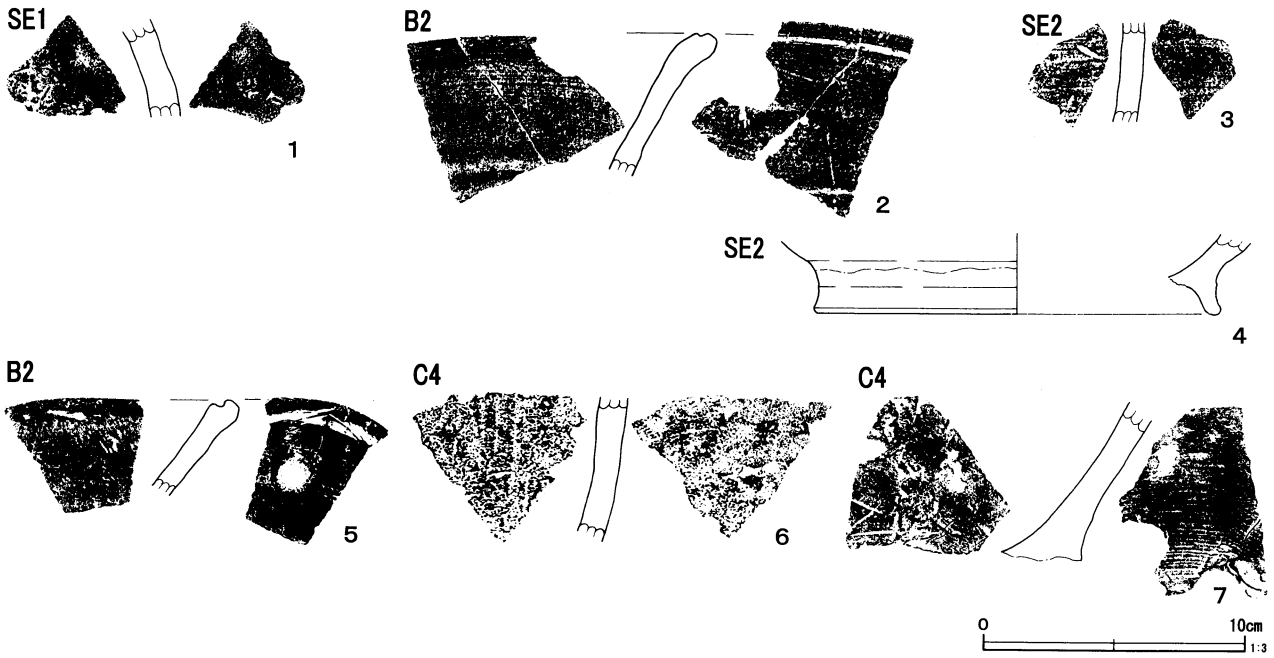
遺物は甕の肩部の破片が、１点出土している。産地は不明であるが、きめ細かく、灰白色を呈し、外面に一部灰釉がかかる。

第２号井戸跡（第13図、第16図２～４）

Ｂ－２区に位置する。一部調査区外にかかるが、平面形は南北方向に細長い楕円形を呈し、現存で長径1.60m、短径1.45mを測る。1.4mほど掘り下げたが底には至らず、湧水が著しく、危険防止のためそれ以上の掘削を行わなかったため、深さは不明である。開口部が外反状のラッパ状に開く形態で、開口部より約１mの深さから、径１mの筒状を呈する。



第15図　井戸跡



第16図　井戸跡・グリッド出土土器

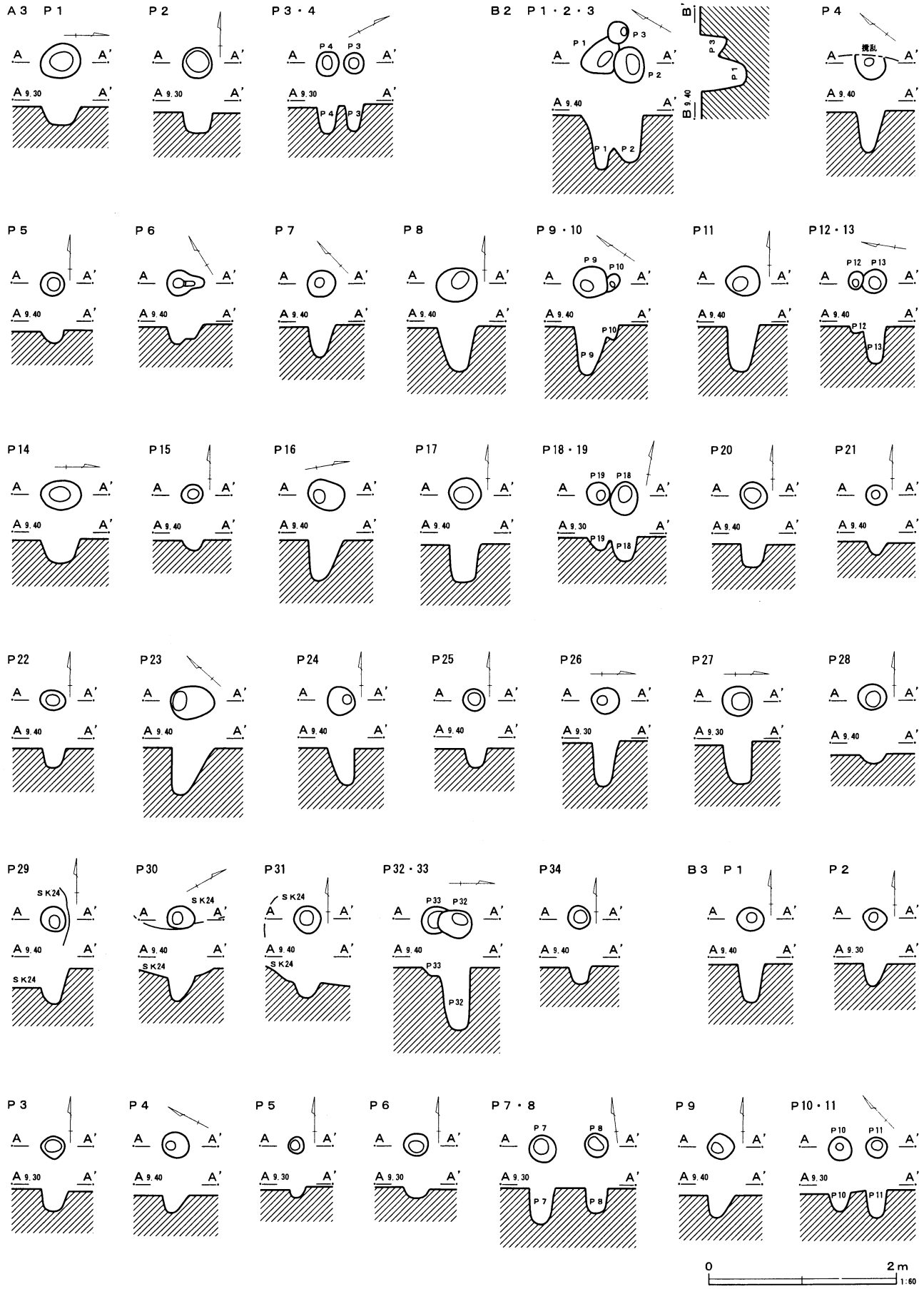
第５表　井戸・グリッド出土遺物観察表(第16図)

挿図番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	生産地	残存(%)	焼成	色調	出土位置	備考	図版
1	陶器	甕	－	－	－	常滑	5	良好	黄灰	SE1	自然釉付着	4-1
2	陶器	片口鉢	(24.0)	－	－	常滑	10	良好	灰	B2	山茶碗系	4-2
3	陶器	甕	－	－	－	常滑	5	良好	灰黄	SE2		4-3
4	陶器	片口鉢	－	－	(15.0)	常滑	10	良好	灰黄	SE2	山茶碗系	4-4
5	陶器	片口鉢	－	－	－	常滑	10	良好	灰	B2	山茶碗系	4-5
6	陶器	甕	－	－	－	常滑	10	良好	灰	C4		4-6
7	陶器	甕	－	－	－	常滑	10	良好	灰	C4	山茶碗系	4-7

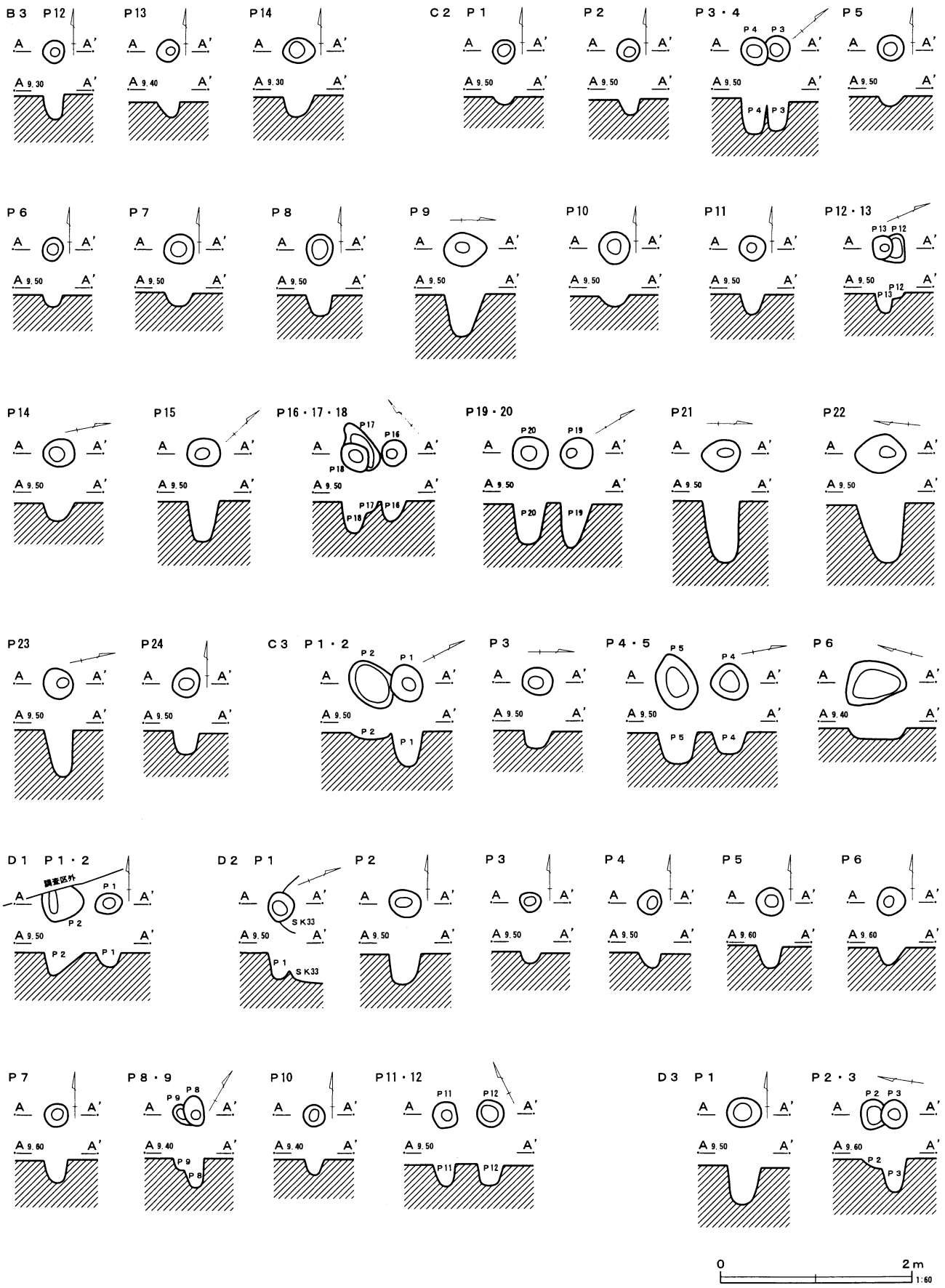
覆土は第１号井戸跡と類似し、自然堆積状の平坦な堆積を呈し、１層の暗灰色土、２層の粘性の強い暗灰色土、３層の黒灰色土が堆積していた。

遺物は片口鉢の口縁部破片と、甕の胴部と底部破片が出土している。２は口唇上に沈線を廻らすもので、灰白色を呈し、轆轤整形が明瞭に残り、胎土に白色粒子を含む。３は灰白色を呈し、胎土に白色粒子と細砂粒を少量含み、ナデ整形痕が見られる。４は底部破片で、1.5cm程度の高台が付く。

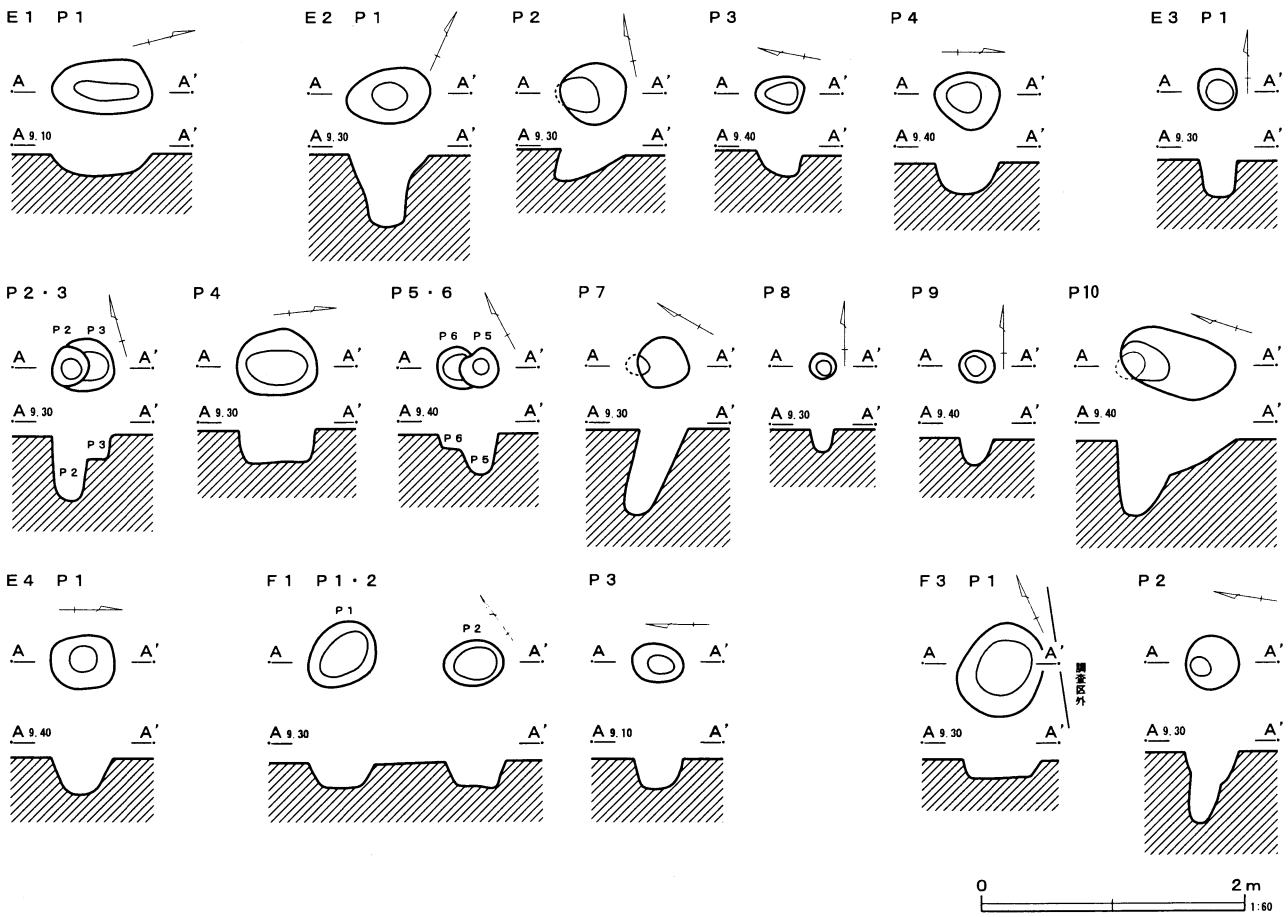
他に、井戸周辺のグリッドから第16図５～７の破片が出土した。５は２と同一個体と思われる片口鉢の注ぎ口部の破片と思われる。口唇上には沈線を廻らす。６は胴部破片で、１と胎土が類似する。７は鉢の底部破片で、きめ細かな胎土に細砂粒と白色粒子を少量含み、内面にナデ整形痕が残る。灰白色を呈し、１～７の中で最も白色が強い。井戸跡出土の破片と、同一個体がグリッドから出土していることなどから、井戸の構築時期もこれらの遺物と同じ時期と推測され、中世段階の所産と推定される。


A3 P1
P2
P3・4
B2 P1・2・3
P4
P5
P6
P7
P8
P9・10
P11
P12・13
P14
P15
P16
P17
P18・19
P20
P21
P22
P23
P24
P25
P26
P27
P28
P29
P30
P31
P32・33
P34
B3 P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7・8
P9
P10・11
SK24
0
2m
1:60

第17図　ピット（1）


B3 P12
P13
P14
C2 P1
P2
P3・4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12・13
P14
P15
P16・17・18
P19・20
P21
P22
P23
P24
C3 P1・2
P3
P4・5
P6
D1 P1・2
調査区外
D2 P1
SK33
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8・9
P10
P11・12
D3 P1
P2・3
0
2m
1:60

第18図　ピット（2）



第19図　ピット（3）

7　ピット跡

調査区からは、多数のピット跡が検出された。その多くはB～D－2・3区にかけて存在しており、付近には第2号井戸跡が存在している。ピット跡は整然とした並びを把握できなかったが、井戸跡となんらかの関係を持つものと思われる。

また、E－2・3区にかけてもピット跡が散在し、第1号掘立柱建物跡との関連が窺われる。

第6表　ピット計測表(1)

グリッド	遺構番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
A-3	P 1	0.43	0.36	0.20
	P 2	0.33	0.32	0.23
	P 3	0.22	0.21	0.28
	P 4	0.27	0.23	0.30
B-2	P 1	0.45	0.34	0.58
	P 2	0.39	0.32	0.50
	P 3	0.24	0.22	0.28
	P 4	(0.26)	0.32	0.45
	P 5	0.25	0.25	0.14
	P 6	0.40	0.28	0.19
	P 7	0.31	0.28	0.33
	P 8	0.43	0.35	0.47
	P 9	0.38	0.35	0.52
	P10	0.21	0.14	0.15

グリッド	遺構番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
B-2	P11	0.36	0.30	0.48
	P12	0.19	0.15	0.07
	P13	0.28	0.23	0.39
	P14	0.42	0.31	0.25
	P15	0.23	0.20	0.13
	P16	0.39	0.30	0.41
	P17	0.34	0.32	0.41
	P18	0.36	0.28	0.24
	P19	0.25	0.24	0.13
	P20	0.29	0.27	0.23
	P21	0.22	0.22	0.14
	P22	0.27	0.21	0.20
	P23	0.46	0.35	0.49
	P24	0.30	0.29	0.39

第7表　ピット計測表(2)

グリッド	遺構番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
B-2	P25	0.24	0.21	0.21
	P26	0.30	0.27	0.48
	P27	0.32	0.30	0.44
	P28	0.31	0.27	0.10
	P29	0.27	0.26	0.38
	P30	0.30	0.24	0.33
	P31	0.29	0.27	0.16
	P32	0.36	0.29	0.66
	P33	(0.32)	0.28	0.09
	P34	0.24	0.23	0.18
B-3	P1	0.28	0.25	0.40
	P2	0.26	0.20	0.24
	P3	0.26	0.21	0.23
	P4	0.29	0.26	0.18
	P5	0.18	0.17	0.11
	P6	0.26	0.23	0.11
	P7	0.29	0.28	0.38
	P8	0.25	0.24	0.26
	P9	0.29	0.25	0.24
	P10	0.25	0.24	0.20
	P11	0.22	0.21	0.30
	P12	0.24	0.21	0.26
	P13	0.24	0.21	0.16
	P14	0.34	0.26	0.21
C-2	P1	0.25	0.20	0.08
	P2	0.25	0.23	0.16
	P3	0.27	0.26	0.31
	P4	0.31	0.27	0.36
	P5	0.28	0.27	0.10
	P6	0.25	0.20	0.13
	P7	0.33	0.30	0.14
	P8	0.33	0.27	0.20
	P9	0.43	0.35	0.44
	P10	0.33	0.32	0.12
	P11	0.27	0.25	0.21
	P12	0.32	(0.12)	0.06
	P13	0.25	0.20	0.22
	P14	0.33	0.28	0.18
	P15	0.35	0.29	0.42
	P16	0.28	0.25	0.20
	P17	0.54	(0.09)	0.13
	P18	0.34	0.26	0.32
	P19	0.34	0.32	0.46
	P20	0.36	0.34	0.43
	P21	0.40	0.31	0.63
	P22	0.52	0.39	0.61

グリッド	遺構番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
C-2	P23	0.32	0.29	0.49
	P24	0.31	0.27	0.23
C-3	P1	0.39	0.33	0.36
	P2	0.56	0.40	0.06
	P3	0.32	0.29	0.19
	P4	0.39	0.37	0.23
	P5	0.59	0.40	0.33
	P6	0.62	0.45	0.12
D-1	P1	0.41	(0.31)	0.24
	P2	0.28	0.21	0.16
D-2	P1	0.30	0.27	0.28
	P2	0.34	0.27	0.33
	P3	0.22	0.19	0.13
	P4	0.26	0.24	0.16
	P5	0.29	0.27	0.23
	P6	0.30	0.28	0.19
	P7	0.25	0.24	0.24
	P8	0.32	0.20	0.30
	P9	0.25	(0.11)	0.13
	P10	0.24	0.22	0.17
	P11	0.27	0.24	0.23
	P12	0.29	0.28	0.22
D-3	P1	0.36	0.30	0.40
	P2	0.32	(0.20)	0.12
	P3	0.30	0.27	0.36
E-1	P1	0.76	0.40	0.17
E-2	P1	0.64	0.41	0.54
	P2	0.49	0.46	0.23
	P3	0.38	0.28	0.17
	P4	0.48	0.43	0.23
E-3	P1	0.32	0.30	0.27
	P2	0.30	0.27	0.48
	P3	0.44	0.43	0.20
	P4	0.61	0.49	0.24
	P5	0.30	0.25	0.31
	P6	0.34	0.30	0.12
	P7	0.39	0.38	0.64
	P8	0.20	0.20	0.17
	P9	0.26	0.24	0.20
	P10	0.88	0.46	0.57
E-4	P1	0.48	0.40	0.28
F-1	P1	0.57	0.46	0.18
	P2	0.46	0.34	0.22
	P3	0.40	0.29	0.22
F-3	P1	0.72	0.59	0.12
	P2	0.42	0.40	0.53

8　グリッド出土遺物

（1）縄文土器

九宮１遺跡のグリッドからは、縄文時代中期末葉の土器群と、後期前葉の土器群が出土している。他の時代・時期の遺物は、井戸跡の項で説明した中世陶器の破片のみであった。

第Ⅰ群土器

縄文時代中期末葉の土器群を一括する。

第１類（第20図１～16・22）

沈線で区画し磨消縄文のモチーフを持つ土器群を一括する。

１はやや肥厚して内湾する口縁部が開くキャリパー形土器で、口縁部に幅狭の磨消縄文で渦巻文を連結するモチーフを描くものと思われる。口縁部は内削状を呈し、地文に太細の撚り合わせである単節ＲＬ縄文を充填施文する。

２は肥厚する口縁部が強く内湾する器形を呈し、口縁部に隆起線で幅狭な無文帯を区画する。口縁部は隆起線に沿った沈線で区画し、口縁部の区画線に抉入する形で、磨消縄文の抱球文を施文する。地文は単節ＬＲの充填施文である。

３は細かな刻みを施す２本沈線で口縁部を区画し、２と同様に磨消縄文で区画線に抉入する抱球文を施文するものと思われる。

４はやや内湾する口縁部の無文帯を沈線で区画し、５は口唇直下に沈線を廻らす。

６～８・10～13は磨消縄文の曲線的なモチーフを描く土器群である。６～８は胴部に幅広の褶曲文を描くもので、地文に単節ＬＲを充填施文する。７・８は胴下半部の逆Ｕ字状懸垂文に対応するモチーフを描くものである。11～13は幅の狭い磨消無文帯で、上下に対向する曲線文を描く。

９は磨消縄文で渦巻文を描くもので、２と同一個体と思われる。

14～16は直線的な磨消懸垂文を垂下する破片であり、16は口縁部文様帯下端部の区画が存在する。いずれも地文は単節ＲＬの充填施文である。

22は口縁部に無文部を沈線で区画する鉢形土器で、胴部に単節ＬＲを縦位施文する。

１・５・11～16・22は加曽利ＥⅢ式新段階、２～４・６～10はⅣ式古段階に位置付けられよう。

第２類（第20図17～21・23・24）

微隆起線で区画、モチーフを描くものである。

17・18・23は内湾する口縁部に微隆起線を廻らして、口縁部無文帯を区画する。17は地文に単節ＬＲ、18はＲＬ縄文を施文し、23は無文である。19・20は、隆起線を垂下して無文懸垂文とし、20は地文に単節ＲＬ、19はＬＲを充填施文する。21は沈線の沿う隆帯でＵ字状の区画を施し、単節ＲＬ縄文を充填施文する。24は指頭状の磨消縄文を施文するもので、磨消縄文の両サイドが微隆起線状に盛り上がる。地文は単節ＬＲである。

18・20・21は加曽利ＥⅢ式新段階、他はⅣ式古段階に位置付けられよう。

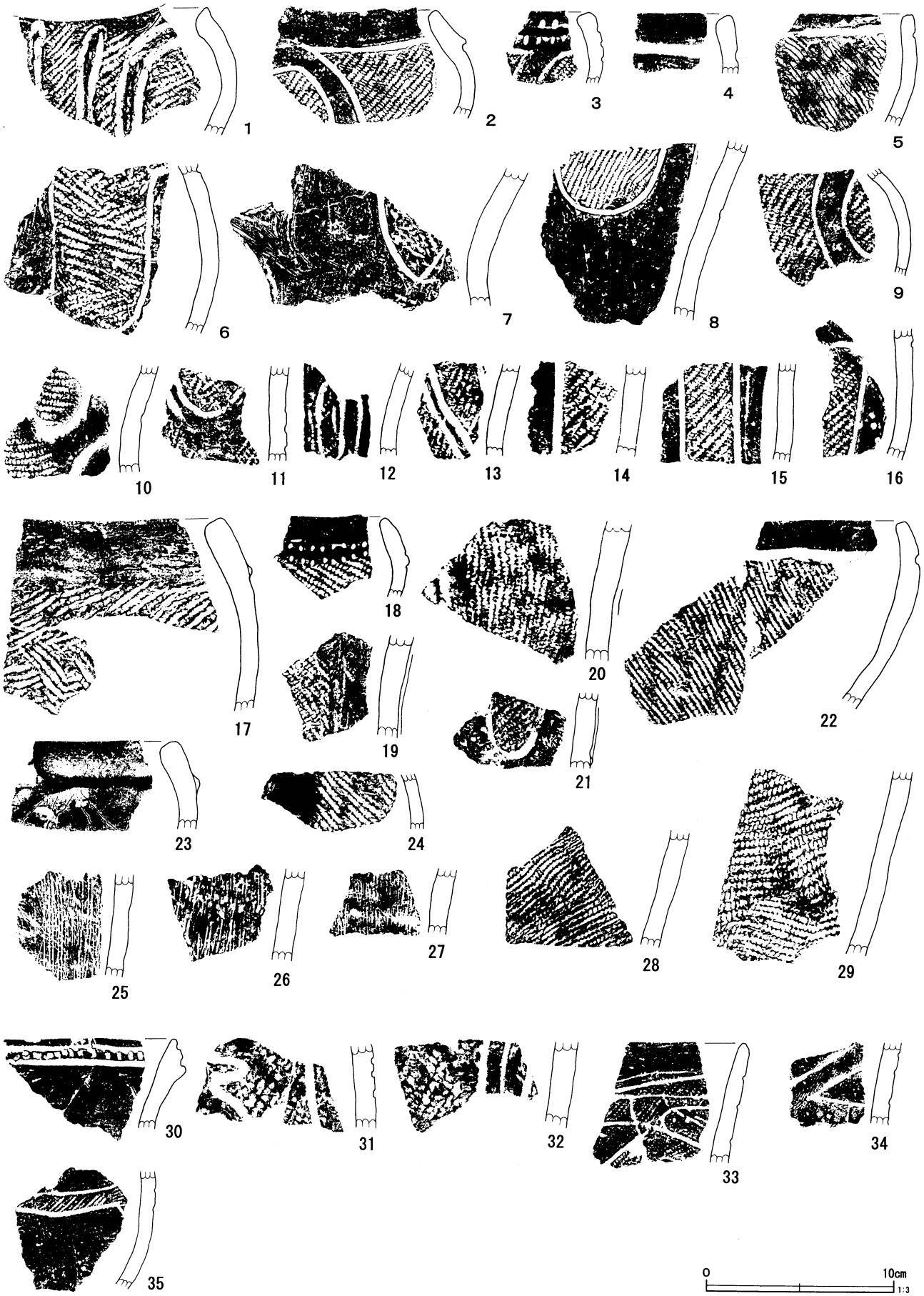
第３類（第20図25～29）

地文のみ施文する破片で、25～27は細かな条線文を、28・29は単節ＬＲを施文する。いずれも加曽利ＥⅢ式新段階に位置付けられよう。

第Ⅱ群土器（第20図30～35）

後期前葉の堀之内式土器を一括する。30～32は堀之内Ⅰ式土器で、30は肥厚する口縁部が開き、２本沈線間に刻みを施す口縁部文様帯を構成する。31・32は地文単節ＬＲ縄文上に蕨手文等の懸垂文を垂下する。

33・34は堀之内Ⅱ式土器で、口縁部が直線的に開き、胴部でやや括れる器形を呈し、磨消縄文で三角形状モチーフや曲線状のモチーフを連結する構成を採る。33は口縁部の隆線区画が見られず、モチーフの一部に曲線的な区画文が施文されている。地文は単節ＬＲの充填施文である。



第20図　グリッド出土土器

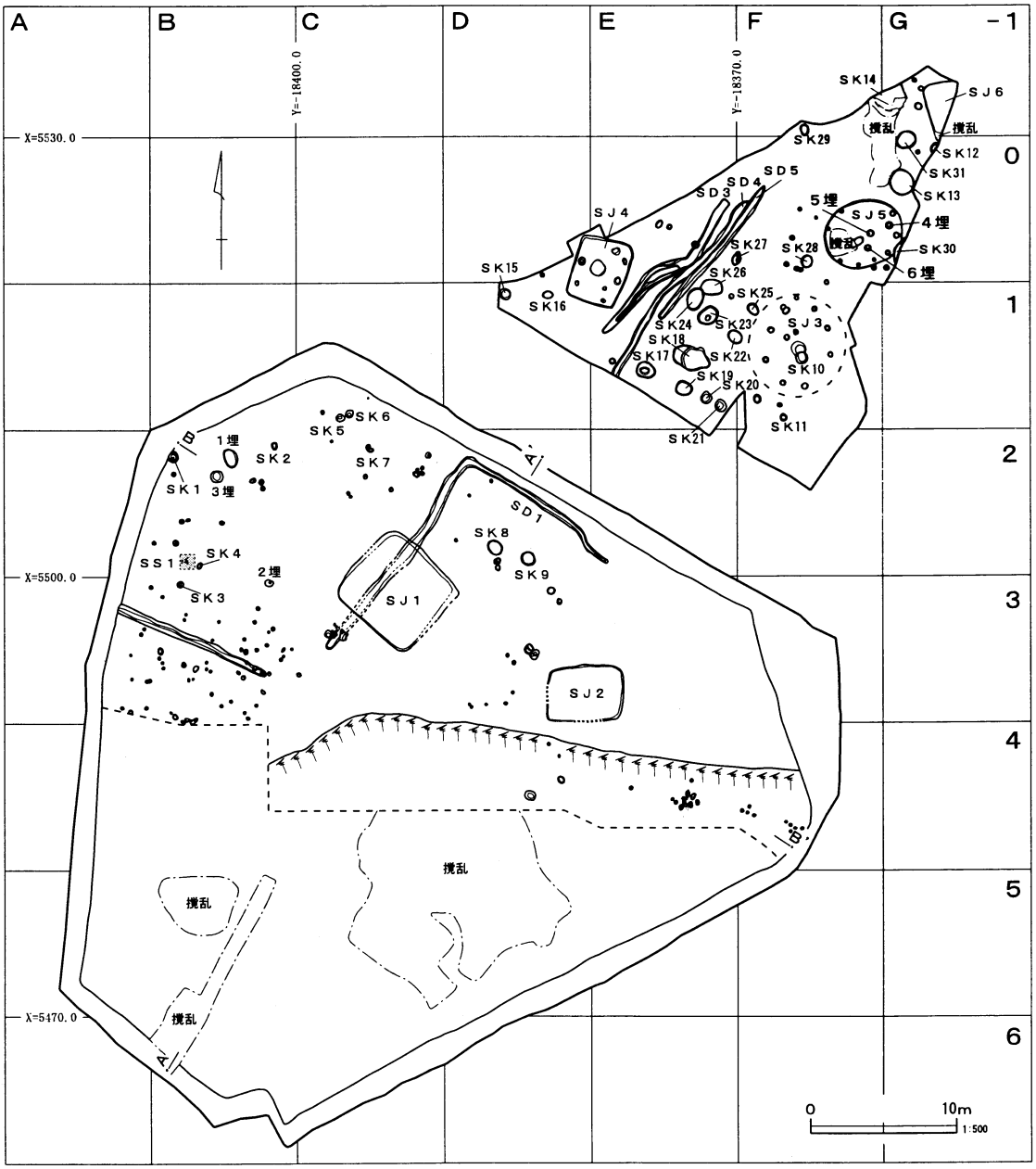
Ⅳ　九宮２遺跡の調査

１　遺跡の概要

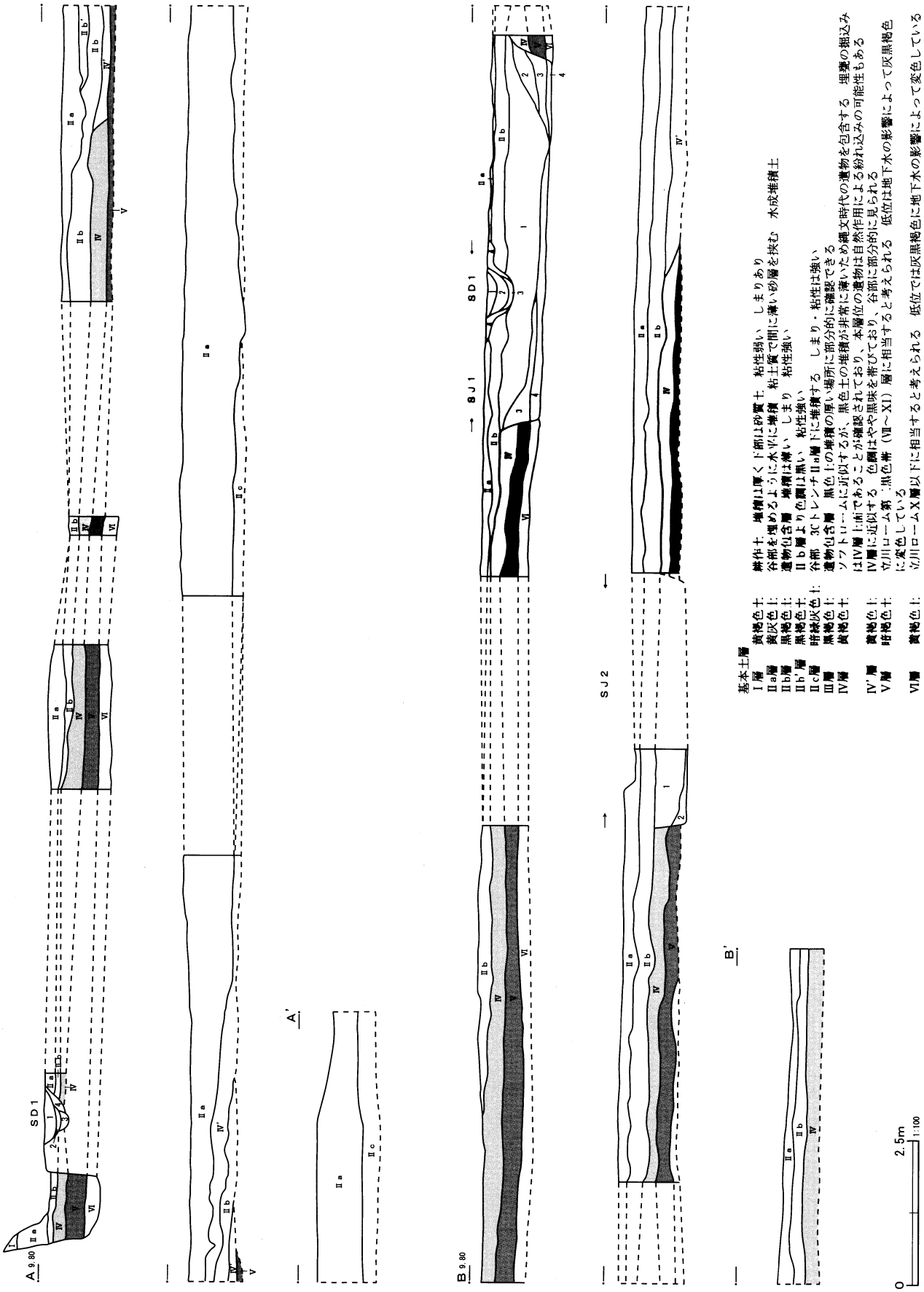
九宮２遺跡は菖蒲町南東端の、星川と庄兵衛堀川に開析された標高10m前後を測る埋没ローム台地上に立地し、東側に久喜市、南側に白岡町が隣接する。

遺跡が立地する台地は上記の両河川や元荒川、備前堀川等の乱流により、北西から南東方向に削り出されたローム台地が縞状に埋没しており、現在周辺には水田が広がっている。特に、遺跡周辺部は台地の幅が狭まっている部分である。遺跡の東側は谷状に入り込む開析で抉られており、南側は調査区の半分ほどが谷状地形を呈して、遺物包含層を形成していた。遺構は幅の狭い台地上から肩部にかけて構築されていた。

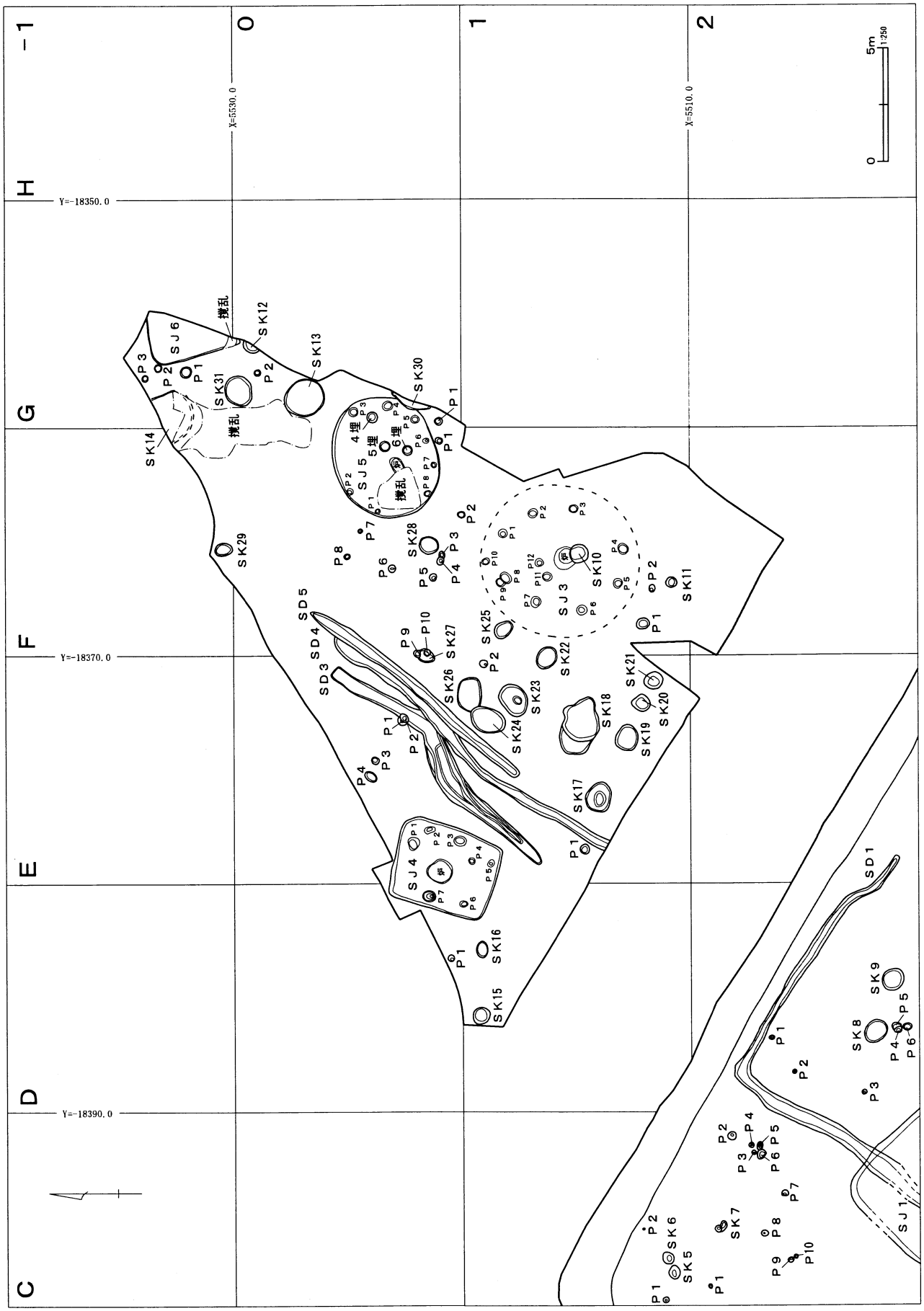
遺跡の堆積土層は、大きく分けて第Ⅰ層の耕作



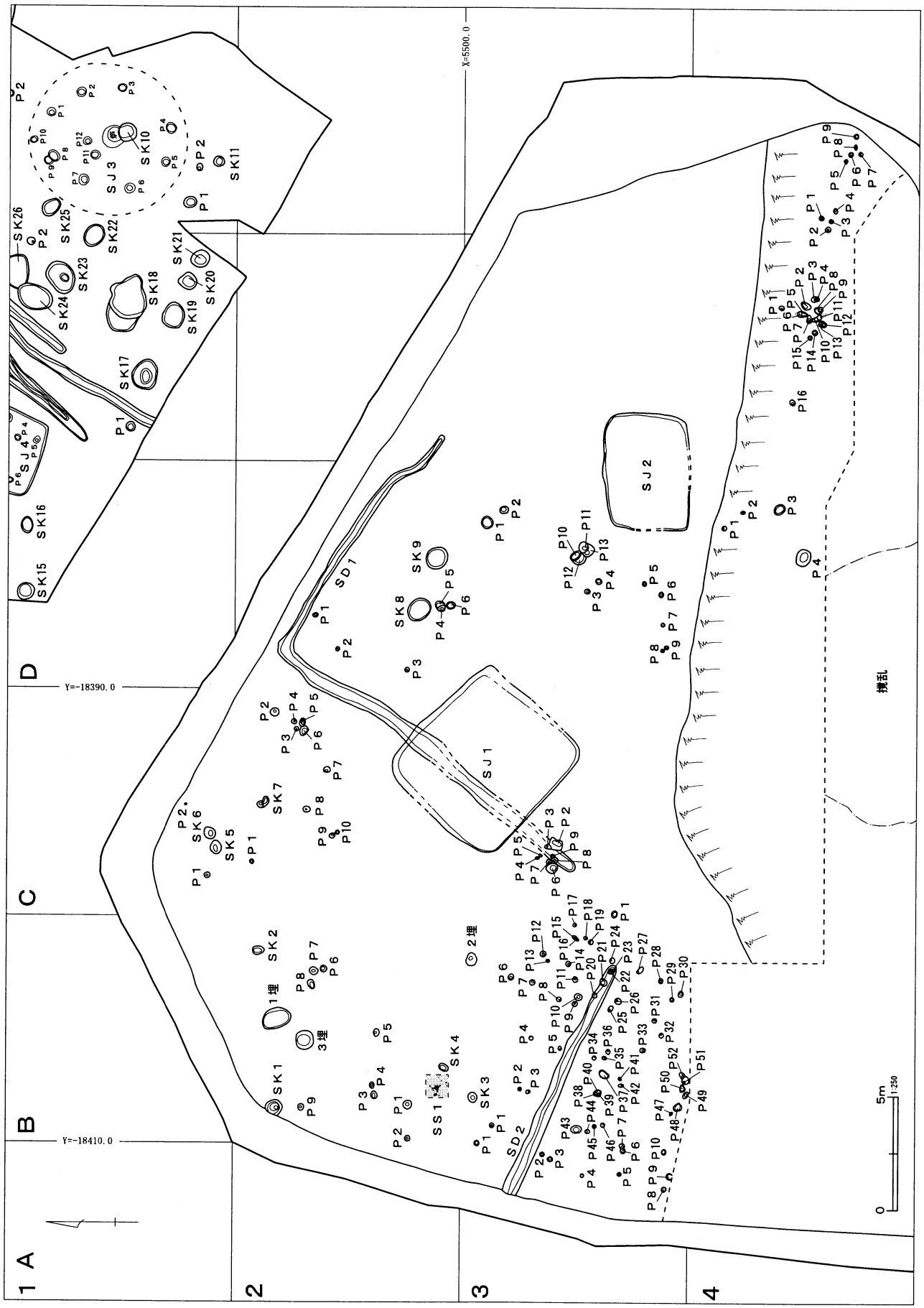
第21図　九宮２遺跡調査区全体図（１）


A 9.80
A'
B 9.80
B'
SD1
SJ1
SJ2
0
2.5m
1:100
基本土層
Ⅰ層　褐色土：　縦作土、堆積は厚く下部は砂質土　粘性弱い　しまりあり
Ⅱa層　黄灰色土：　谷部を埋めるように水平に堆積　粘土質で間に薄い砂層を挟む　水成堆積土
Ⅱb層　黒褐色土：　遺物包含層　堆積は薄い　しまり　粘性強い
Ⅱb'層　黒褐色土：　Ⅱb層より色調は黒い　粘性強い
Ⅱc層　暗緑灰色土：　谷部　3Cトレンチ$Ⅱ_a$層下に堆積する　しまり・粘性は強い
Ⅲ層　黒褐色土：　遺物包含層　黒色土の堆積の厚い場所に部分的に確認できる
Ⅳ層　黄褐色土：　ソフトロームに近似するが、黒色土の堆積が非常に薄いため縄文時代の遺物を包含する　埋甕の掘込みはⅣ層上面であることが確認されており、本層位の遺物は自然作用による紛れ込みの可能性もある
Ⅳ'層　黄褐色土：　Ⅳ層に近似する　色調はやや黒味を帯びており、谷部に部分的に見られる
Ⅴ層　暗褐色土：　竹川ローム第Ⅶ層（黒色帯（Ⅶ～Ⅺ））層に相当すると考えられる　低位は地下水の影響によって灰黒褐色に変色している
Ⅵ層　黄褐色土：　竹川ローム$Ⅹ_1$層以下に相当すると考えられる　低位では灰黒褐色に地下水の影響によって変色している

第22図　基本土層



第23図　九宮２遺跡調査区全体図（２）



第24図　九宮２遺跡調査区全体図（３）

土層。第Ⅱ～Ⅲ層の遺物包含層、第Ⅳ～Ⅵ層の関東ローム層で構成されていた。さらに、第Ⅱ層はａ、ｂ、ｂ’、ｃ層に分層される。第Ⅲ層は谷部の遺物包含層に部分的に形成された黒褐色土層である。第Ⅳ層は２層に分層され、上面はソフトロームに相当するものと思われ、浸食が著しく、縄文時代の遺物が混在する。下面はハードロームに相当するものと思われ、このⅣ層中から石器群が出土している。第Ⅴ層は暗褐色土層で、立川ロームの第Ⅱ黒色帯に、第Ⅵ層が立川ロームのＸ層以下に相当するものと思われる。

調査区は町道を挟んで北と南に分割されているが、３次に亘る調査で検出された遺構は、旧石器時代の遺物集中区１箇所、縄文時代の竪穴住居跡３軒、古墳時代前期の竪穴住居跡３軒、古墳時代前期の祭祀跡１箇所、縄文時代の埋甕６基、各時代の土壙31基、溝跡５条、ピット跡多数であった。

旧石器時代の遺構、遺物はＢ・Ｃ－２・３区にかけて検出されており、遺物は主に第Ⅳ層中で、散在的に発見されている。

縄文時代の住居跡は全て後期前葉の堀之内式の所産であり、町道より北側の第２次、第３次調査区内に位置する。調査区の西側の際に谷が入り込んでいることから、台地肩部は後世の侵食が著しく、住居跡も浸食を受けていた。

住居跡は年代的に張り出しを持つ柄鏡形住居跡と思われるが、ピットのみ存在するものがあるなど、全体の形状を窺い知ることのできないものであった。堀之内式期では張り出し部に埋甕を設けるものはなくなり、張り出し部を特定することは難しくなる。

埋甕は町道を挟んで南側と北側に各３基が検出された。南側ではＢ－２・３区にかけて検出され、堀之内Ⅰ式の第１号埋甕と第３号埋甕が隣接して存在し、称名寺Ⅱ式の埋甕がやや離れて単独で存在していた。北側ではＦ・Ｇ－０区にかけて、堀之内Ⅰ式の第４号～第６号埋甕３基が、第５号住居跡内にまとまって埋設されていた。埋甕は第５号住居跡が埋没した後、窪地を利用して行われたものと思われる。埋甕同士にある程度のまとまりがあることから、墓域との関係でなんらかの関連性が窺える。

古墳時代前期では五領式期の住居跡が、南側に２軒、北側に１軒検出された。いずれも、台地上部に占地しており、縄文時代の竪穴住居と位置取りが異なる。南側の第１号、第２号住居跡は確認面から深く、調査時点で床面付近からの湧水があるため、詳細な調査ができなかったが、遺物は床面付近から出土している。北側の第３号住居跡では、炉は明瞭に把握されたが、ピット跡を含めた他の施設は不明瞭であった。

さらに、古墳時代前期ではＢ－２区で、小型の壺が多く、しかも特殊な状態で検出された地点があった。これは通常の遺物遺棄場、または生活痕跡とは考え難いことから、祭祀遺構と認定された。

各時期の土壙は、調査区の各区に分布していたが、確実に時期を認定できないものの、覆土から縄文土器片が出土する土壙は、縄文時代の竪穴住居跡の周囲から検出される傾向にある。

ピット跡も時期を限定できないが、各区から多数検出されている。特に、Ｂ－３区やＤ－３区で集中する傾向にあり、縄文時代の住居跡の残骸である可能性もある。これらが住居跡の残骸であるならば、検出された住居跡の配列から見て都合の良いものと思われる。

他に、溝跡も５条検出されているが、第１号溝、第３号～第５号溝は現道である町道と直角方向に伸びており、第１号溝のクランクに折れ曲がった一部と、第２号溝は平行方向に走ることから、近世もしくはそれ以降に構築された区画溝的な性格が強いものと判断される。

遺跡の範囲は東側の調査区を限界とし、西側へさらに続くものと思われる。

２．旧石器時代の調査

（１）概要

遺構確認及びその精査の過程で、旧石器時代と思われる石器が数点検出された。調査区北側の台地肩部を中心に深掘区を設定し調査を実施した。

ロームの堆積状況は薄く、立川ローム層に相当すると思われる層厚は約0.6mである。層の区分は調査時の観察で上層が茶褐色、暗褐色層を挟んで下層が黄褐色の３層に区分された。武蔵野台地標準層位との対比では、第Ⅴ層の暗褐色層が第２暗色帯に相当すると思われる。

石器集中は、調査区東側のＢ・Ｃ－２区から検出された。遺物は第Ⅳ'層から第Ⅴ層上面にかけて出土している。調査時の観察では、武蔵野台地との第Ⅲ～Ⅴ層に対応するとしているが、石器の形態との間に齟齬はない。

（２）石器集中

遺物の分布は、南北約７m、東西約14mに広がっているが、石器の点数は12点と少なく、石器集中として捉えられるのか問題はある。遺物の分布は散漫で、数点の小さなまとまりが幾つかみられる。石器は図示可能なもの４点を実測した。チャート製のナイフ形石器と黒色頁岩の剥片が分布の中央部で近接し、分布の西部に黒曜石製の掻器と剥片が近接して出土した。

（３）石器（第26図）

ナイフ形石器（１）

１は下位の縦長剥片を素材にし、打面を除去している。正面を構成する剥離面は、主要剥離面の剥離方向と約45°ずれている。刃部は右刃で先端は、使用によるため若干欠損している。調整加工は左側縁に基端から先端まで急角度の規格的剥離が施されている。右側縁は基部付近に裏面から剥離が施され、調整加工の代わりをなしている。

掻器（２）

２は外形が方形に近く、下縁に刃部加工が施されている。素材剥片は正面を主要剥離面とした厚手の剥片で、右側縁に自然面を残し、左側面は正面方向からの力によって折断されている。裏面の剥離面の打撃方向は主要剥離面と90°異なっている。

剥片（３～５）

３は黒曜石製の剥片である。打面は広く自然面を残している。

４・５は黒色頁岩製の剥片である。打面は単剥離面で広く、端部は少し欠損している。右側縁の正面と、左側縁の裏面に細かい剥離が観察できる。

（４）グリッド出土の石器（第28・29図）

ナイフ形石器（１）

１は上半部を欠損する。ナイフ形石器に分類するのにはやや違和感があるが、他の器種と考える要素も少なくナイフ形石器に含めておく。右側縁は、対向剥離によって急角度で直線的に仕上げられている。左側縁は抉りを入れるように、裏面からの急角度の剥離が施されている。

削器（２）

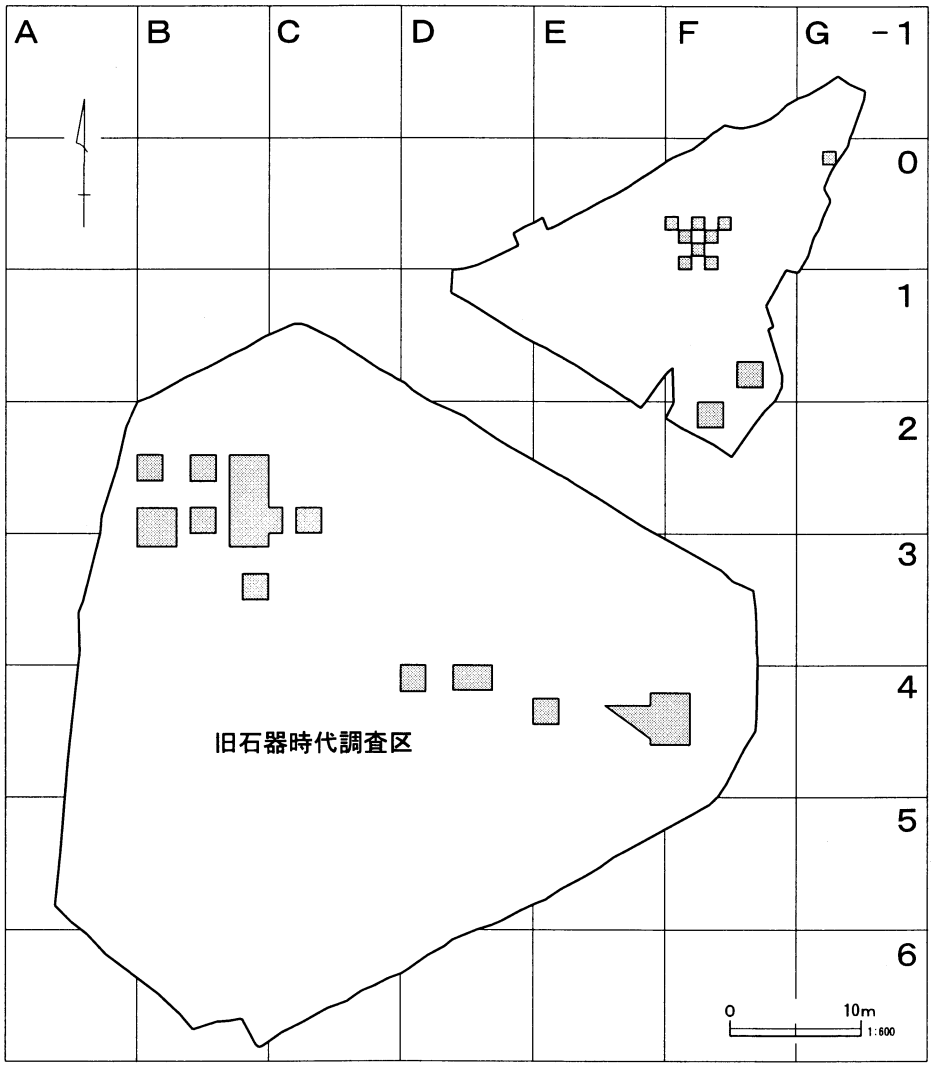
２は裏面が節理面による平坦面、正面は主要剥離面に凸面となっている。右側縁に細かい剥離による刃部加工が施されている。

剥片（３～10）

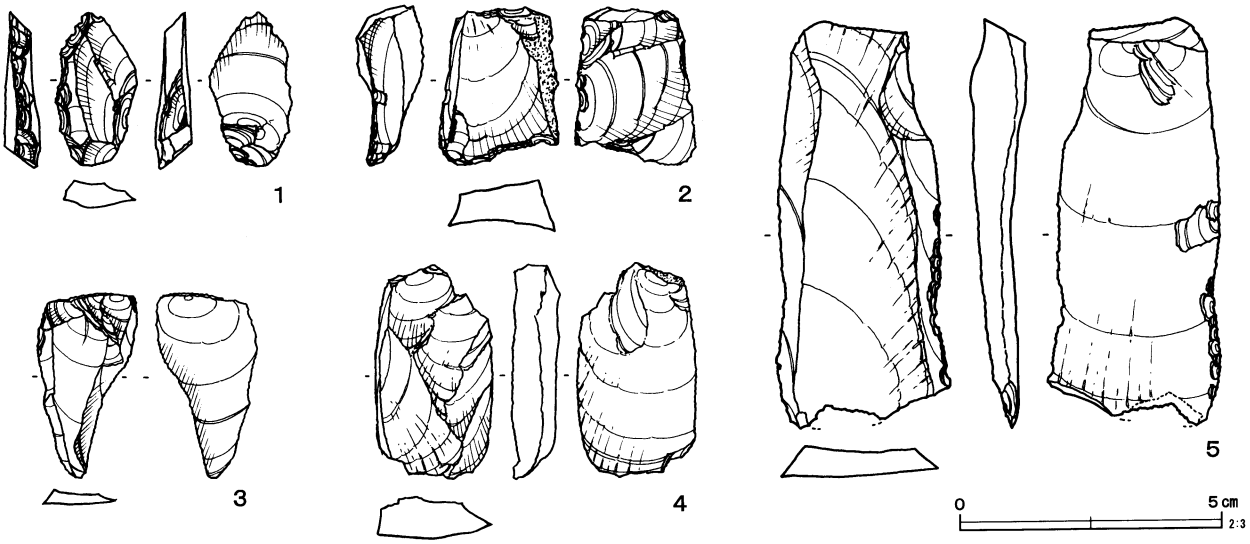
比較的形の整った剥片を図示した。石材は多様である。

石核（11～13）

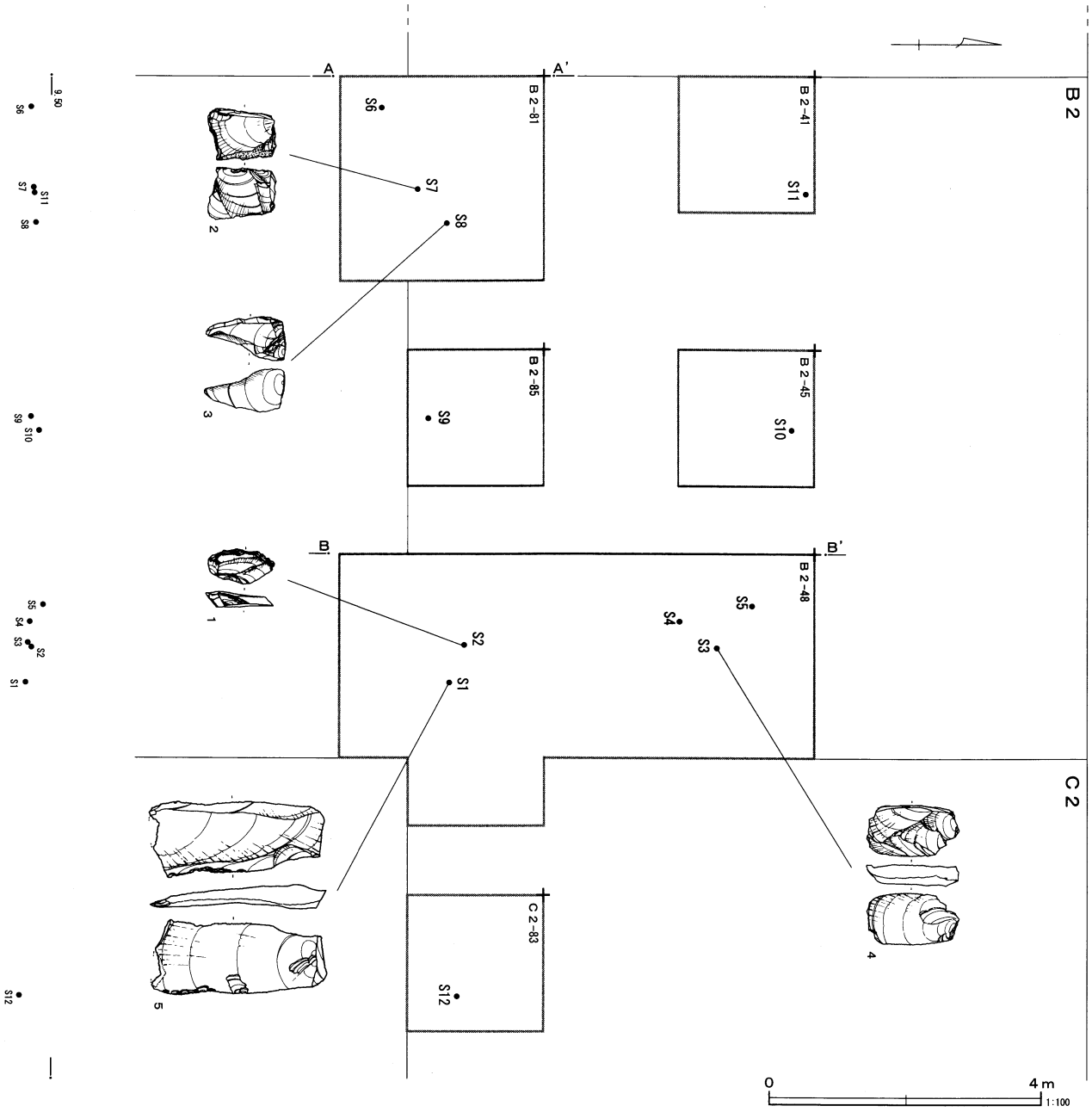
石核は小形のもののみである。12は小口を作業面とした石核で、小形の縦長剥片を作出したものと考えられる。

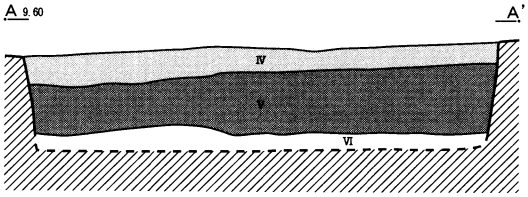


第25図　旧石器時代調査区

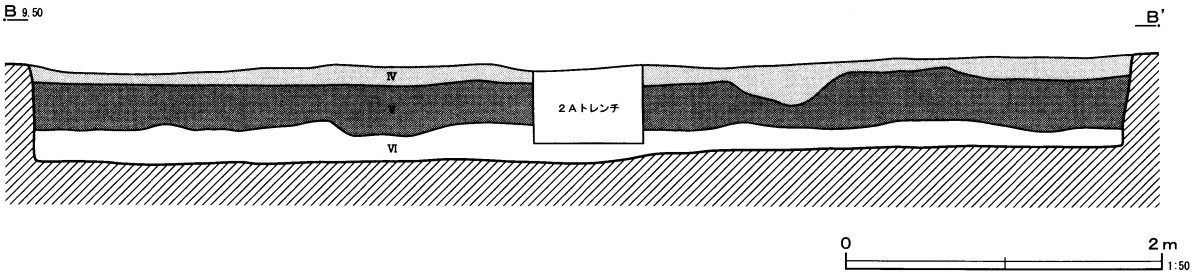


第26図　旧石器時代調査区出土遺物

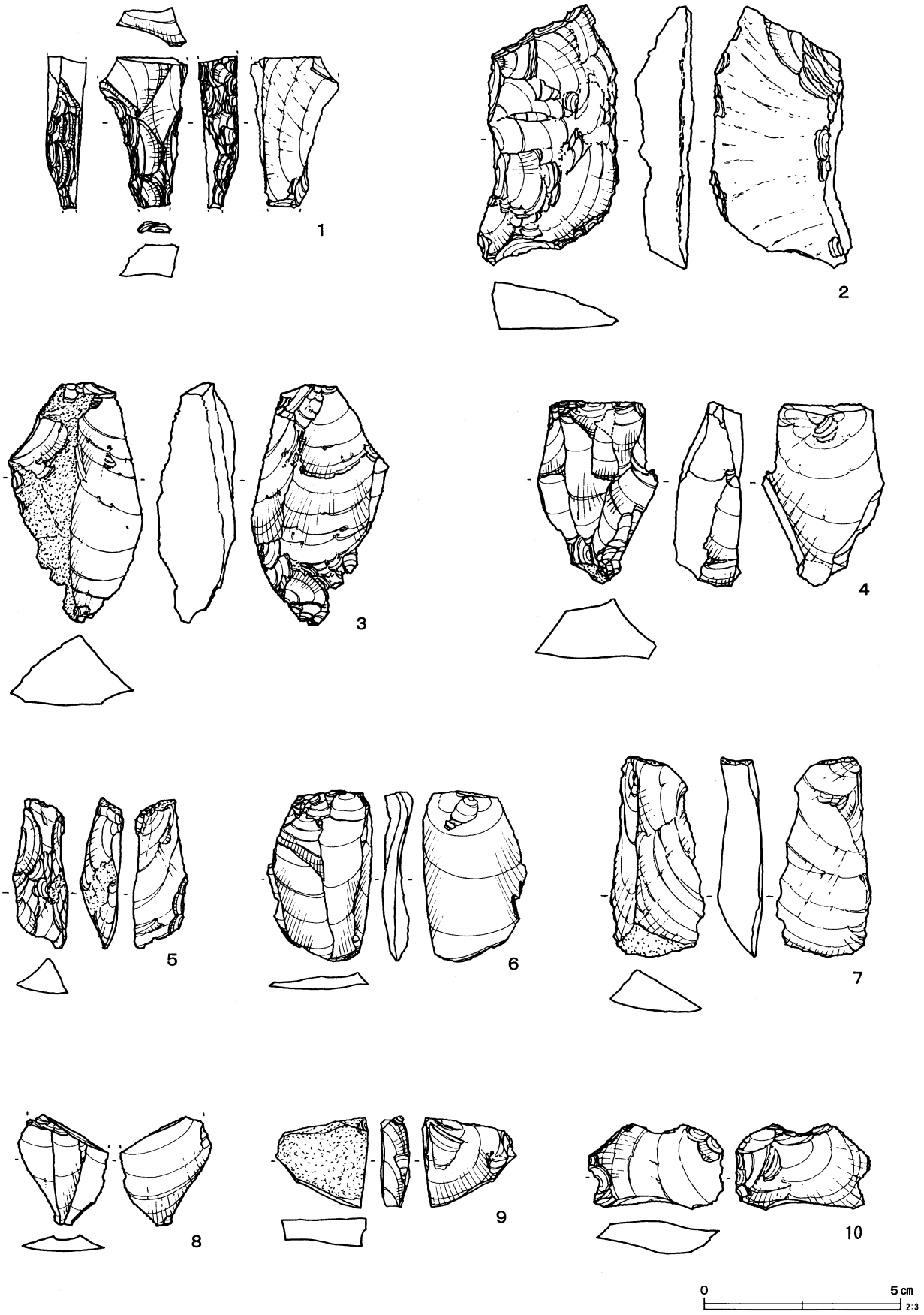




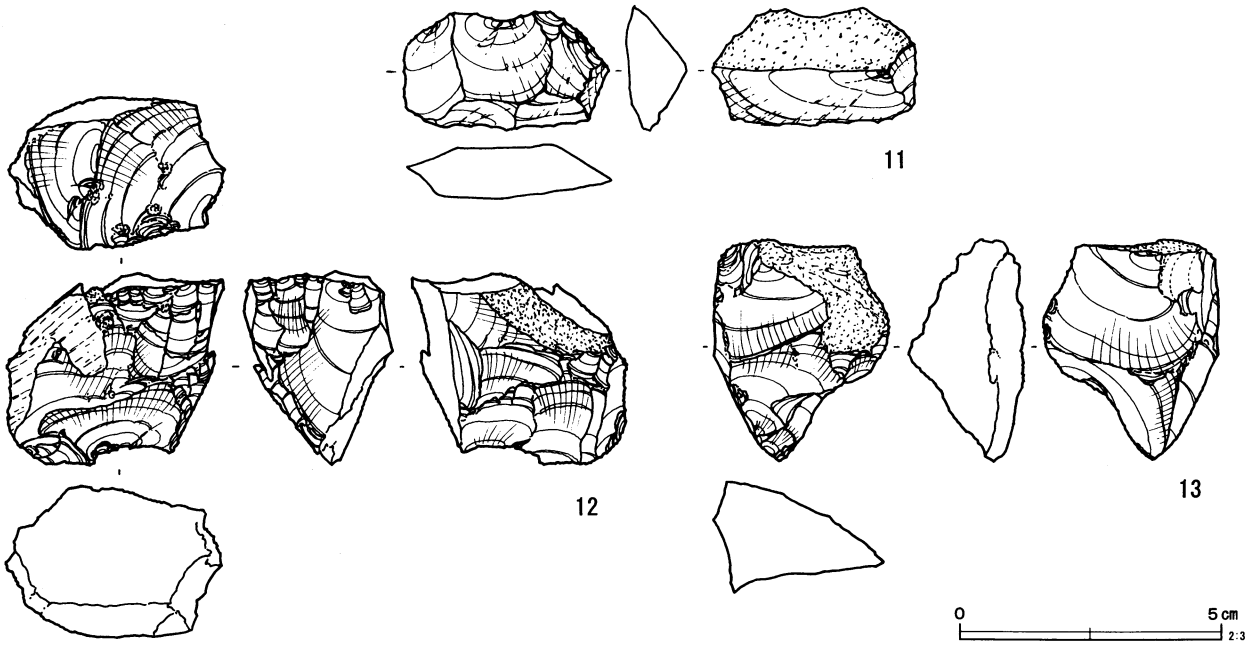
Ⅳ層　茶褐色土　しまりなし（立川ローム　Ⅲ～Ⅴ層に相当すると考えられる）
Ⅴ層　暗褐色土　しまり有り（立川ローム第二黒色帯　Ⅶ～Ⅸに相当）
Ⅵ層　黄褐色土　しまり有り（立川ローム　Ⅹ層以下に相当すると考えられる）
※旧石器遺物はⅣ層からⅥ層上面にかけて出土した



第27図　旧石器時代調査区遺物分布図



第28図　旧石器時代グリッド出土遺物（1）



第29図　旧石器時代グリッド出土遺物（２）

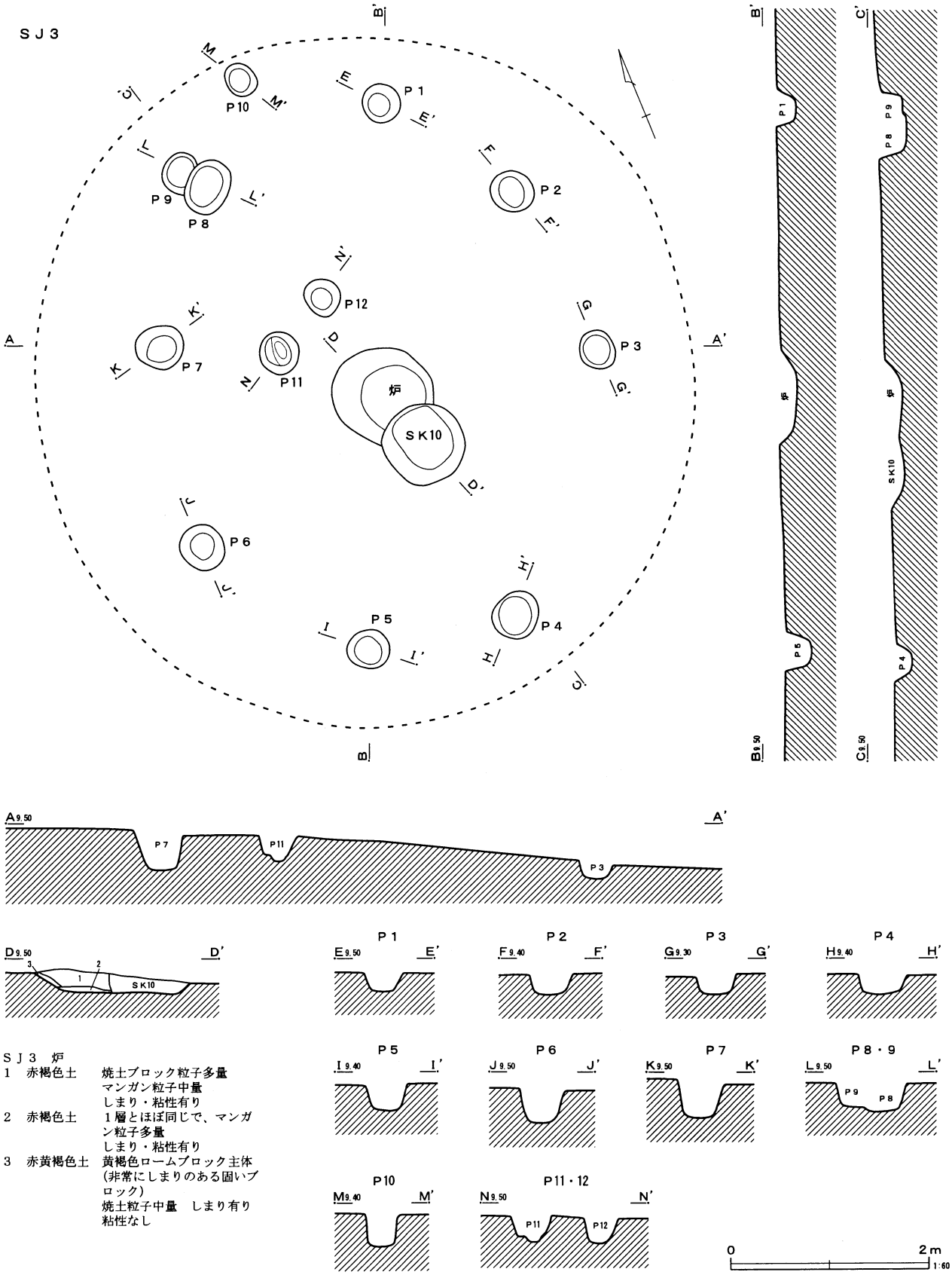
第８表　旧石器時代調査区出土遺物観察表(第26図)

取上No.	グリッド	北－南(m)	西－東(m)	標高	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	挿図番号	図版番号
S1	B2	9.34	8.87	186.5	剥片	黒色頁岩	7.7	3.4	1.1	25.8		5	18-5
S2	B2	9.14	8.31	182.8	ナイフ形石器	チャート	2.9	1.5	0.7	2.9		1	18-1
S3	B2	5.40	8.37	176.9	剥片	黒色頁岩	4.1	2.2	1.0	10.6		4	18-4
S4	B2	5.97	7.99	179.5	剥片	メノウ	1.8	1.2	0.3	0.9			
S5	B2	4.90	7.74	160.5	砕片	チャート	0.7	0.5	0.1	－	重:測定不能		
S6	B3	0.35	0.46	177.4	砕片	黒曜石	1.7	7.7	0.2	0.3			
S7	B2	9.81	1.66	175.3	掻器	黒曜石	2.9	2.3	1.3	7.5	石核転用	2	18-2
S8	B2	9.39	2.12	170.0	剥片	黒曜石	3.5	1.9	0.3	1.4		3	18-3
S9	B2	9.67	5.00	179.7	礫	安山岩	4.4	2.5	2.6	44.1	被熱		
S10	B2	4.33	5.18	167.2	礫	安山岩	1.5	2.3	1.6	5.6	被熱		
S11	B2	4.12	1.73	174.8	剥片	安山岩	2.9	4.5	0.9	13.3			
S12	C2	9.24	3.48	197.6	礫	砂岩	3.8	2.8	1.2	13.9			

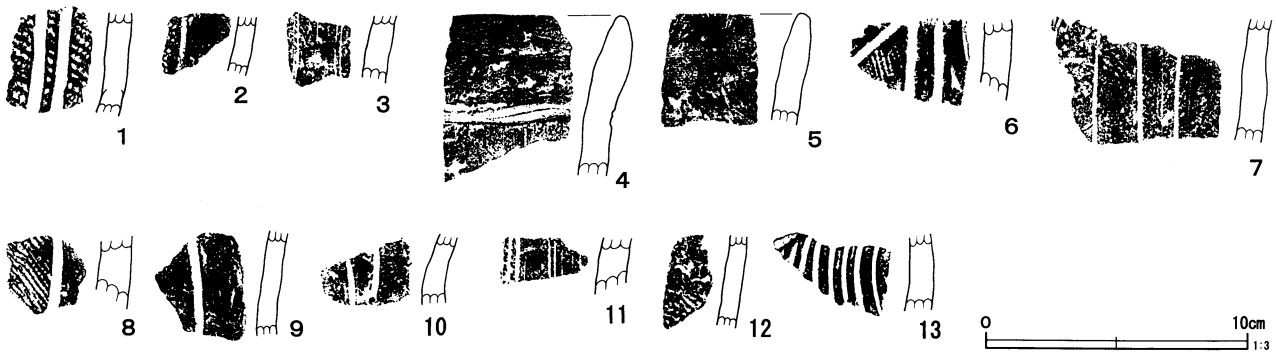
第９表　旧石器時代グリッド出土遺物観察表(第28･29図)

グリッド	層位	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	挿図番号	図版番号
D3-92	Ⅲb	ナイフ形石器	チャート	3.7	2.2	1.0	8.0		1	19-1
B3-46		削器	チャート	3.6	6.7	1.5	28.9		2	19-2
B2-82	Ⅲ層	剥片	黒曜石	6.0	3.4	1.9	28.5		3	19-3
F4-51		剥片	黒色頁岩	3.1	4.6	1.7	24.2		4	19-4
G(-1)		剥片	チャート	3.8	1.4	1.0	4.6		5	19-5
B2-72	Ⅲ層	剥片	黒曜石	4.4	2.6	0.8	5.0		6	19-6
G(-1)		剥片	砂岩	5.0	2.3	1.1	11.2		7	19-7
B2-45	Ⅲ層	剥片	硬質珪岩	2.8	2.3	4.2	2.3		8	19-8
B3-4	Ⅲ層	剥片	黒曜石	2.3	2.4	0.7	4.5		9	19-9
C2-78	Ⅲa層	剥片	チャート	2.2	3.5	7.8	7.0		10	19-10
G0		石核	砂岩	2.4	3.4	1.2	9.3		11	19-11
B2-27	Ⅲ層	石核	黒曜石	3.7	4.1	2.8	35.1		12	19-12
B3		石核	黒曜石	3.4	4.2	2.2	21.7		13	19-13

3　住居跡



第30図　第3号住居跡



第31図　第３号住居跡出土遺物

（1）縄文時代

第３号住居跡（第30図、第31図１～13）

Ｆ－１区に位置する。第10号土壙と重複するが、本住居跡の方が古い。本住居跡は第２次・第３次調査区にまたがって検出されており、調査区の北側に傾斜する台地の片部に構築され、炉と柱穴のみが辛うじて検出されたもので、プラン等は不明である。中央部の地床炉を中心として、南北方向にやや細長い楕円形状にピットが配列する。炉の南側に位置するＰ４、Ｐ５はその位置と配列から、柄鏡形住居跡の入り口部対ピットの可能性がある。ピットの深度は比較的浅いものが多く、平均的には0.25m前後が多い。最も深いものはＰ７の0.38m、最も浅いものはＰ３の0.17mであった。

本住居跡は出土遺物から、張り出しを持つ柄鏡形を呈する住居プランと思われるが、張り出し部や、埋甕等が存在せず、詳細は不明である。

遺物は第31図１～13が出土している。１～３は炉から出土した土器片である。１は単節ＲＬ地文上に２本沈線が垂下するもので、堀之内Ｉ式に比定される深鉢形土器の胴部破片である。２は器面が荒れていて不鮮明であるが、沈線懸垂文と縄文が施文されている。原体は不明である。称名寺式に比定される可能性が高い。３は条線文を施文する、堀之内Ｉ式である。

４～13は住居跡域から出土した破片である。４、５は無文の口縁部を沈線で区画するもので、体部に懸垂文を基本としたモチーフを描くものと思われる。６～10は直線的な懸垂文を垂下する堀之内Ｉ式土器で、６・８は垂下する沈線と斜行する沈線が組み合うモチーフを描き、区画内に単節ＬＲ縄文を充填施文する。８は沈線がやや曲線気味に垂下することから、称名寺式に比定される可能性ある。７、９、10は無地文上に沈線を垂下するものである。７はＰ５、10はＰ１の出土である。

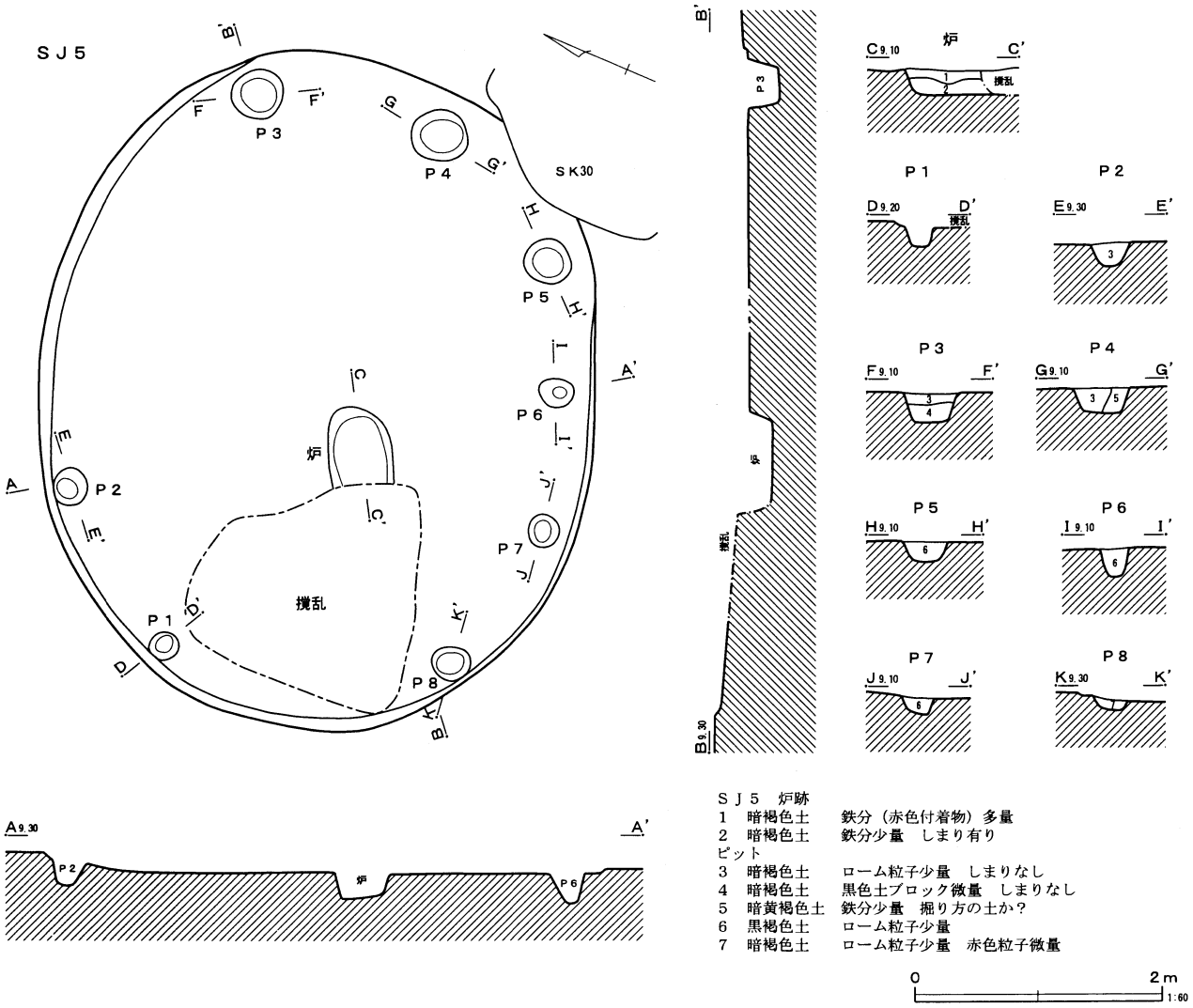
12はＰ７の出土で、縄文のみ施文する破片であり、器面の荒れのため、原体は不明である。

13は胴部で括れ、口縁部が開き、胴部が張る器形の深鉢の胴部破片である。多条沈線が対弧状に垂下する構成を採る。堀之内Ⅱ式に比定されよう。

第10表　第３号住居跡計測表

グリッド	遺構内	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)
F-1	炉	(0.75)	0.96	0.24
	Ｐ１	0.39	0.38	0.20
	Ｐ２	0.44	0.38	0.21
	Ｐ３	0.39	0.34	0.17
	Ｐ４	0.50	0.45	0.19
	Ｐ５	0.44	0.40	0.26

グリッド	遺構内	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)
F-1	Ｐ６	0.46	0.43	0.34
	Ｐ７	0.49	0.44	0.38
	Ｐ８	0.56	0.42	0.27
	Ｐ９	0.43	(0.27)	0.24
	Ｐ10	0.43	0.39	0.24
	Ｐ11	0.38	0.36	0.26



第32図　第５号住居跡

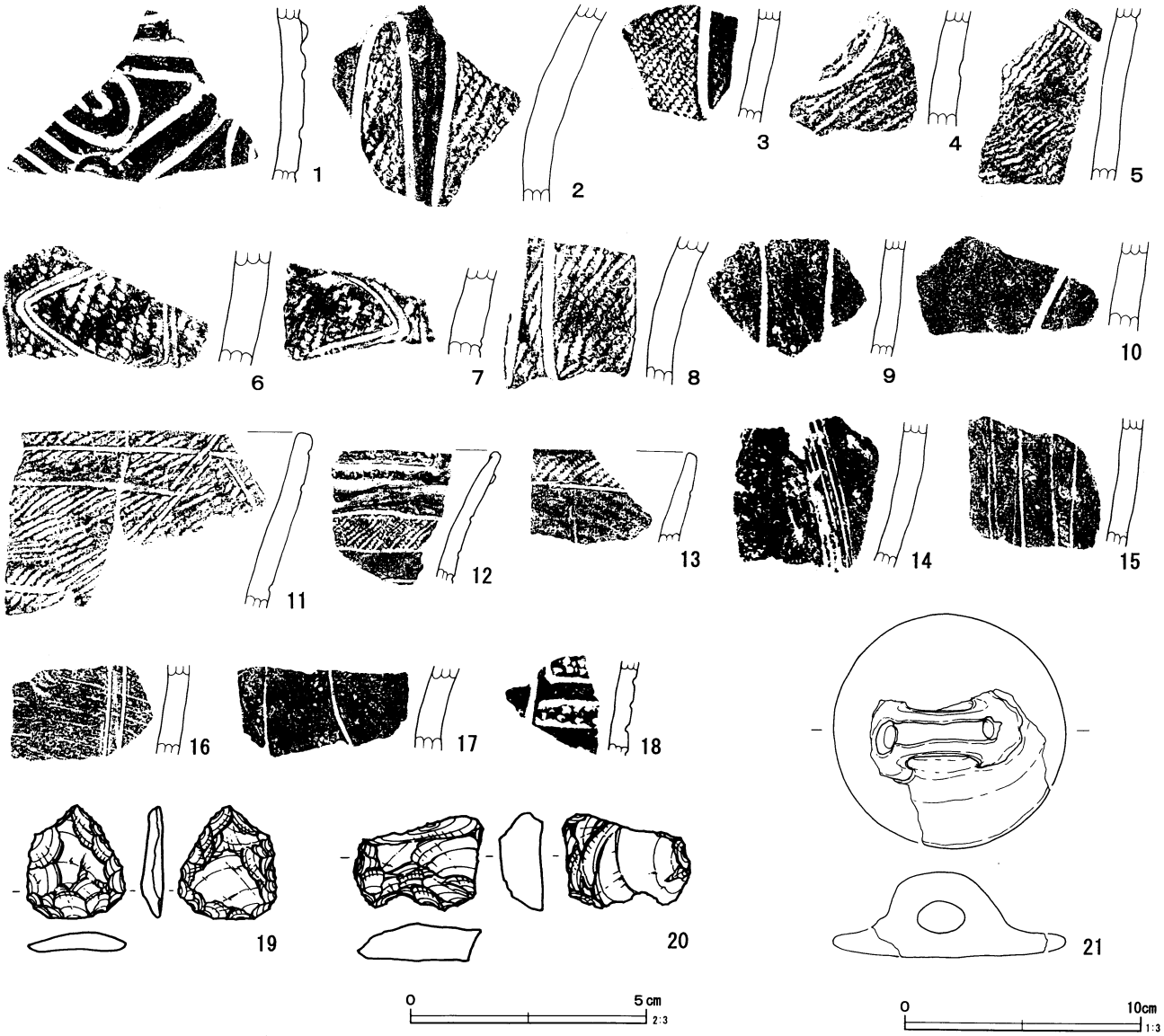
第５号住居跡（第32図、第33図１～21）

Ｆ・Ｇ－０区に位置する。第30号土壙と重複するが、新旧関係は不明である。調査区の東側に向かって傾斜する台地肩部に位置することから、住居跡東側の壁が削平されている。住居跡のプランは東西方向に細長い楕円形を呈するものと思われ、中央部のやや南側に地床炉が存在する。この地床炉の南西側に大きく撹乱を受けており、入り口部等の施設は不明である。ピットは壁際に検出され、北壁部分に一部存在しない部分がある。ピットの深度は平均0.2m内外と概して浅く、最も深いものはＰ６の0.25mで、最も浅いものはＰ７の0.14mであった。

出土遺物から、縄文時代後期堀之内式期の所産で、張り出しを持つ柄鏡形を呈すると思われるが、検出された形状は、長径5.45m、短径4.45m、深さ0.15mを測る楕円形であった。

住居跡の地床炉東側に単独埋甕３基が、住居の埋没後に埋設されていた。

遺物は第33図１～21が出土している。１は胴部で括れ、口縁部が開き、胴部がやや張る器形の深鉢形土器の胴部破片である。胴部を隆帯で区画し、無地文上に平行沈線で三角形と区画内に渦巻文を組み合わせるモチーフを展開する。三角形の合わさる部分には円形浮文を施す。２・３・５は磨消縄文で曲線的なモチーフを描くもので、２・３は曲線の懸垂文状、５は斜行線状に施文する。地文は２・３が単節ＬＲ、５は無節Ｌを施文する。６



第33図　第５号住居跡出土遺物

～８は懸垂文と蛇行懸垂文を垂下するもので、地文に単節ＬＲを施文する。９・10は無地文上に沈線を垂下するもので、10はやや斜行する。９は炉内の出土である。以上、１～10は堀之内Ｉ式に比定される。

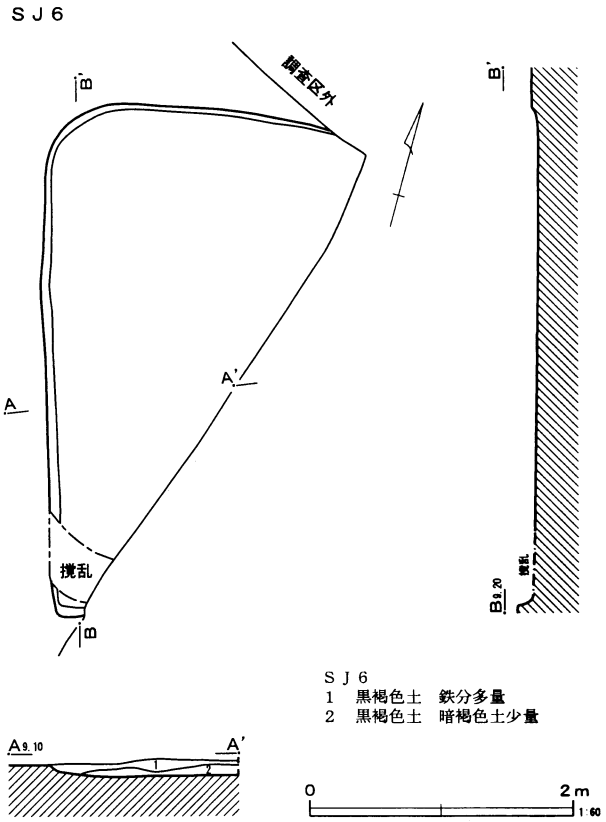
11は地文単節ＬＲ上に、平行沈線の区画と、三角形状モチーフを組み合わせた幾何学文的なモチーフを施文するもので、口唇部裏面に沈線を持たない。堀之内Ｉ式の最新段階に位置付けられようか。

12は口縁部に刻み隆線を、裏面に沈線を廻らす堀之内Ⅱ式の深鉢形土器で、13は沈線で口縁部に

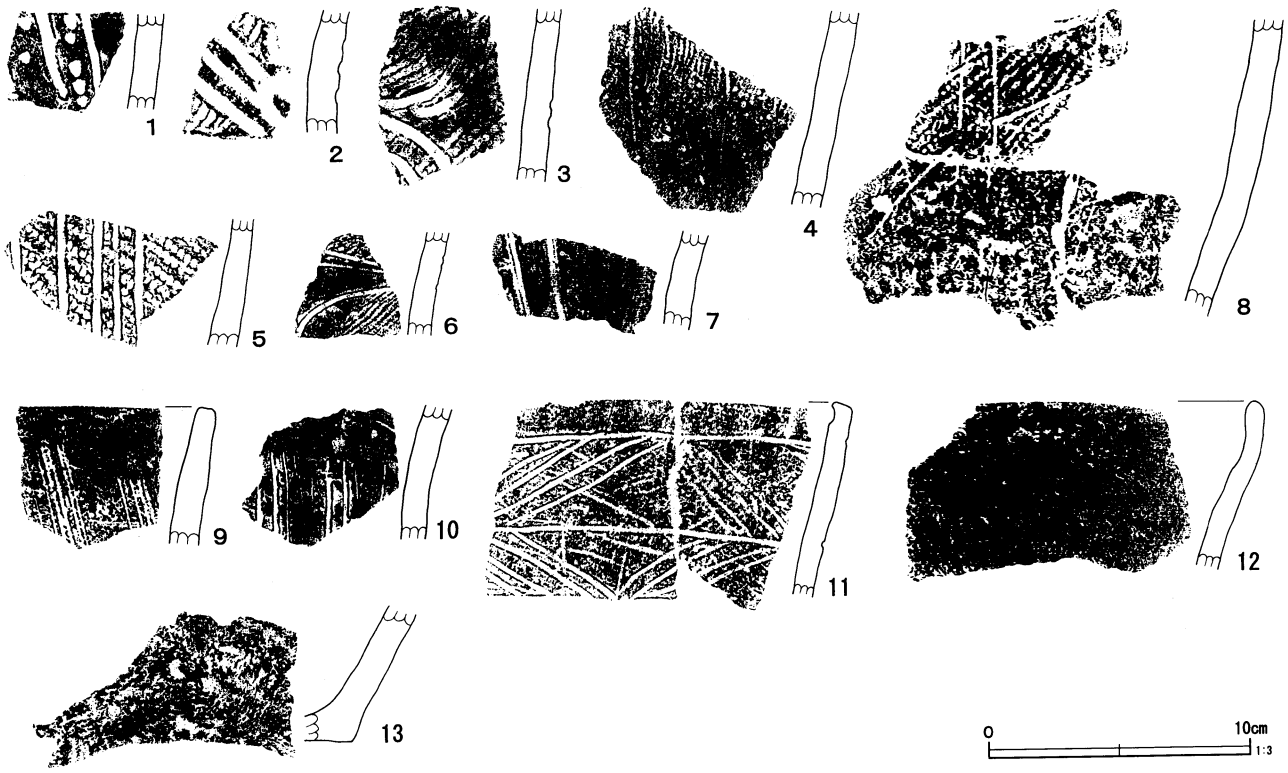
第11表　第５号住居跡計測表

グリッド	遺構内	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)
F-0	炉	(0.63)	0.51	0.22
	P 1	0.24	0.22	0.17
	P 2	0.31	0.28	0.19
G-0	P 3	0.42	0.38	0.24
	P 4	0.46	0.41	0.21

グリッド	遺構内	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)
G-0	P 5	0.38	0.36	0.16
F-0	P 6	0.28	0.23	0.25
	P 7	0.26	0.25	0.14
	P 8	0.32	0.27	0.08



第34図　第６号住居跡



第35図　第６号住居跡出土遺物

縄文帯を区画する。地文はいずれも単節ＬＲの充填施文である。14～17は無地文上に沈線や条線を垂下するもので、17は折り返し状の構成を採る。18は縦位沈線と横位楕円区画を施すもので、注口土器の頸部の可能性がある。12～18は堀之内Ⅱ式に比定される。

21は把手の付く蓋であり、推定径約9.8cmを測り、３分の１ほどが現存する。

19・20はチャート製の石鏃の未製品である。19は縦2.4cm、横2.1cm、厚さ0.5cm、重さ2.7ｇ、20は縦2.1cm、横2.6cm、厚さ0.9cm、重さ6.4ｇを測る。

第６号住居跡（第34図、第35図１～13）

Ｇ－－１～０区に位置する。大半が調査区外に位置するため、全体のプランは不明瞭であるが、長方形に近い形状と思われる。現存で長径3.80m、短径2.40m、深さ0.13mを測る。

遺物は第35図１～13が出土している。１は無地文上に刺突を挟む平行沈線を、２は地文縄文上に斜行沈線、３は曲線的なモチーフを施文するもので、１・２は単節ＬＲを施文する。４・５・８は縄文上に、７は無地文上に沈線懸垂文を垂下する。６は磨消縄文で曲線的なモチーフを描き、地文に単節ＬＲを充填施文する。

９、10は帯状の条線文を垂下施文するもので、９は角頭状の口縁部が緩く開く器形を呈し、口縁部にやや無文部を設けて、条線文を帯状に垂下する。堀之内Ⅰ式に比定される。

11は内面に沈線を廻らす口縁部が、直線的に開く器形を呈する。口縁部に幅狭な無文帯を沈線で区画し、体部は平行する沈線で水平区画して、区画内に集合沈線を鋸歯状に配する構成をとる。堀之内Ⅱ式に比定される。

12は口縁部がやや内湾して開く無文土器の口縁部で、13は底部破片である。

（２）古墳時代

第１号住居跡（第36・37図）

Ｃ－２・３、Ｄ－３グリッドに位置する。撹乱が著しく、北西壁と南東壁の多くの部分が壊されていた。第１号溝と重複し本住居跡のほうが古い。主軸方向はＮ－50°－Ｗである。

全体の平面形はやや歪んだ隅丸長方形で、規模は長軸6.70m、短軸6.22mである。深さは0.70mで深い。各辺は直線的で、壁面の立ち上がりは上部が壊れたためかやや緩やかで、断面形は角度のある台形状になる。床面は平坦で、若干硬化していた。涌水が著しく、加えて撹乱により相当痛んでおり、炉跡等の施設は検出できなかった。覆土はほとんどローム土を含まないレンズ状堆積で自然堆積と考えられる。

出土土器は、２・３層中からのものと、床面付近のものがある。いずれも小破片である。

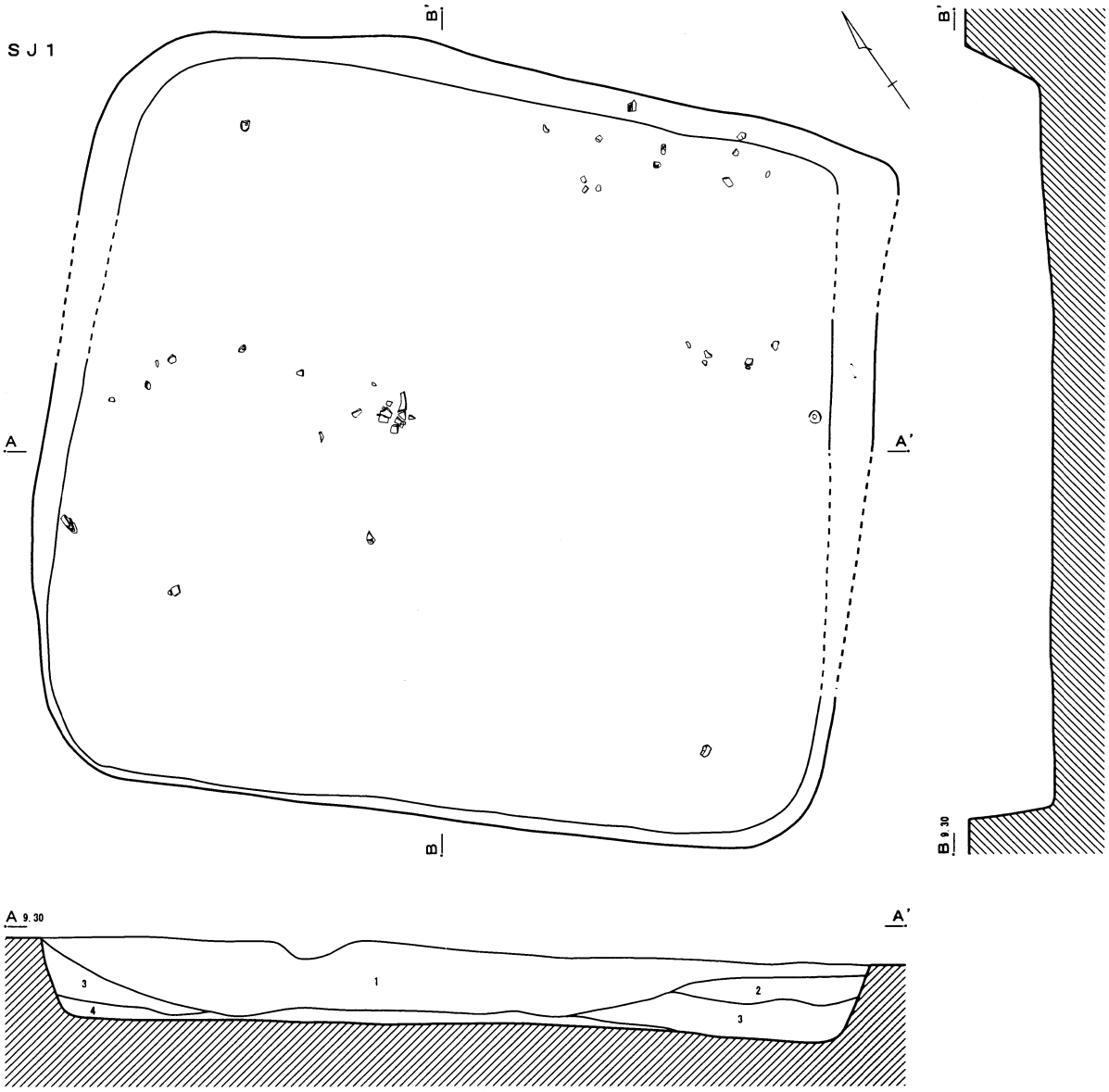
壺は頸部から直線的に開くもの（１）と、大きく外反するもの（２）がある。２は端部の外面に幅の狭い薄い粘土帯が貼付され、複合口縁になっており、赤彩される。端部はいずれも丸く収められる。胴部（４）は下端に不明瞭な稜があり、やや縦長の胴部になると思われる。底部（３）は、底面にもヘラ磨きが施される。

台付甕（７～９）は脚台部のみが出土している。いずれも小型で、ホゾ接合である。２次加熱を受け、赤変する。８は外面に煤が付着する。

高坏は坏部から脚部の破片（５）と、脚部の破片（６）がある。５は坏部の下半に稜があるもので、脚部は大きく開くと思われる。坏部と脚部の接合はホゾ接合である。坏部内面は上方から挿入した粘土塊が剥落する。脚部には径1.1cmの透穴が３箇所ある。６は直線的な脚部で、端部は丸く収められる。外面が赤彩される。

第２号住居跡（第38・39図）

Ｄ・Ｅ－３グリッドに位置する。撹乱が著しく、



ＳＪ１　　Ⅲａ層は部分的にしかみとめられない。よってⅡｂ層＝Ⅲａ層と基本的に理解していただきたい。

1　黒褐色土　黒色土主体（Ⅲａ層土主体）ローム粒子微量[橙色粒、ブロック（植物の根の痕）]混入　しまり・粘性なし
2　暗黄褐色土　黒色土にローム粒子多量　しまりなし
3　暗褐色土　Ⅲｂ層土主体　ローム粒子少量　しまり・粘性有り
4　灰黒褐色土　Ⅳａ層土（立川ローム第二黒色帯と考えられる）を混入する黒色土で床面より若干しまりに欠ける

0　2m　1:60

第36図　第１号住居跡

西壁中央と南壁の多くの部分が壊されていた。

主軸方向はＮ－50°－Ｗである。全体の平面形はやや歪んだ隅丸長方形で、規模は長軸5.20m、短軸3.74mである。深さは0.7mで深い。

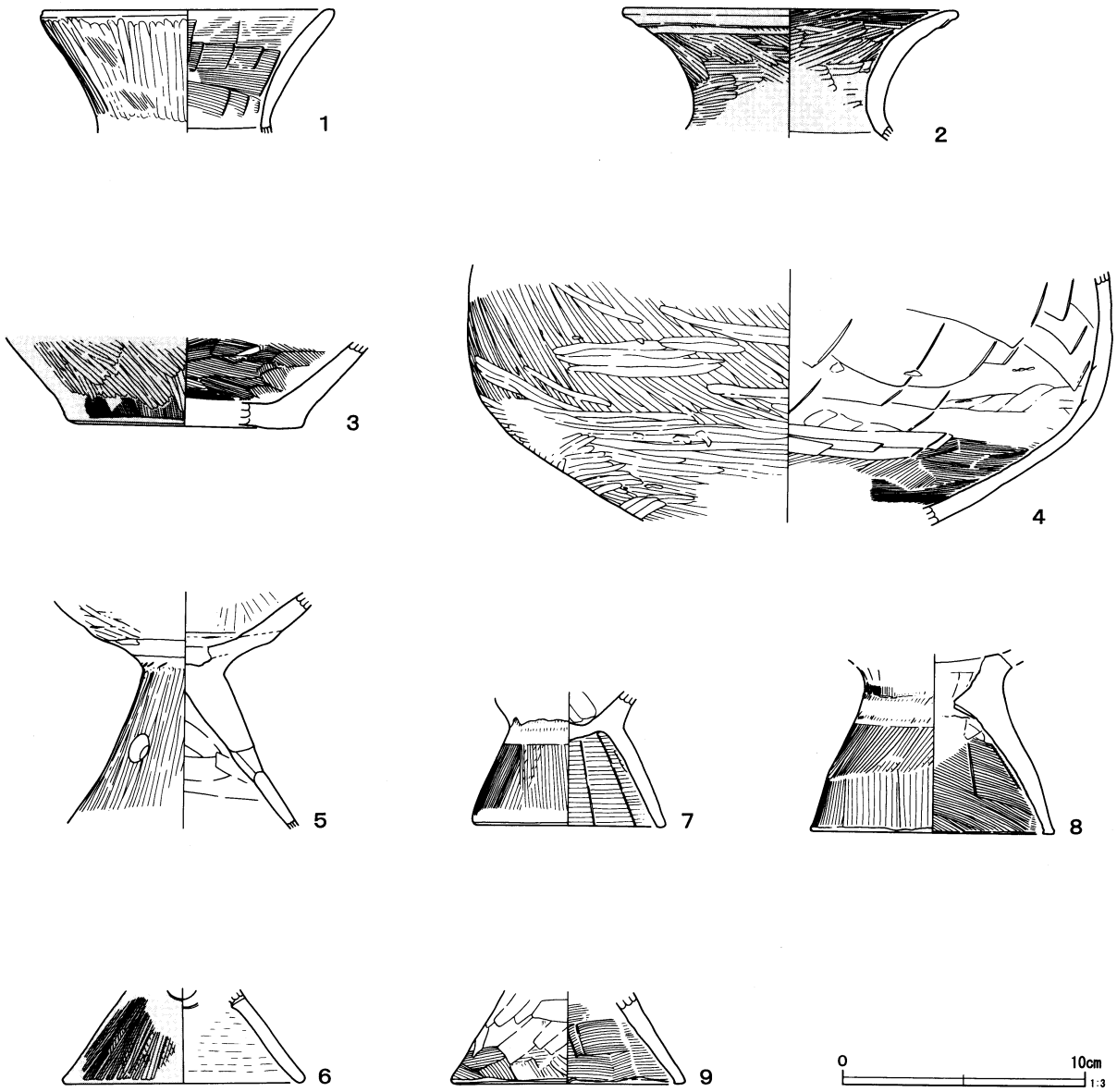
各辺は直線的で、壁面の立ち上がりは上部が壊れたためかやや緩やかである。断面形はやや歪んだ台形になる。

床面は、涌水が著しく、加えて撹乱により相当痛んでおり、炉跡等の施設は検出できなかった。

覆土はほとんどローム土を含まない三角堆積に近いもので、自然堆積と考えられる。

出土土器は、２層中からのもので、遺構の東側に分布する。１・２以外はいずれも破片である。

小型壺は、縦長の胴部に短い直線的な口縁部が



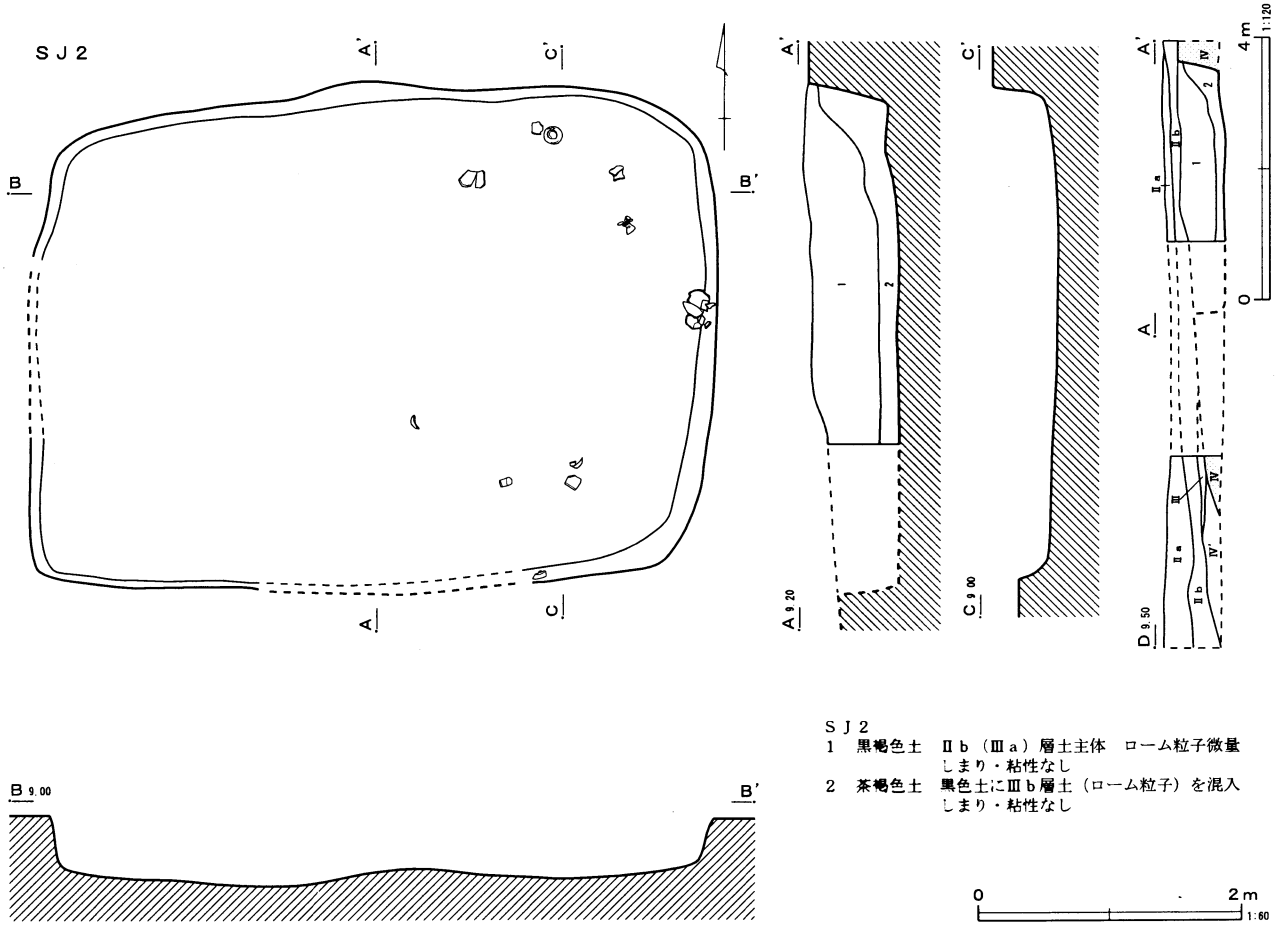
第37図　第１号住居跡出土遺物

第12表　第１号住居跡出土遺物観察表(第37図)

挿図番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	残存(%)	焼成	色調	出土位置	備考	図版
1	土師器	壺	11.6	(5.0)	—	C·E·G·H·I	75	普通	にぶい黄橙	No.3		
2	土師器	壺	(13.6)	(5.3)	—	C·G·H·I	40	普通	にぶい黄橙		赤彩	21-14
3	土師器	壺	—	(3.6)	(9.6)	C·E·I	30	普通	にぶい黄橙		小礫含む　赤彩	21-15
4	土師器	壺	—	(10.4)	—	E·H·I	50	良好	にぶい黄褐	No.11		21-17
5	土師器	高坏	—	(9.7)	—	A·H·I	65	普通	にぶい黄橙	No.1		13-1
6	土師器	器台	—	(3.8)	(10.0)	E·G	10	普通	にぶい橙	No.5	赤彩	21-18
7	土師器	台付甕	—	(5.5)	7.9	A·E·G·H	100	良好	にぶい黄橙	No.23		
8	土師器	台付甕	—	(7.2)	10.0	E·G·I	40	良好	にぶい黄橙	No.7.14		21-16
9	土師器	台付甕	—	(3.8)	(9.6)	G·I	10	良好	にぶい橙			21-19

「く」の字状に付くものである。底部はやや突出している。口縁部は端部が丸く収められる。２の器台は、台付甕の脚台部に良く似たものである。器受部は小さく、脚部との接合はホゾ接合で、その部分が柱状になっている。脚部の透穴は３箇所で径７㎜である。脚端部は面を持つ。３は器台の器受部のみの破片である。

４は高坏の坏部下半の破片で、赤彩される。坏



第38図　第２号住居跡

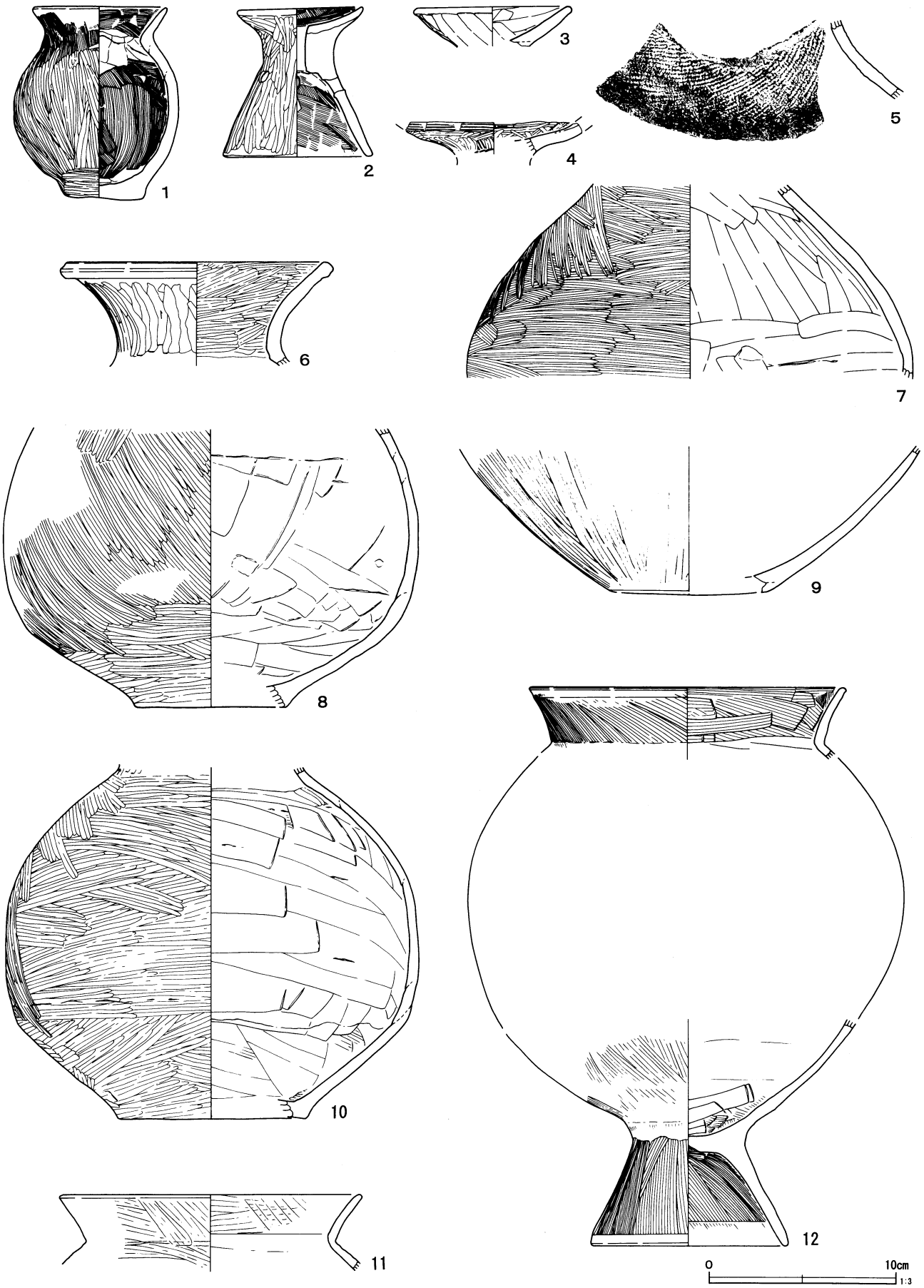
部上半との接合面には刷毛目が施される。

壺は口縁部と胴部の破片がある。外反する口縁部（６）は、端部の外面に幅の狭い薄い粘土帯が貼付され、肥厚している。端部は丸縁状である。５・７～10は胴部である。５は肩部の破片で単節ＬＲの縄文が施される。７～10の外面にはいずれも丁寧なヘラ磨きが施される。７は粘土帯の積み上げ単位で剥離している。９は２次加熱を受け、赤変している。10は器面の風化が進んでいる。

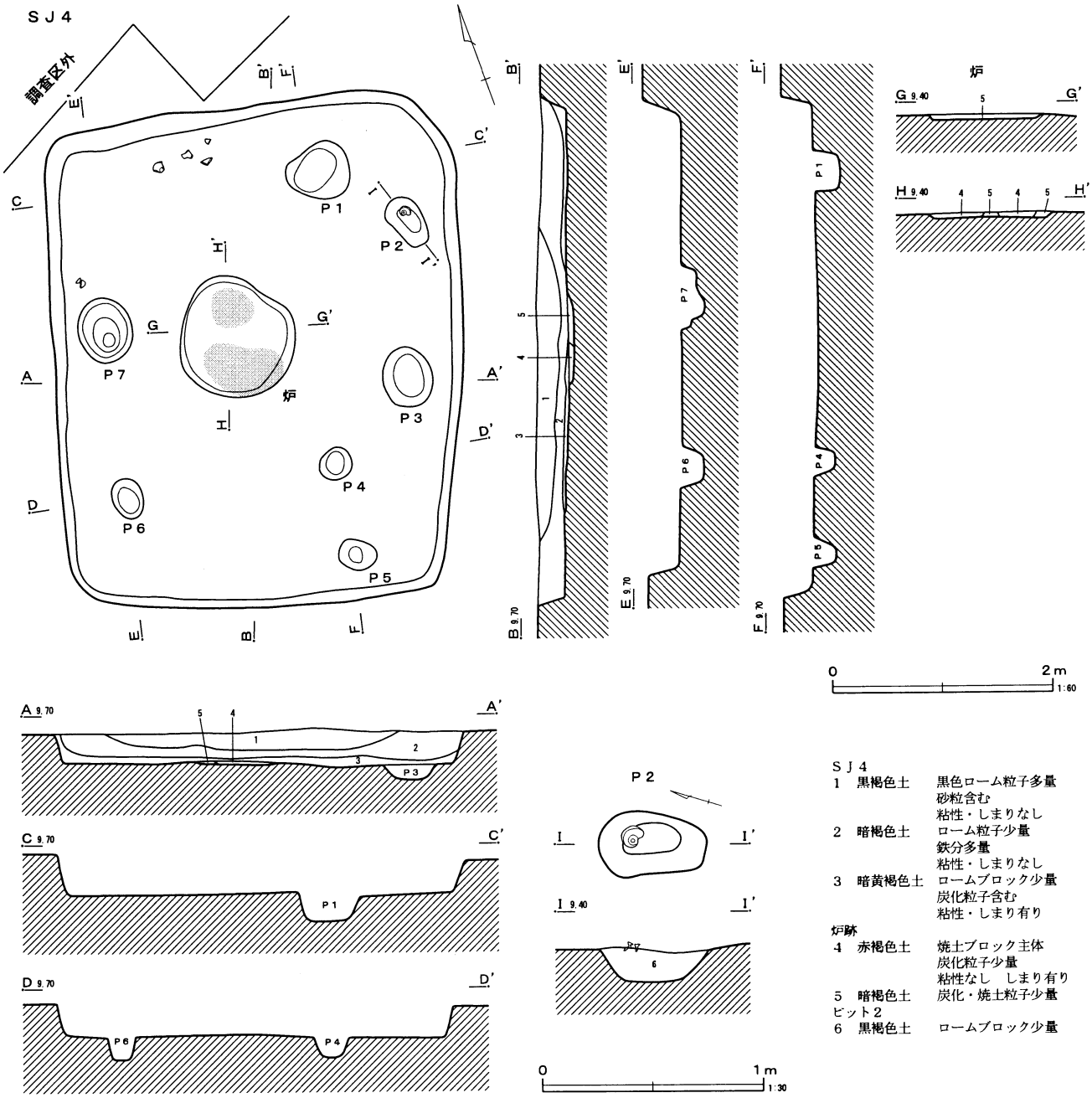
台付甕は口縁部の破片（11）と胴部下半から脚台部が出土している（12）。口縁部は「く」の字状の短い直線的なもので、端部は丸く収められている。ホゾ接合である。外面に煤が付着する。

第13表　第２号住居跡出土遺物観察表（第39図）

挿図番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	残存(%)	焼成	色調	出土位置	備考	図版
1	土師器	小型壺	7.0	10.1	4.1	C·E·G·I	95	普通	にぶい橙	No.2		13-2
2	土師器	器台	6.6	7.9	7.9	A·C·I	95	良好	にぶい黄橙	No.5	三方透	13-4
3	土師器	器台	(8.0)	(2.1)	—	E·G·I	10	普通	にぶい黄橙			22-1
4	土師器	高坏	—	(1.8)	—	H·I	50	良好	にぶい黄橙	No.18	赤彩	22-2
5	土師器	壺	—	—	—	C·E·I	10	良好	にぶい橙	No.10		22-3
6	土師器	器台	13.9	(5.5)	—	C·E·G·I	10	普通	にぶい黄橙	No.3		
7	土師器	壺	—	(10.3)	—	A·E·G·I	60	普通	にぶい橙	No.1.8.9		
8	土師器	壺	—	(14.7)	(8.0)	C·E·I	40	普通	にぶい黄橙	No.12		22-4
9	土師器	壺	—	(7.7)	(8.5)	E·G·H	25	普通	にぶい橙			
10	土師器	壺	—	(18.6)	(10.0)	C·E·H·I	50	普通	にぶい黄橙	No.6		13-3
11	土師器	甕	(15.7)	(4.0)	—	A·B·E	5	普通	にぶい黄橙			22-5
12	土師器	台付甕	(16.9)	(29.5)	10.5	E·G·I	40	普通	にぶい橙			13-5·22-6



第39図　第２号住居跡出土遺物



第40図　第４号住居跡

第４号住居跡（第40・41図）

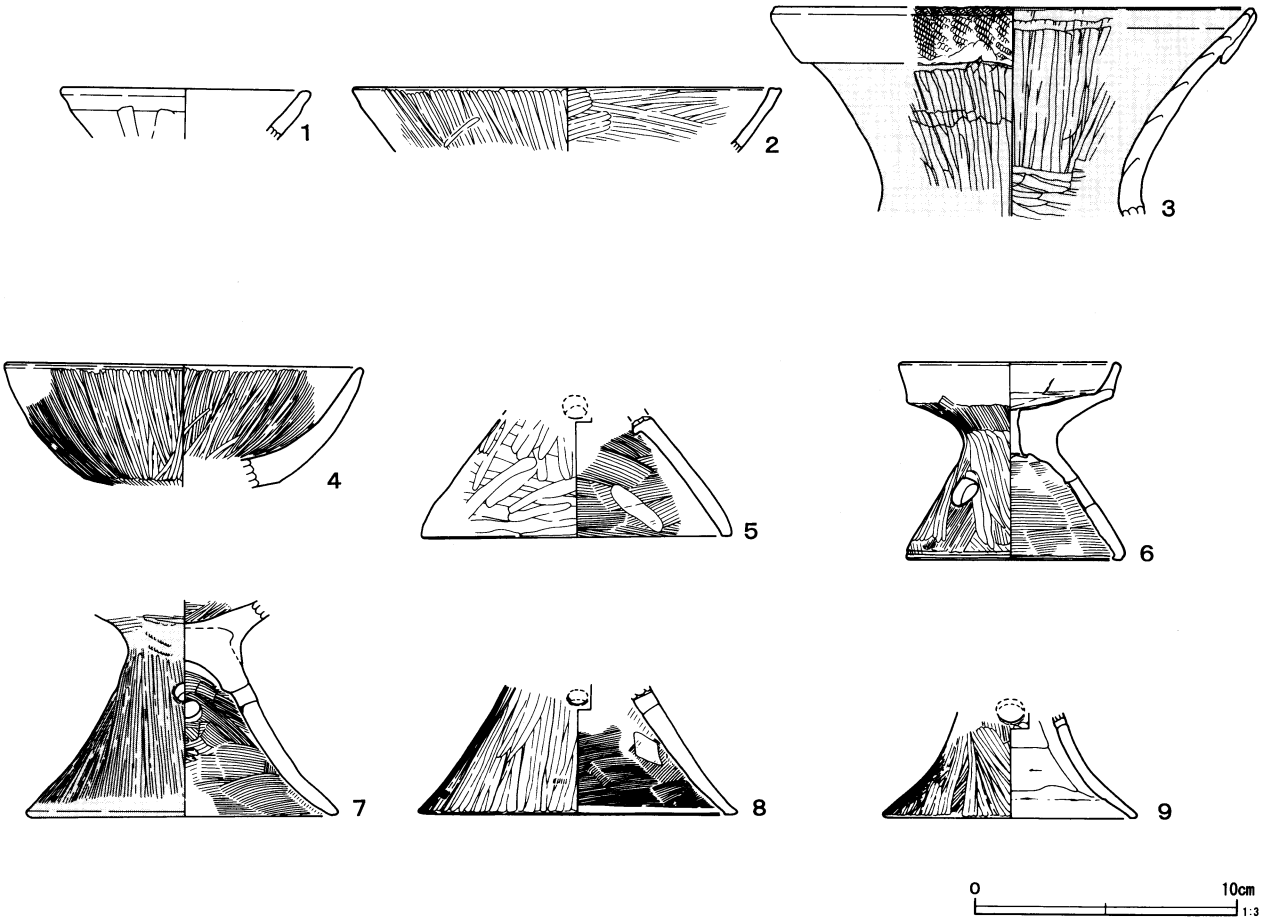
Ｄ・Ｅ－０・１グリッドに位置する。主軸方向はＮ－18°－Ｅである。全体の平面形はやや歪んだ隅丸長方形である。規模は長軸4.50m、短軸3.68mである。深さは0.4mで深い。

各辺は直線的で、壁面の立ち上がりは上部が壊れたためかやや緩やかで、断面形は台形になる。

床面は平坦で、炉跡の周辺に硬化面が見られた。炉跡は床面の中央に径1.1m、深さ５㎝ほどの浅い掘り込みとして認められ、底面が２箇所焼土化

第14表　第４号住居跡計測表

グリッド	遺構内	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
E-0	炉	1.11	1.02	0.04
	P 1	0.54	0.51	0.24
	P 2	0.48	0.28	0.16
E-0・1	P 3	0.56	0.46	0.14
E-1	P 4	0.31	0.30	0.19
	P 5	0.33	0.26	0.21
D-0・1	P 6	0.36	0.29	0.20
D-0	P 7	0.57	0.48	0.22



第41図　第４号住居跡出土遺物

第15表　第４号住居跡出土遺物観察表(第41図)

挿図番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	残存(%)	焼成	色調	出土位置	備考	図版
1	土師器	鉢	(9.3)	(1.9)	－	I	5	普通	橙		小礫含む	22-7
2	土師器	高坏	(16.1)	(2.5)	－	A·C·G	5	普通	にぶい褐			22-8
3	土師器	壺	(18.1)	(7.9)	－	B·H	20	良好	にぶい橙	No.3	小礫含む　赤彩	22-9
4	土師器	高坏	(13.3)	(4.6)	－	H·I	20	良好	にぶい橙		小礫含む	22-10
5	土師器	高坏	－	(8.1)	(14.7)	B·E·H·I	60	普通	にぶい橙	No.2	赤彩	22-11
6	土師器	器台	8.2	7.5	8.2	F·H·I	75	良好	にぶい橙	No.6. P5		13-6
7	土師器	高坏	－	(4.9)	(12.0)	G·H·I	25	良好	にぶい黄橙	No.4		
8	土師器	高坏	－	(4.5)	(11.7)	C·H·I	10	良好	にぶい黄橙			22-13
9	土師器	高坏	－	(4.0)	(9.5)	I	25	良好	にぶい橙			22-14

しており、造り替えられたと考えられる。

床面からは径30～50cm、深さ15～25cmのピットを７箇所検出した。いずれも柱穴の可能性があるが、組み合わせは不明である。炉の作り替えに見られるように、建て替えられた可能性がある。

Ｐ２は器台が出土し、貯蔵穴の可能性がある。

覆土は自然堆積である。上層にローム粒子、砂を多く含むため、洪水等による埋没と考えられる。

出土土器は、北壁付近の２層下位からのものである。６・７以外はいずれも破片である。

壺（３）は複合口縁で、複合部外面と口唇部に単節ＲＬの縄文が施され、それ以外は赤彩される。

４～８・10は高坏である。７はホゾ接合で、外面は赤彩される。端部は７が丸く収められる以外は面を持つ。脚部の透穴はいずれも８mmと小さい。

６の器台は、器受部が大きく、全体的に大振りで特異である。ホゾ接合である。

4　祭祀遺構

B－2区に位置する。関係する図面を第42図、第43図に示した。掘り込みをもたず、ローム土の上の黒色土中から、約1m四方の範囲で土器が出土した。この内2・9は据え置かれた状態であった。出土土器は、法量や調整が相似し、何らかの祭祀に使用され、一括して廃棄されたものと考えられる。1～3の小型壺、5・6の小型壺は土器のつくりや色調が相似し、セットと考えられる。

1～3の小型壺は、いずれも底径が大きく器高の低いものである。2は口縁端部が面取りされている。最大径が胴部の中位にあり、底部がやや突出し、外面の刷毛目も細かくやや様相を異にしている。いずれも外面の調整は刷毛目で、胴部の中位に粘土を着せた跡がバリ状に残っている。頸部は「く」の字状に接合されている。胴部内面の上位には粘土帯の接合痕が明瞭で、それを指頭によりナデつけている。2の底面はわずかながらリング状を呈している。若干ナデが加えられるのみで、ほとんど無調整である。

4の小型壺も、全体の調整、色調、焼成は1～3と共通している。口縁部はやや長めで、端部は面取りされる。上半分に横ナデが施され境目が沈線状になっており、複合口縁を意識しているものと考えられる。

5・6の小型壺も外面の調整や色調は1～4同様である。両者とも器形、調整が非常に似通っており、対と考えられる。口縁部はやや長めで直線的に開くが、6は端部に若干粘土を足すことにより肥厚させている。内側から、2個一対の径5㎜程の穿孔が2箇所施されている。

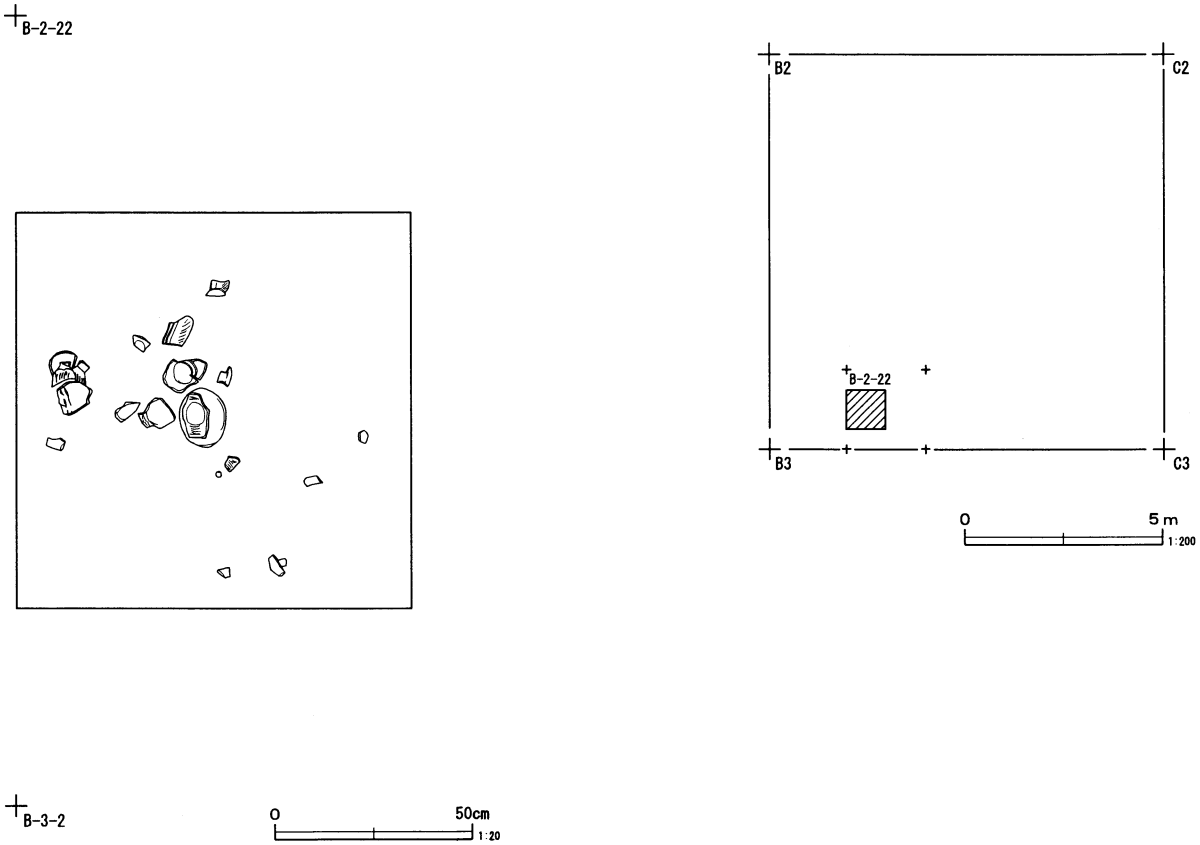
7は複合口縁壺の端部である。端面は面取りされている。

8は壺の底部である。立ち上がりが直線的で、長胴気味になると考えられる。

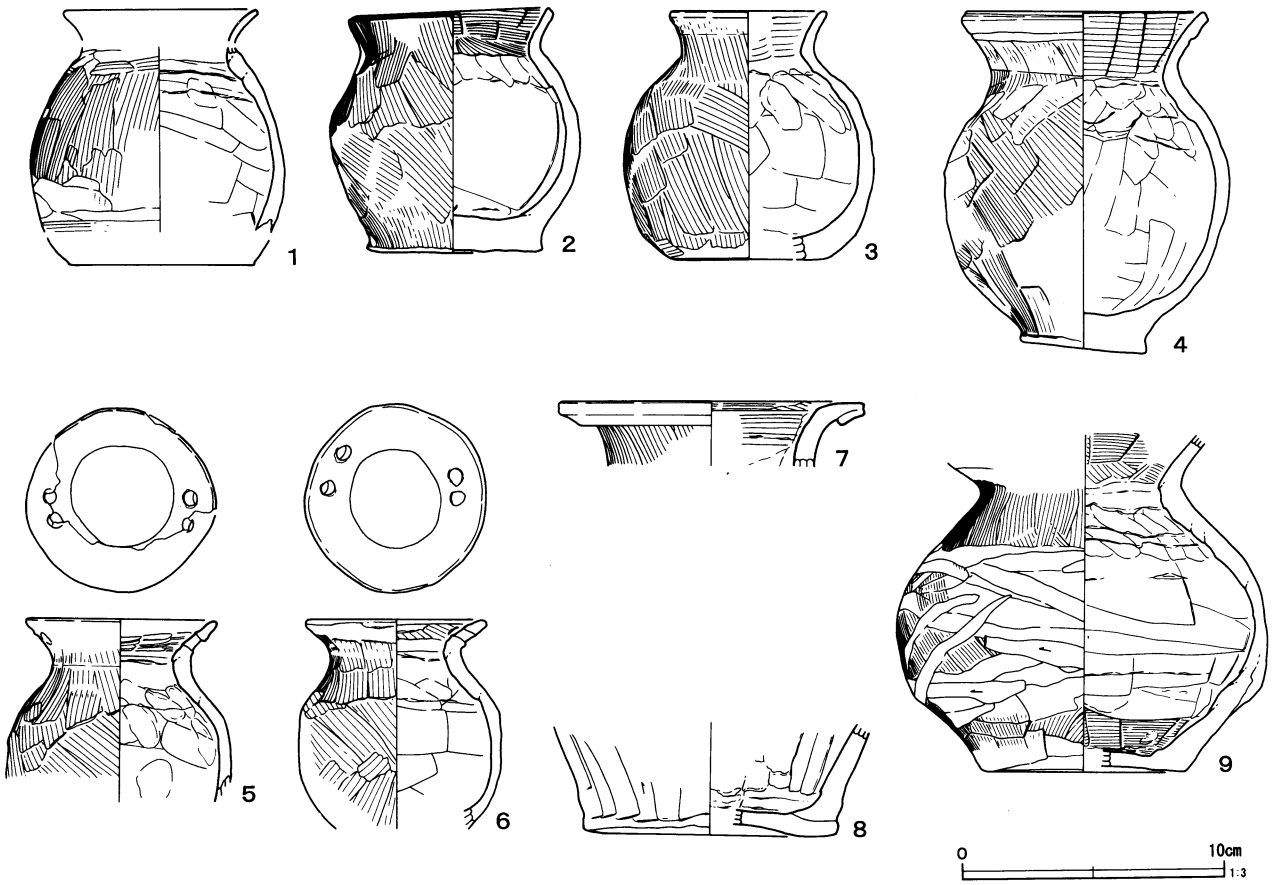
9も1～7と同様のつくりである。焼成にムラがあり、斑に赤変している。下段の粘土の接合が部分的に剥がれ、全体に粘土が一枚着せられているのが分かる。1～3同様に、胴部の上位にバリ状の粘土のはみだしがあり、それをヘラによってナデつけている。底面は、ほとんど無調整である。

第16表　第1号祭祀跡出土遺物観察表(第43図)

挿図番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	残存(%)	焼成	色調	出土位置	備考	図版
1	土師器	小型壺	－	(7.0)	－	E·G	25	良好	にぶい黄橙	No.1		
2	土師器	小型壺	(7.4)	9.2	6.7	G·H·I	80	良好	にぶい黄橙	No.3		14-1
3	土師器	小型壺	(5.7)	9.3	(6.0)	G·H·I	35	普通	にぶい黄橙	No.1.3		14-2
4	土師器	小型壺	9.0	12.9	4.8	G·H·I	65	普通	にぶい黄橙	No.1.4.9		14-3
5	土師器	ミニチュア	(7.1)	(6.9)	－	G·I	35	普通	にぶい黄橙	No.1	一部黒斑 歪みあり	14-4
6	土師器	ミニチュア	6.8	(7.9)	－	G·I	50	普通	灰黄褐	No.6		14-5
7	土師器	壺	(11.5)	(2.5)	－	C·I	20	良好	にぶい橙	No.3	胎土に小礫含む	22-12
8	土師器	壺	－	(4.3)	(9.6)	E·G·H·I	20	普通	浅黄橙			22-15
9	土師器	小型壺	－	(12.7)	7.7	G·I	80	普通	にぶい橙	No.2	胎土に小礫含む　内面黒褐	14-6



第42図　第１号祭祀跡



第43図　第１号祭祀跡出土遺物

5　埋甕

第１号埋甕（第44図、第46図1）

Ｂ－２区に位置する。土壙のプランは南北方向に細長い楕円形を呈し、長径1.31m、短径0.88m、深さ0.33mを測る。土壙の北西コーナー寄りに、底部の欠損する深鉢が正位で埋設されている。土壙の底面は、埋甕埋設部分が最も深く、南壁に向かって徐々に浅くなる。土壙周辺に、埋甕と接合する破片が散っており、表土除去の際に埋甕を一部損傷している可能性がある。

埋甕は１点検出され、第46図１は底部と口縁部の一部を欠損するものの、ほぼ完形で遺存していた。底部は埋設する際に既に欠いているもので、文様帯の下端部で一様に欠損している。

１は４単位の緩い波状縁で、頸部で緩く括れ、口縁部が開き、胴部が張る器形を呈する。口縁部は肥厚した幅狭の口縁部文様帯を設定するもので、穿孔を伴う眼鏡状の把手を４単位に配し、それぞれの把手脇に施される２穴の盲孔を２本沈線で繋ぎ、口縁部文様帯を形成している。２本沈線間には斜位の刻み列を施す。体部は、頸部に無文部を設け、以下、称名寺式に系譜を求められる沈線懸垂文を垂下する。沈線懸垂文は上半部分で「O」字状と「Y」字状を呈するもので、Y字状を呈する部分はスペード状文を蟹挟み状にしたモチーフで、左右が対象的なモチーフとなっている。本来O字状とY字状の懸垂文が交互に４単位の８単位で施文されるはずであるが、O字状４単位、Y字状３単位の７単位を施文している。モチーフは地文に単節ＬＲを浅く施文した後、磨消して無文地文とした上に施文するが、部分的に縄文が残っているのが観察される。口径40.5cm、現存高38.8cmを測る。

第２号埋甕（第44図、第47図1）

Ｂ－３区に位置する。土壙のプランはほぼ円形を呈し、長径0.62m、短径0.57m、深さ0.41mを測る。断面形は埋設する土器に合わせ、円錐状を呈する。埋甕はほぼ中央部に正位の状態で埋設されていた。

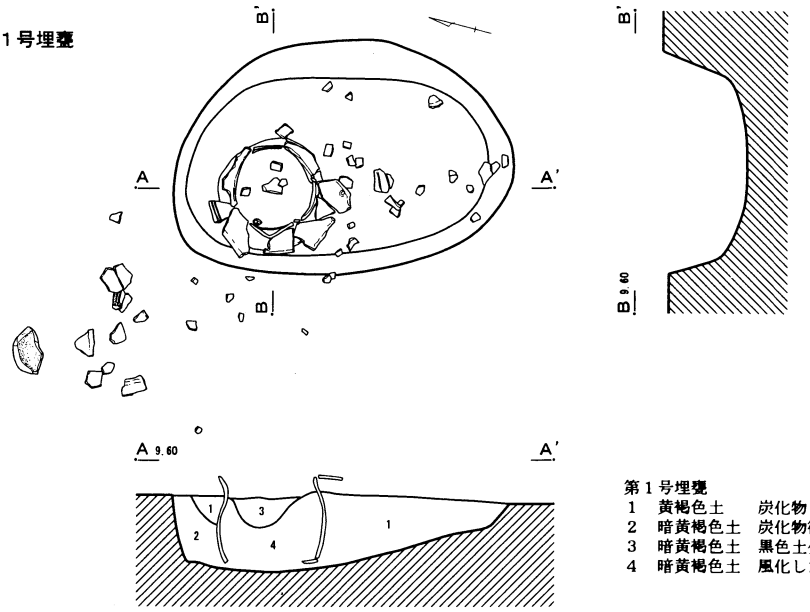
第47図１は口縁部を欠損するが、胴部で緩く括れ、沈線で区画した口縁部が緩く開く器形を呈するものと思われる。体部は平行する２本沈線で上下に連結するＪ字状文と、細かな棘状のＪ字状文を持つ懸垂文を、交互にセットで施文するものである。上下に連結するＪ字状文は釣針状の返しを持つもので、無文部で表現されている。一方、Ｊ字状文に沿いながら、またその間に垂下する棘状のＪ字状文を持つ懸垂文は、平行沈線内に１列の刺突文列を施文する。Ｊ字状文と、間の懸垂文は交互に５単位で繰り返される。しかし、この棘状のＪ地文を持つ懸垂文は、右側のＪ字状文に沿う刺突を伴う逆Ｊ字状文と、体部で連結することはないが、１箇所で左右の連結する部分があり、全体のモチーフ構成の統一性を壊している。現存高50.2cm、底径8.6cmを測る。

第３号埋甕（第44図、第48図、第49図1～3）

Ｂ－２区に位置する。土壙のプランは東西に細長い楕円形を呈し、長径0.98m、短径0.78m、深さ0.39mを測る。埋甕には半個体状の深鉢２個体と、他に２個体分の口縁部破片が埋設されていた。第49図１を埋設し、蓋状に第48図１が乗せられていたような出土状況であった。

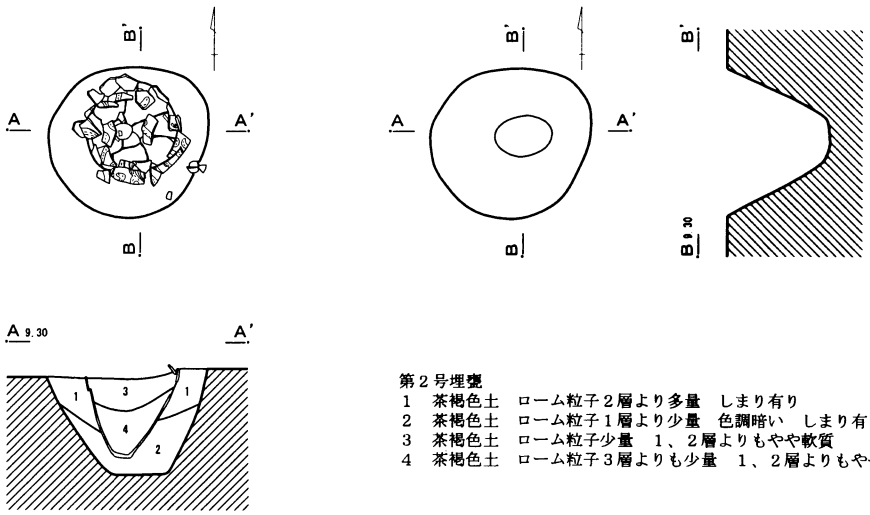
第48図１は胴部でやや括れ、肥厚する口縁部が開き、胴部が張る器形を呈する。肥厚する口縁部は２対の盲孔を施す突起を中心として緩い波状を呈し、無文となる。頸部を沈線で区画して無文帯を設け、体部には無地文上に称名寺式に系譜がある沈線懸垂文を垂下する。破片のため全体のモチーフ構成は不明であるが、Ｊ字状のモチーフと、頭が鉤状を呈するモチーフの懸垂文を交互に配するものと思われる。推定口径37.5cm、現存高35.2

第１号埋甕



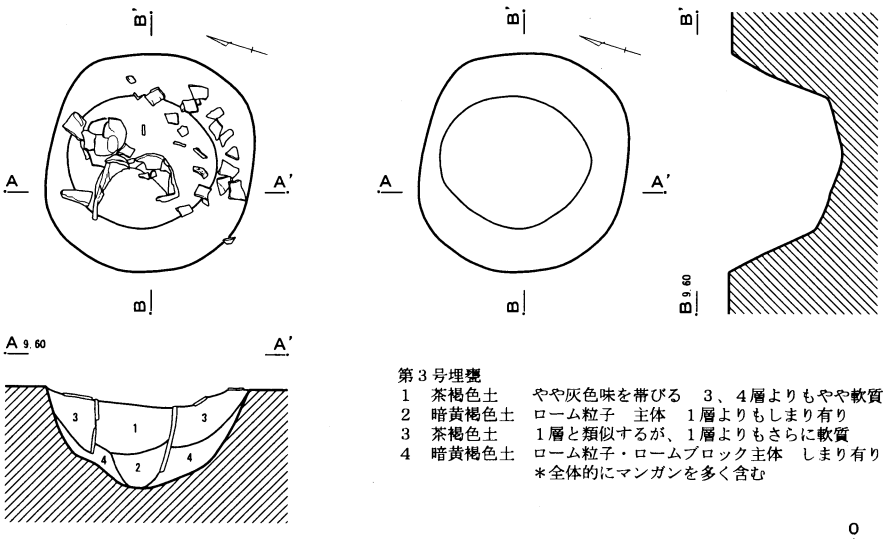
第１号埋甕
1　黄褐色土　炭化物・焼土粒子少量　遺物混入
2　暗黄褐色土　炭化物微量　地山（Ⅳ層）と酷似する
3　暗黄褐色土　黒色土少量　風化したロームブロック・遺物混入
4　暗黄褐色土　風化したロームブロック微量

第２号埋甕



第２号埋甕
1　茶褐色土　ローム粒子２層より多量　しまり有り
2　茶褐色土　ローム粒子１層より少量　色調暗い　しまり有り
3　茶褐色土　ローム粒子少量　１、２層よりもやや軟質
4　茶褐色土　ローム粒子３層よりも少量　１、２層よりもやや軟質

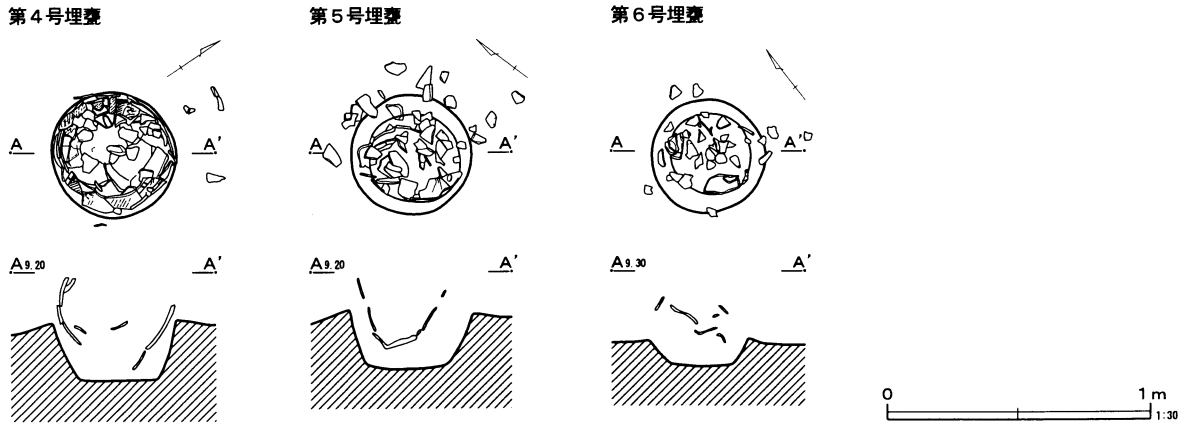
第３号埋甕



第３号埋甕
1　茶褐色土　やや灰色味を帯びる　３、４層よりもやや軟質
2　暗黄褐色土　ローム粒子　主体　１層よりもしまり有り
3　茶褐色土　１層と類似するが、１層よりもさらに軟質
4　暗黄褐色土　ローム粒子・ロームブロック主体　しまり有り
＊全体的にマンガンを多く含む

0　1m
1:30

第44図　埋甕出土状況図（１）



第45図　埋甕出土状況図（２）

cmを測る。

第49図１は胴部がやや膨らみ、口縁部が開く樽形の器形を呈し、盲孔を伴う突起を中心として緩い波状縁を呈する。口縁は４単位を呈すると思われるが、３単位の可能性もある。口縁部を沈線で区画し、単節ＬＲ縄文地文上に、波頂部下では３本沈線懸垂文、波底部では円形浮文を基点として蕨手状懸垂文を垂下する。この蕨手状懸垂文は、末端が閉塞している。推定口径31.5cm、推定器高50.8cm、底径10.8cmを測る。

第49図２・３は口縁部破片で、２は内折する口縁部に、両脇に縦位２箇対の盲孔を伴う楕円文と細長い楕円区画を施文して、口縁部文様帯を形成する。３はやや内湾気味に開く口縁部破片で、無節Ｌを横位施文する。

第４号埋甕（第45図、第50図1）

Ｇ－０区に位置する。土壙のプランはほぼ円形で、径0.48m、深さ0.24mが現存する。埋甕は正位に埋設され、口縁部と底部を欠損する。

第50図１は胴部が括れる器形を呈し、単節ＬＲ縄文地文上に磨消によるＨ状懸垂文と、蕨手状懸垂文を垂下する。Ｈ状文は上半部が磨消手法で描かれている。Ｈ状懸垂文と蕨手状懸垂文は交互に８単位施文されており、全体としては４単位構成となる。最大径40.0cm、現存高46.0cmを測る。

第５号埋甕（第45図、第49図５）

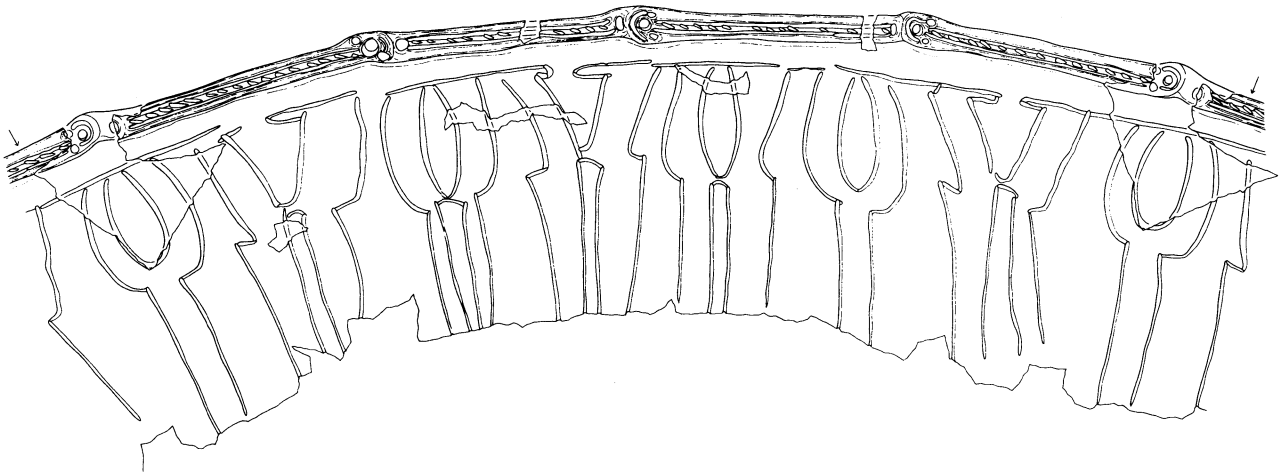
Ｆ－０区に位置する。土壙のプランはほぼ円形で、径0.6m、深さ0.23mが現存する。埋甕は正位に埋設され、胴部上半が欠損する。

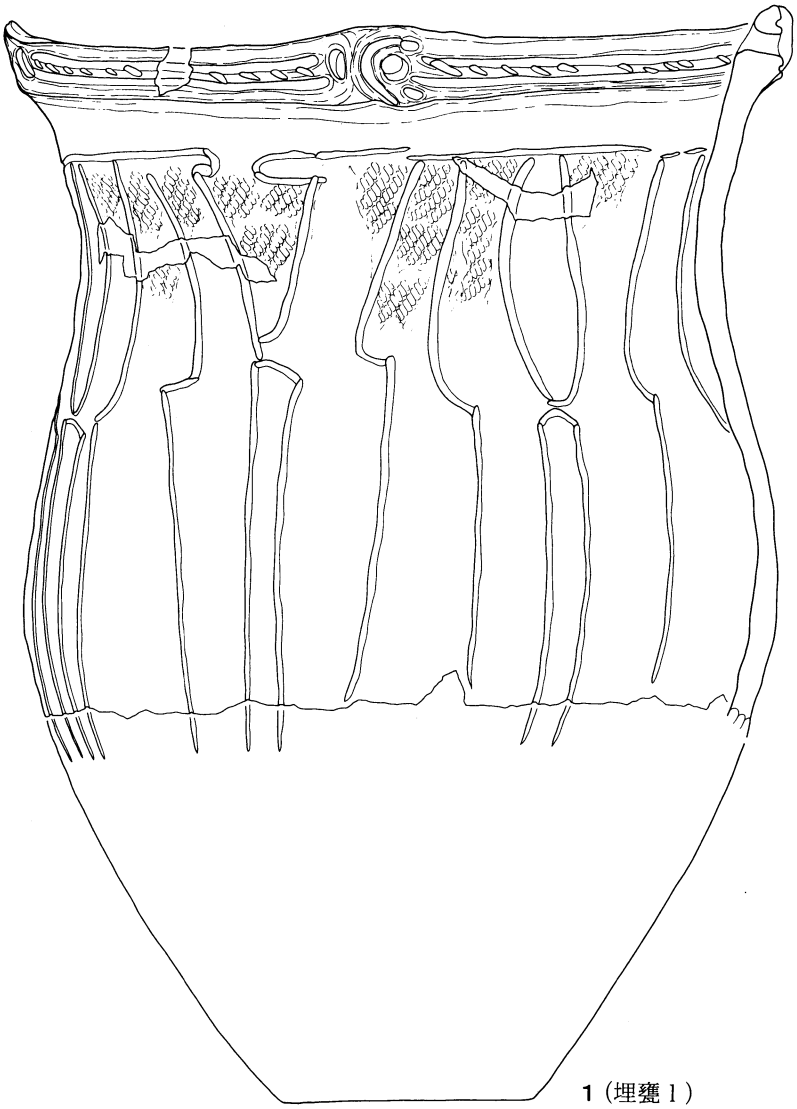
第49図５は単節ＬＲ縄文地文上に沈線懸垂文と、それを左右に繋ぐ鋸歯状の蛇行懸垂文を交互に垂下施文する。文様は体部の３分の２程の位置まで施文し、底部付近は幅広の磨消無文部となる。最大径38.5cm、底径13.2cm、現存高39.8cmを測る。

第６号埋甕（第45図、第49図4）

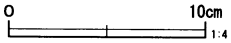
Ｇ－０区に位置する。土壙のプランは円形を呈し、径0.44m、深さ0.12mが現存する。埋甕は正位に埋設されていたが、底部のみ現存する。

第49図４は無文の底部破片で、推定底径11.2cm、現存高18.5cmを測る。

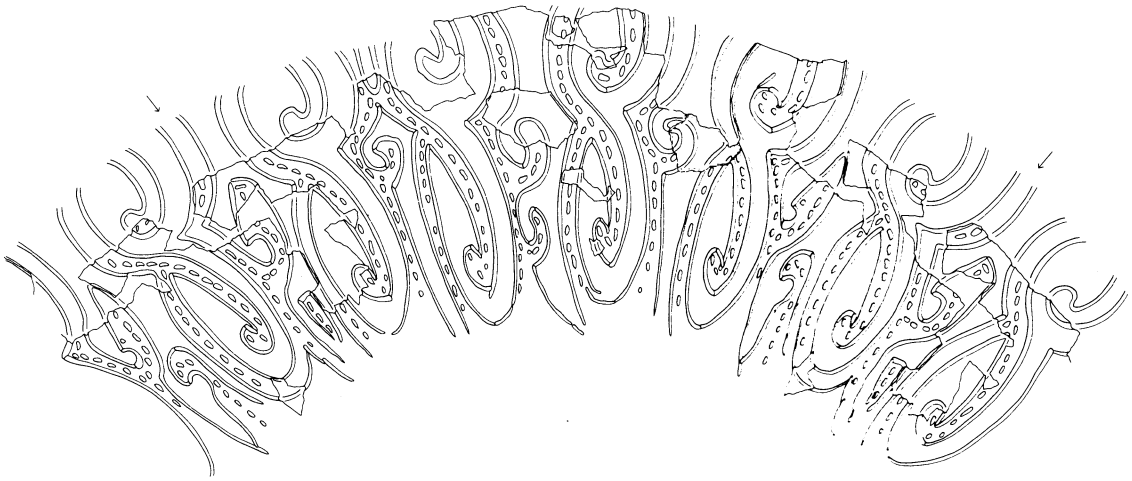


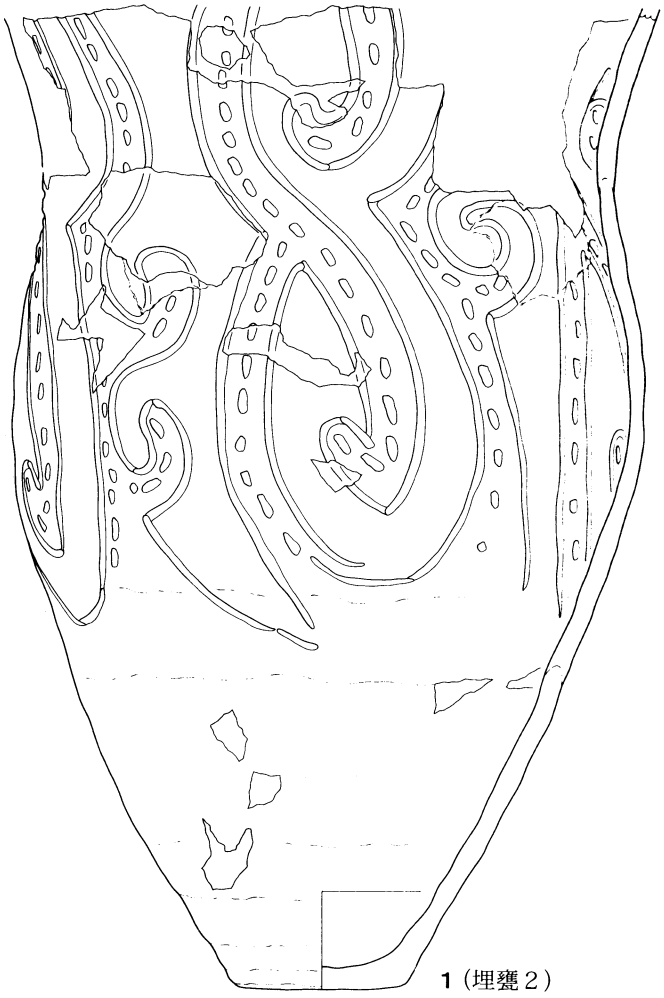


1（埋甕１）



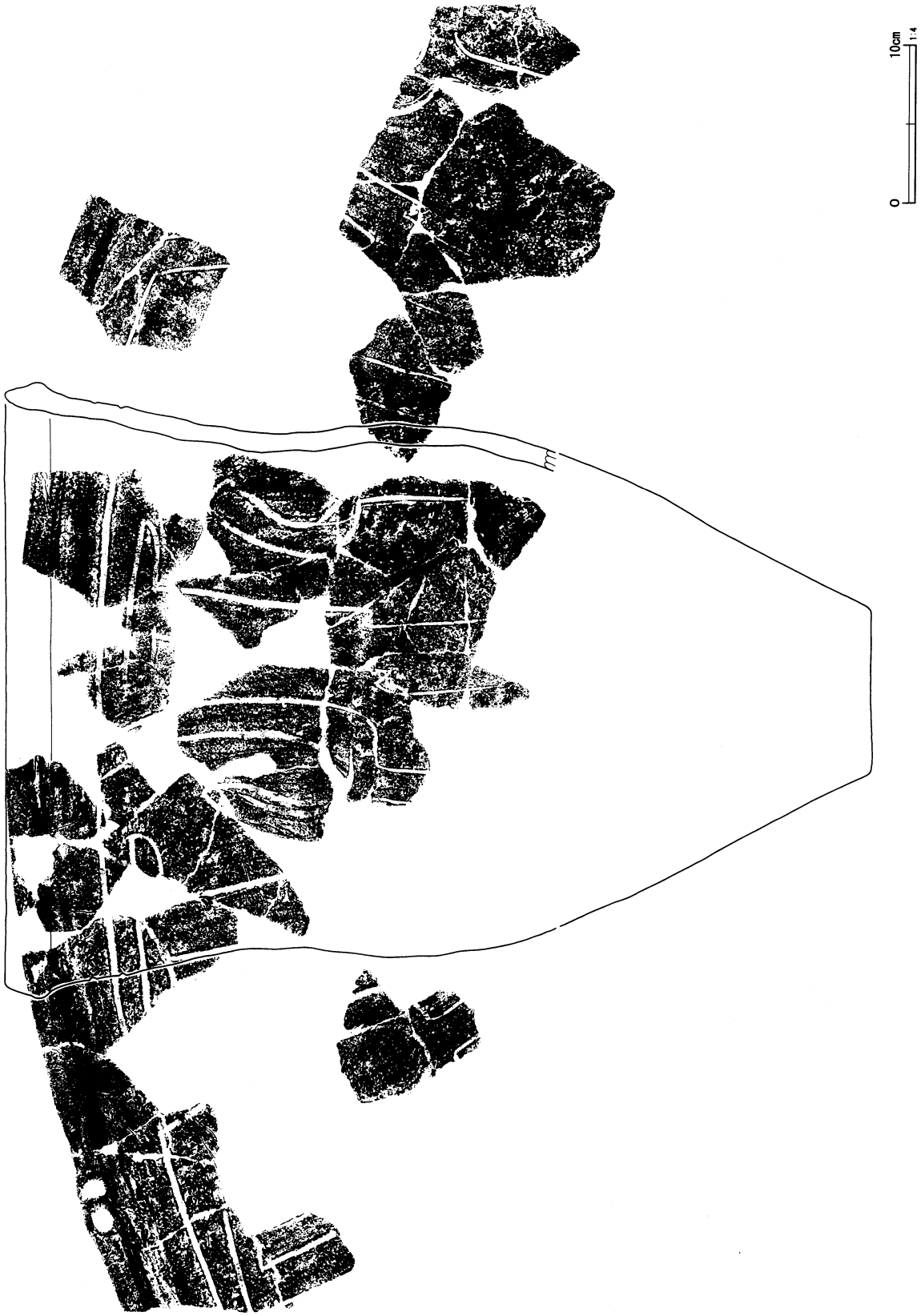
第46図　埋甕１





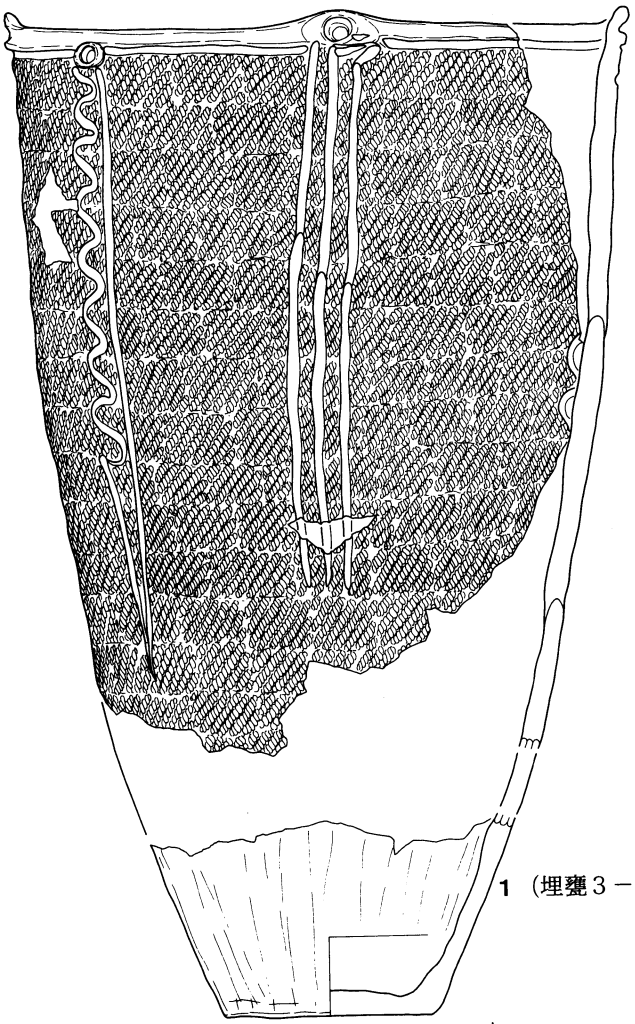
1（埋甕２）

第47図　埋甕２

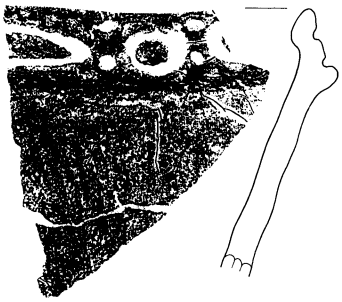


1（埋甕３－１）

第48図　埋甕３（１）



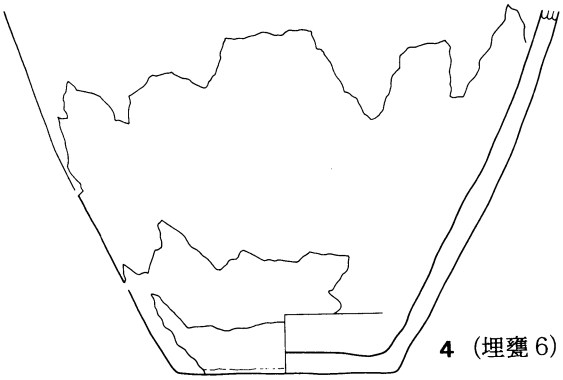
1（埋甕３－２）



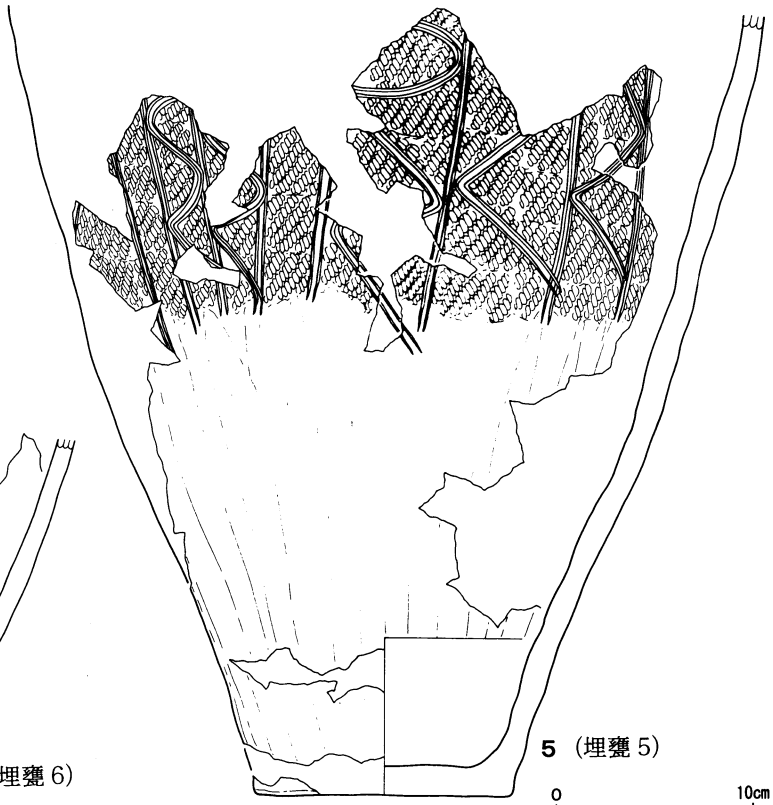
2（埋甕３－３）

3（埋甕３－４）

0　10cm
1:3



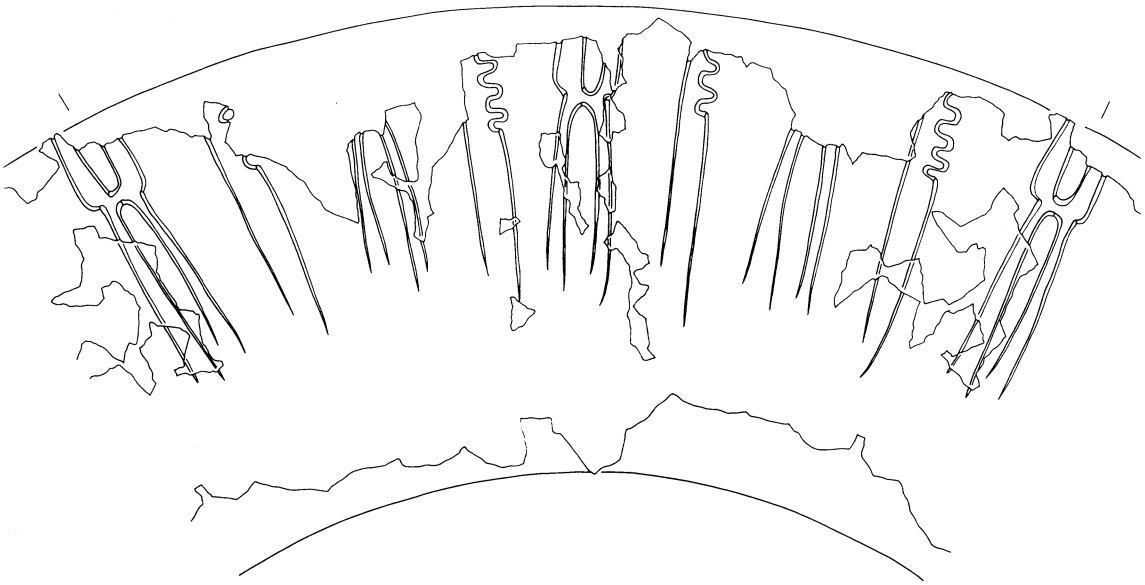
4（埋甕６）

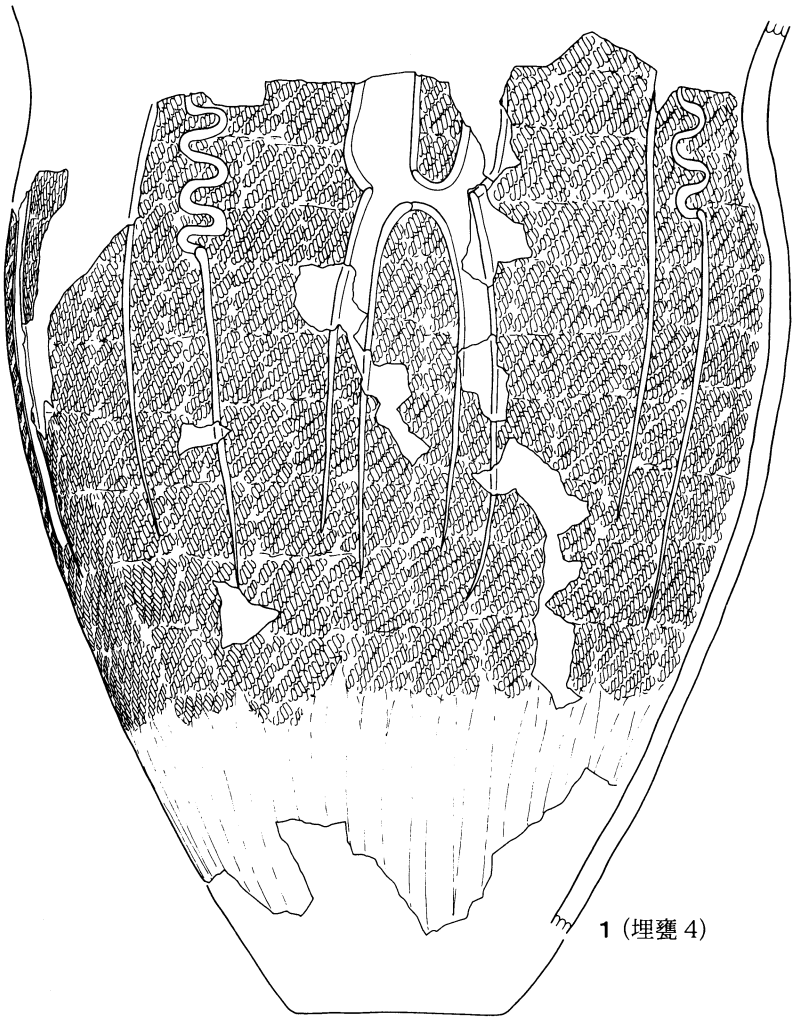


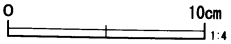
5（埋甕５）

0　10cm
1:4

第49図　埋甕３（２）・５・６







第50図　埋甕４

6　土壙

第１号土壙（第51図、第54図１～４）

Ｂ－２区に位置する。平面形は円形のピット状を呈し、長径0.76m、短径0.73m、深さ0.54mを測る。

遺物は１～４の土器片が出土している。１は磨消縄文を施文する深鉢の胴部破片で、単節ＬＲを施文する。２は地文単節ＬＲ縄文上に沈線を垂下する。３は地文単節ＬＲ縄文のみ施文する破片で、４は縦位の条線文を施文する破片である。２～４は堀之内Ⅰ式、１は堀之内Ⅱ式に比定される。

第２号土壙（第51図）

Ｂ－２区に位置する。平面形は楕円形の浅いピット状を呈し、長径0.50m、短径0.38m、深さ0.20mを測る。遺物は、出土していない。

第３号土壙（第51図、第54図５～８）

Ｂ－３区に位置する。平面形は円形のピット状を呈し、長径0.45m、短径0.41m、深さ0.23mを測る。

遺物は５～８の土器片が出土している。５は地文単節ＬＲ縄文上に、沈線の囲いを施す蕨手状懸垂文を施文する。６は屈曲する頸部の無文部破片である。７は地文に無節Ｒを横位施文するもので、８は無文土器である。いずれも堀之内Ⅰ式に比定される。

第４号土壙（第51図）

Ｂ－２区に位置する。平面形は楕円形の浅いピット状を呈し、長径0.44m、短径0.30m、深さ0.15mを測る。遺物は、出土していない。

第５号土壙（第51図、第54図９～15）

Ｃ－１区に位置する。平面形は楕円形のピット状を呈し、長径0.61m、短径0.51m、深さ0.23mを測る。

遺物は９～15が出土している。９は角頭状口縁部が内湾気味に緩く開く器形を呈し、口唇部内端が突出する。口縁部に沈線を廻らして、幅狭の口縁部無文帯を区画している。10は角頭状の口縁部が緩く開く器形で、角状沈線を廻らして口縁部を区画する。11は沈線区画内に条線文を施文し、12は列点文を１列施文する。13、14は無地文上に沈線文を施文する。15は角頭状口縁部が外反気味に立つ器形を呈し、破片より下部に横位の沈線を廻らしている可能性が高い。以上の土器群は、称名寺Ⅱ式に比定される。

第６号土壙（第51図、第54図16～20）

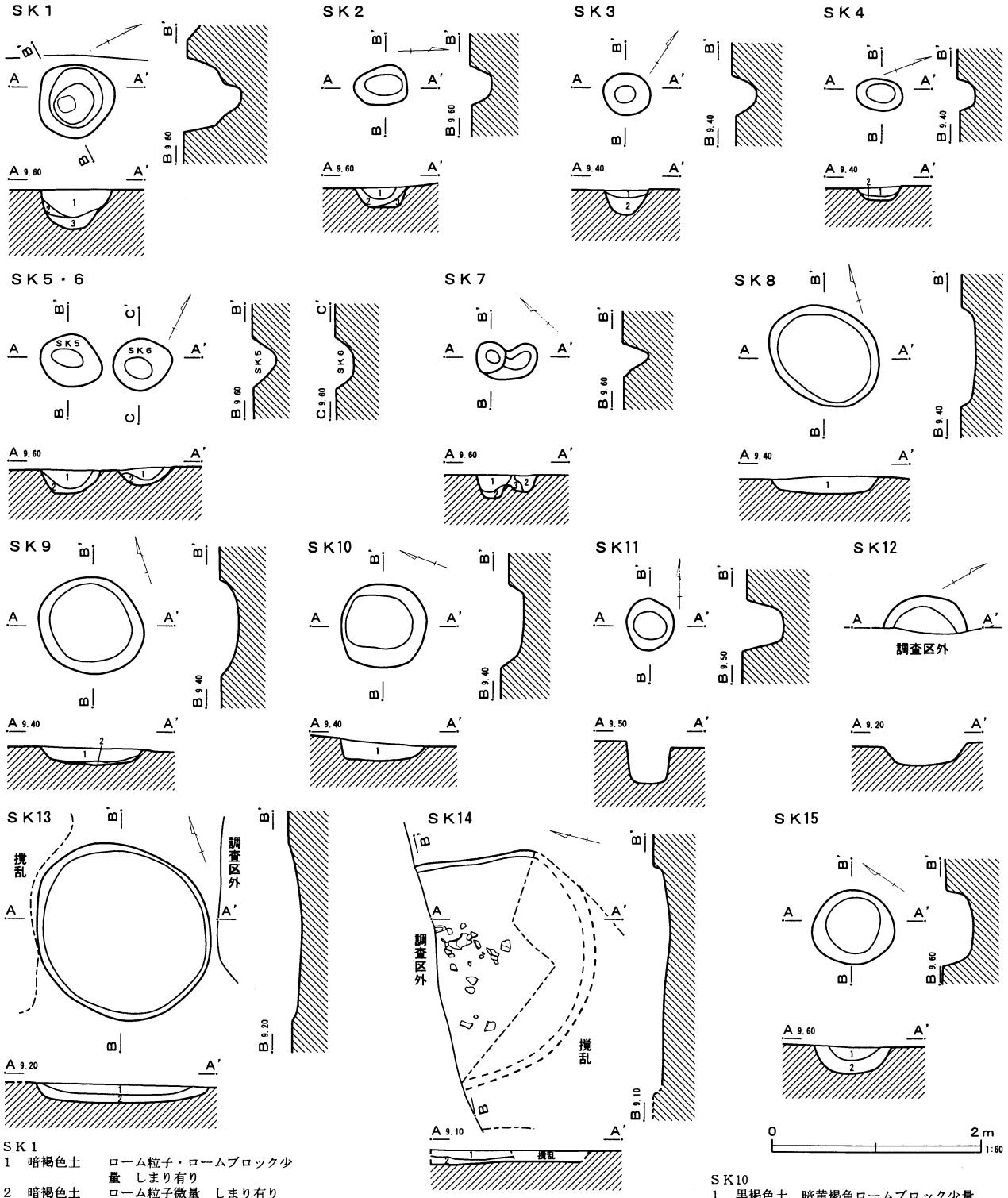
Ｃ－１区に位置する。平面形は円形の浅いピット状を呈し、長径0.57m、短径0.48m、深さ0.17mを測る。

遺物は16～20の土器片が出土している。16は頸部が強く屈曲して胴部の張る壺形、もしくは注口土器と思われる。口縁部裏面に沈線を廻らし、頸部は刺突列を施す隆線で区画して、体部には３本沈線による鋸歯状文の連結モチーフを描くものと思われる。地文は単節ＬＲを充填施文する。17は３本沈線を流水文状に施文するが、縦位の懸垂文間に縦位の鋸歯状に施文するものと思われる。18～20は無文土器である。17～20は堀之内Ⅰ式の新段階、16は堀之内Ⅱ式に比定される。

第７号土壙（第51図、第54図24）

Ｃ－２区に位置する。平面形は２個のピットが合わさったような不整形を呈し、長径0.58m、短径0.28m、深さ0.23mを測る。

遺物は24の石器が出土している。24は緑泥片岩製の敲石で、扁平な素材の先端部を使用している。長さ14.7㎝、幅3.8㎝、厚さ1.0㎝、重さ101.1ｇを測る。



SK1
1　暗褐色土　ローム粒子・ロームブロック少量　しまり有り
2　暗褐色土　ローム粒子微量　しまり有り
3　暗黄褐色土　ロームブロック多量　マンガン混入　しまり有り

SK2
1　黒褐色土　ローム粒子少量　しまりなし
2　暗黄褐色土　ローム粒子多量　しまりなし
3　暗黄褐色土　ローム粒子多量　しまりなし

SK3
1　黒褐色土　ローム粒子少量　しまりなし
2　暗黄褐色土　ローム粒子多量　しまりなし

SK4
1　黒褐色土　ローム粒子少量　しまりなし
2　暗黄褐色土　ローム粒子多量　しまりなし

SK5・6
1　暗褐色土　ローム粒子多量　しまり有り
2　暗黄褐色土　ローム粒子多量　しまり有り

SK7
1　黒褐色土　ローム粒子少量　しまりなし
2　暗褐色土　ローム粒子多量　しまりなし
3　暗黄褐色土　ローム粒子多量　しまり有り

SK8・9
1　灰黒褐色土　Ⅱb層土主体　黒色土に青灰色粘土混入　粘性・しまり有り
2　灰黒褐色土　Ⅱb層土主体　黒色土に青灰色粘土混入　ローム粒子多量　粘性・しまり有り

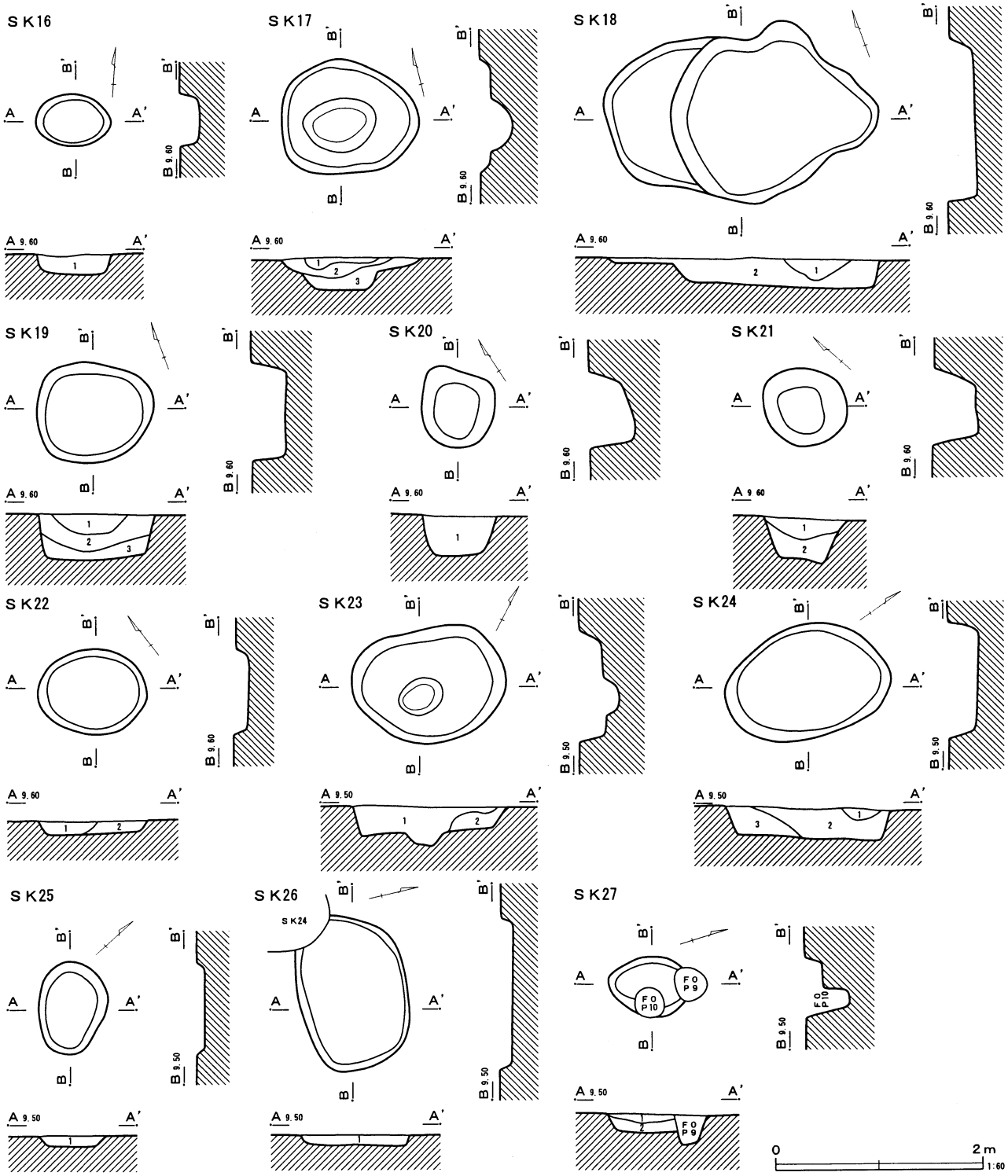
SK10
1　黒褐色土　暗黄褐色ロームブロック少量　暗黄褐色ローム粒子中量　しまり・粘性有り

SK13
1　黒褐色土　ローム粒子少量　しまりなし
2　暗褐色土　ロームブロック・灰色土ブロック少量　しまりなし

SK14
1　黒褐色土　炭化粒子・鉄分含む
2　暗褐色土　灰色土ロームブロック少量

SK15
1　暗褐色土　ローム粒子少量
2　暗褐色土　ロームブロック少量

第51図　土壙（1）



SK16
1　暗褐色土　黒色粒子少量　しまり有り

SK17
1　黒褐色土　赤色粒子含む
2　暗褐色土　ローム粒子少量
3　暗褐色土　ロームブロック少量

SK18
1　黒褐色土　鉄分多量
2　暗褐色土　ローム粒子少量

SK19
1　黒褐色土　砂質　赤色粒子少量
2　暗褐色土　ローム粒子・ロームブロック含む
3　暗褐色土　ローム粒子少量

SK20
1　暗褐色土　黒色粒子少量

SK21
1　暗褐色土　赤色・ローム粒子含む
2　暗褐色土　ロームブロック含む

SK22
1　黒褐色土　赤色粒子少量
2　暗褐色土　ローム粒子少量

SK23
1　黒褐色土　ローム粒子少量
2　暗褐色土　ロームブロック含む

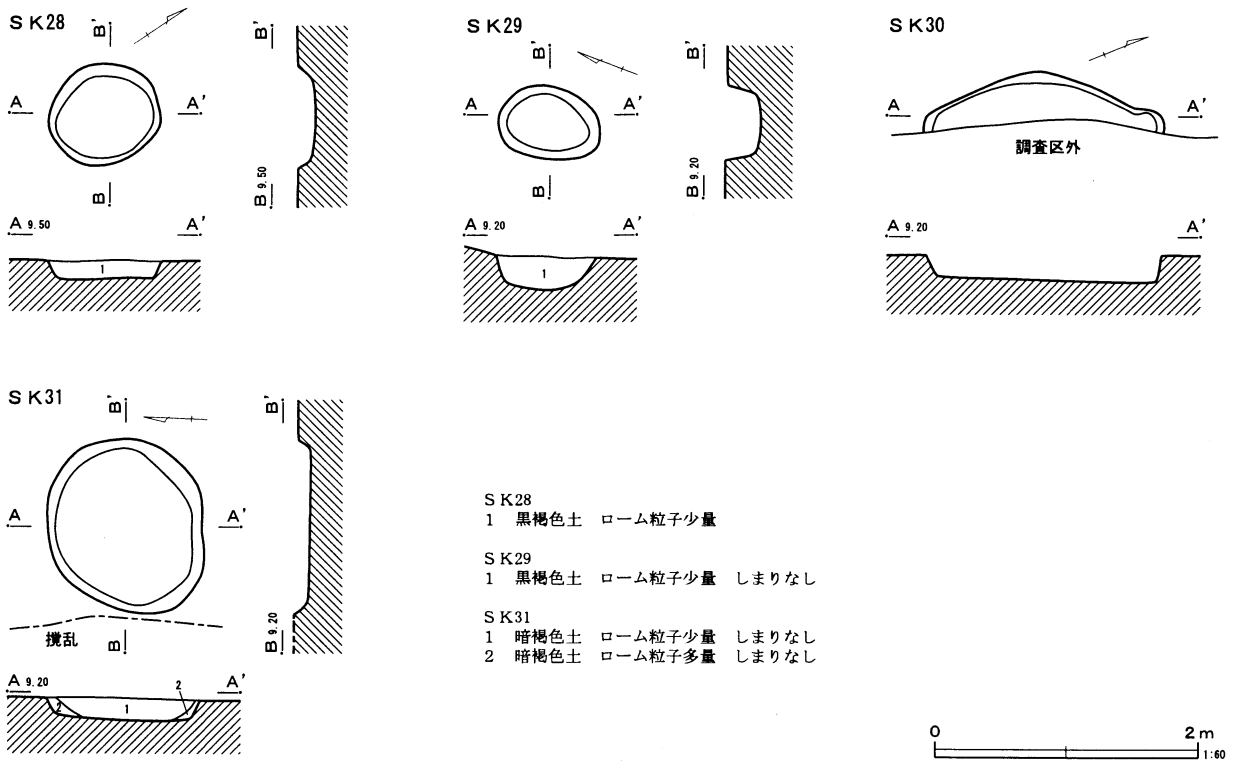
SK24
1　黒褐色土　黒色粒子多量
2　暗褐色土　ローム粒子少量　鉄分多量
3　暗褐色土　ロームブロック含む

SK25
1　暗褐色土　ローム粒子少量

SK26
1　暗褐色土　ローム粒子少量

SK27
1　暗褐色土　ローム粒子多量
2　暗褐色土　ロームブロック（黒色帯）含む

第52図　土壙（2）



第53図　土壙（３）

第17表　土壙計測表

グリッド	遺構番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	形態
B-2	SK1	0.76	0.73	0.54	円形
	SK2	0.50	0.38	0.20	楕円形
B-3	SK3	0.45	0.41	0.23	円形
B-2	SK4	0.44	0.30	0.15	楕円形
C-1	SK5	0.61	0.51	0.23	楕円形
	SK6	0.57	0.48	0.17	円形
C-2	SK7	0.58	0.28	0.23	不整形
D-2	SK8	1.10	0.88	0.14	楕円形
	SK9	1.02	0.90	0.14	円形
F-1	SK10	0.80	0.79	0.18	円形
	SK11	0.49	0.44	0.37	円形
G-0	SK12	0.79	(0.36)	0.20	円形？
	SK13	1.77	1.59	0.17	楕円形
F・G-(-1)	SK14	(2.07)	1.11	0.15	楕円形？
D-1	SK15	0.79	0.72	0.28	円形
	SK16	0.73	0.49	0.18	楕円形

グリッド	遺構番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	形態
E-1	SK17	1.31	1.08	0.30	楕円形
	SK18	2.64	1.53	0.28	不整楕円形
	SK19	1.12	0.93	0.44	楕円形
	SK20	0.82	0.75	0.42	不整円形
	SK21	0.84	0.74	0.43	円形
E・F-1	SK22	1.03	0.82	0.13	楕円形
E-1	SK23	1.45	1.10	0.38	楕円形
	SK24	1.62	1.08	0.29	楕円形
F-1	SK25	0.87	0.65	0.10	楕円形
E-0・1	SK26	1.50	1.04	0.11	楕円形
E・F-0	SK27	(0.77)	0.58	0.16	楕円形
F-0	SK28	0.85	0.75	0.13	円形
F-(-1)	SK29	0.78	0.54	0.26	楕円形
G-0	SK30	1.81	(0.33)	0.20	楕円形？
G-(-1)・0	SK31	1.37	1.22	0.16	円形

第８号土壙（第51図、第54図21～23）

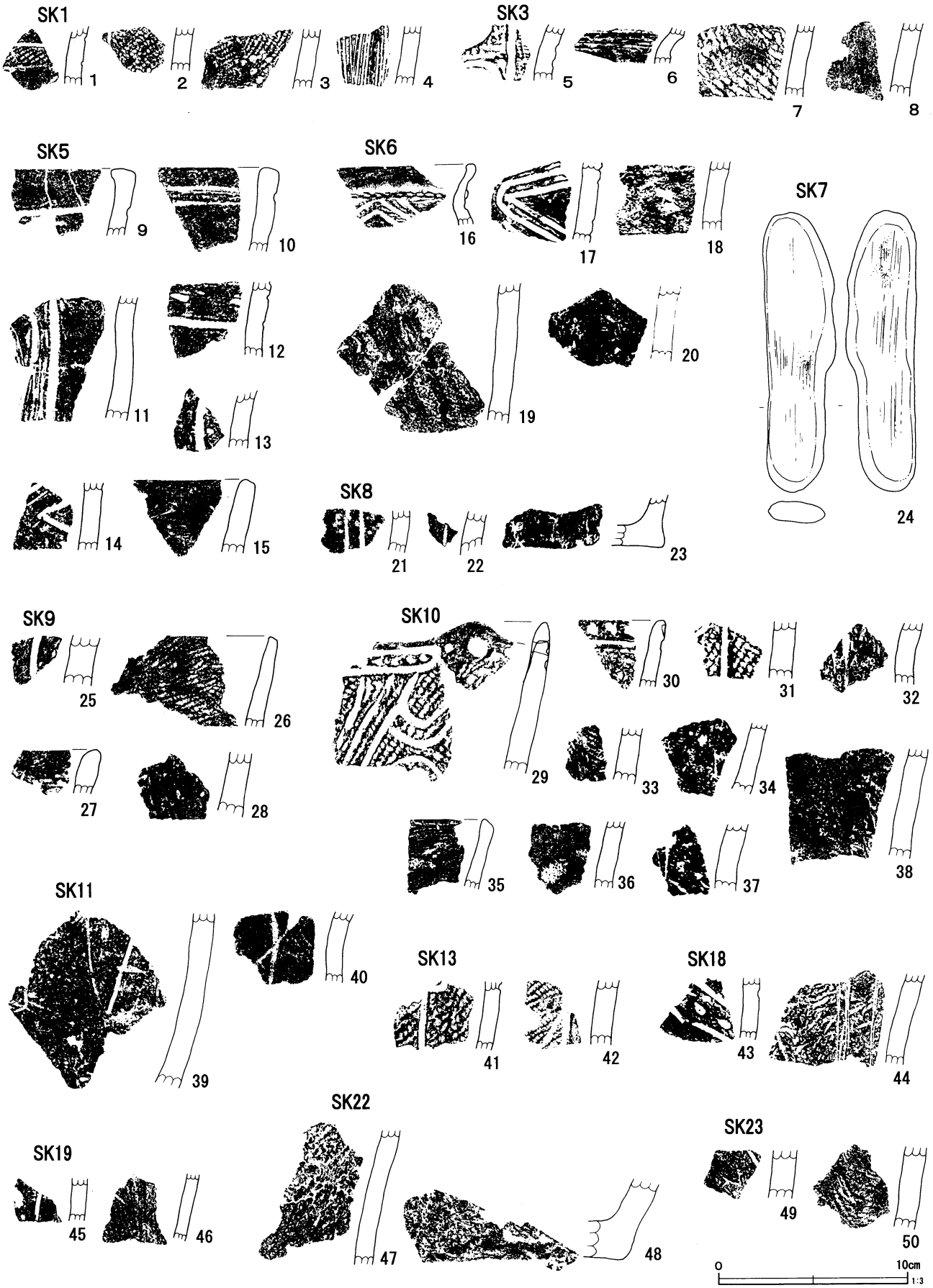
Ｄ－２区に位置する。平面形は楕円形の浅い皿状を呈し、長径1.10m、短径0.88m、深さ0.14mを測る。

遺物は21～23の土器片が出土している。21・22は地文縄文上に沈線懸垂文を垂下するもので、地文は単節ＬＲである。23は底部破片である。いずれも堀之内Ｉ式に比定される。

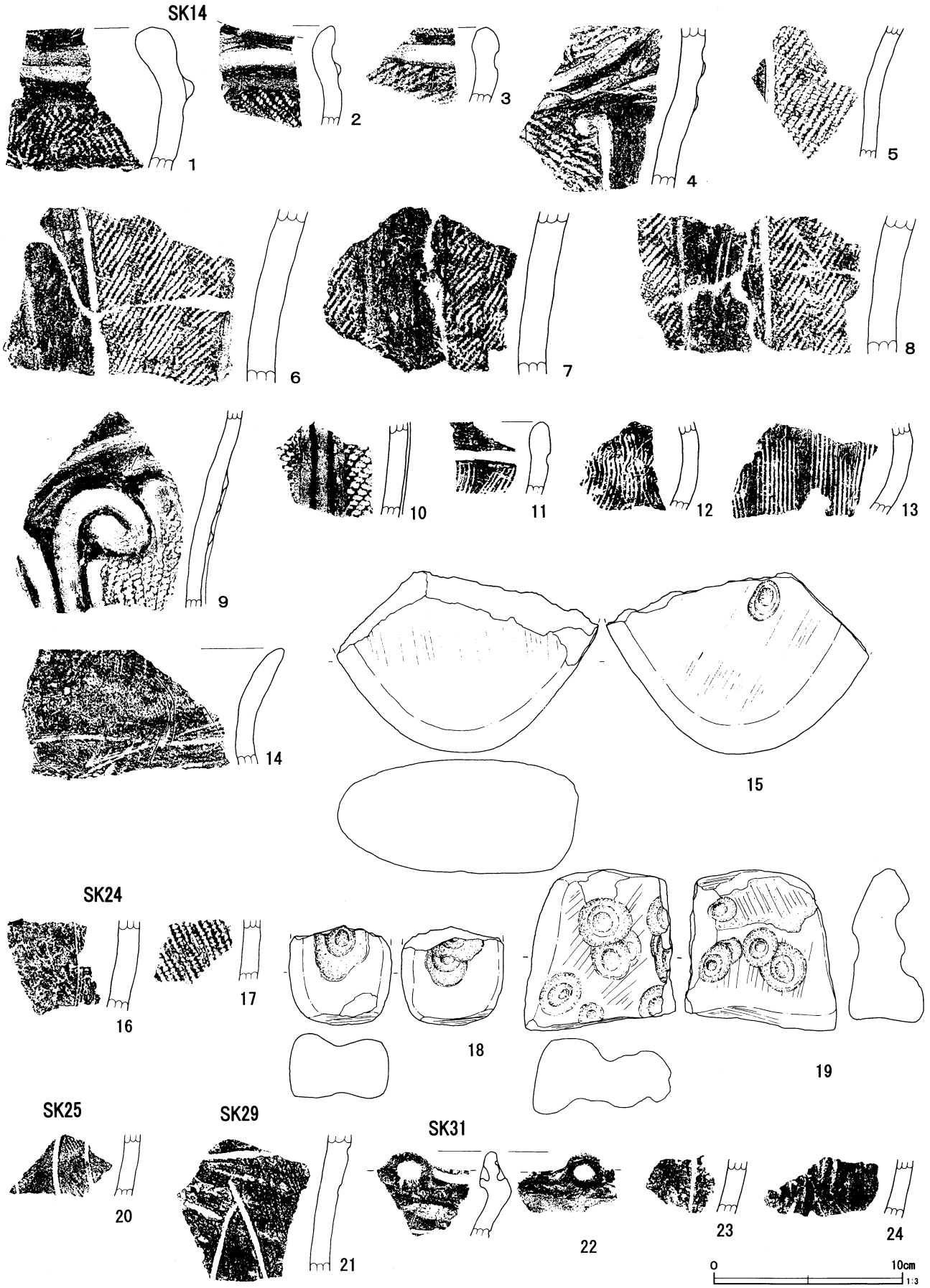
第９号土壙（第51図、第54図25～28）

Ｄ－２区に位置する。平面形は円形の浅い皿状を呈し、長径1.02m、短径0.90m、深さ0.14mを測る。

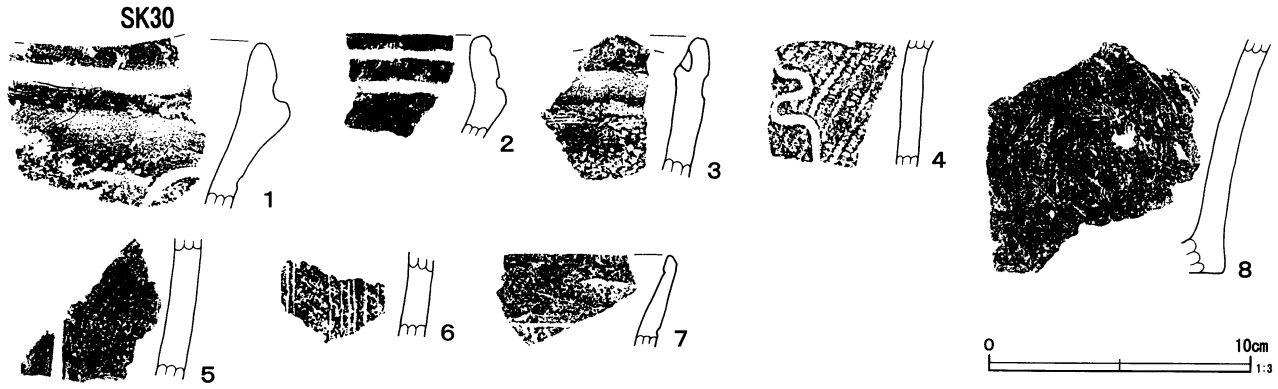
遺物は25～28の土器片が出土している。25は無



第54図　土壙出土遺物（1）



第55図　土壙出土遺物（２）



第56図　土壙出土遺物（3）

地文上に沈線を垂下するものである。26は角頭状の先細り状口縁部が開く器形を呈し、地文に単節ＬＲ縄文を横位施文する。27は丸頭状口縁部が緩く開く器形で、口縁部にやや無文部を空けて単節ＬＲ縄文を施文する。28は無文土器である。25・27・28は堀之内Ｉ式、26は堀之内Ⅱ式に比定される。

第10号土壙（第51図、第54図29～38）

Ｆ－１区に位置する。第３号住居跡の炉と重複するが、本土壙の方が新しい。平面形は円形を呈し、長径0.80ｍ、短径0.79ｍ、深さ0.18ｍを測る。

遺物は29～38の土器片が出土している。29は口縁部が直線的に開く深鉢形土器で、山形の把手が付く小波状縁を呈する。山形把手部は円孔を穿ち、さらに円孔の両サイドに２箇所の盲孔を設ける。口縁部はこの盲孔を基点として、沈線の楕円区画文を設け、区画内に刺突列を施文する。体部は波頂下に蕨手状懸垂文を垂下して区画し、さらに斜行する２本沈線を垂下して懸垂文との余白に、対弧状の弧状沈線を施文する。地文は単節ＬＲ縄文の横位施文である。

30は幅広の角頭状沈線を廻らして口縁部を区画し、沈線と同一工具と思われる角頭状刺突を充填施文する。地文は単節ＬＲ縄文を横位施文する。31・32は沈線懸垂文を垂下するもので、31は地文に単節ＬＲ縄文を施文し、32は無地文である。33は不明瞭であるが、無節Ｌ縄文を施文する。34～38は無文土器で、35は口縁部破片で、やや外削状の口唇部が引く器形を呈する。いずれも堀之内Ｉ式に比定される。

第11号土壙（第51図、第54図39・40）

Ｆ－１区に位置する。平面形は深いピット状の円形を呈し、長径0.49m、短径0.44m、深さ0.37ｍを測る。

遺物は39・40の土器片が出土している。39は底部近くの破片で、逆放物線状に垂下する沈線が収束するモチーフを描く。40は胴部の比較的強い括れ部に相当する破片で、深い沈線が垂下し、単節ＬＲ縄文が充填施文される。両者とも称名寺Ⅱ式の終末に位置付けられる可能性がある。

第12号土壙（第51図）

Ｇ－０区に位置する。東側半分が調査区外に当たる。平面形は円形の浅い皿状を呈するものと思われ、現存で長径0.79m、短径0.36m、深さ0.20ｍを測る。遺物は、出土していない。

第13号土壙（第51図、第54図41・42）

Ｇ－０区に位置する。平面形は楕円形の皿状を呈し、長径1.77m、短径1.59m、深さ0.17mを測る。

遺物は41・42が出土している。41・42は地文単節ＬＲ縄文上に、41は蕨手状、42は沈線懸垂文を垂下する。両者とも堀之内Ｉ式に比定される。

第14号土壙（第51図、第55図１～15）

Ｆ・Ｇ－０～－１区に位置する。平面形は、北側半分が調査区外に当たり、南側が撹乱により壊されているため詳細は不明である。調査範囲内では、長径2.07m、短径1.11m、深さ0.15mを測る。

遺物は１～14の土器片と、15の石器が出土している。１～３は加曽利Ｅ式キャリパー系土器の口縁部破片である。１は丸頭状に肥厚する口唇部が内湾して開く器形を呈し、口縁部を隆帯で区画する。口縁部文様帯内には単節ＲＬ縄文を縦横に施文する。２は口縁部が内湾して開き、隆帯で区画するが、先細り状の口唇部が外反する器形を呈する。口縁部の地文は単節ＲＬ縄文を横位施文する。３は丸頭状口唇部が内湾しながら開く器形で、口縁部を凹線で区画する。

４は口縁部文様帯から胴部にかけての破片で、口縁部下端を低隆帯で区画し、文様帯内に渦巻文を連結する斜位の隆帯を施文する。地文は単節ＬＲを口縁部で横位に、胴部で縦位に施文する。５から８は沈線の磨消懸垂文を垂下する胴部破片である。磨消懸垂文の無文帯は幅の広いもので、地文に単節ＲＬを充填施文する。

９・10は隆帯でモチーフを描く土器群である。９は口縁部文様帯を持つ渦巻文系深鉢土器の胴部破片と思われ、頸部に無文部が設定されている。胴部は２本隆帯による渦巻文の連結部に、口縁部区画から隆帯を垂下して縦位の区画を行い、垂下隆帯の一部を渦巻状に施文する。地文は単節ＲＬの充填縄文である。10は微隆起線状の２本隆帯で渦巻文を描くもので、器壁が比較的薄く、地文縄文に単節ＲＬを充填施文する。

11～13は口縁部に沈線を廻らして幅狭の無文帯を区画する鉢形土器で、胴部に縦位の条線を施文する。11は口縁部破片で、やや間隔を空けて条線を帯状に施文する。12は条線をやや蛇行状に、13は帯状に垂下施文する。

14は両耳壺の口縁部破片と思われる。先細り状の幅広無文部が、外反しながら立つ器形を呈する。

15は磨石で、約半分が現存するが、片面に凹穴が穿たれる。閃緑岩製で長さ9.5㎝、幅13.8㎝、厚さ6.0㎝、重さ1019.0ｇを測る。

以上の土器群は、加曽利ＥⅢ式古段階から新段階に位置付けられるものを含んでいる。

第15号土壙（第51図）

Ｄ－１区に位置する。平面形は円形を呈し、長径0.79m、短径0.72m、深さ0.28mを測る。遺物は、出土していない。

第16号土壙（第52図）

Ｄ－１区に位置する。平面形は楕円形を呈し、長径0.73m、短径0.49m、深さ0.18mを測る。遺物は、出土していない。

第17号土壙（第52図）

Ｅ－１区に位置する。平面形は楕円形の二段掘り状を呈し、長径1.31m、短径1.08m、深さ0.30mを測る。遺物は、出土していない。

第18号土壙（第52図、第54図43・44）

Ｅ－１区に位置する。平面形は不整形を呈し、長径2.64m、短径1.53m、深さ0.28mを測る。

遺物は43・44の土器片が出土している。43は無地文上に、平行する２本沈線でモチーフを描き、沈線間に水滴状の列点文を施文する。44は横位の無節Ｌ縄文地文上に、細かな条線の懸垂文を垂下施文する。43は称名寺Ⅱ式、44は堀之内Ｉ式に比定される。

第19号土壙（第52図、第54図45・46）

Ｅ－１区に位置する。平面形は楕円形を呈し、長径1.12m、短径0.93m、深さ0.44mを測る。

遺物は45・46の土器片が出土している。45は無地文上に沈線を施文し、46は無文土器である。堀之内Ⅰ式に比定されよう。

第20号土壙（第52図）

Ｅ－１区に位置する。平面形は楕円形を呈し、長径0.82m、短径0.75m、深さ0.42mを測る。遺物は、出土していない。

第21号土壙（第52図）

Ｅ－１区に位置する。平面形は円形を呈し、長径0.84m、短径0.74m、深さ0.43mを測る。遺物は、出土していない。

第22号土壙（第52図、第54図47・48）

Ｅ・Ｆ－１区に位置する。平面形は楕円形を呈し、長径1.03m、短径0.82m、深さ0.13mを測る。

遺物は47・48の土器片が出土している。47は底部近くの胴部破片で、破片上部に単節ＬＲ縄文を横位施文する。48は底部破片であり、器壁が厚く、底部の張り出しも見られない。両者とも堀之内Ⅰ式に比定される。

第23号土壙（第52図、第54図49・50）

Ｅ－１区に位置する。平面形は楕円形を呈し、長径1.45m、短径1.10m、深さ0.38mを測る。

遺物は49・50の土器片が出土している。49は無文地文上に、浅い沈線を施文するものである。50は単節ＬＲを縦位施文する。両者とも堀之内Ⅰ式に位置付けられよう。

第24号土壙（第52図、第55図16～19）

Ｅ－１区に位置する。第26号土壙と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は楕円形を呈し、長径1.62m、短径1.08m、深さ0.29mを測る。

遺物は16・17の土器片と、18・19の石器が出土している。16は無地文上に細かな条線を帯状に施文するもので、17は単節ＬＲを縦位施文する。16は堀之内Ⅰ式に比定されるが、17は縄文の施文手法を考慮すると、加曽利ＥⅢ式に比定される可能性がある。

18は磨石で、約半分を欠損するが、長方形状に面取りが施されており、両面に浅い凹穴を持つ。安山岩製で長さ4.8㎝、幅5.5㎝、厚さ3.4㎝、重さ115.6ｇを測る。19は石皿から転用の凹石で、両面に多数の凹穴を持つ。緑泥片岩製で、縦9.5㎝、横7.5㎝、厚さ4.0㎝、重さ447.5ｇを測る。

第25号土壙（第52図、第55図20）

Ｆ－１区に位置する。平面形は楕円形を呈し、長径0.87m、短径0.65m、深さ0.10mを測る。

遺物は20の土器片が出土している。20は平行する沈線で曲線的なモチーフを描くものと思われ、区画内に単節ＬＲ縄文を充填施文する。称名寺式に比定される。

第26号土壙（第52図）

Ｅ－０・１区に位置する。平面形は楕円形の皿状を呈し、長径1.50m、短径1.04m、深さ0.11mを測る。遺物は、出土していない。

第27号土壙（第52図）

Ｅ・Ｆ－０区に位置する。Ｆ－０のＰ９・10と重複し、Ｐ９より古く、Ｐ10とは不明である。平面形は楕円形を呈し、現存の長径0.77m、短径0.58m、深さ0.16mを測る。遺物は、出土していない。

第28号土壙（第53図）

Ｆ－０区に位置する。平面形は円形の皿状を呈し、長径0.85m、短径0.75m、深さ0.13mを測る。遺物は、出土していない。

第29号土壙（第53図、第55図21）

Ｆ－－１区に位置する。平面形は楕円形を呈し、長径0.78m、短径0.54m、深さ0.26mを測る。

遺物は21の土器片が出土している。21は横位沈線で口縁部を区画し、無地文上の体部に格子状に斜行する沈線を施文し、その始点が交わるモチーフを描いている。堀之内Ⅰ式に比定される。

第30号土壙（第53図、第56図1～7）

Ｇ－０区に位置する。平面形は長楕円形を呈するものと思われるが、大半が調査区外に当たるため、全体のプランは不明である。現存の長径1.81m、短径0.33m、深さ0.20mを測る。

遺物は１～７の土器片が出土している。１～３は口縁部破片である。１は肥厚する口縁部が内湾気味に開く器形を呈し、口縁部に凹線状の沈線を廻らせる。胴部は、無地文上に逆Ｕ字状の沈線懸垂文を垂下するものと思われる。２は口縁部が内折して開く器形を呈し、幅狭口縁部文様帯に、２本沈線を廻らせる。３は小波状縁を呈し、やや内湾気味に開く口縁部に、太い凹線状の沈線を廻らせて口縁部を区画する。波頂部の内面には盲孔を穿つ。地文は単節ＬＲ縄文の横位施文である。４は地文単節ＬＲ縄文上に、蕨手状懸垂文を垂下する。５は無地文上に沈線の懸垂文を垂下する。６は細かな条線を帯状に施文する。

７は積み上げ状口縁部が直線的に開く器形を呈し、口縁部内面に沈線を廻らす。口縁部は沈線を廻らして、無文帯を区画し、体部に磨消縄文でモチーフを描く。８は底部破片で、底部がやや張り出す器形を呈する。

以上、１～６・８は堀之内Ⅰ式、７は堀之内Ⅱ式に比定される。

第31号土壙（第53図、第55図22～24）

Ｇ－－１・０区に位置する。平面形は円形の皿状を呈し、長径1.37m、短径1.22m、深さ0.16mを測る。

遺物は22～24の土器片が出土している。22は頸部で括れ、胴部が張る器形の深鉢で、把手の付く波状縁を呈する。把手は内外面に大きな盲孔を施文し、口縁部には沈線を廻らしている。頸部は沈線で区画し、体部に貼付文を基点とした懸垂文を施文するものと思われる。23は無地文上に沈線を垂下するもので、24は無文土器である。以上は堀之内Ⅰ式に比定される。

7　溝跡

第１号溝跡（第57図）

Ｃ－２～Ｅ－２区にかけてクランク状に位置する。第１号住居跡と重複するが、本遺構の方が新しい。検出された規模は長さ27.5m、幅0.26m～1.00m、深さ0.13m～0.27mを測る。

第２号溝跡（第57図）

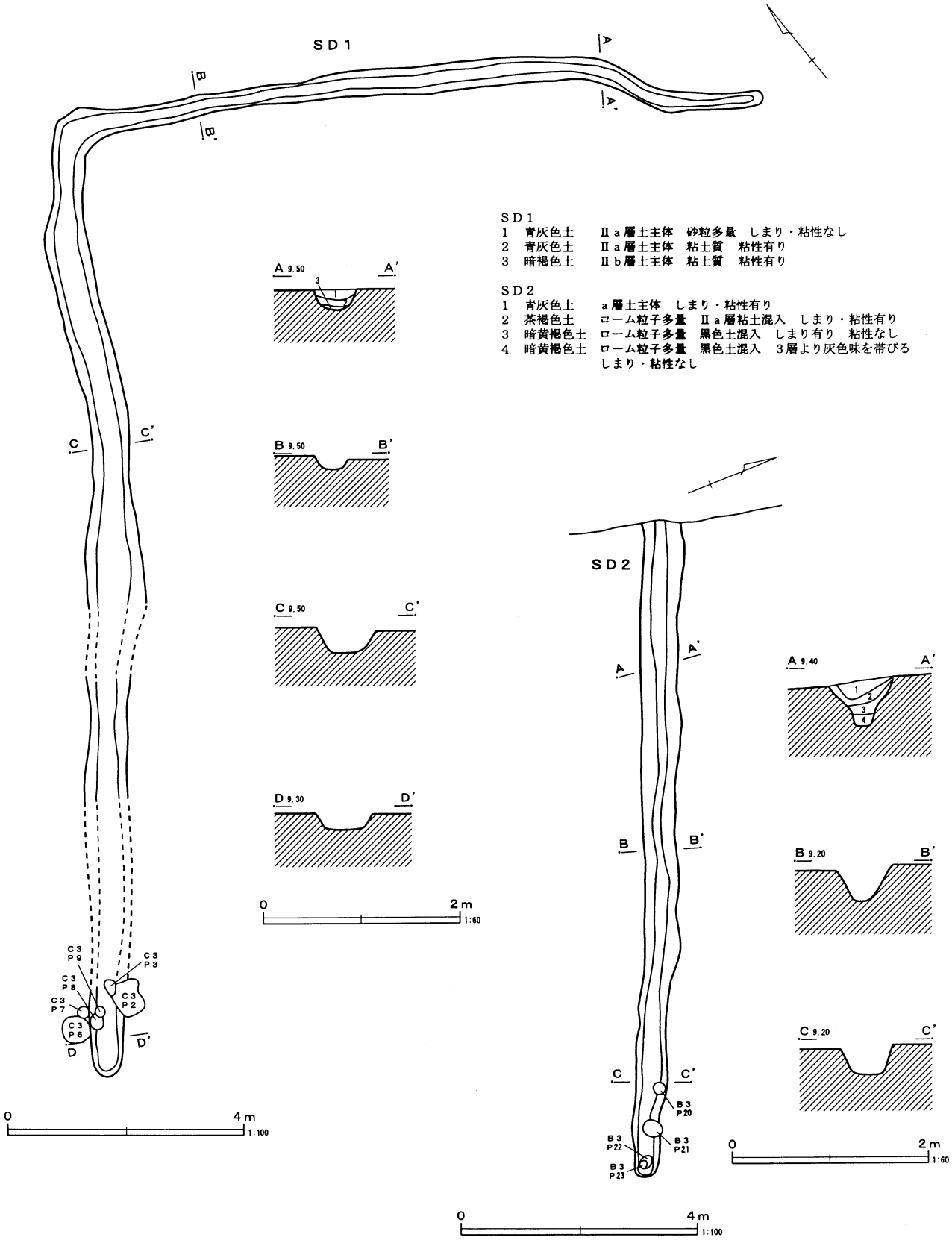
Ａ～Ｂ－３区にかけて調査区の東西方向に位置する。検出された規模は長さ11.1m、幅0.45m～0.67m、深さ0.15m～0.46mを測る。

第３号溝跡（第58図）

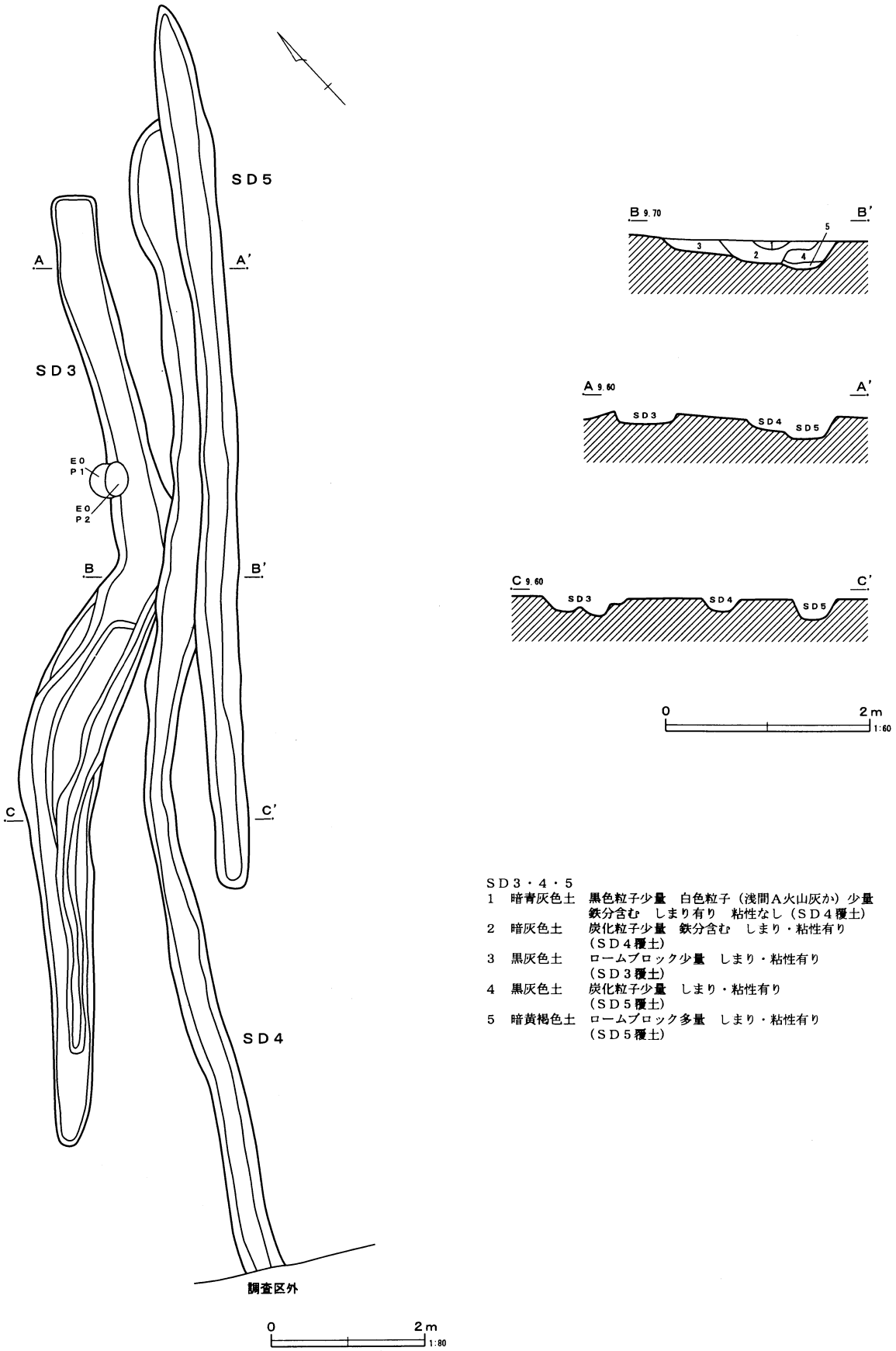
Ｅ－０～１区にかけて調査区の南北方向に位置する。第４号溝跡と重複するが、本遺構の方が古い。検出された規模は長さ12.60m、幅0.56m～1.08m、深さ0.04m～0.17mを測る。

第４号溝跡（第58図）

Ｅ－０～Ｆ－０区にかけて位置する。第３号溝跡・第５号溝跡と重複するが、本遺構の方が新しい。検出された規模は長さ15.14m、幅0.38m～0.56m、深さ0.06m～0.23mを測る。


SD1
SD1
1　青灰色土　Ⅱa層土主体　砂粒多量　しまり・粘性なし
2　青灰色土　Ⅱa層土主体　粘土質　粘性有り
3　暗褐色土　Ⅱb層土主体　粘土質　粘性有り
SD2
1　青灰色土　a層土主体　しまり・粘性有り
2　茶褐色土　ローム粒子多量　Ⅱa層粘土混入　しまり・粘性有り
3　暗黄褐色土　ローム粒子多量　黒色土混入　しまり有り　粘性なし
4　暗黄褐色土　ローム粒子多量　黒色土混入　3層より灰色味を帯びる
しまり・粘性なし
A 9.50
B 9.50
C 9.50
D 9.30
0　2m
1:60
C3 P9
C3 P8
C3 P7
C3 P6
C3 P3
C3 P2
0　4m
1:100
SD2
A 9.40
B 9.20
C 9.20
B3 P20
B3 P21
B3 P22
B3 P23
0　2m
1:60
0　4m
1:100

第57図　溝跡（1）



SD３・４・５
1　暗青灰色土　黒色粒子少量　白色粒子（浅間Ａ火山灰か）少量
　　鉄分含む　しまり有り　粘性なし（ＳＤ４覆土）
2　暗灰色土　炭化粒子少量　鉄分含む　しまり・粘性有り
　　（ＳＤ４覆土）
3　黒灰色土　ロームブロック少量　しまり・粘性有り
　　（ＳＤ３覆土）
4　黒灰色土　炭化粒子少量　しまり・粘性有り
　　（ＳＤ５覆土）
5　暗黄褐色土　ロームブロック多量　しまり・粘性有り
　　（ＳＤ５覆土）

第58図　溝跡（２）

第５号溝跡（第58図）

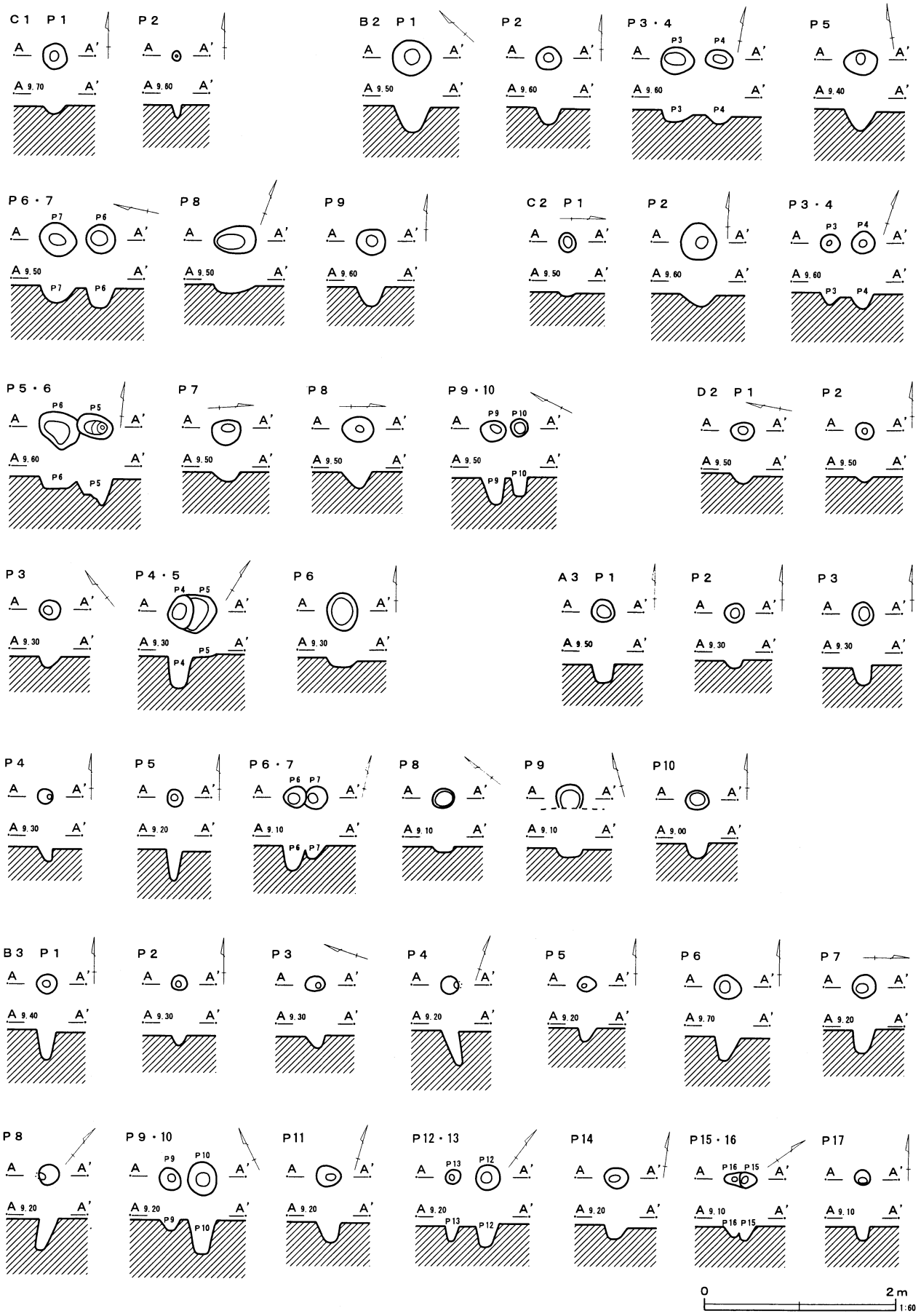
Ｅ－０～Ｆ－０区にかけて位置する。第４号溝跡と重複するが、本遺構の方が古い。検出された規模は長さ11.56m、幅0.44m～0.64m、深さ0.07m～0.25mを測る。

8　ピット跡

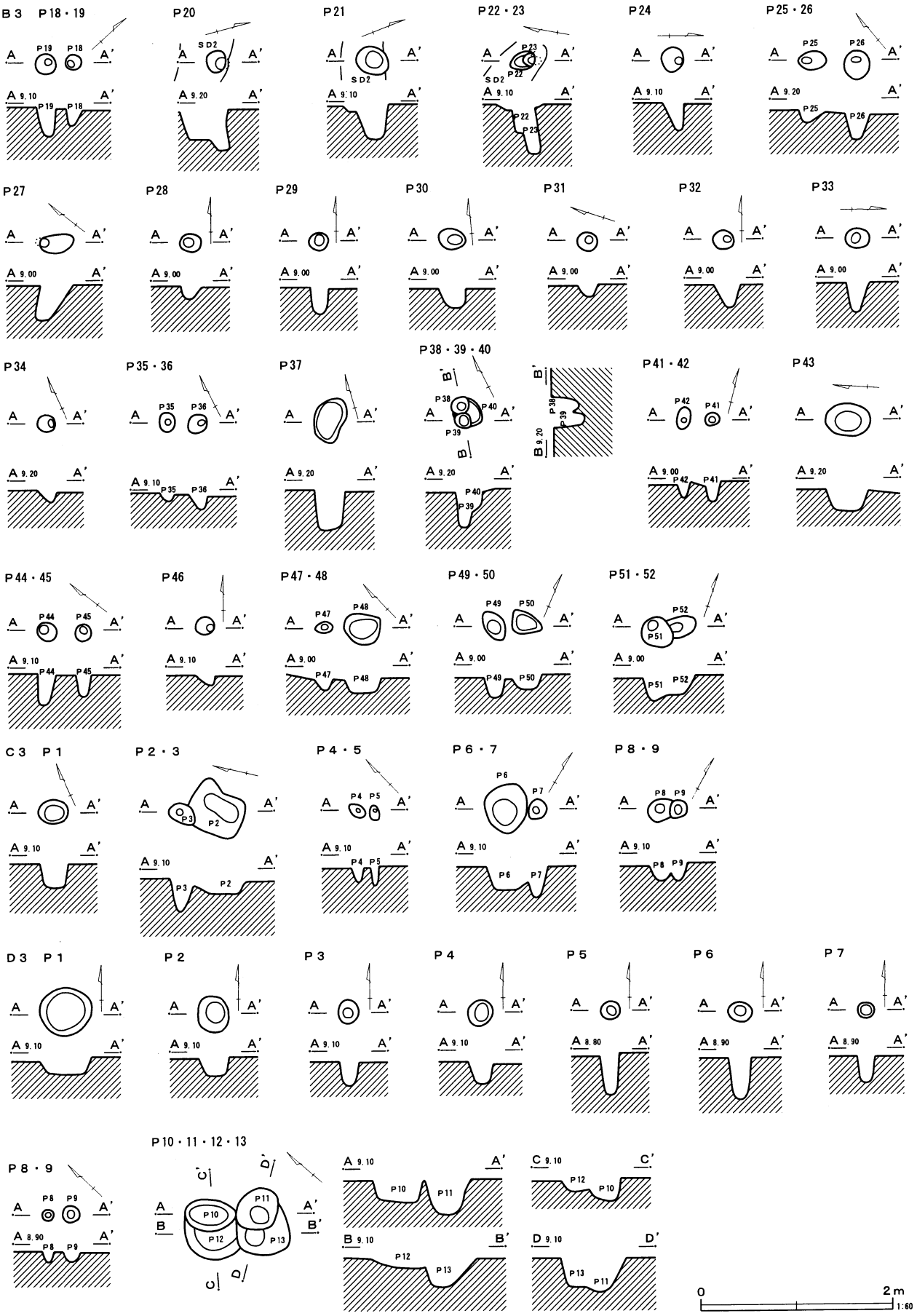
ピット跡は調査区内に散在するが、特にＡ～Ｂ－３区に集中を見せている。縄文時代後期の住居跡が調査区北側の縁辺部で検出されていることから、このピット集中区に住居跡があった可能性もある。しかし、積極的に住居跡と認定する証左はなかった。

第18表　ピット計測表（１）

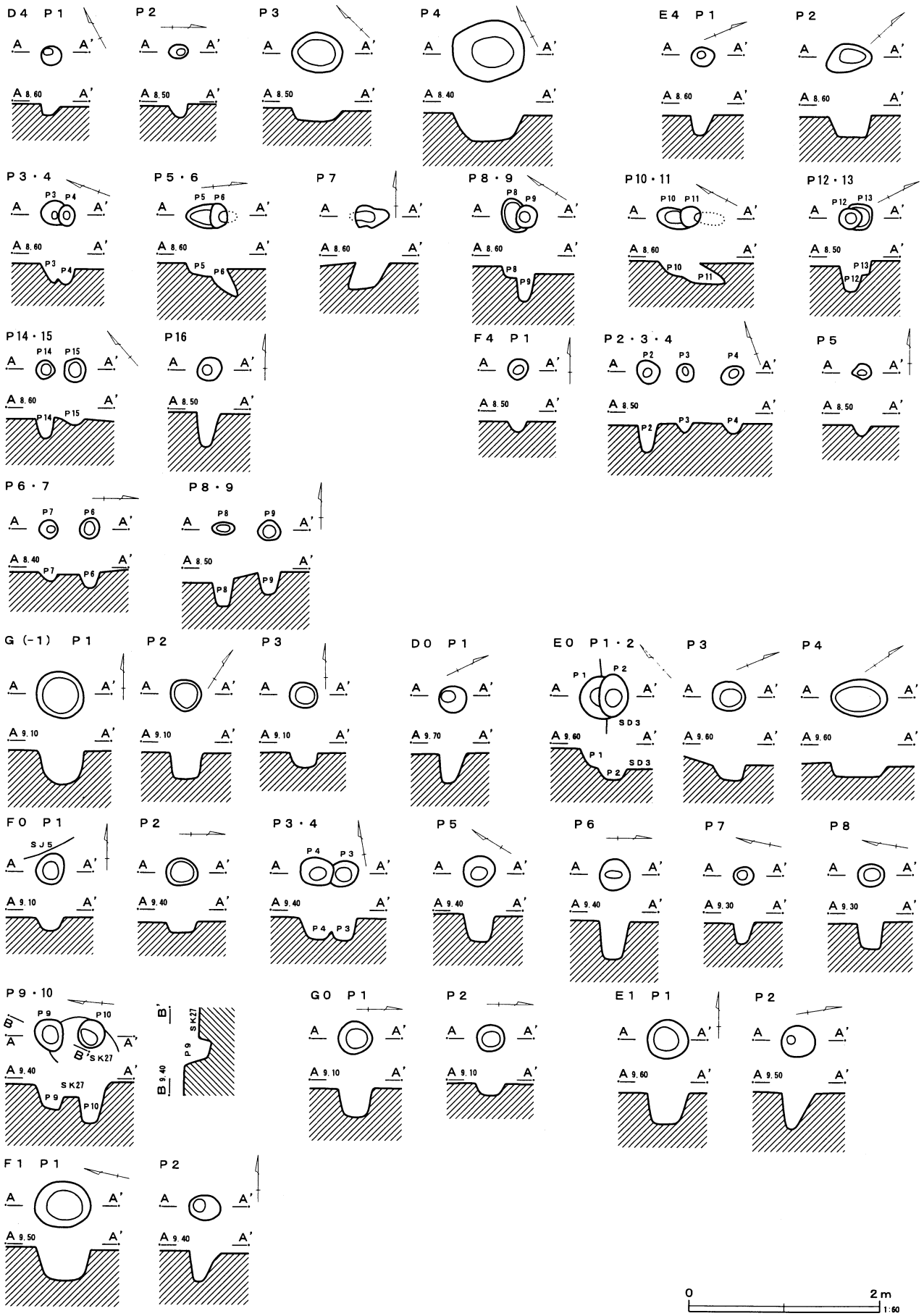
グリッド	遺構番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
C-1	P 1	0.28	0.24	0.09
	P 2	0.11	0.08	0.13
B-2	P 1	0.40	0.36	0.28
	P 2	0.26	0.22	0.17
	P 3	0.34	0.28	0.12
	P 4	0.28	0.18	0.10
	P 5	0.34	0.24	0.23
	P 6	0.30	0.29	0.21
	P 7	0.38	0.34	0.17
	P 8	0.43	0.27	0.08
	P 9	0.30	0.26	0.20
C-2	P 1	0.20	0.18	0.04
	P 2	0.38	0.37	0.14
	P 3	0.20	0.19	0.14
	P 4	0.24	0.22	0.16
	P 5	0.38	0.24	0.28
	P 6	0.45	0.33	0.12
	P 7	0.30	0.26	0.10
	P 8	0.33	0.26	0.18
	P 9	0.26	0.22	0.28
	P10	0.18	0.18	0.21
D-2	P 1	0.24	0.19	0.08
	P 2	0.19	0.18	0.07
	P 3	0.22	0.20	0.12
	P 4	0.34	0.25	0.33
	P 5	0.43	(0.22)	0.03
	P 6	0.40	0.34	0.08
A-3	P 1	0.24	0.23	0.19
	P 2	0.20	0.20	0.08
	P 3	0.24	0.18	0.21
	P 4	0.16	0.15	0.16
	P 5	0.18	0.16	0.33
	P 6	0.24	0.22	0.26
	P 7	0.25	0.24	0.14
A-3	P 8	0.23	0.20	0.06
	P 9	0.30	0.29	0.10
	P10	0.25	0.19	0.16
B-3	P 1	0.21	0.20	0.32
	P 2	0.16	0.14	0.11
	P 3	0.21	0.15	0.13
	P 4	0.18	0.18	0.35
	P 5	0.20	0.16	0.14
	P 6	0.28	0.24	0.25
	P 7	0.25	0.24	0.25
	P 8	0.22	0.20	0.34
	P 9	0.24	0.22	0.12
	P10	0.36	0.30	0.35
	P11	0.26	0.22	0.22
	P12	0.26	0.26	0.25
	P13	0.16	0.14	0.17
	P14	0.26	0.18	0.15
	P15	0.18	0.17	0.16
	P16	(0.16)	0.12	0.11
	P17	0.16	0.16	0.16
	P18	0.16	0.14	0.18
	P19	0.22	0.18	0.30
	P20	0.24	0.20	0.43
	P21	0.35	0.28	0.37
	P22	0.25	0.14	0.31
	P23	(0.13)	0.14	0.52
	P24	0.26	0.22	0.29
	P25	0.30	0.19	0.13
	P26	0.30	0.26	0.28
	P27	0.35	0.19	0.36
	P28	0.22	0.18	0.13
	P29	0.20	0.18	0.28
	P30	0.28	0.22	0.20
	P31	0.22	0.19	0.12


C1 P1
P2
B2 P1
P2
P3・4
P5
P6・7
P8
P9
C2 P1
P2
P3・4
P5・6
P7
P8
P9・10
D2 P1
P2
P3
P4・5
P6
A3 P1
P2
P3
P4
P5
P6・7
P8
P9
P10
B3 P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9・10
P11
P12・13
P14
P15・16
P17
0
2m
1:60

第59図　ピット（1）


B3 P18・19
P20
P21
P22・23
P24
P25・26
P27
P28
P29
P30
P31
P32
P33
P34
P35・36
P37
P38・39・40
P41・42
P43
P44・45
P46
P47・48
P49・50
P51・52
C3 P1
P2・3
P4・5
P6・7
P8・9
D3 P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8・9
P10・11・12・13
SD2
0
2m
1:60

第60図　ピット（2）


D4 P1
P2
P3
P4
E4 P1
P2
P3・4
P5・6
P7
P8・9
P10・11
P12・13
P14・15
P16
F4 P1
P2・3・4
P5
P6・7
P8・9
G(-1) P1
P2
P3
D0 P1
E0 P1・2
P3
P4
F0 P1
P2
P3・4
P5
P6
P7
P8
P9・10
G0 P1
P2
E1 P1
P2
F1 P1
P2
0
2m
1:60

第61図　ピット（3）

第19表　ピット計測表(2)

グリッド	遺構番号	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)
B-3	P32	0.22	0.16	0.24
	P33	0.26	0.20	0.30
	P34	0.18	0.16	0.13
	P35	0.20	0.16	0.09
	P36	0.22	0.19	0.14
	P37	0.47	0.32	0.39
	P38	0.19	0.18	0.27
	P39	0.18	0.16	0.32
	P40	0.30	(0.29)	0.21
	P41	0.15	0.12	0.22
	P42	0.23	0.14	0.14
	P43	0.48	0.34	0.23
	P44	0.21	0.19	0.33
	P45	0.18	0.16	0.24
	P46	0.20	0.19	0.10
	P47	0.18	0.12	0.12
	P48	0.38	0.31	0.16
	P49	0.33	0.21	0.21
	P50	0.32	0.21	0.15
	P51	0.34	0.30	0.24
	P52	(0.28)	0.21	0.20
C-3	P1	0.31	0.25	0.24
	P2	0.58	0.44	0.12
	P3	0.30	0.19	0.36
	P4	0.19	0.12	0.15
	P5	0.16	0.10	0.20
	P6	0.52	0.44	0.24
	P7	0.21	0.18	0.33
	P8	(0.30)	0.23	0.17
	P9	0.20	0.18	0.19
D-3	P1	0.54	0.51	0.18
	P2	0.38	0.32	0.20
	P3	0.25	0.22	0.24
	P4	0.28	0.24	0.23
	P5	0.20	0.18	0.43
	P6	0.26	0.20	0.42
	P7	0.18	0.16	0.28
	P8	0.12	0.12	0.12
	P9	0.18	0.16	0.11
	P10	0.52	0.33	0.24
	P11	0.49	0.41	0.36
	P12	0.66	(0.30)	0.11
	P13	0.54	(0.26)	0.30
D-4	P1	0.22	0.20	0.12
	P2	0.20	0.15	0.13
	P3	0.53	0.42	0.14
	P4	0.74	0.64	0.30
E-4	P1	0.25	0.20	0.22

グリッド	遺構番号	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)
E-4	P2	0.44	0.30	0.24
	P3	0.25	(0.18)	0.18
	P4	0.22	0.18	0.18
	P5	0.25	0.18	0.30
	P6	(0.26)	0.25	0.14
	P7	0.34	(0.21)	0.28
	P8	0.36	(0.18)	0.12
	P9	0.24	0.22	0.30
	P10	(0.24)	0.20	0.15
	P11	0.22	0.21	0.22
	P12	0.24	0.23	0.26
	P13	0.29	(0.13)	0.14
	P14	0.24	0.22	0.06
	P15	0.20	0.20	0.21
	P16	0.26	0.24	0.36
F-4	P1	0.22	0.20	0.12
	P2	0.26	0.22	0.29
	P3	0.18	0.18	0.11
	P4	0.25	0.18	0.11
	P5	0.20	0.17	0.11
	P6	0.23	0.21	0.16
	P7	0.20	0.19	0.10
	P8	0.24	0.13	0.28
	P9	0.24	0.21	0.23
G-(-1)	P1	0.52	0.48	0.37
	P2	0.33	0.32	0.28
	P3	0.30	0.25	0.16
D-0	P1	0.29	0.28	0.31
E-0	P1	0.45	(0.21)	0.21
	P2	0.45	0.31	0.32
	P3	0.35	0.31	0.16
	P4	0.58	0.40	0.13
F-0	P1	0.33	0.28	0.15
	P2	0.32	0.28	0.12
	P3	(0.32)	0.26	0.23
	P4	0.35	0.29	0.23
	P5	0.33	0.30	0.29
	P6	0.33	0.32	0.41
	P7	0.22	0.18	0.22
	P8	0.28	0.24	0.28
	P9	0.34	0.29	0.28
	P10	0.29	0.28	0.42
G-0	P1	0.36	0.35	0.29
	P2	0.29	0.27	0.13
E-1	P1	0.43	0.41	0.33
	P2	0.36	0.33	0.38
F-1	P1	0.58	0.48	0.34
	P2	0.32	0.26	0.32

9　グリッド出土遺物

（1）縄文土器

九宮２遺跡の第１次調査から第３次調査において、グリッドから出土した縄文土器は後期前葉の土器群を中心としながら、早期から晩期までの土器群を含んでいる。ここではそれらを時期ごとに分類し、主体となる後期前葉の土器群については、器形及び縄文施文の有無により系統別に分類して配列した。

第Ⅰ群土器

早期の土器群を一括する。

第１類（第62図１～12）

早期初頭の撚糸文系土器群を一括する。１～３は口唇部文様帯と口縁部文様帯を持つ井草Ⅰ式に比定され、１は肥厚口唇部が外傾し、口唇部に単節ＬＲとＲＬを２段横位施文し、羽状を構成する。２は若干肥厚する口唇部がやや外反し、口唇外端部に単節ＬＲを１段、口唇内端部にＲＬとＬＲを２段横位施文し羽状を構成する。口縁部にはＲＬを細かく横位施文する。３は無肥厚の口唇部が緩く外反し、口唇外端部に無節Ｌ、内端部Ｒをそれぞれ１段横位施文する。口縁部には無節Ｒを細かく横位施文する。２・３は口唇部形態や縄文施文手法等の特徴から同時期のものと思われるが、典型的な井草式とは異なり、細かな位置付けが難しい。井草Ⅰ式でも新しい段階のものと思われるが、口縁部の縄文の在り方や、無肥厚口唇部などから古く位置付けられる可能性も残される。

４は夏島式に比定され、角頭状口縁部が若干内湾しながら外折する器形を呈し、外折部分に指頭状圧痕が残る。原体は比較的大粒の単節ＲＬを浅く施文し、口唇部は縄文施文後、平滑にナデ整形を施す。夏島式の古段階に比定されよう。

５～11は撚糸文系土器の胴部破片で、12は底部付近の破片である。５～10は単節ＲＬを施文し、11・12は撚糸文を施文するもので、11は細かな撚糸Ｌ、12は比較的粗い撚糸Ｒを施文する。縄文施文の特徴などから、５～９、11は井草式、10・12は夏島式に比定されるものと思われる。

第２類（第62図13・14）

早期後葉の条痕文系土器群を一括する。13は角頭状の口縁部が緩く立つ器形を呈し、内外面に浅い条痕を施文する。14は内外面に縦位の条痕を施文する胴部破片で、外面の条痕は短く繋ぐように施文する。胎土等から、条痕文系土器群前半期に位置付けられるものと思われる。

第Ⅱ群土器

前期の土器群を一括する。

第１類（第62図15・16）

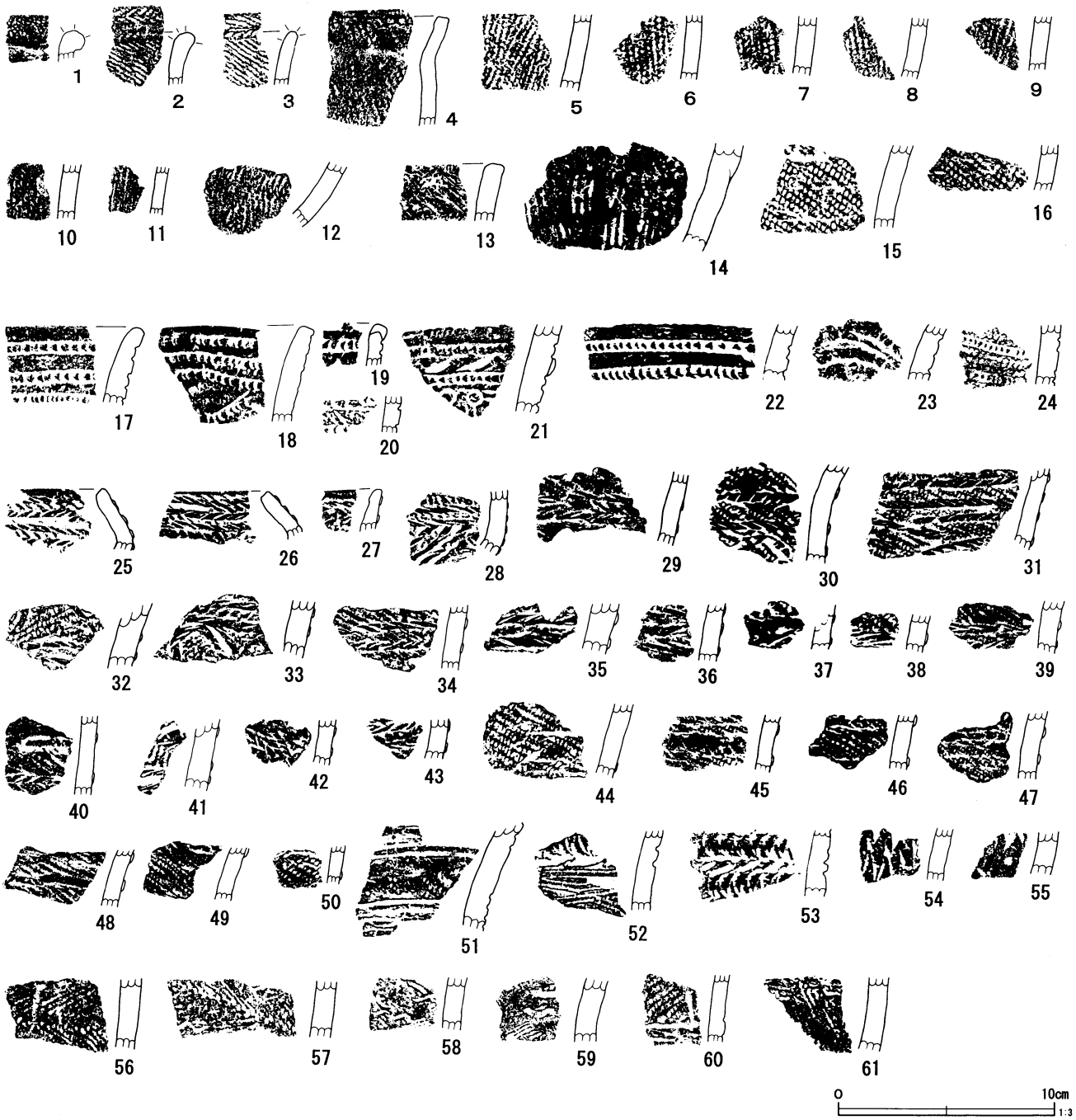
前期中葉の繊維土器である黒浜式土器を一括する。15・16とも繊維を多く含み、単節ＲＬを横位施文する。両者とも裏面整形を丁寧に施している。

第２類（第62図17～51）

前期後葉の無繊維土器である諸磯ｂ式土器を一括する。

a）17～24は諸磯ｂ式古段階の爪形文土器である。17～19は口縁部に２～３条の爪形文を施文して区画し、18は口縁部に菱形状のモチーフを描いている。19は口唇部に小突起を施す。20～24は胴部破片で、20・21は爪形文間の隆起部や隆帯に斜めの刻みを施す。22～24は爪形文を並行して施文するもので、24は地文に縄文を施文する。21・23はモチーフの交点等に円形竹管文を施している。概して、諸磯ｂ１式からｂ２式古段階に位置付けられよう。

b）25～50は諸磯ｂ式中段階から新段階にかけての浮線文土器である。25～27は口縁部破片で、25・26は内湾が強く27は直行口縁である。28～43は地文縄文上に浮線文を複数本施文し、段を違えて異方向の刻みを交互に施文する。33・42のように曲線的なモチーフを描くものもある。



第62図　グリッド出土土器（1）

44～50は並行施文する浮線上に、縄文を施文するものである。縄文施文のためか、浮線は低平なものが多い。

c）51は1点のみであるが、半截竹管による横位の平行沈線を施文する沈線文土器である。地文には単節ＲＬを浅く施文する。

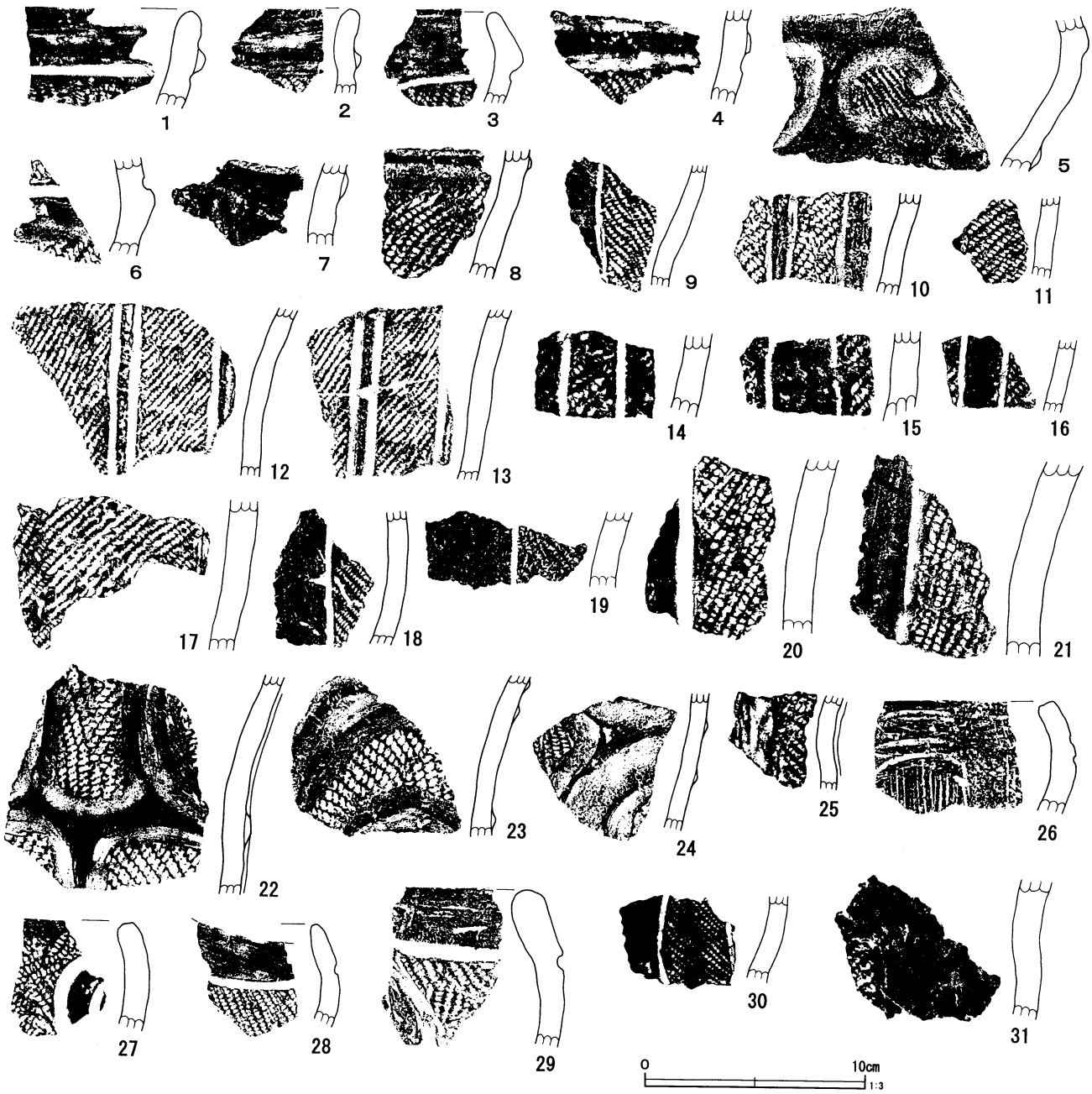
以上、これ等の土器群は、浮線や沈線を多段に平行施文することを特徴とし、口縁部の内湾が強いことから、諸磯ｂ２式でも新しい段階か、ｂ３式にかけての位置付けが可能となろう。

第３類（第62図52～55）

東関東系の浮島式系土器群を一括する。

a）52・53は幅広の連続爪形文を施文する浮島式土器で、52は棕櫚状の爪形文で区画し、平行沈線で菱形状モチーフを施文する。53は棕櫚状の爪形文間に斜位の刻みを施すもので、第２類ａの諸磯ｂ式古段階の土器群に伴うものと思われる。

b）54無肋の貝殻腹縁のロッキング文を、横位帯



第63図　グリッド出土土器（２）

状に施文するもので、第２類ｂ種の諸磯ｂ式新段階に伴うものと思われる。

第４類（第62図56～61）

前期終末から中期初頭にかけての縄文施文土器を一括する。56・57は結束羽状縄文を施文するもので、58・59・61は原体末端を結節した綾繰縄文を施文する。60は低隆帯で胴部を区画し、沈線が垂下する。いずれの破片も細砂と小礫を多く含み、雲母を少量含み、前期終末の特徴的な様相を呈している。

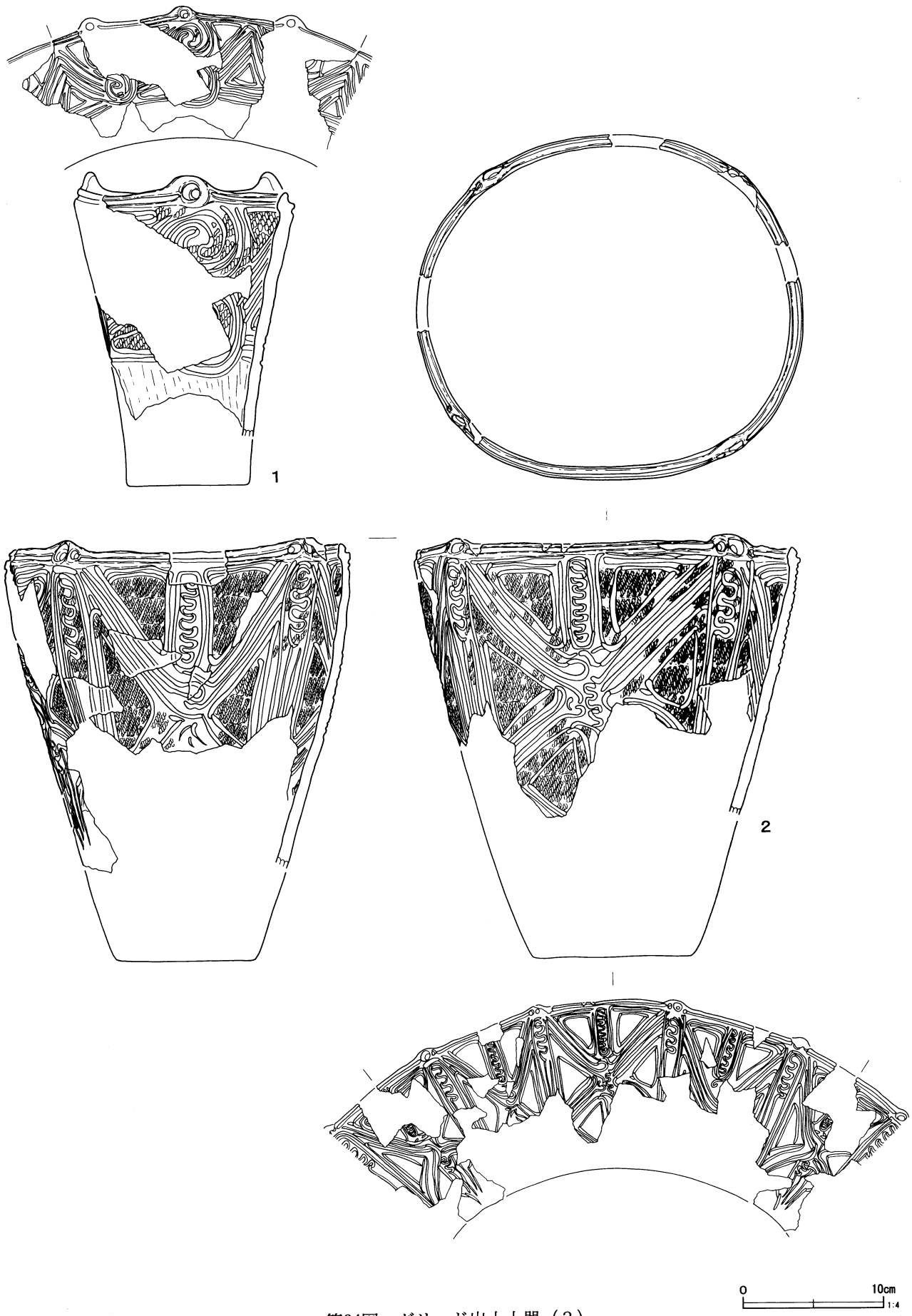
第Ⅲ群土器

中期の土器群を一括する。

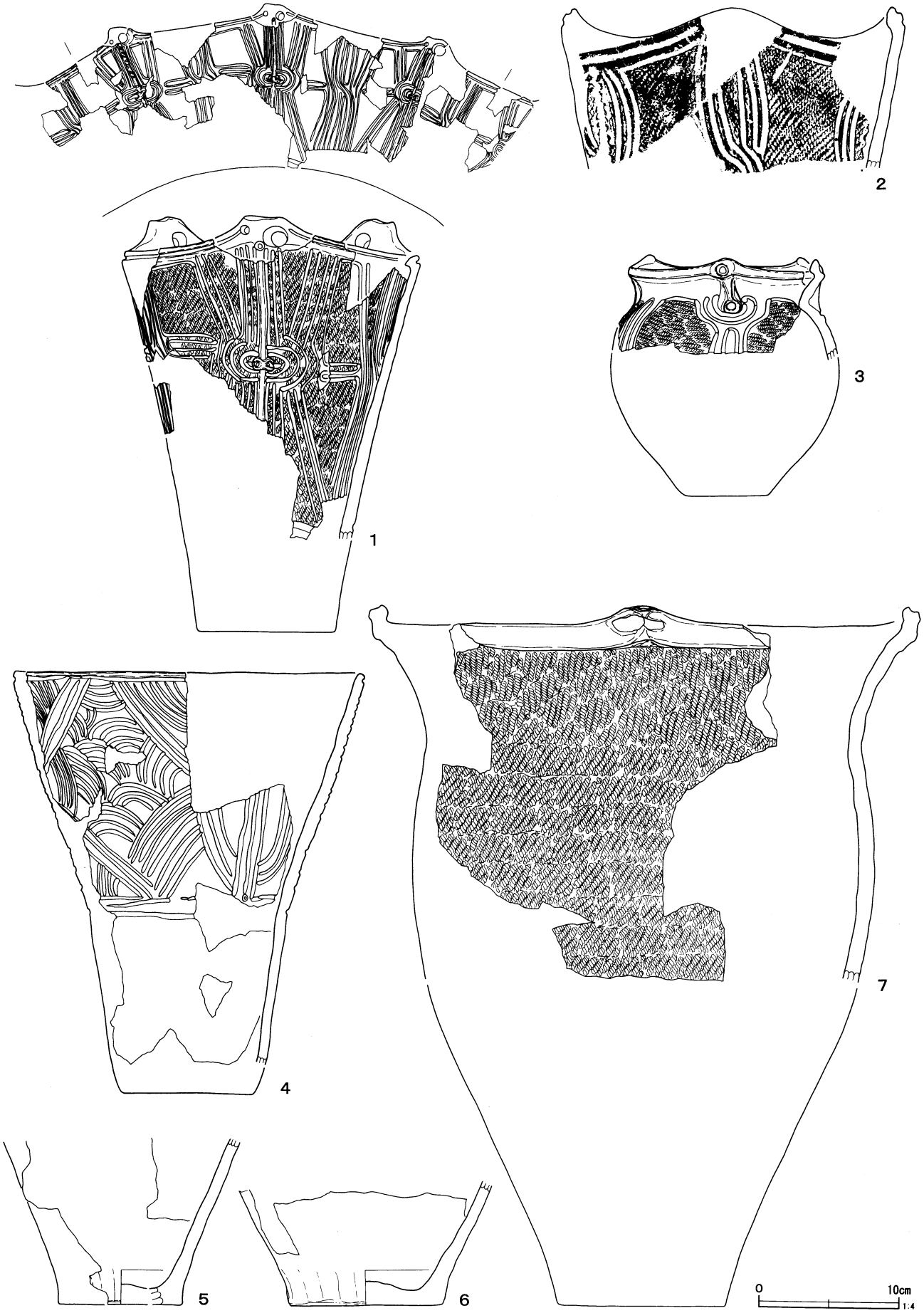
第１類（第62図１～27・28）

中期後葉の加曽利ＥⅢ式土器を一括する。

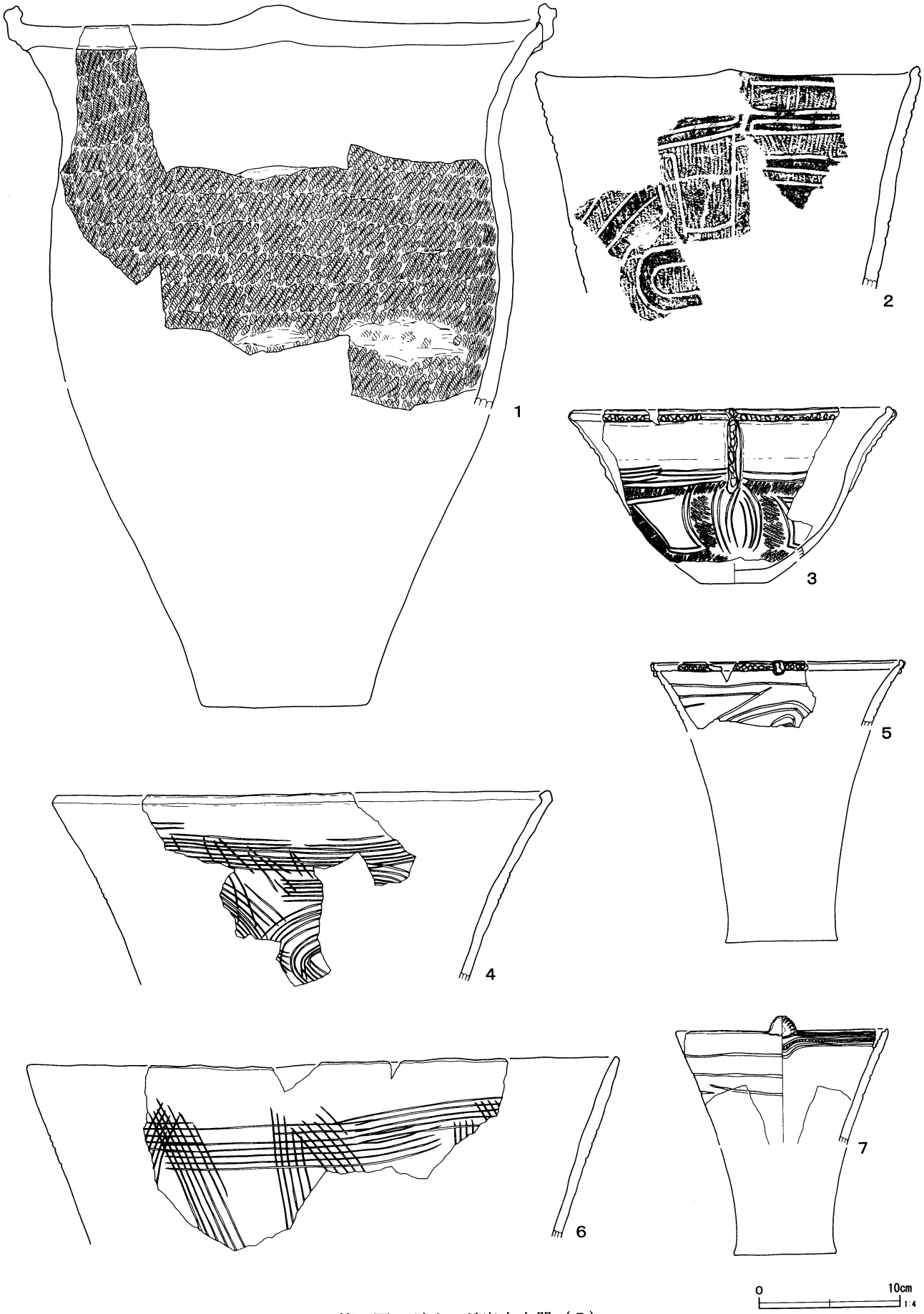
口縁部文様帯と胴部文様帯を構成するキャリパー系土器群で、１～３は口縁部破片、４～６は口縁部付近の破片、７～21は胴部破片である。



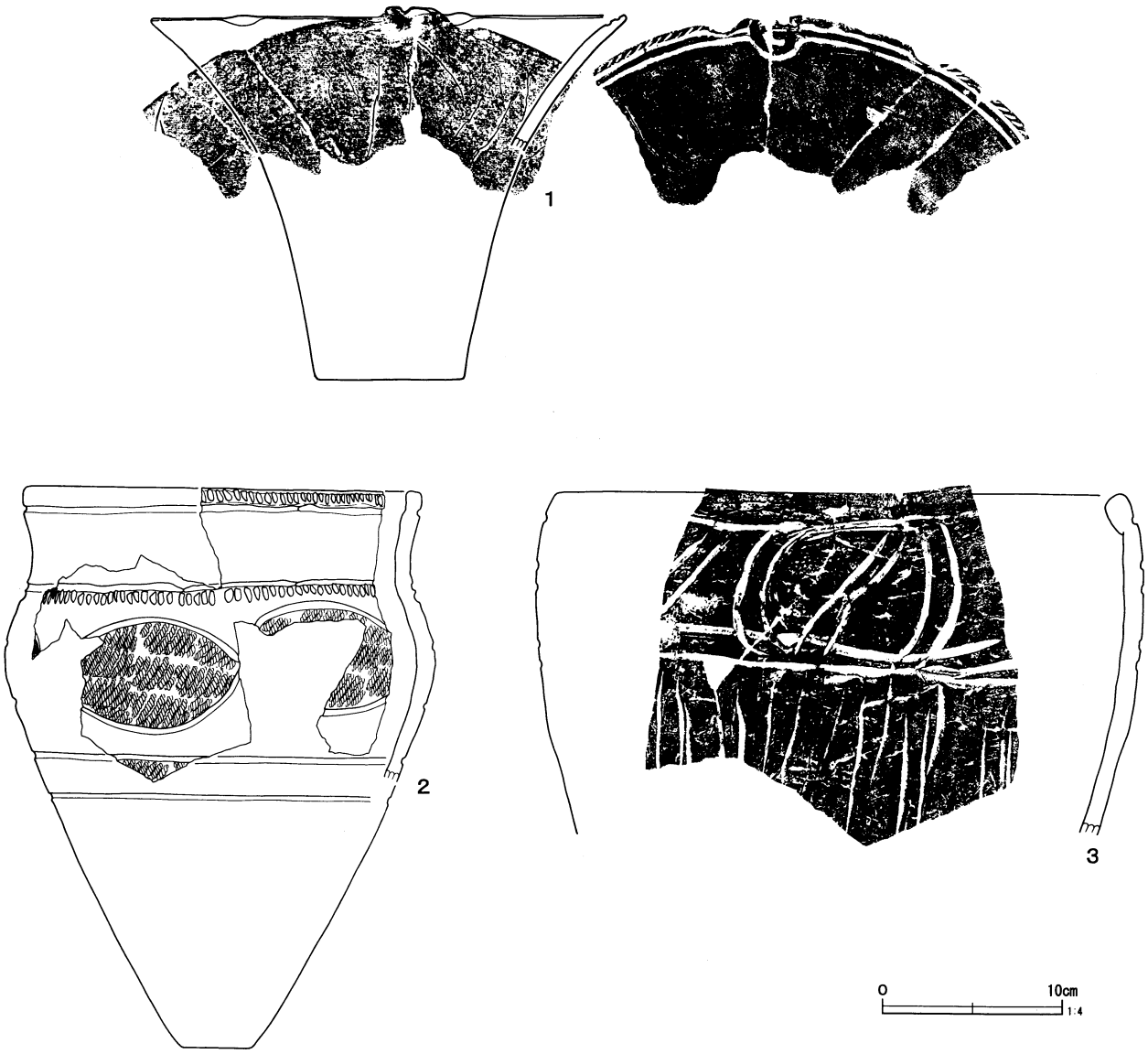
第64図　グリッド出土土器（3）



第65図　グリッド出土土器（4）



第66図　グリッド出土土器（5）



第67図　グリッド出土土器（6）

１は口縁部の湾曲が緩く、２は口唇部がやや外反し、３は内湾が強い器形を呈する。１・２は口縁部上端を隆帯で区画し、３は口唇部と一体となった突帯状の隆起部で区画する。４・５は口唇部を欠損するが口縁部を低隆帯で区画し、楕円状区画や渦巻文を低隆帯で施文する。

胴部破片は全て磨消懸垂文を施文するもので、磨消懸垂文の幅が狭いもの（12・13）と比較的広いもの（14～21）がある。地文は９・18・19が単節ＬＲで、他はＲＬを縦位に充填施文する。

ｂ）胴部に隆帯の渦巻文を基調としたモチーフを展開する土器群で、口縁部文様帯を持つものもあるが、本遺跡では口縁部の破片は出土していない。22～24は断面が三角形状の隆起線２本が対になってモチーフを描くものである。地文は24が単節ＬＲ、他は単節ＲＬを充填施文する。描出隆帯は、強いナゾリが施されて隆起線状を呈する。

ｃ）26・27は口縁部文様帯を持たないキャリパー形の深鉢土器で、吉井城山類と呼ばれる土器群である。26は内湾する口縁部に平行沈線で逆Ｕ字状の懸垂文を施文し、地文に縦位の条線を施文する。27は口縁部に磨消縄文で渦巻文、もしくは波状文を施文する構成と思われる。地文は口縁部に単節ＬＲを１段横位施文し、以下モチーフ間に縦位に

充填施文する。

第２類（第63図25・28～31）

中期終末の加曽利ＥⅣ式土器を一括する。

ａ）胴部の括れるキャリパー形の深鉢形土器で、磨消縄文でモチーフを描く土器群である。28・29は内湾する口縁部を沈線で区画し、29は磨消縄文で抱球文状のモチーフを描くものと思われる。地文は単節ＲＬである。30・31は胴部破片で、磨消縄文モチーフや懸垂文を施文する。30は単節ＬＲ、31はＲＬを施文する。

ｂ）25は隆起線でモチーフを描く、瓢形土器である。胴部で強く括れ、胴部を貫いて２本の隆起線が垂下する。地文は単節ＬＲである。

第Ⅳ群土器

後期初頭の称名寺式系土器群を一括する。

第１類（第68図１～34）

磨消縄文でモチーフを描く土器群を一括する。１～10は口縁部破片で、１～７は口縁部が大きく内湾し、口唇内端部が突出するものが多く、胴部が強く括れる器形を呈する。８～10は括れが緩い器形で、口縁部が緩く開く器形を呈する。２・５・７は緩い波状縁を呈する。７は磨消縄文の区画文内に、円形竹管文を縦列に施文する。充填縄文は単節ＬＲが主体を占め、８のみ無節Ｌの可能性がある。

11～34は胴部破片で、磨消縄文によるＪ字状モチーフを施文するものもあるが、大半は懸垂部に相当する破片である。33・34は区画内の縄文地文上に、列点文を施文する。縄文は11・30・32が単節ＲＬ、12・15・17・20・23～27・31～34がＬＲ、13・14・18・19・21・22・28・29が無節Ｌである。

第１類に分類した土器群は称名寺式系の縄文施文系ではあるが、口縁部の形態やモチーフの崩れ、懸垂状のモチーフ構成が多いこと、列点文と併施文されることなどから、称名寺式の終末の様相を呈するものが多く含まれるものと思われる。

第２類（第68図35～42、第69図１）

区画内に条線文を充填施文する土器群を一括する。第69図１は波状口縁の把手部分の破片で、把手内面には中央に盲孔を穿ち、沈線を縁に沿って施文する。モチーフの区画内には、条線を施文する。35は緩い波状を呈する口縁部破片で、口唇部内端が突出し、胴部で括れる器形を呈する。胴部破片では、充填条線文を曲線状や、レンズ状に施文する部分がある。

型式学的な特徴が第１類と類似することから、時期的にも並行するものと判断される。

第３類（第69図１～52、第70図１～39）

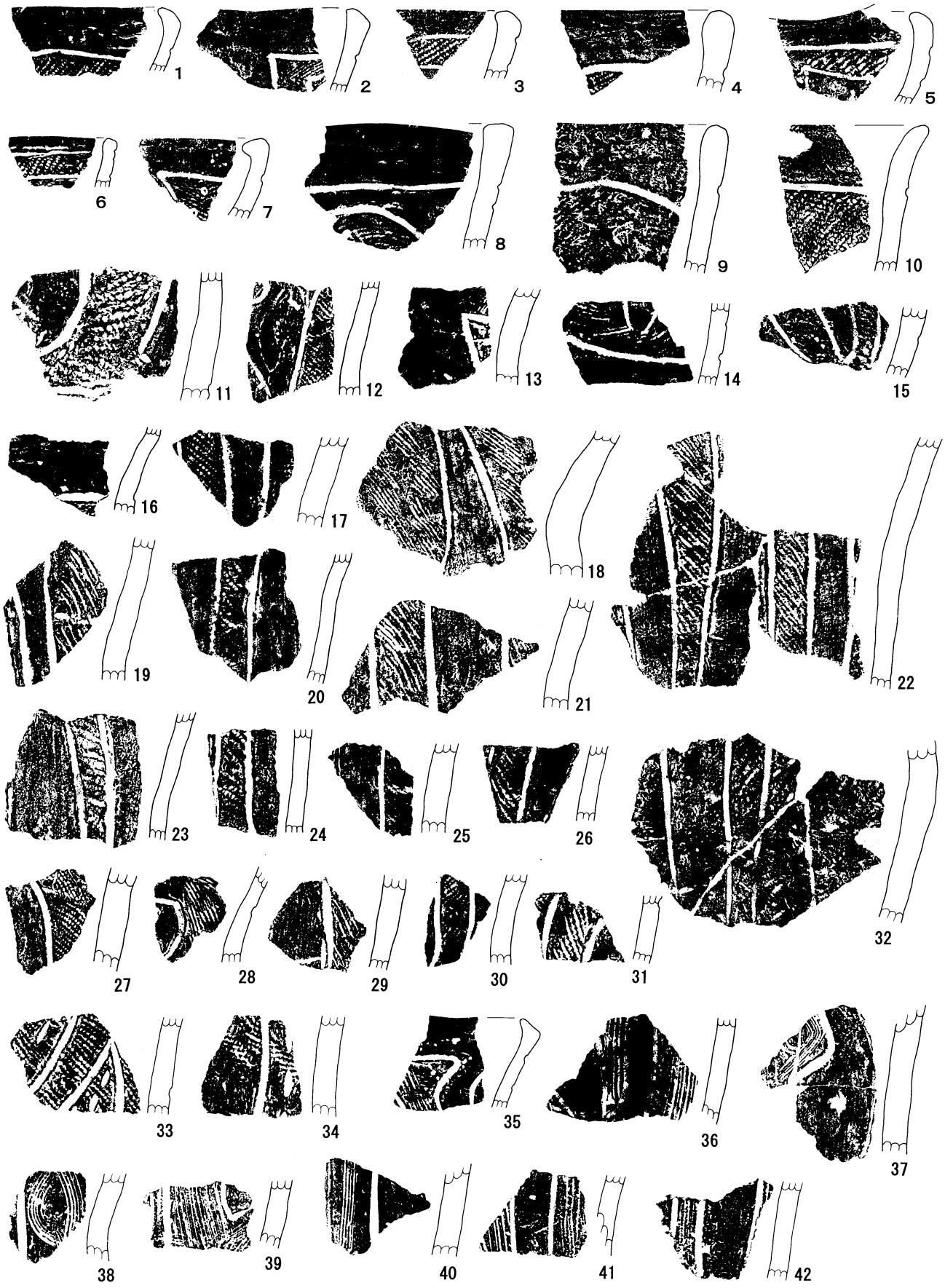
区画内に列点文を施す列点文系、または無文系の土器群を一括する。

胴部で括れる器形と、直線的な器形の深鉢形土器がある。胴部が括れる器形では、波状縁と、平縁がある。２～４・９は波状の大きな把手が付く波状縁で、４は環状の把手が付く。７・８・12は緩い波状縁を呈し、口唇部内端が突出するものが多い。５・６・10・11・13・14は平縁、口縁部が内湾して開く器形を呈する。

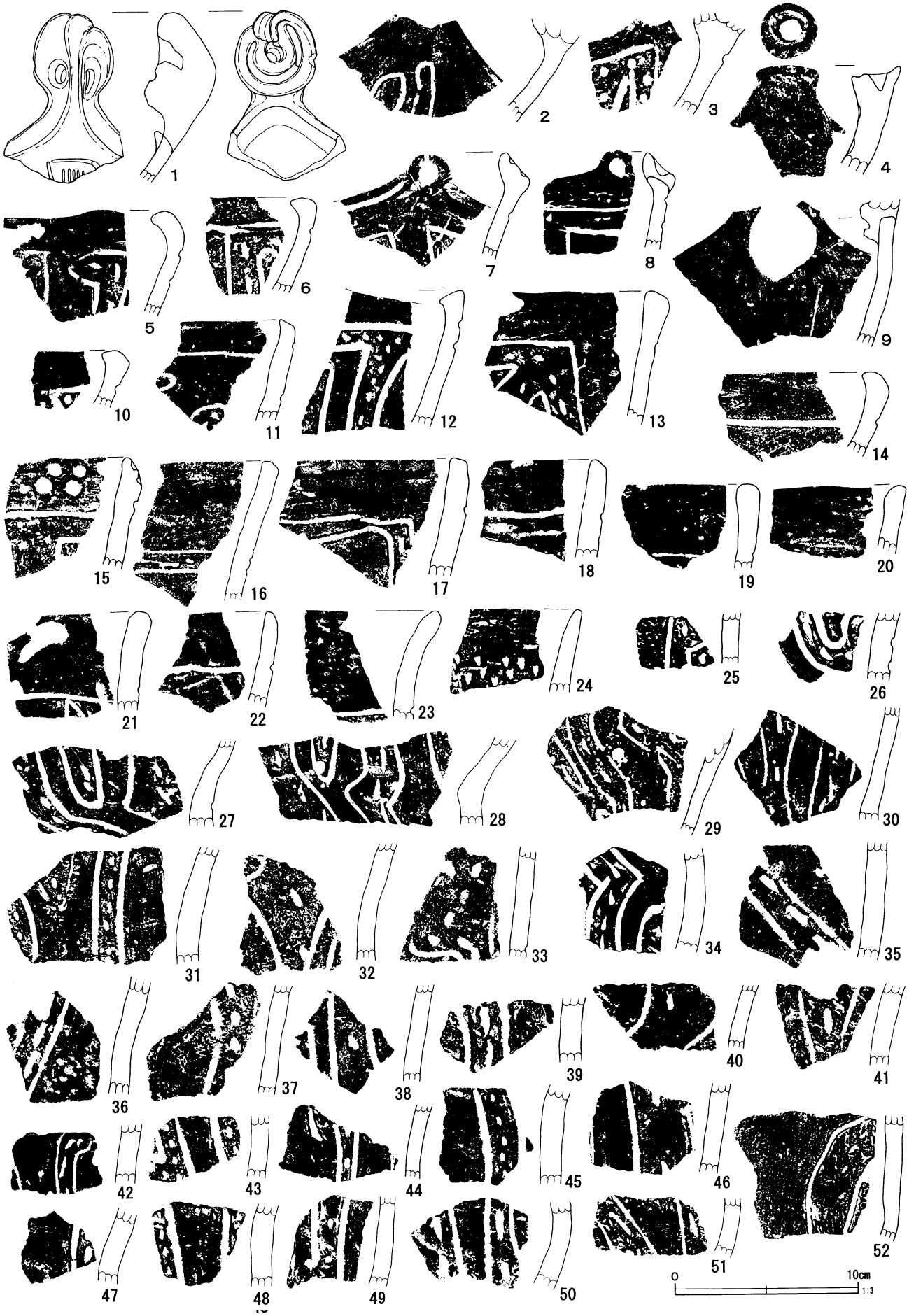
15～24は胴部でやや括れるが、口縁部が直線的に、もしくは外反しながら開く器形を呈し、口縁部を沈線で区画するものが多い。15はやや肥厚する口縁部に円形刺突文を4箇所に施文し、21・23は口縁部が外反する。24は先細り状の口縁部が直線的に立ち、口縁部の区画線が無く、刺突文を全面に施文する。

胴部のモチーフは入り組みのＪ字状モチーフが、胴上半部から下半部にかけて、流れながらずれる構成を採るものが多い（27～34）。モチーフは比較的幅狭の平行沈線で描かれ、25～52には１列の列点文を充填施文する。

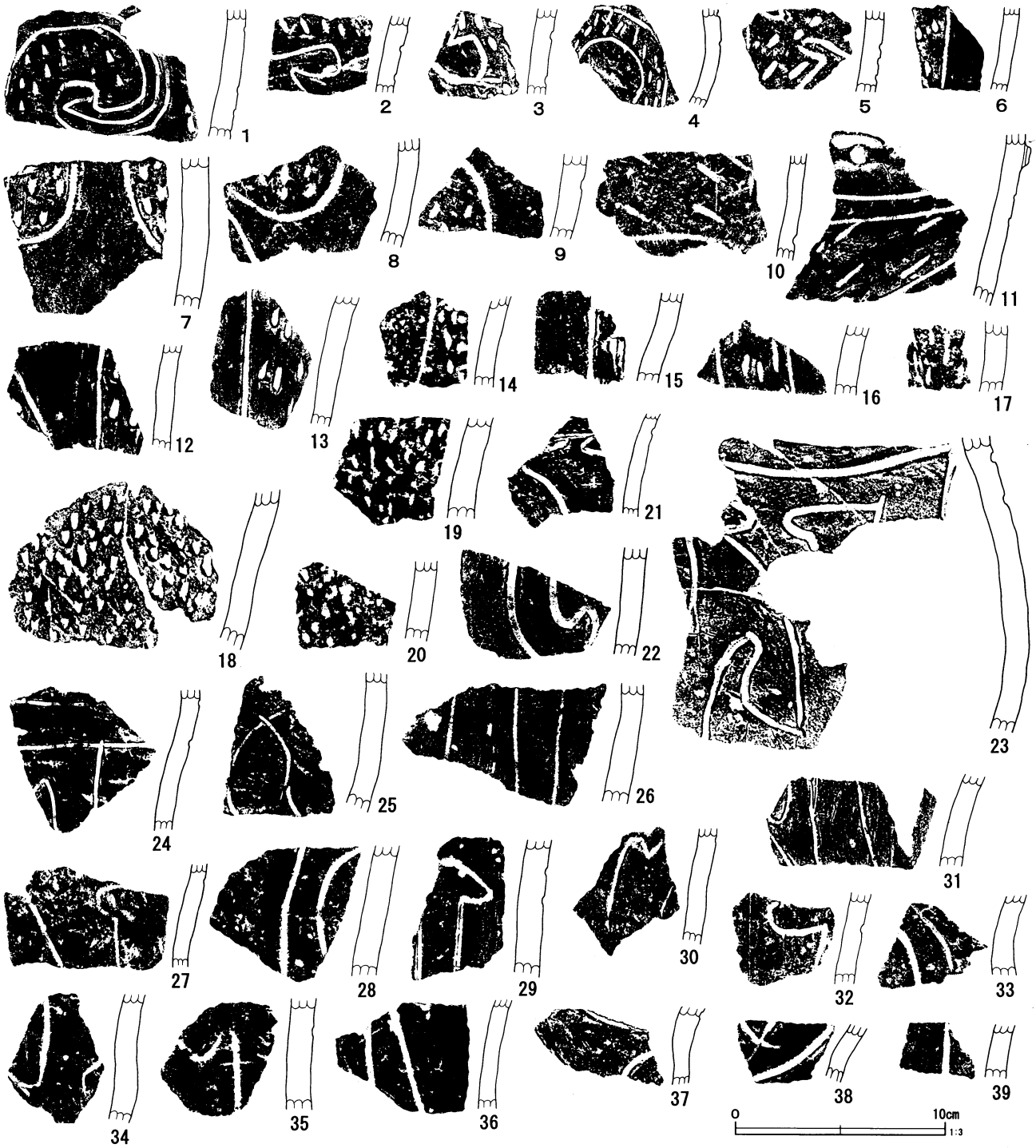
第70図１～４は渦巻文状のモチーフを描くもので、複列の列点文を充填する。５～17はモチーフ内に複列の列点文を施文し、18～19は全面に刺突



第68図　グリッド出土土器（７）



第69図　グリッド出土土器（8）



第70図　グリッド出土土器（９）

文を施す構成となる。

23～39は沈線でモチーフを施文し、何も充填施文しない無文系の土器群である。23は頸部で大きく括れ、胴部が膨れる器形を呈する。スペード状文やそれに連なるＪ字文やＲ字状文を描く。他の胴部破片もＲ字状文を主体としたモチーフを描いている。

第１類～第３類の土器群は、傾向として第１類から第３類にかけて新しくなる編年が考えられているが、本遺跡ではそれぞれの土器群が大きくオーバーラップして存在していたものと考えられ、大半が称名寺Ⅱ式の終末期の土器群を構成していたものと想定される。また、各類には堀之内式の初頭に位置付けられる土器群も含まれており、系統的に分類した所以ともなっている。

第Ⅴ群土器

後期前葉の堀之内式土器を一括する。堀之内式土器は西関東の称名寺式の系統を引く土器群と、東関東の綱取式の系統を引く土器群で組成されており、ここではそれぞれの土器群を縄文施文の有無及び器形の系統性などを加味して分類した。大きくは縄文施文のA群と縄文を施文しないB群とに分類し、さらに器形や施文の系統性で類別した。

A群土器

地文に縄文を施文する深鉢土器群を一括する。

第1類（第71図1～43、第72図1～14）

胴部で緩く括れ、口縁部が肥厚して緩く内湾気味に開く器形の深鉢で、口縁部に隆帯と沈線状の凹線を廻らせ、二重口唇状を呈するものを一括する。口縁部は突起を中心として、緩い波状を呈するものが多い。地文縄文上に、各種の沈線懸垂文を施文するものである。

第1種（第71図1～37）

地文縄文上に、比較的太い単沈線、もしくは2～3本の沈線を対にして懸垂文状のモチーフを施文するものである。

a）蕨手状懸垂文を施文するものである（1～11）。いずれも口縁の小突起を基点として緩い波状口縁を呈し、突起下の対の盲孔や、口唇上の盲孔を繋ぐように凹線状の沈線を廻らす。8は口縁部の隆帯に刻みを施し、9は口縁部に2本の沈線を廻らし、幅狭の口縁部文様帯を構成している。10は突起状の波頂部に2対の盲孔と、中央部に1個の穿孔を穿っている。蕨手状懸垂文は、1～2本沈線の放物線状の囲いを持つもの（1～3・7・9）と、蛇行沈線状に施文するもの（4～6・8・10・11）がある。地文は全て単節LRの横位施文であるが、11は複節LRLが口縁部付近に縦位施文されている。

b）折り返し状や箱状及び直線状の懸垂文を施文するものである（12～29・33・36）。12・13は肥厚する口唇部が平坦状を呈し、胴部に折り返す沈線懸垂文を垂下する。13は懸垂文の一部が、蛇行沈線状を呈する。15～17は箱状の懸垂文を垂下するもので、15は口縁部に盲孔を伴う大きな円形浮文と端部が連結する2本の沈線文を廻らし、口縁部文様帯を構成する。7は箱状懸垂文と2本懸垂文が融合している。直線的な懸垂文を垂下するものは2～3本の沈線を対にしており、口縁部の波頂部から垂下するもの（18～24）が多い。また、やや斜位に垂下するもの（26・28）もあり、破片外で他のモチーフと組み合わさることも考えられる。波頂部に施文される盲孔は3個のもの（19・25）や上下対に4個施文するもの（21）もある。また、29は口縁部に盲孔の伴う円形浮文を施文しており、27は口縁部隆帯に刻みを施している。地文縄文は基本的には単節LRの横位施文であるが、15はLRを縦位施文する。

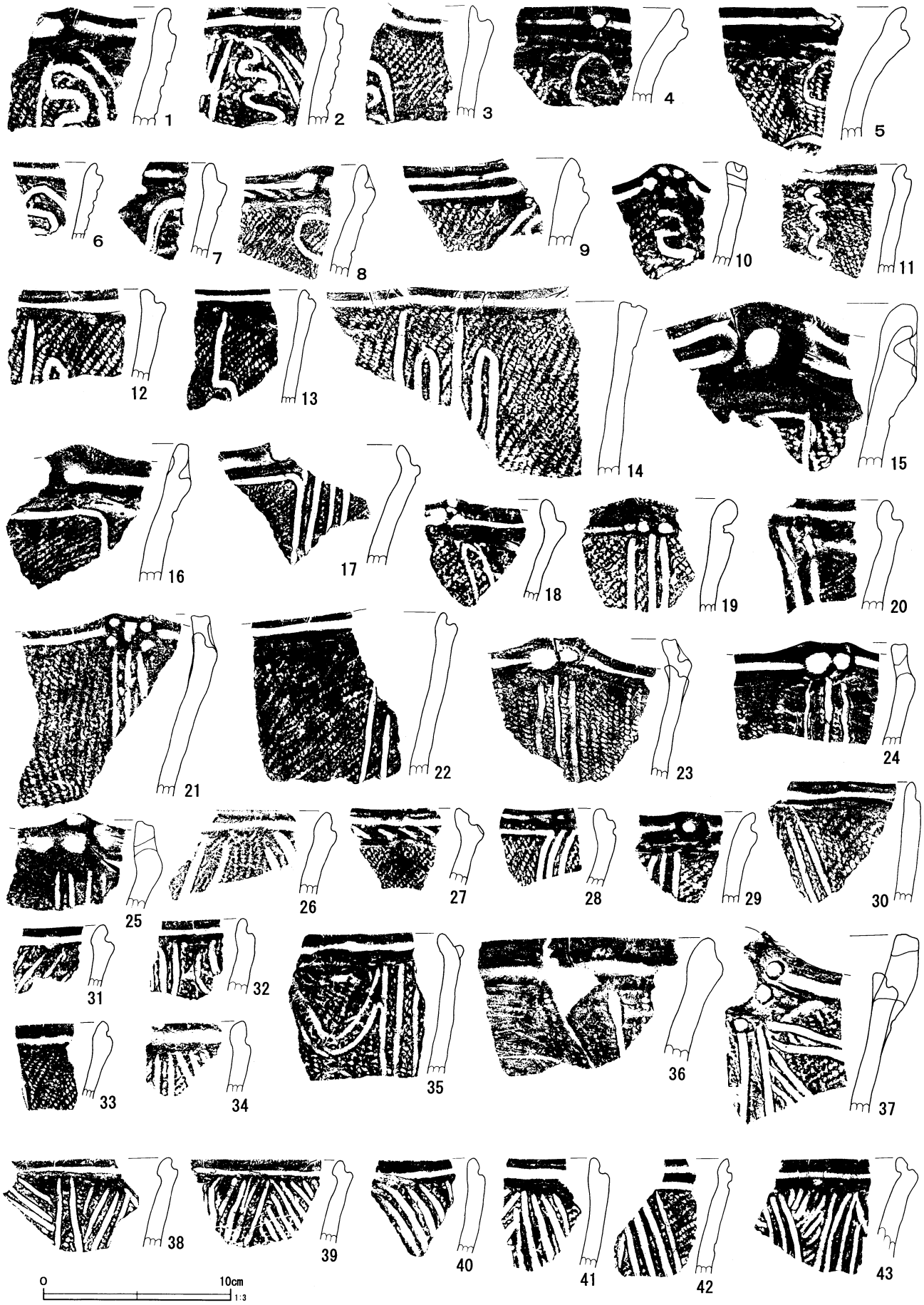
c）縦位の懸垂文と斜位やU字状などの沈線文を組み合わせたモチーフを施文するものである（30～32・34・35・37）。30～32・34は2本沈線で肋骨文状の懸垂文を施文し、35は3本沈線懸垂文と2本沈線U字状文とが組み合う。37は波頂部に大きな穿孔に沿って盲孔が廻り、2本沈線で口縁部文様帯が区画される。胴部は2本沈線懸垂文に3本斜行沈線が組み合うモチーフ構成である。地文はいずれも単節LRの横位施文である。

第2種（第64図1・2、第65図1、第66図2、第71図38～43、第72図1～14）

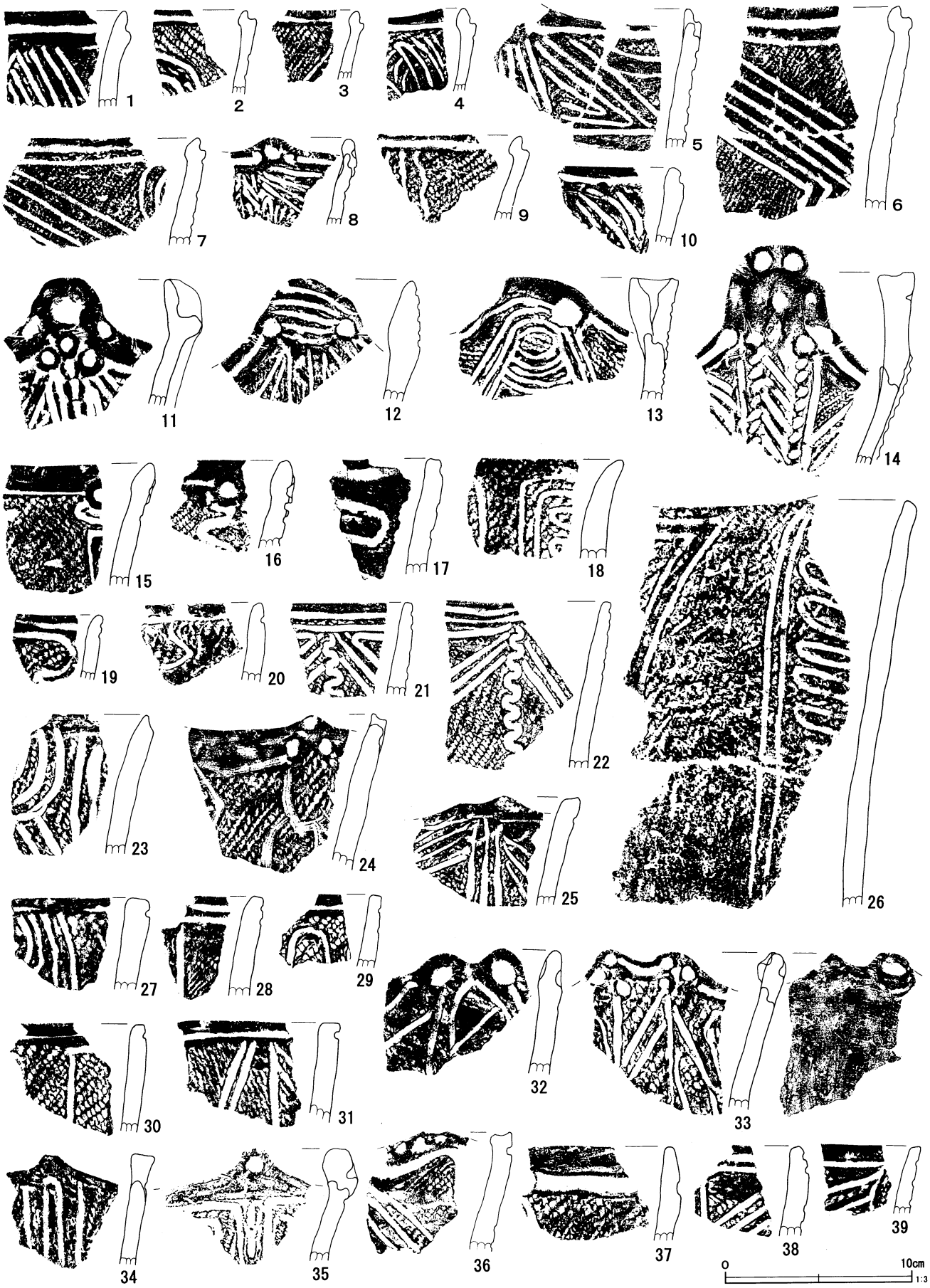
器形の特徴等は第1種の系譜下にあるが、概して器壁が薄く、直線的な括れの少ない器形へと変化し、描出線が多条になることを特徴とする。口縁部の肥厚が弱くなり、内端が突出するものや、細く外反するものが出現する。

a）多条の沈線文で、縦位及び斜位の懸垂文を組み合わせる構成のものである（第64図2、第65図1、第71図38～43）。

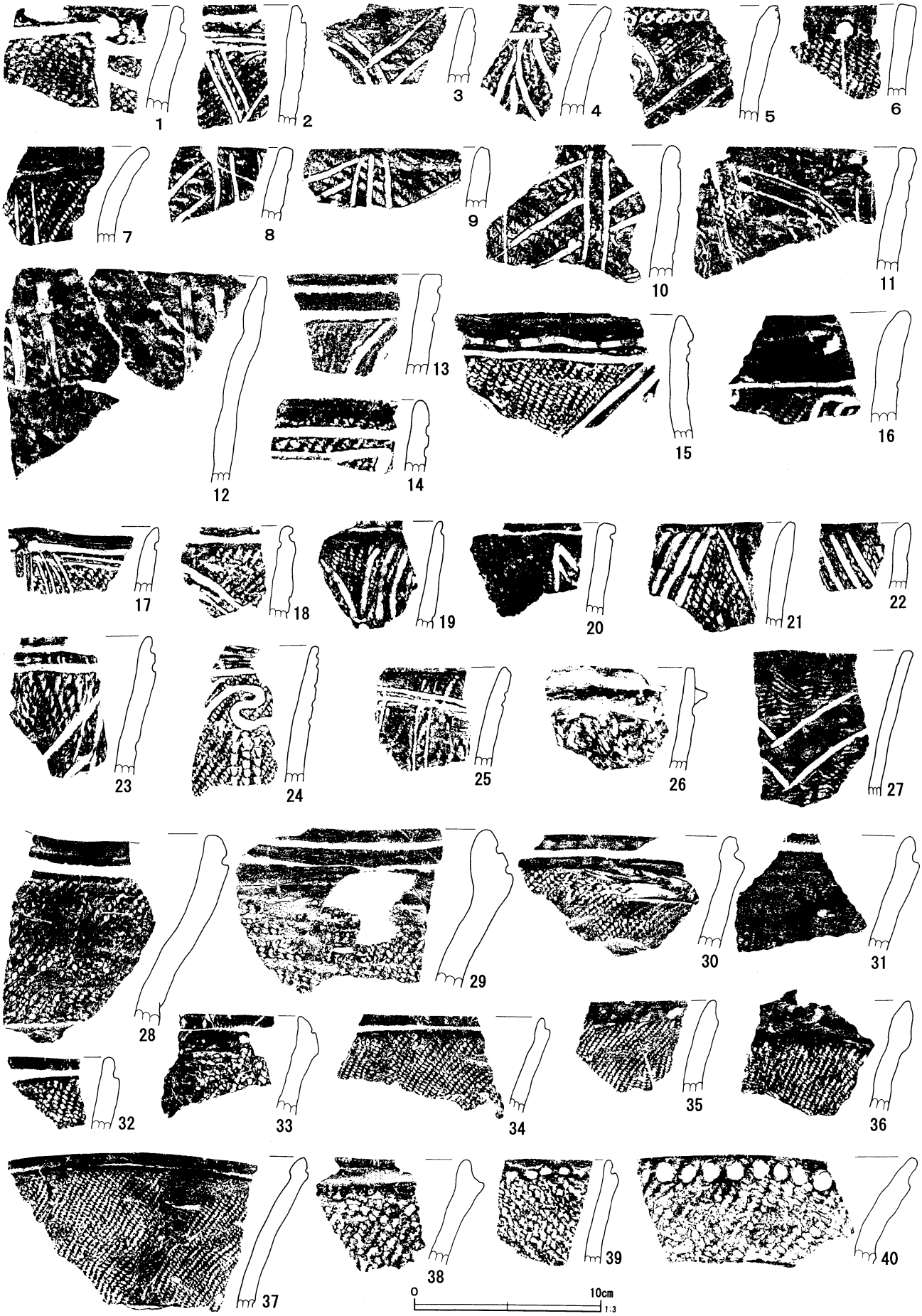
第64図2は典型例であり、胴下半を欠損するが、口縁部は全周が残る。器形は口縁部が隅丸長方形



第71図　グリッド出土土器（10）



第72図　グリッド出土土器（11）



第73図　グリッド出土土器（12）

を呈し、コーナーに当たる部分に小突起が４単位に付いている。口縁部が若干内湾気味に開く器形で、器高の低いバスケット形を呈するものと思われる。口縁部の肥厚は少なく、口唇部内端がやや突出し、内面に凹線状の窪みが廻っている。口縁部の小突起は、盲孔と穿孔の２つの穴を組み合わせて構成し、口唇上にはこの穴を繋ぐ沈線を廻らしている。胴部は短辺側と長辺側に分かれるが、同じモチーフ構成を４単位で繰り返している。モチーフは突起下に蕨手状懸垂文を配し、懸垂文間にＸ状の斜行沈線を配し、交点部分に枠取りを施す蛇行懸垂文を垂下する構成を採る。描線は２本単位の沈線を合わせることから４本沈線となるが、斜行沈線が交差する部分では２本沈線が結節もしくは入り組むなどの独自の構成を採る。地文縄文は単節ＬＲの横位施文である。口縁部の短径24.8㎝、長径27.6㎝、現存高24㎝を測る。

第65図１はやや外反気味に立ち上がるバケツ形を呈する深鉢で、口縁部の一部と底部付近を欠損する。口唇部内端の突出が強くなり、内面の窪みも沈線状に深くなる。口縁は緩い波状を呈し、非対称の山形把手が３単位に付く。把手には透かし状の大きな円孔と小さな盲孔を施し、それぞれを沈線で結ぶ。把手下に細い隆帯を垂下して器面を３単位に分割し、垂下隆帯の中央部で横型の８字状貼付文を施し、これを基点として左右に横長の楕円区画文を施す。また、この楕円区画文を横位に連結して、胴部の横位区画文とし、上下左右に放射状の斜沈線を組み合わせて米字状のモチーフを構成する。把手の間は米字状を変形させたｙ字状の懸垂文を垂下する。各モチーフは、多条の沈線で施文し、文様帯の下端部は太沈線で区画している。地文縄文は、細かな単節ＬＲの横位施文である。推定口径23.5㎝、現存高23㎝を測る。

38・39・43は口縁部内端が突出する傾向にあり、内面に凹線状の窪みが形成される。また、40～42は口唇部の肥厚が弱く、隆帯というよりも沈線を廻らせて口縁部を形成しているようであり、口唇部は薄く立つ傾向にある。多条沈線は縦位と斜位に組み合わされ、やや曲線を構成するものもある。

b）多条沈線で幾何学文、円形文、曲線文等を連結するモチーフを描くものである（第64図１、第65図２、第66図２、第72図１～10）。

第64図１は口縁部が外反気味に開くバケツ形の器形を呈し、口縁に３単位の突起が付く。突起は穿孔を中心とした耳状を呈し、沈線で連結される。胴部は突起下に上下に連結したＳ字状の渦巻文を３単位で配するものと思われ、突起間に三角状の区画文を配し、それぞれを連結させる構成を採るものと思われる。モチーフは多条沈線で描出する。地文縄文は単節ＬＲを粗く施文するもので、横位区画下には縦位のナデ整形を施す。推定口径16㎝、現存高19㎝を測る。

第65図２は内折する口縁部が緩やかな波状を呈し、直線的に開く器形を呈する。口縁部の約半分が現存し、口縁部には沈線を廻らす。３単位の波状を呈するものと思われ、波頂部下には上下で反転して垂下するＳ字状のモチーフ、波底部には盲孔を繋ぎ細かく蛇行する沈線を充填する紡錘文を交互に施文する。地文は単節ＬＲを横位施文する。推定口径23㎝、現存高11.5㎝を測る。

第66図２は口縁部の大形破片からの復元であるが、小突起を有する平縁で、直線的に開く器形を呈する。口縁部は内端が緩く突出し、裏面に緩い窪みを持つ。地文に単節ＬＲの縦走縄文を施文し、平行沈線及び磨消縄文で曲線と直線を組み合わせたモチーフを描いている。推定口径27.5㎝、現存高16㎝を測る。

第72図１・５・７・８・10は三角形状のモチーフを連結するもので、７は円形モチーフを斜行沈線で連結する。地文はいずれも単節ＬＲの横位施文である。

c）大きな波状把手を一括する（第72図11～14）。

11は大きな盲孔を取り囲む扇状の把手を呈し、両脇にそれぞれ盲孔を１個ずつ配する。把手下には盲孔を伴う円形浮文を基点として、連続刺突を施す隆帯を垂下し、隆帯の付け根部分にも左右に盲孔を伴う円形浮文を施文する。垂下隆帯脇には２本沈線を組で施文しており、さらに斜行する沈線を配する。地文は単節ＬＲを、粗く横位施文する。

12は把手部分が肥厚する非対称の山形を呈し、両裾に設ける盲孔を基点として横位の多条沈線を施文する。口縁部にはこの盲孔を結ぶ沈線を廻らせている。把手下に３本の懸垂文を垂下し、左右に開いた斜行沈線を施文する。地文は単節ＬＲを、粗く横位施文する。

13は非対称の筒形を呈する山形把手で、正面右裾に大きな盲孔を持つ。把手の上面形は円形の筒型を呈するが、裾の盲孔と連結したねじれたＳ字状を呈する。口縁部には沈線を廻らせ、把手下には３本沈線の囲いを施した変形蕨手状懸垂文を垂下する。地文は不明瞭であるが、複節ＲＬＲを横位施文する。

14は細長い台形状把手で、上面に２個、両裾にそれぞれ１個の盲孔を穿ち、把手下の２個の盲孔を基点として刻みを施す２本の隆帯が垂下する。隆帯間には集合の斜行沈線を充填施文し、外側には放射状の斜行沈線を施文する。地文は単節ＬＲの横位施文である。

第２類（第72図15～39、第73図１～27）

口縁部が肥厚せず、外反気味か直線的に開く器形の土器群で、地文縄文上に各種の懸垂文を施文するものを一括する。

第１種（第72図15～39、第73図１～16）

地文縄文上に、比較的太い単沈線、もしくは２～３本の沈線を対にして懸垂文状のモチーフを施文するものである。施文の特徴は、第１類第１種と同様である。

ａ）蕨手状のモチーフを垂下するものである（第72図15～20・26）。15・16は幅狭な口縁部無文帯下の盲孔付き円形浮文から蕨手状の蛇行沈線が垂下し、15は蛇行沈線下にスペード状文を垂下する。17・19・20は口縁部区画沈線から直接蛇行沈線が垂下する。18・26は２本沈線の囲いを持つ扁平幅狭な蛇行沈線を垂下するものである。地文全て単節ＬＲである。

ｂ）折り返し状・箱状・直線状の懸垂文を施文するものである（第72図28・30・34・35、第73図６・７・12・14）。第72図28、第73図６・７・12は直線の懸垂文を垂下するもので、28は口縁部の沈線から、６は口縁部の盲孔を基点に垂下する。12は内外面の整形が粗く、地文無節Ｒ上に角頭状工具で２本対の沈線を短く垂下する。

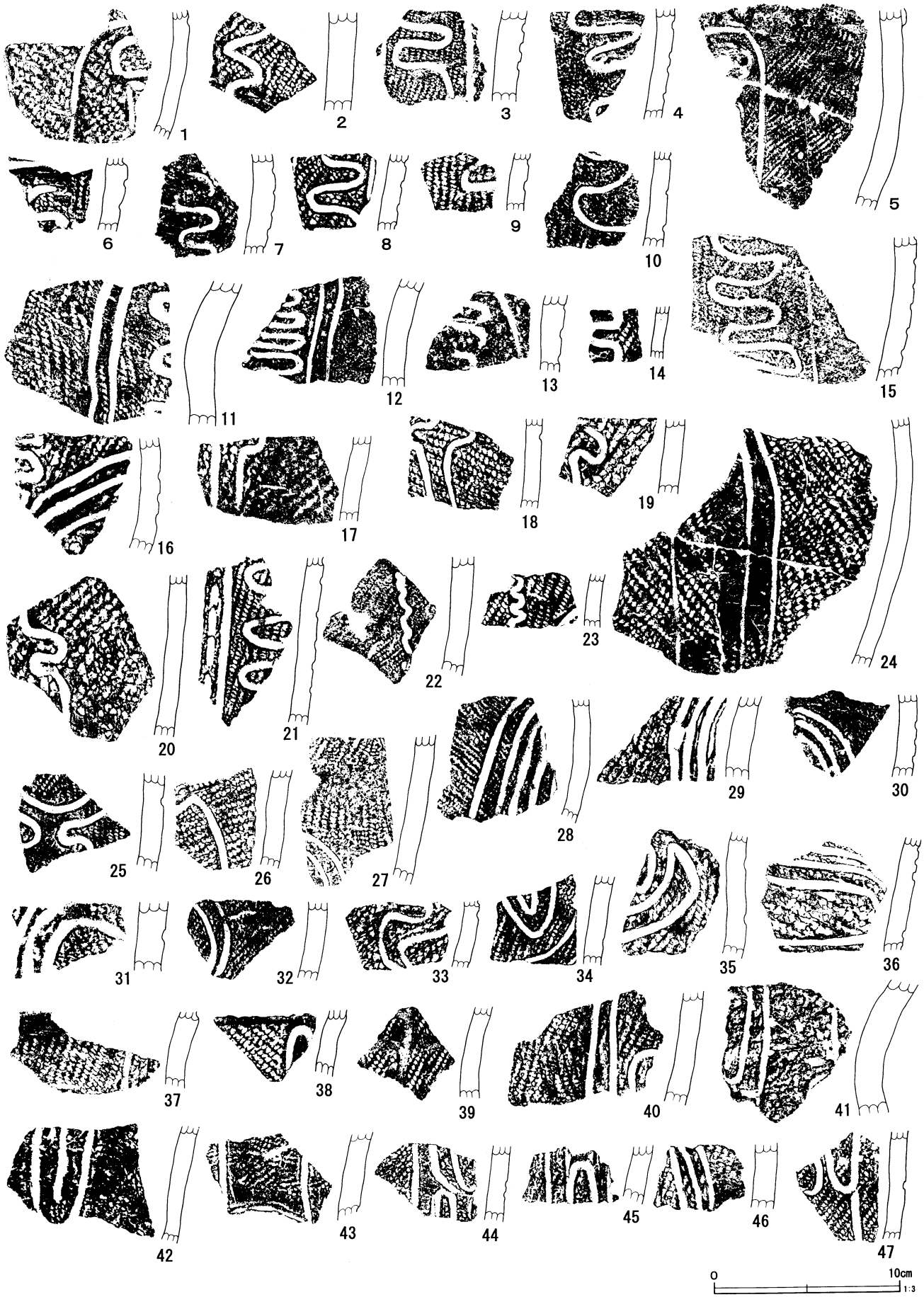
第72図30・35、第73図14は箱状の懸垂文を垂下するもので、35は列点を伴う箱状懸垂文間に蕨手状懸垂文が垂下する可能性がある。

第72図34は折り返し状の沈線懸垂文を垂下するもので、口縁部が山形の波状を呈する。地文はいずれも単節ＬＲの横位施文である。

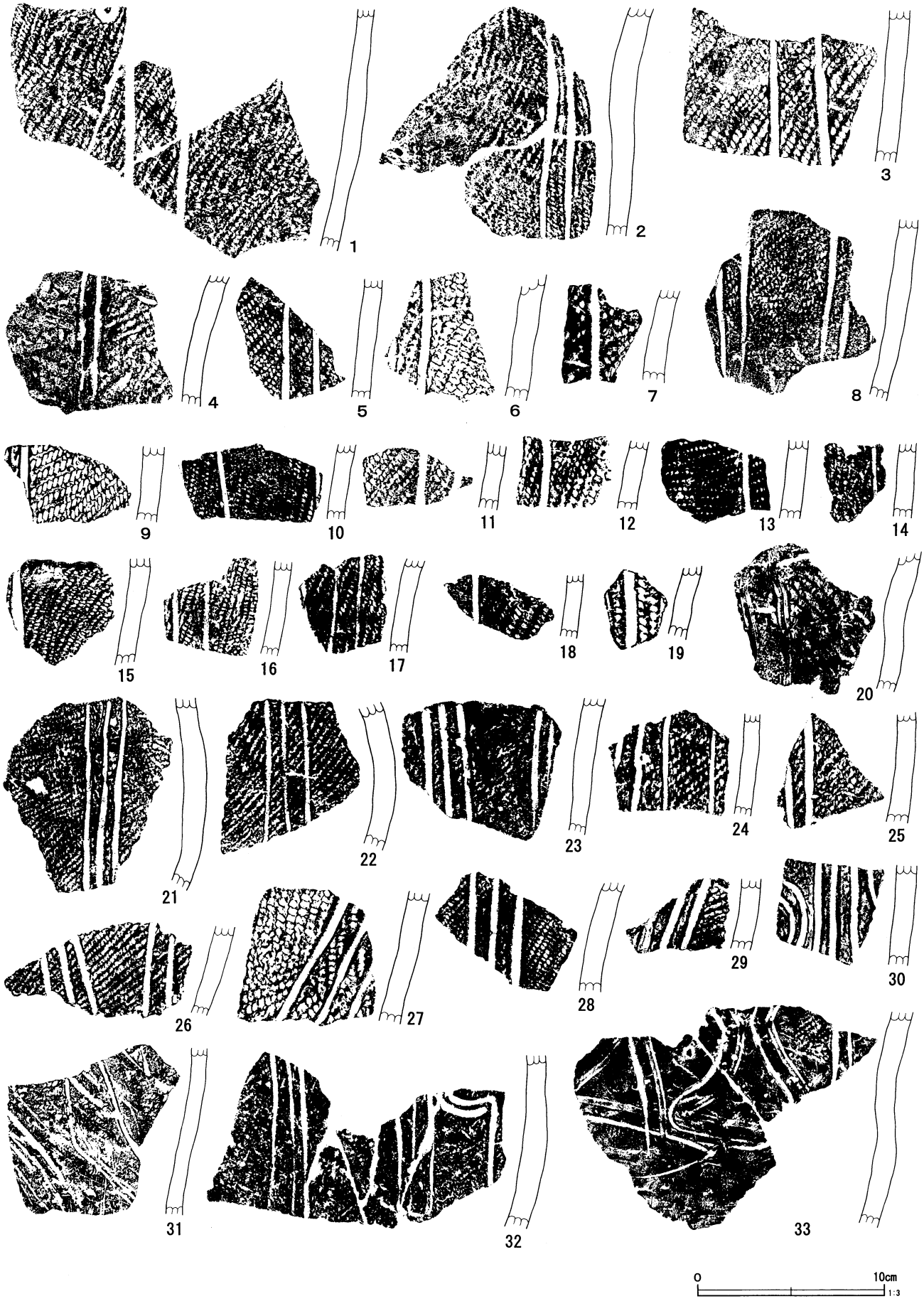
ｃ）縦位の懸垂文と斜位やＵ字状などの沈線文を組み合わせたモチーフを施文するものである（第72図21～25・27・29・31～33・36～39、第73図１～５・８～11・13・15・16）。

23・24・27は上下に対弧状の沈線懸垂文を垂下するもので、24は１本沈線、23は２本沈線で描く。第73図２～５は円形もしくは渦巻文状の曲線状モチーフと斜行沈線を連結するモチーフを描くもので、４は曲線モチーフから懸垂文が垂下する。第73図16は口縁部にやや幅広の無文帯を沈線で区画し、曲線状の懸垂文を垂下するものと思われる。

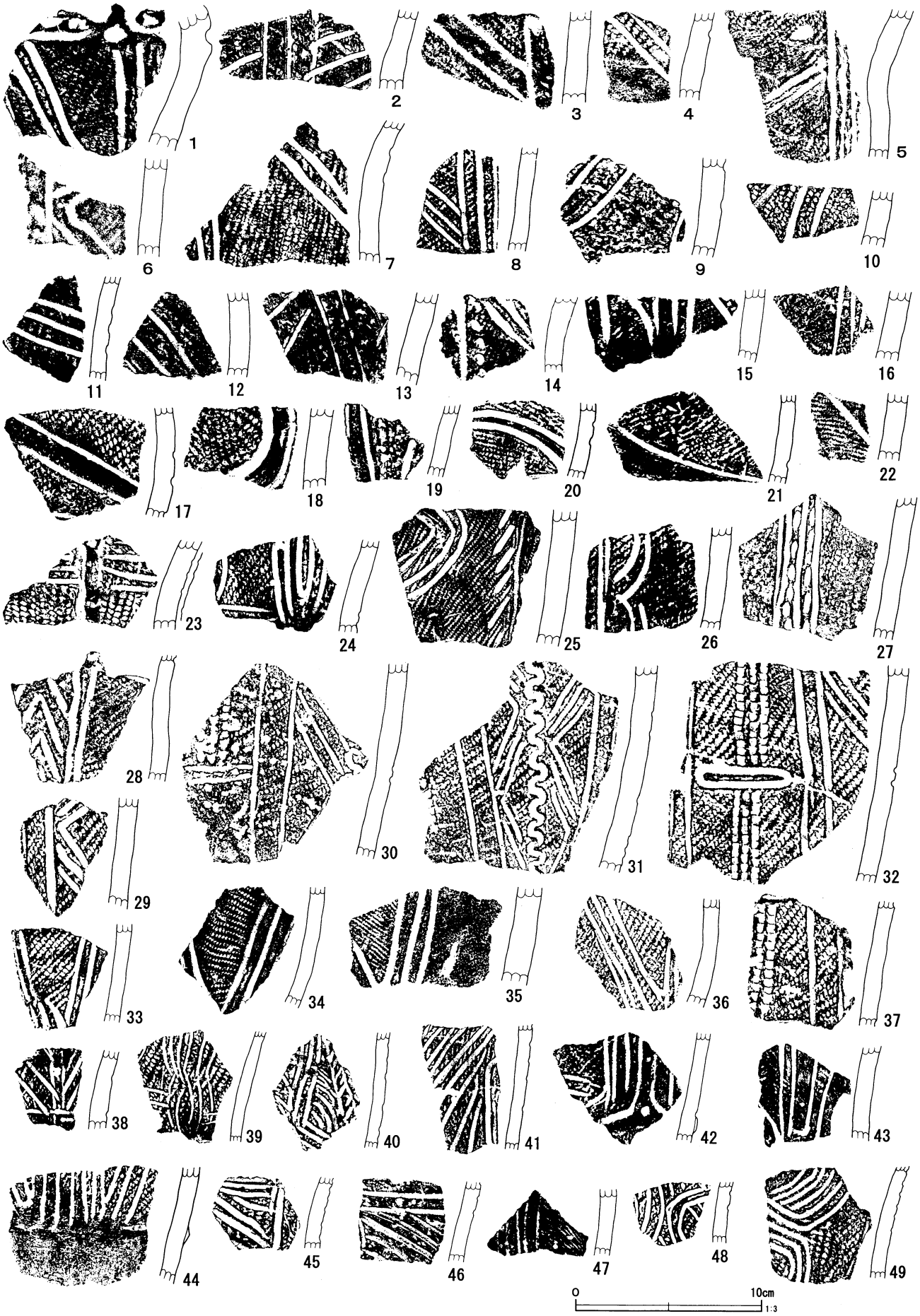
他は、垂下する懸垂文と、斜行沈線を組み合わせる肋骨文状のモチーフを描くものである。21・22は蛇行懸垂文を垂下し、他は直線の沈線懸垂文を垂下する。32・33は波状口縁の双頭の波頂部から懸垂文を垂下し、懸垂文間に斜行沈線を施文する。波頂部には盲孔が穿たれ、懸垂文はそれを基



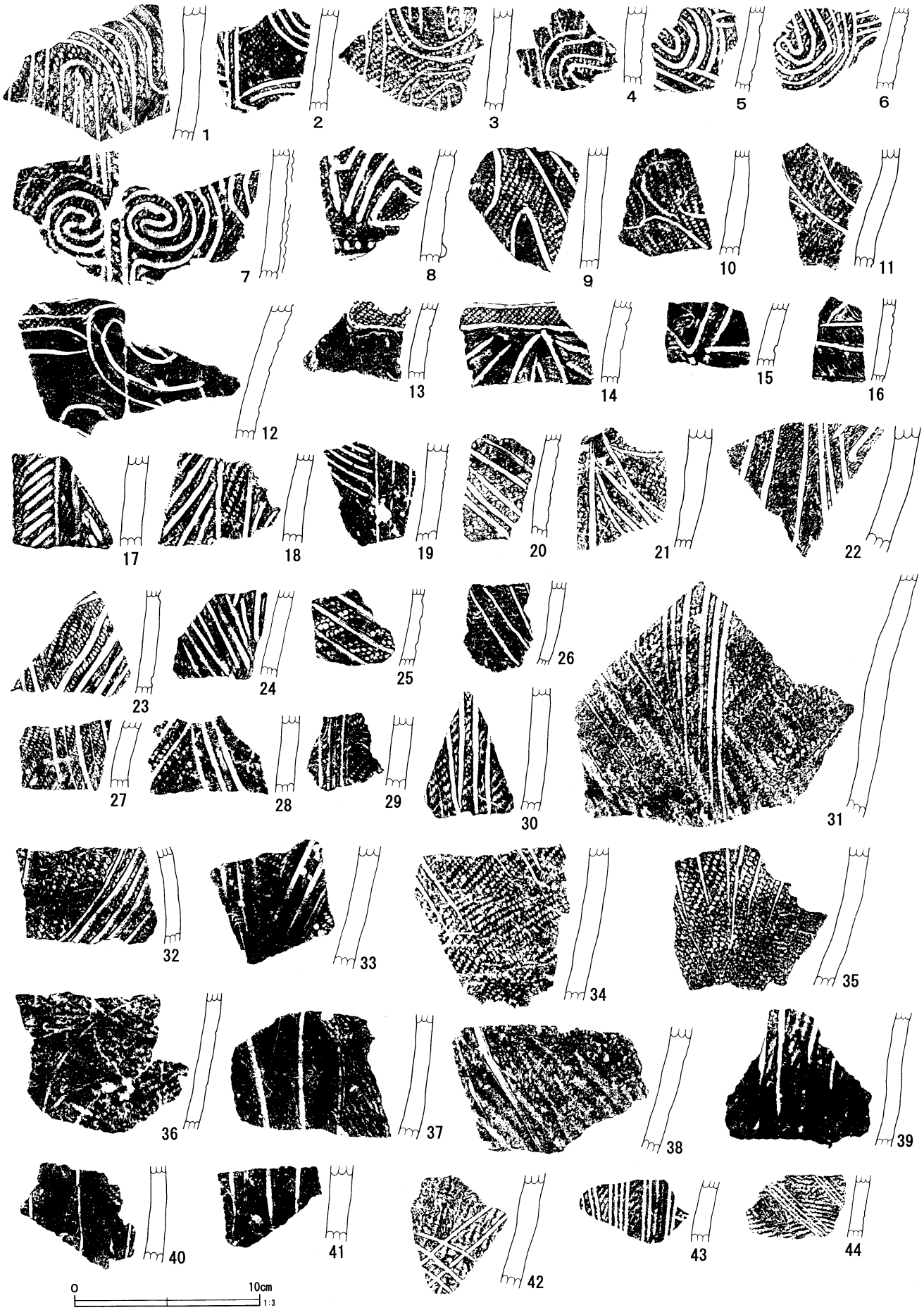
第74図　グリッド出土土器（13）



第75図　グリッド出土土器（14）



第76図　グリッド出土土器（15）



第77図　グリッド出土土器（16）

点として垂下する。地文縄文は大半が単節ＬＲの横位施文であるが、第72図32、第73図8～10が無節Ｒ、第73図2が無節Ｌ、11が単節ＲＬの横位施文である。

第2種（第73図17～27）

器形は、概して器壁が薄く、直線的な括れの少ない器形へと変化し、描出線が多条になることを特徴とする。懸垂文を中心としたモチーフが多い。

17・19は直線の懸垂文と曲線状に垂下するモチーフを組み合わすもので、17は緩い波頂部下の2穴の盲孔を繋ぐ沈線から、懸垂文を垂下する。

20は沈線懸垂文間に斜行沈線を施文するもので、18・21・22は斜行沈線を組み合わせるモチーフ、23は懸垂文と斜行沈線を組み合わせるものである。

24は蕨手状モチーフが変化したものと思われ、Ｓ字状のモチーフ下に3条の結節沈線を垂下する。

25は口縁部を沈線で区画し、粗い懸垂文を間隔を狭めて垂下する。26は口縁部を背高の隆帯で区画するもので、懸垂文は不明である。

27は磨消縄文の鋸歯状文を施文するもので、器壁が薄い。

地文縄文は23が無節Ｒ、27が無節Ｌである。

第3類（第65図7、第66図1、第73図28～40）

第1類と器形的な特徴は同じで、幅広の胴上半部に縄文のみ施文する土器群を一括する。

第1種（第65図7、第66図1、第73図28～32、33）

肥厚する口縁部に1～2本の太沈線を廻すものである。29のみ2本沈線を廻らすもので、幅狭の口縁部文様帯を構成する。第65図7、第66図1は同一個体であるが、縄文のみを施文する土器で、第73図36とともに、肥厚する口縁部を段状に成形して、口縁部無文帯を区画する。緩い波状縁を呈し、波頂部下に盲孔の代わりにナゾリ状の押圧を施している。第65図7は推定口径39.5㎝、現存高27.0㎝を測る。地文は全て単節ＬＲの横位施文である。

第2種（第73図33～35・37・38）

口縁部の肥厚が小さく、器壁が薄くなり、口縁部に廻る沈線が細くなる土器群である。33・34・37は細い沈線を口縁部に廻らすもので、35・38は沈線部分が凹線状となり、端部が尖り気味となる。地文は単節ＬＲ縄文の横位施文である。

第3種（第73図39・40）

器形の特徴は第2種と同様であるが、口縁部に円形の列点文列を廻らす土器群である。

39は口縁部がやや内湾気味に開く器形で、円形の刺突文状の列点が廻る。40は口縁が外反気味に開き、口縁部に押圧状の列点文を廻らす。地文は39が複節ＲＬＲ、40がＬＲの横位施文である。

第4類（第74図～第77図）

Ａ群第1類、第2類の胴部破片を一括する。

第1種（第74図、第75図、第76図1～22）

太沈線で懸垂文を中心としたモチーフを描くものを一括する。

ａ）蕨手状懸垂文を施文するものである（第74図1～30）。蕨手状懸垂文を囲む沈線が1本のもの（1・5・15）、2本のもの（11・12・24）、3本のもの（28～30）があり、24は2本沈線間を無文にする。また、16は蕨手懸垂文と斜行沈線文を組み合わすもので、21は刺突を挟む懸垂文と併施文される。25はスペード状の懸垂文を構成するものと思われる。地文は1・18・24・28が単節ＲＬ、他はＬＲである。

ｂ）Ｕ字状や曲線的なモチーフを組み合わせたものである（31～47）。曲線的なモチーフ（31～36）は蕨手状モチーフの一部もしくは、懸垂文と組み合わない可能性もあるが、Ｕ字状もしくは対向Ｕ字状のモチーフ（37～47）は懸垂文を構成する。地文は38が単節ＲＬ、他がＬＲの横位施文であり、38は中期末に位置付けられる可能性もある。

ｃ）2本もしくは3本の太沈線懸垂文を垂下するものである（第75図1～33）。2本を単位とす

る懸垂文（１～20）は間隔をやや開けて施文しており、３本単位の懸垂文（21～30）は間隔が狭く、多条化への中間的な様相を呈する。いずれも地文は単節ＬＲの横位施文である。31～33は称名寺式に系譜する蛇行沈線文と、直線の懸垂文が組み合うモチーフで、地文に単節ＬＲを粗雑に施文する。

ｄ）直線的に垂下する懸垂文と、斜行沈線文を組み合わせた肋骨文状のモチーフを施文するものである（第76図１～16）。２～３本の沈線を組み合わせており、６は沈線の交点が曲線化しており、14は沈線に列点が沿うなど、やや新しい様相を呈する。また、３は沈線間を無文にする。地文は薄いものが多く、３が単節ＲＬ、他がＬＲの横位施文である。

ｅ）沈線間を無文にする磨消縄文手法でモチーフを描くものである（第76図17～22）。ｄ）のモチーフの一部を構成するものもあるが、全体でのモチーフ構成の不明なものが多い。地文は単節ＬＲの横位施文である。

第２種（第76図23～49、第77図１～44）

第１種よりも器壁が薄くなる傾向があり、描出沈線が細く、さらに多条化するものを一括する。

ａ）沈線懸垂文と各種の斜行沈線文等が組み合うモチーフを施文するもの（第76図23～47）。

23は押圧を施す隆帯が垂下し、３本の横位沈線で胴部を区画する。24は多条沈線のＪ字状懸垂文が垂下し、それを束ねるように横位区画沈線を施文する。25～29は沈線懸垂文と、それに付随する多条の弧状沈線（25・26）や斜行沈線（28・29）が組み合うものである。27は沈線懸垂文間に刺突列を施文する。

30～38は沈線懸垂文と斜行沈線文等が組み合って、幾何学的な文様を描くものである。30・32・37は沈線文と結節沈線文列でモチーフを描くものであり、32は垂下する結節沈線文の中間に、横長の楕円区画文を配する。31は懸垂文と蛇行懸垂文が垂下し、その間に斜行沈線を組み合わせて縦位連続の菱形文を構成する。33～36・38は3本沈線を基本として三角形を連続したモチーフを描くものと思われる。

39～47は器壁が薄くなり、多条沈線で懸垂文や区画文を描くもので、39は上下に連結する長楕円のモチーフを垂下し、40は区画内にうろこ状の集合沈線を充填施文する。44は文様帯の下端を低隆帯で区画する。地文縄文はいずれも単節ＬＲで、34・35は区画内に充填施文する。

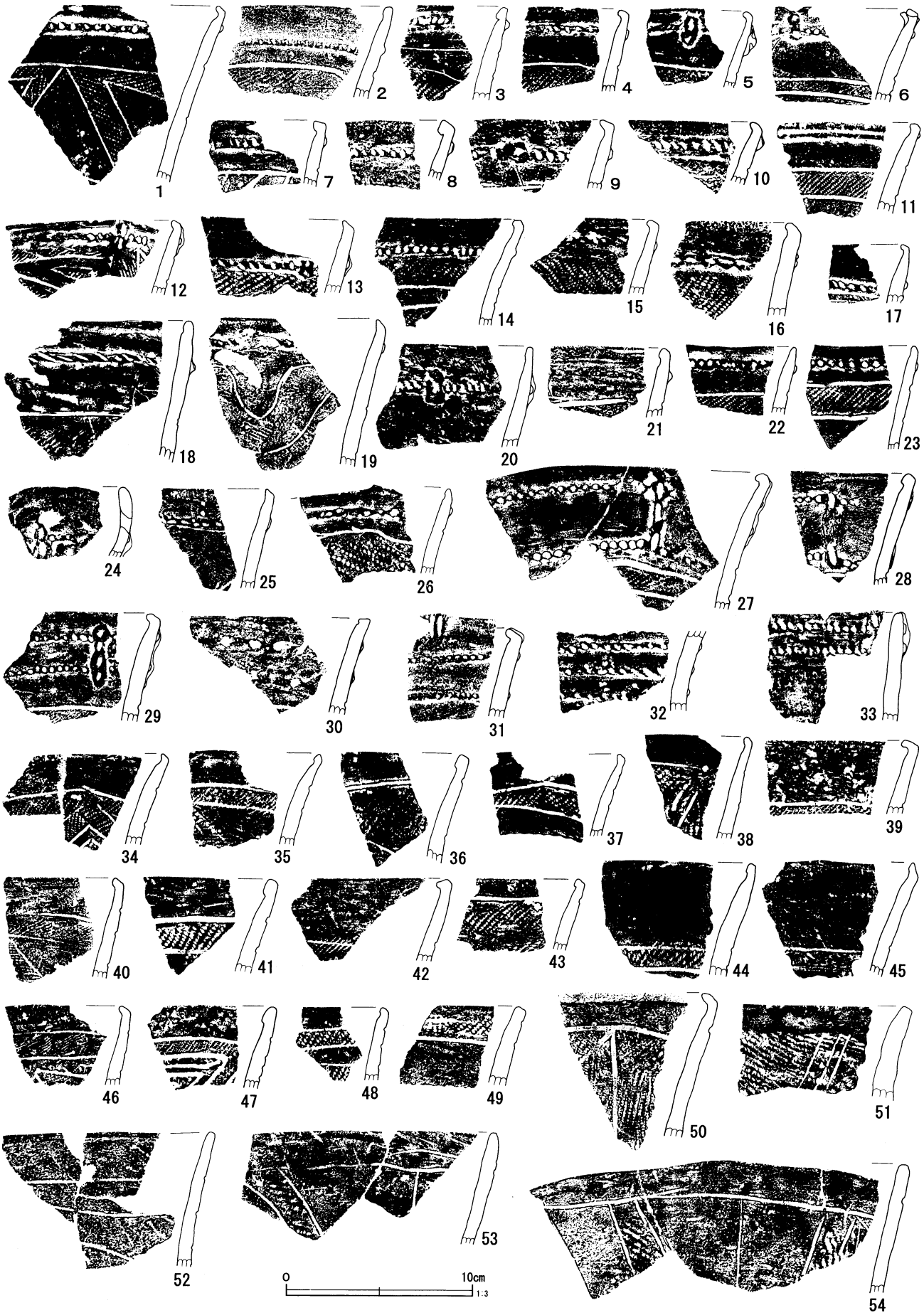
ｂ）曲線的なモチーフ（第76図48・49、第77図１～４・８～16）や渦巻状のモチーフ（第77図５～７）を施文するものである。地文原体は、いずれも単節ＬＲである。

第76図48・49、第77図１～４は多条沈線で曲線文を描くもので、２・３は垂下する沈線懸垂文と対向するＵ字状文を構成する。１・４は楕円区画状文を多条沈線で取り囲むモチーフである。８～11はモチーフが判然としないが、地文縄文上に曲線文を描く。12は横位区画文下に鉤状の渦巻文を連結するモチーフを描く。13～16は12に類する磨消縄文で幾何学状のモチーフを施文するものであり、縄文は充填縄文である。

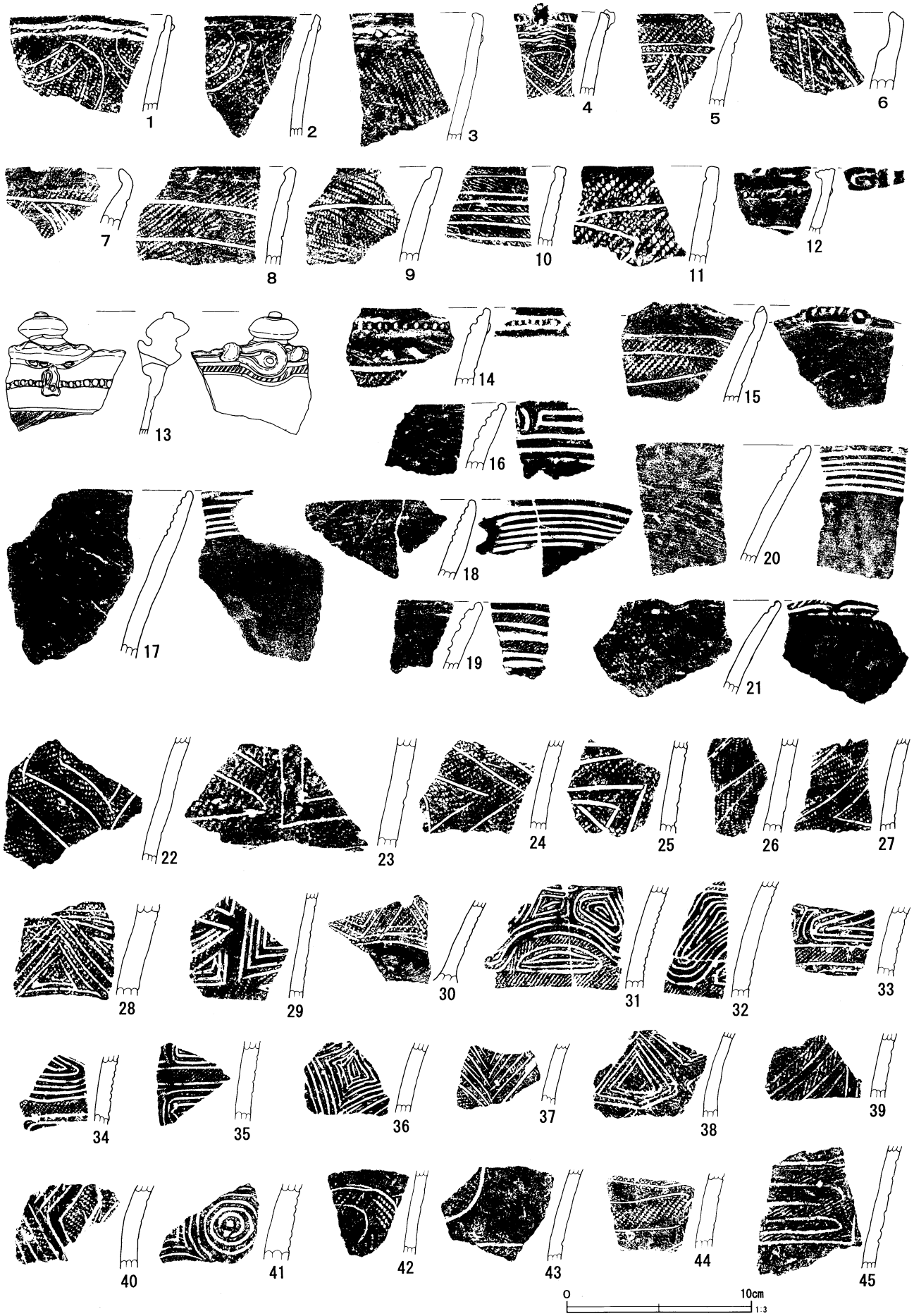
５～７は渦巻文を施文するもので、７は垂下する刻みのある隆帯を挟んで対峙する位置に、入り組み状の渦巻文を配する。

ｃ）垂下する懸垂文と斜行沈線文が組み合って、肋骨文状のモチーフを構成するもの（第77図17～44）。17～28は垂下懸垂文と斜行沈線が組み合う肋骨文系のモチーフのものと思われるが、破片ではａ）との区分が明瞭ではない。地文は19のみ単節ＲＬで、他はＬＲである。

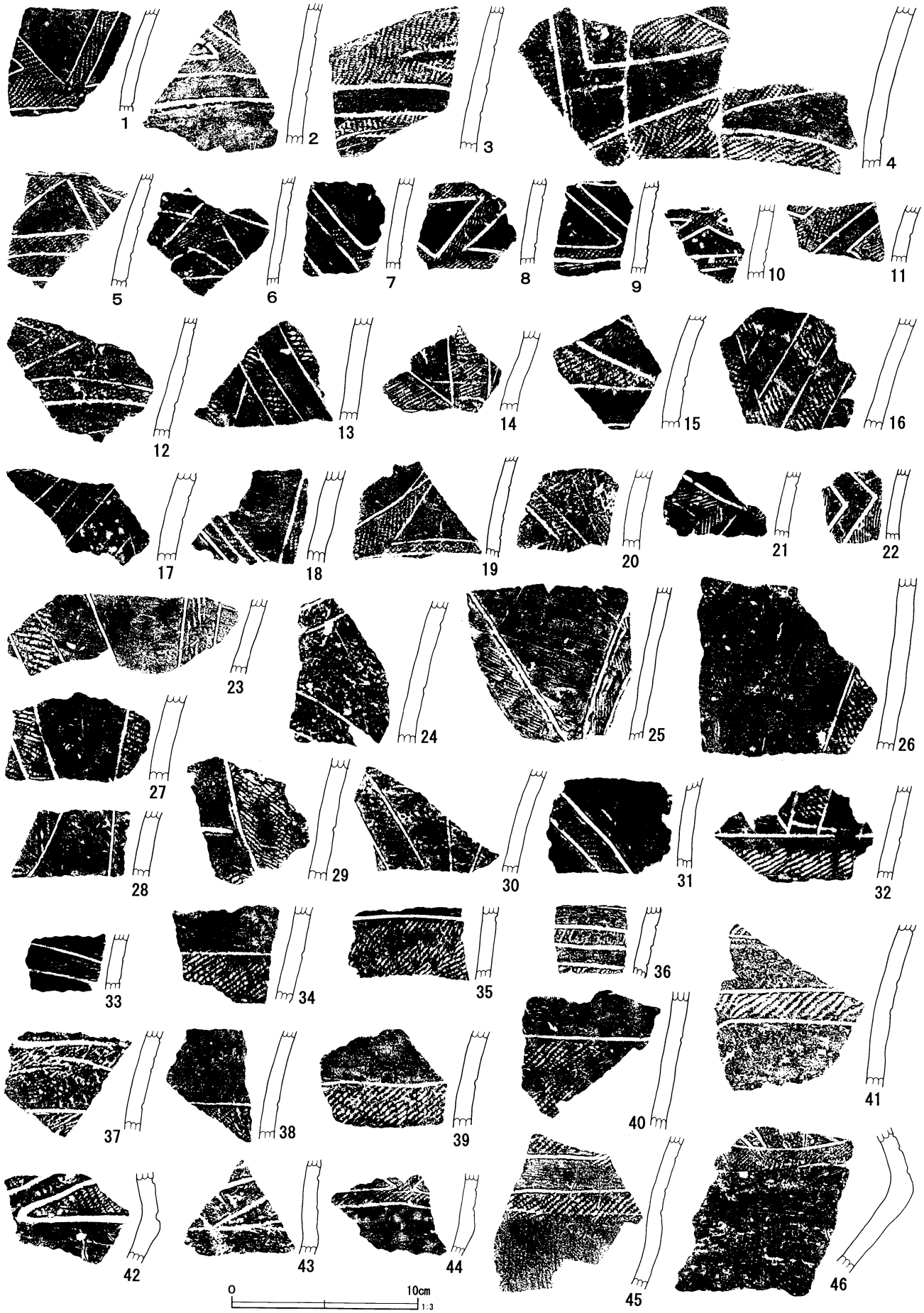
29～35は文様帯下部の破片で、粗い施文が特徴的である。36・37・40・41は地文縄文が磨り消されているものが多く、42は粗い沈線の格子目文を、43・44は条線文を施文するものである。地文は大半が単節ＬＲであるが、38は磨り消されており、原体は判然としない。



第78図　グリッド出土土器（17）



第79図　グリッド出土土器（18）



第80図　グリッド出土土器（19）

第５類（第78図～第80図）

口縁部が直線的に広がる、もしくは胴部が若干括れて口縁部が開く、いわゆるバケツ形の深鉢形土器を一括する。大半が堀之内Ⅱ式に位置付けられるもので、一部加曽利Ｂ式に位置付けられるものが含まれている可能性もある。

第１種（第78図１～54）

口縁部に刻みを施す隆線を廻らし、磨消縄文でモチーフを描く土器群を一括する。

ａ）口縁部に１本の隆線を廻らすものである（１～26）。口縁部裏面に沈線、もしくは凹線状の沈線が廻り、口縁部に廻らす隆線には縦位の８字状貼付文を施すものもある（５・６・９・12・13・20・24）。体部の文様は三角形を組み合わせた幾何学文を、磨消縄文手法で施文する。19は８字状貼付文が剥落しているが、貼付文を避けるように磨消縄文のモチーフがＵ字状の弧を描いている。地文縄文は単節ＬＲの充填縄文が大半であるが、15・26はＲＬ縄文である。

ｂ）口縁部に２～３本の隆線を廻らすものである（27～33）。２本隆線間に施文される縦位の８字状貼付文は、隆線の間隔が開くため縦位の縦長へと変化する（27～29）。また、32は隆線が３本の構成を採る。33は口縁部裏面に沈線を施さず、口縁部にやや太い隆線を２本廻らしている。

第２種（第78図34～49・52～54）

第１種と同様な器形、文様を持つが、口縁部に隆線を施文しない土器群を一括する。文様は三角形を組み合わせたもの（34・35・40・47）を主体とするが、直線的な磨消縄文を施文するものもある（48・49）。また、モチーフが弧線を描くもの（52）、器形の大型化とともに三角形状モチーフが大型化したもの（53・54）もある。地文は全て単節ＬＲの充填縄文である。

第３種（第78図50・51、第79図１～11）

第１種と同様な器形、文様構成を持ち、全面に地文縄文を施文するものを一括する。口縁部の造りが積み上げ状を呈するものが少なく、裏面に沈線を廻らすものが多いことは、やや後出の要素と捉えることができよう。

ａ）口縁部に隆線を廻らすものである（１～４）。１・２は口縁部裏面のやや下がった部分に沈線を廻らすもので、体部は２本沈線で曲線状のモチーフを描く。３は体部にモチーフはなく、４は口唇外端部に刻みを施し、隆線と同様な効果を挙げている。さらに、口唇上から口唇端部にかけて８字状貼付文を突起状に施文する。

ｂ）口縁部に隆線を廻らさないものである（第78図50・51、第79図５～11）。地文縄文上に三角形状のモチーフを描くもの（50・51・５～７）や、平行沈線を多条に施すもの（８～10）、雷状のモチーフを施文するもの（11）などがある。11は角頭状を呈し、裏面に細い沈線が廻り、地文縄文の節が大型化することなどから、加曽利Ｂ式に下る可能性もある。

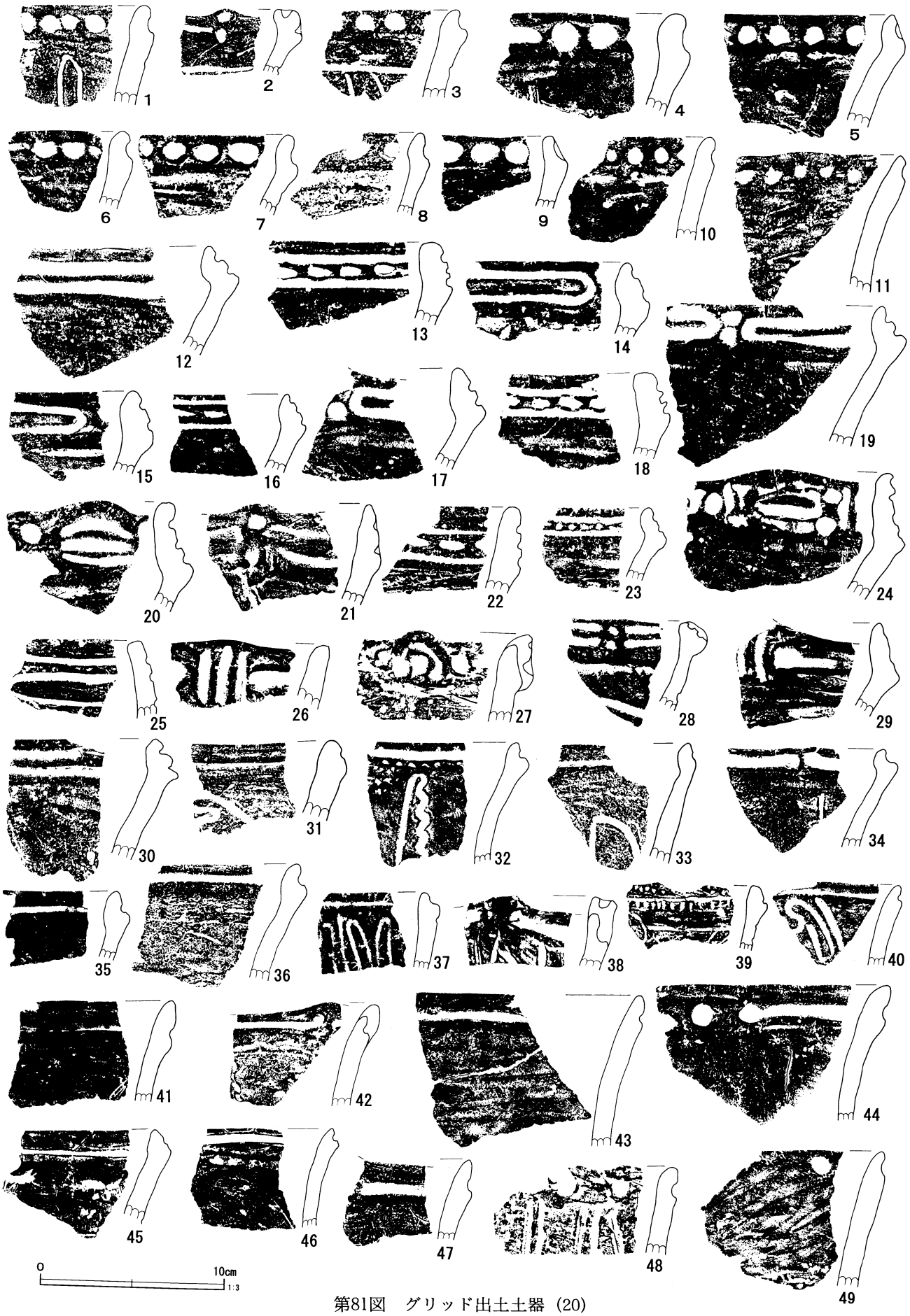
第４種（第57図１、第79図12～21）

口唇上及び口縁裏面に文様帯を持つものを一括する。

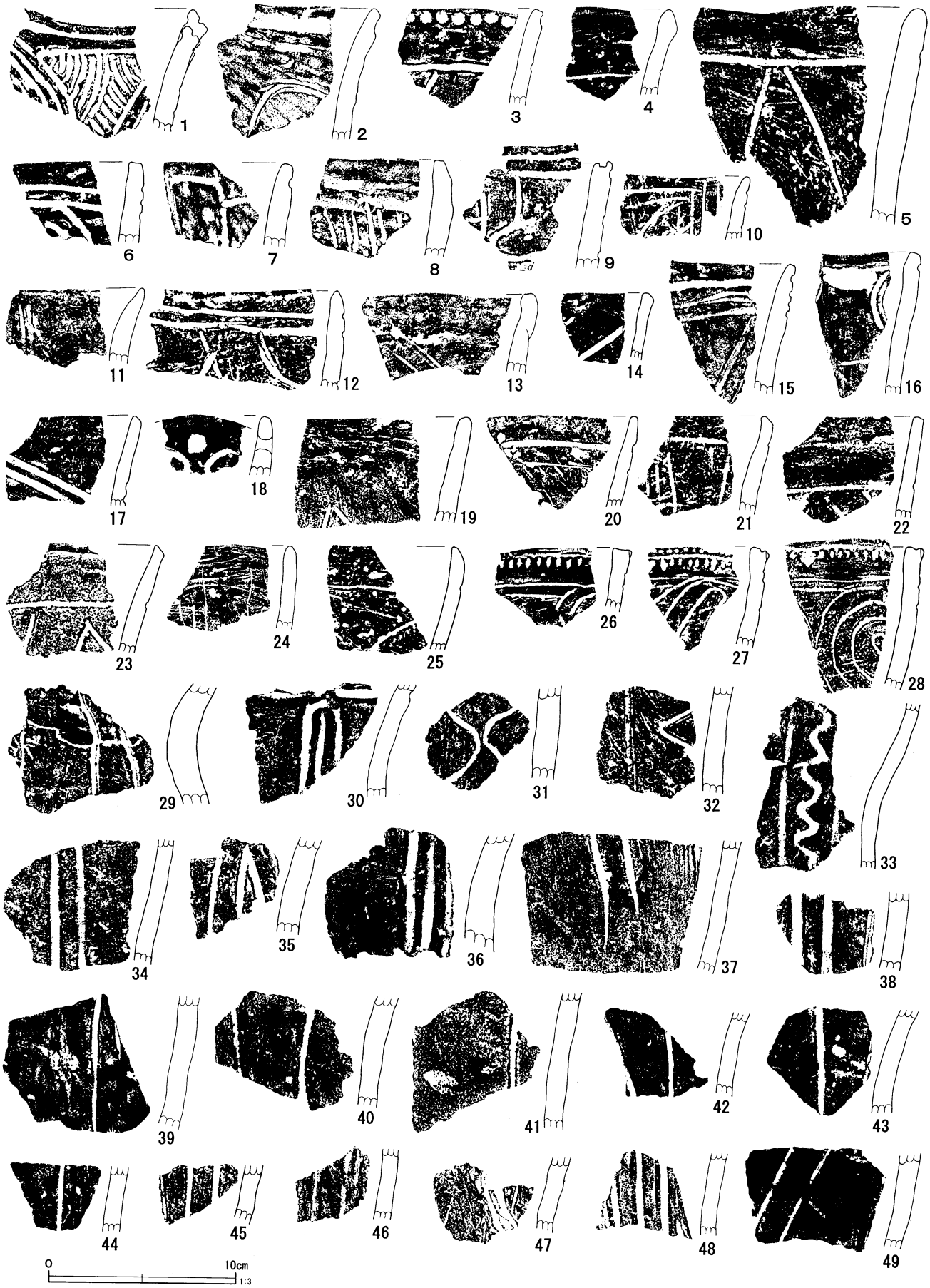
ａ）口唇上に加飾を施すものである（12・13）。12は幅広で平坦な口唇上に隆帯の渦巻文を施文し、13は加飾を施す円形状突起を配する。さらに、13は口縁裏面に刻みを持つ平行沈線を施文して幅狭な文様帯を構成する。

ｂ）口縁部裏面に幅狭な文様帯を形成するものである（14・15）。14は口縁部に隆線を廻らし、体部に磨消縄文のモチーフを施文し、口縁裏面に刻みを持つ沈線の円形区画文を施している。15は口縁部が緩い山形の波状を呈し、裏面に環状貼付文と刻み列を施して、口唇部内面の文様帯を形成する。体部は３本の沈線を横位施文して、単節ＬＲを充填施文する。

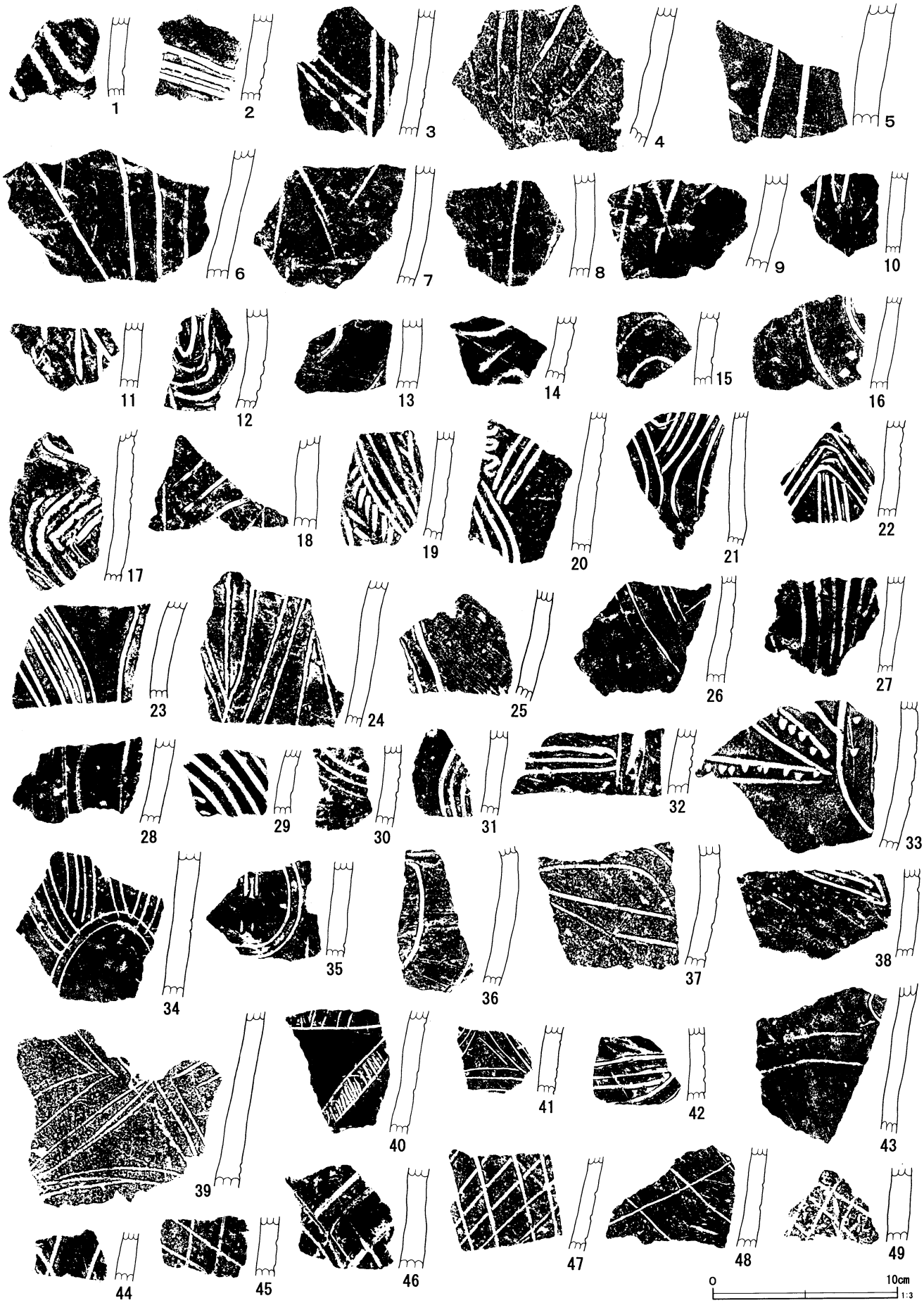
ｃ）口縁部内面の文様帯のみに施文する土器群で、全て外面を無文とする土器群を一括する（第67図１、第79図16～21）。



第81図　グリッド出土土器（20）



第82図　グリッド出土土器（21）



第83図　グリッド出土土器（22）

１は口縁部の大形破片から器形を復元したもので、推定口径約27㎝、現存高7.5㎝を測る。外面は無文で、おそらく３単位と思われる小突起と部分的な押圧を施して口縁部が小波状を呈する。口縁部内面に２本沈線を廻らせて口縁部裏面文様帯を形成し、部分的に口唇部との間に細かな刻みを施している。また、小突起は口唇部上から内面にかけてＳ字状に垂下する隆帯の一部であり、口唇部の押圧と一体化して、蛇行する蛇体文状を呈する。

16～20は内面に多条の沈線を廻らすもので、部分的に円形の区画文（16）や円形の盲孔（18）を施文するものもあり、沈線間に縄文を施すものもある（16・19）。21は第67図１と同一個体の可能性が高い。

第６類（第79図22～45、第80図1～46）

第５類の胴部破片を一括する。

第１種（22～30）

地文縄文上に三角形を組み合わせたモチーフを施文するものである。

ａ）施文沈線の間隔は広く、大柄なモチーフを描くものである（22～27）。22は重菱形文を描くもので、他は重三角文を組み合わせたものである。地文は全て単節ＬＲである。

ｂ）多条沈線で三角文を重ねたモチーフを描くものである（28～30）。30は底部付近の破片であり、地文は文様帯内のみに施文する。

第２種（第79図31～45、第80図１～46）

磨消縄文で三角形・菱形・円形のモチーフを組み合わせたものである。

ａ）多条沈線で、重三角文、重菱形文、重円形文や、曲線的なモチーフを組み合わせて施文するものである（31～41）。

ｂ）磨消縄文で曲線的なモチーフを描くものである（42～45）。42・43は円形モチーフ、44・45は流水文状のモチーフを描く。

ｃ）磨消縄文で横位区画と三角形を組み合わせたモチーフを施文するものである（第80図１～46）。いずれも比較的大柄なモチーフを施文するもので、33～41は横位の磨消状文を施文する。42～46は胴部の屈曲部分にあたり、46は屈曲が強いことから、注口土器の可能性もある。地文縄文は大半が単節ＬＲの充填施文であるが、42は単節ＲＬの充填施文である。

Ｂ群土器

地文に縄文を施文しない深鉢形土器群を一括する。基本的にはＡ群土器と器形、文様構成、施文手法が同一の土器群である。

第１類（第81図１～49）

胴部で緩く括れ、口縁部が肥厚して緩く内湾気味に開く器形の深鉢で、口縁部に幅狭な文様帯を持つものや、口縁部に隆帯と沈線状の凹線を廻らせ、二重口唇状を呈するものを一括する。口縁部は突起を中心として、緩い波状を呈するものが多い。無地文上に、各種の沈線懸垂文を施文するものである。

第１種（第81図１～36）

無地文上に、比較的太い単沈線、もしくは２～３本の沈線を対にして各種の懸垂文を施文するものである。

ａ）押圧状の円形列点文や２本沈線を廻らすなどして、口縁部に幅狭文様帯を形成し、太沈線の懸垂文を施文するものである（１～30）。肥厚口縁部に円形列点文（１～11）、縦位の列点文を区切りとする２本沈線の区画文（12・14・15・17・19・21・25・28・30）、刺突文を挟む２本沈線（13・16・18・23）、区切り文としての縦横沈線の区画文（20・24・26・27・29）などを廻らせて、口縁部幅狭文様帯を構成する。胴部に明瞭な沈線懸垂文を持つものは少ないが、１・４・14・21は肥厚口縁部下から懸垂文を垂下し、２・３・28は頸部を横位沈線で区画し、懸垂文を垂下するものと思われる。

b）肥厚口縁部に沈線を廻らし、蕨手状などの各種の懸垂文を施文するものである（31～36）。31は比較的器壁の厚い大型土器と思われ、幅広の蕨手状懸垂文を垂下する。32は囲みのない蕨手状懸垂文を垂下し、33・34は称名寺式に系譜する折り返し状の懸垂文を施文するものと思われる。

a）・b）の中で、胴部に文様がない破片は、破片のさらに下部に横位沈線をめぐらせ、称名寺式に系譜するモチーフを施文するものと思われるが、A群第3類に類し縄文を施文しないものや、C群土器の口縁部に相当するものが含まれている可能性もある。

第2種（37～49）

第1種の口縁部の肥厚や、胴部の括れが弱くなり、多条沈線の懸垂文を施文するものである。

a）口縁部がやや内湾気味に開く器形のものである（37～39）。37は折り返し状の多条沈線懸垂文を、38は小波状縁の波頂部下に多条の懸垂文を垂下する。39は小波状縁の口唇部に細かな刻みを施し、円形状の沈線モチーフを施文する。

b）口縁部が外反しながら開く器形のものである（40～47）。40は多条化した蕨手状懸垂文を施文するもので、48は沈線懸垂文を垂下するものである。44・48・49は円形列点文や沈線を組み合わせて口縁部幅狭文様帯を区画する系統のものである。

第2類（第82図1～28）

口縁部が肥厚せず、外反気味か直線的に開く器形、もしくは若干内湾気味に開く器形の土器群で、無地文上に沈線懸垂文や各種のモチーフを施文する土器群を一括する。

第1種（2～12）

比較的太い沈線で、各種の懸垂文を施文するものである。2～4は第1類の口縁部が肥厚しない土器群である。2は口縁部に太い凹線、3は列点文、4は若干肥厚した形態で、幅狭口縁部文様帯を構成するもので、体部には曲線的なモチーフ（2）や、斜行沈線（3）を施文する。

5～7・9は口縁部が直線的に、8・12は若干内湾気味に、10・11は外反気味に開く器形を呈し、斜行沈線を組み合わせた懸垂文（5・6）、直線的な懸垂文（7・8・10・11）、直線と弧線を組み合わせたモチーフ（9・12）を施文する。9は角頭状の口唇部上に沈線を廻らす。

第2種（第65図4、第82図1・13～28）

全体的に器壁が薄くなり、描出線が多条もしくは細くなる土器群である。

a）鱗状の多条沈線文を施文するものである（第65図4、第82図1）。4は器壁が薄く、平口縁で、胴区画部より上が直線的に開く器形を呈するもので、口唇部直下に沈線を廻らして、口縁部を区画する。胴部は紡錘状の囲いを持つ多条沈線の懸垂文で縦位区画を施し、さらに菱形状の区画を施して、区画内や余白に鱗状の多条沈線の充填文を施すものである。推定口径約25㎝、現存高28㎝を測る。

1も同様に区画余白に鱗状の多条沈線文を充填施文するものである。1は波状縁が外反する器形を呈し、口唇上に沈線が廻る。

b）各種のモチーフを施文するものである（第82図13～28）。13・14・17・19は口縁部から斜行する沈線を施文し、18は円孔下に円形状モチーフを施文する。15・16は口縁部を沈線で区画し、15はやや斜行する沈線を、16は対弧状のモチーフを施す。

20～23は口縁部が直線的に開く器形で、口縁の無文帯を沈線で区画し、21は縦位懸垂文、22・23は斜行沈線を組み合わせたモチーフを施文する。

24・25は口縁部が若干内湾気味に開く器形で、24は細沈線の懸垂文を、25は口縁を区画する沈線を施文する。

26～28は同一個体で、角頭状口縁部外端に刻みを施し、口唇上に沈線を廻らす。体部は沈線で口

縁部を区画し、渦巻文を連結するモチーフを施文する。

第３類（第82図29～49、第83図１～49）

Ｂ群第１類、第２類の胴部破片を一括する。

第１種（第82図29～49、第83図１～16）

太沈線で懸垂文を中心としたモチーフを施文するものである。

ａ）沈線及び蛇行沈線の懸垂文を施文するものである（29～49）。２～３本の直線的な太沈線を懸垂文として施文するもの（29・30・34～49）で、蛇行沈線と組み合わせるもの（31～33）もある。

ｂ）直線と斜行沈線を組み合わせた、肋骨文状の懸垂文を施文するものである（第83図１～11）。２～３本の太沈線で肋骨文状の懸垂文を施文する。

ｃ）曲線的なモチーフを施文するものである（12～16）。12は２本沈線を合わせて曲線的なモチーフを描き、13～16は間隔を開けた２本沈線でモチーフを描く。

第２種（第83図17～49）

描線が多条化もしくは細線化した一群である。

ａ）蛇行沈線及び曲線化した多条沈線を組み合わせて、懸垂文状のモチーフを施文するものである（17～28）。17は多条沈線で蛇行懸垂文を、18は多条化した斜行沈線と懸垂文が組み合う肋骨文状のモチーフを施文するものである。

19～28は多条化した曲線的な懸垂文と、直線的な蛇行懸垂文や沈線文をｙ字状に組み合わせて施文する。19はモチーフ間に多条の短い斜行沈線を充填施文する。

ｂ）曲線的なモチーフを描くものである(29～38)。多条沈線による弧状のモチーフ（29～31）、円形モチーフと曲線文を組み合わせたモチーフ（34～36）、曲線を含めた横位区画状のモチーフ（32・37・38）、縦位の弧線と横位、斜位の沈線を組み合わせた区画文（33）を施文するものである。33は平行沈線間に刺突文列を、35は円形モチーフ内に刺突文を充填施文する。

ｃ）三角形を基本とした幾何学的なモチーフを施文するものである（39～43）。多条沈線による三角形状モチーフを組み合わせたもの（39・41）、２本沈線で区画を施し、沈線間に梯子状の細かな沈線を充填施文するもの（40）、文様帯の区画を施すもの（42・43）などがある。

ｄ）斜行格子目文を施文するものである（44～49）。描出沈線の太さや、格子目の大きさや整然さに違いがあるが、大枠で堀之内Ｉ式内に位置付けられると思われるものを一括する。

第４類（第66図４～７、第84図１～21）

口縁部が直線的に広がる、もしくは胴部が若干括れて口縁部が開く、いわゆるバケツ形の深鉢形土器を一括する。無地文上に三角形を基本としたモチーフを描くものを一括する。Ａ群第５類に相当する堀之内Ⅱ式で、縄文を施文しない土器群である。

第１種（第66図５、第84図１～３）

口縁部に刻みを施す隆線を廻らし、口縁部裏面に沈線もしくは凹線状の沈線を廻らすもので、沈線及び条線で三角形や渦巻文を組み合わせるモチーフを描く土器群である。

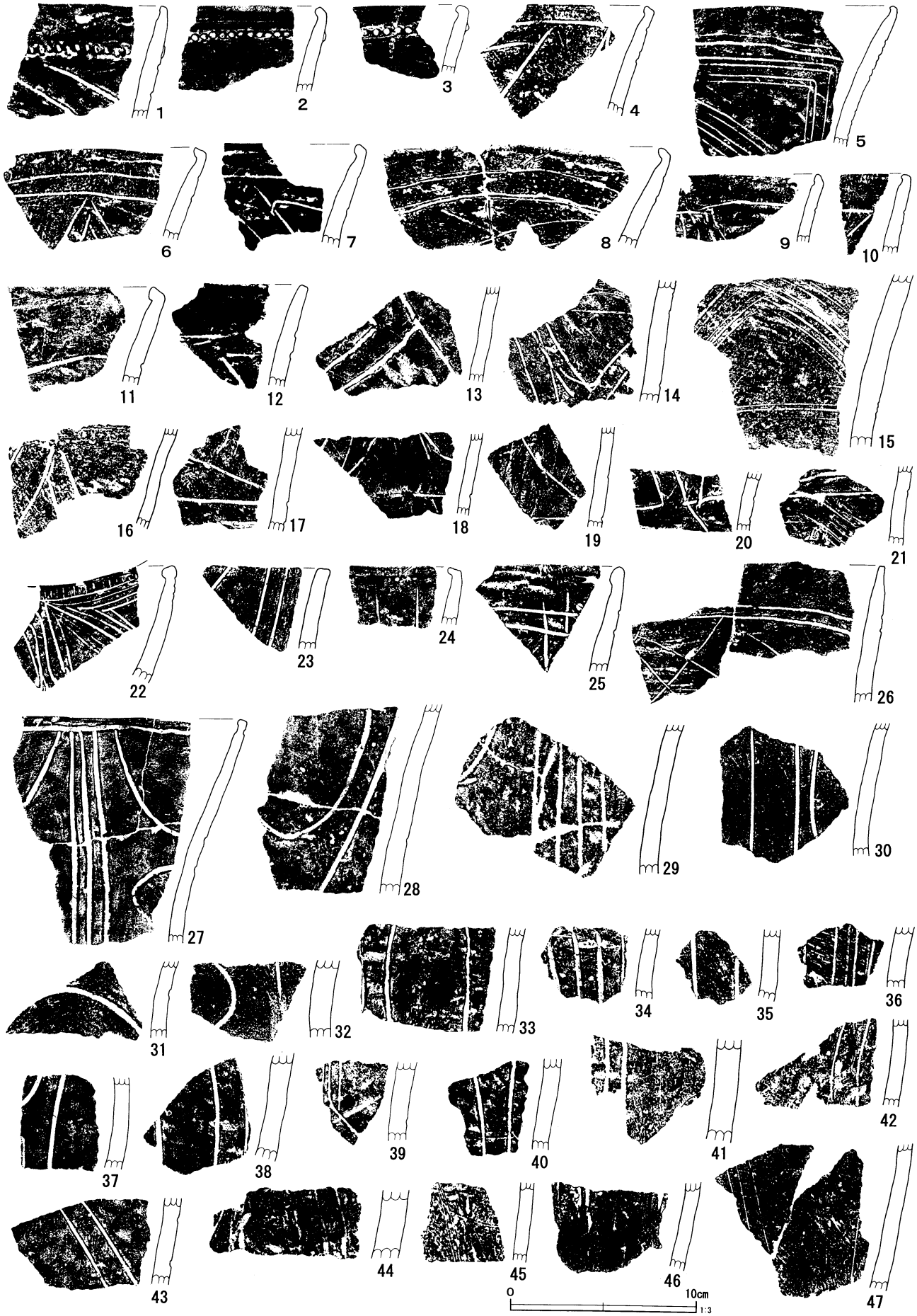
第66図５は口唇部直下に刻みを施す隆線を廻らせ、８字状貼付文を施す。体部は三角形と渦巻文を組み合わせたモチーフを描く。推定口径約22.5㎝、現存高4.8㎝を測る。

１～３は口縁部に幅狭な無文部を残して、刻みを施す隆線を廻らせ、１は隆線下に斜行沈線を施文する。口縁部裏面は、積み上げ状の成形ではなく、凹線状の沈線を廻らす。

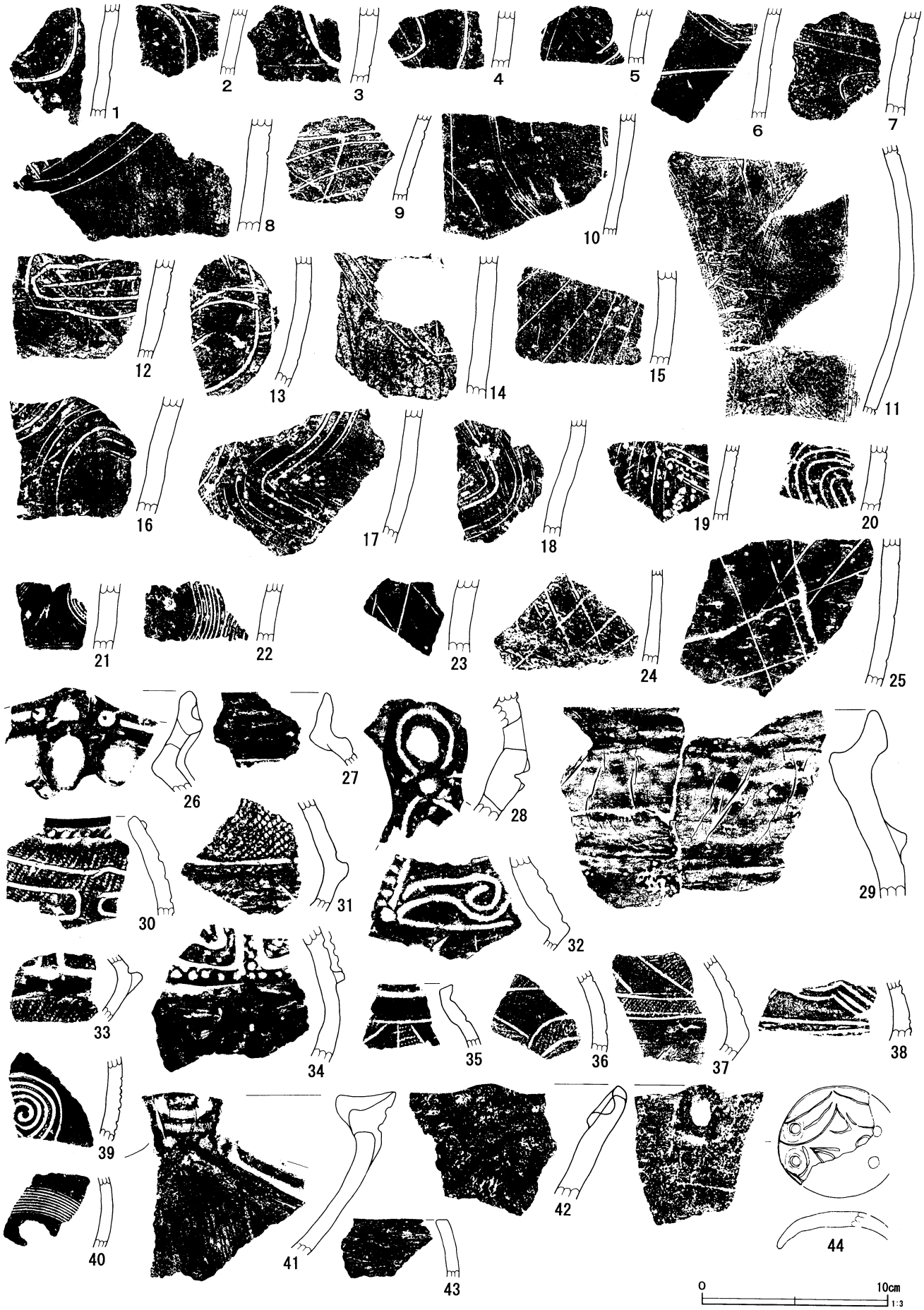
第２種（第66図４・６、第84図４～21）

口縁部に隆線を廻らさない土器群である。

第66図４は口縁部裏面に凹線状の沈線を廻らせ、条線で口縁部の区画、体部に渦巻文を連結するモチーフを施文する。推定口径約35.5㎝、現存高13.5㎝を測る。６は条線文で鋸歯状のモチーフ構成するものであるが、口縁部は直線的に開き、裏



第84図　グリッド出土土器（23）



第85図　グリッド出土土器（24）

面に沈線を廻らせない。

第84図４～12は沈線で三角形状のモチーフを構成するが、５は多条沈線で施文しており、８はモチーフ構成がやや崩れている。大半が口縁部裏面に沈線を廻らせるが、12は沈線を施文しないものである。13～21は胴部破片で、沈線施文が多いが、15・21は多条沈線というよりも条線文で三角形状のモチーフを施文する。

第３種（第66図７）

内面に文様帯を持つものである。７は口縁部に円形状の小突起が付き、体部に横位沈線を３本のみ施文するものである。口縁部裏面には、間隔の狭い平行沈線を多条に施文し、沈線間の一箇所に細かな刻みを施す。突起部分は内面の縁に細かな刻みを施し、平行沈線がU字状を描き、突起裾部分を迂回している。推定口径約15.2㎝、現存高9.2㎝を測る。

第５類（第84図22～47、第85図１～25）

バケツ形の器形以外の土器で、懸垂文を中心としたモチーフ、曲線文、格子目文等を施文するものを一括する。

第１種（第84図22）

多条沈線で重三角文等を施文するものである。22は波状口縁で、胴部が強く括れ、口縁部が大きく開く器形を呈する。口縁部には縦位の沈線列を施文し、体部は波頂部を基準に多条沈線の重三角形文を組み合わせたモチーフを施文する。

第２種（第84図23～27、第85図23～25）

胴部が緩く括れ、口縁部が緩く外反する器形の深鉢形土器で、称名寺式に系譜する懸垂文を中心としたモチーフを施文するものである。

23は口縁部が角頭状を呈し、口唇部直下から細い沈線の懸垂文を垂下する。口唇部は磨られた痕跡があることから、擬口縁の可能性がある。

24・25は裏面に凹線状の沈線を施文し、24は口縁部から、25は口縁部区画線から懸垂文を垂下する。

27は口縁部裏面と表面に沈線を廻らせ、体部は３本の沈線懸垂文とその間に対向U字状の懸垂文を組み合わせて施文する。28～47は懸垂文を施文する土器群の胴部破片で、懸垂文とU字状部分が現れている。

26は平行沈線で口縁の無文部を区画し、斜格子目文を施文するものである。口縁部は先細り状を呈し、裏面に沈線を施さない。第85図23～25は胴部破片で、描線などの特徴からこの種に属するものと判断される。

第３種（第85図１～22）

体部に細沈線で曲線状モチーフを描くものである。口縁部破片は判然としないが、胴部にやや膨らみを持つものもある。描出沈線は単沈線（１・３・４）、平行沈線（２・５）、３本沈線（８・10・11）、条線状沈線（16～20）、条線（21・22）などがある。モチーフは懸垂文と組み合わさるもの（10・14）、渦巻き状のもの（12・13）、流水文状のもの（16～22）などがある。

C群土器

頸部が強く括れ、口縁部が開き、胴部が張る器形の土器群を一括する。A群第１類、B群第１類との区分が難しいが、堀之内Ⅰ式、Ⅱ式を通して系統性の強い土器群で、胴部を区画して懸垂文を施文することを特徴とする。地文縄文を施文するものが多いが、新しくなるに連れて無地文のものも現れる。

第１類（第65図３、第66図３、第86図１～18）

口縁部が強く外反して波状縁を呈し、波頂部から胴部区画に向けて隆帯や沈線を垂下する系列の土器群である。

第１種（第86図１～４）

波状縁の波頂部に盲孔を伴う円形貼付文を施し、それを基点として弧状や対弧状の隆帯を垂下するものである。綱取式系統の土器群である。

１は隆帯が対弧状を呈するが、隆帯の中央部に

凹線状の沈線を施文し、背割れ状の２本隆帯が弧状に対峙する。４も同様に対弧状の隆帯を施文する。綱取式の特徴を示している。

２は背割れ状の２本隆帯が弧状に垂下し、さらにやや方向を変えて別の背割れ隆帯と連結して垂下する。いわゆる、茂沢類型の特徴を示している。

３は背高の２本隆帯を弧状に垂下するもので、５は沈線間で盛り上がる低隆帯を直線的に垂下するものである。

第２種（第65図３、第86図６～10・14）

器形は第１種と同様であるが、口縁部が肥厚して、内湾気味に開き、波頂部の円形貼付文を円形の透かしに変えたり、加飾を施したりするものである。

第65図３は、口縁部が３単位の波状縁を呈し、波頂部の円形貼付文から、強く括れる頸部の円形貼付文にかけて連結するように隆帯が垂下する。体部は２本沈線で頸部の円形貼付文を取り囲み、さらにその外側を取り囲む沈線が逆Ｕ字状沈線と組んで、懸垂文として垂下する。懸垂文部分は、地文が磨り消されている。地文は単節ＬＲの斜位施文で、条が横走する。推定口径約14.5㎝、現存高７㎝を測る。

第86図６は波頂部に円形透かしを施し、それを取り囲むように盲孔を繋ぐ沈線を施文する。波頂部下には盲孔を基点とする刻みを持つ隆帯と、併走する沈線を垂下する。この沈線は頸部を枠状に区画するもので、地文に単節ＬＲを施文する。７は波頂部の円形貼付文を基点として、刻みを施す隆帯を垂下する。８～10は波頂部の円形貼付文を、多条の対弧状沈線によって取り囲み、刻みを施す隆帯を垂下する。８・９は口縁部に盲孔を繋ぐ沈線を廻らせる。14は波頂部に片流れの３本弧線を施文し、口縁部に細い楕円区画を施して文様帯を構成する部分と、沈線を廻らすのみの部分がある。

第３種（第86図11～13・15～18）

口縁部の肥厚が少なくなり、波頂部の加飾が退化するものである。11は波頂部上面に刺突を施し、波頂下に上下２つの盲孔を施し、多条の対弧状沈線で取り囲む。垂下する隆帯は、盲孔を基点とし、刻みを施す。幅狭な口縁部裏面には、波頂部に盲孔を施し、外面と同様に盲孔を取り囲む対弧状の多条沈線を施文している。12は波頂部の盲孔から沈線が垂下するのみの構成となる。13は波頂部に施される片流れの３本の弧状沈線が退化し、刻みのない低隆帯が垂下する。地文には単節ＬＲを横位施文する。16～18は本種、もしくは第２種の頸部破片である。第１種～第３種は堀之内Ｉ式の範囲内に収まるものと思われる。

第４種（第65図3、第87図34・35）

第65図３は内面に沈線を持つ口縁部が大きく開き、胴部で緩く括れ、底部を欠損するが、器高の低い鉢形を呈する。口唇部外端に刻みを施す隆帯を廻らせ、８字状貼付文を基点として、背割状の結節刺突文を施す隆帯を垂下する。この隆帯は、胴部区画線をさらに貫通し、胴部に垂下する対弧状懸垂文の基点となっている。さらに胴部を磨消縄文で枠状に縁取り、単節ＬＲを充填施文する。推定口径約23.5㎝、現存高11.2㎝を測る。堀之内Ⅱ式に比定される。

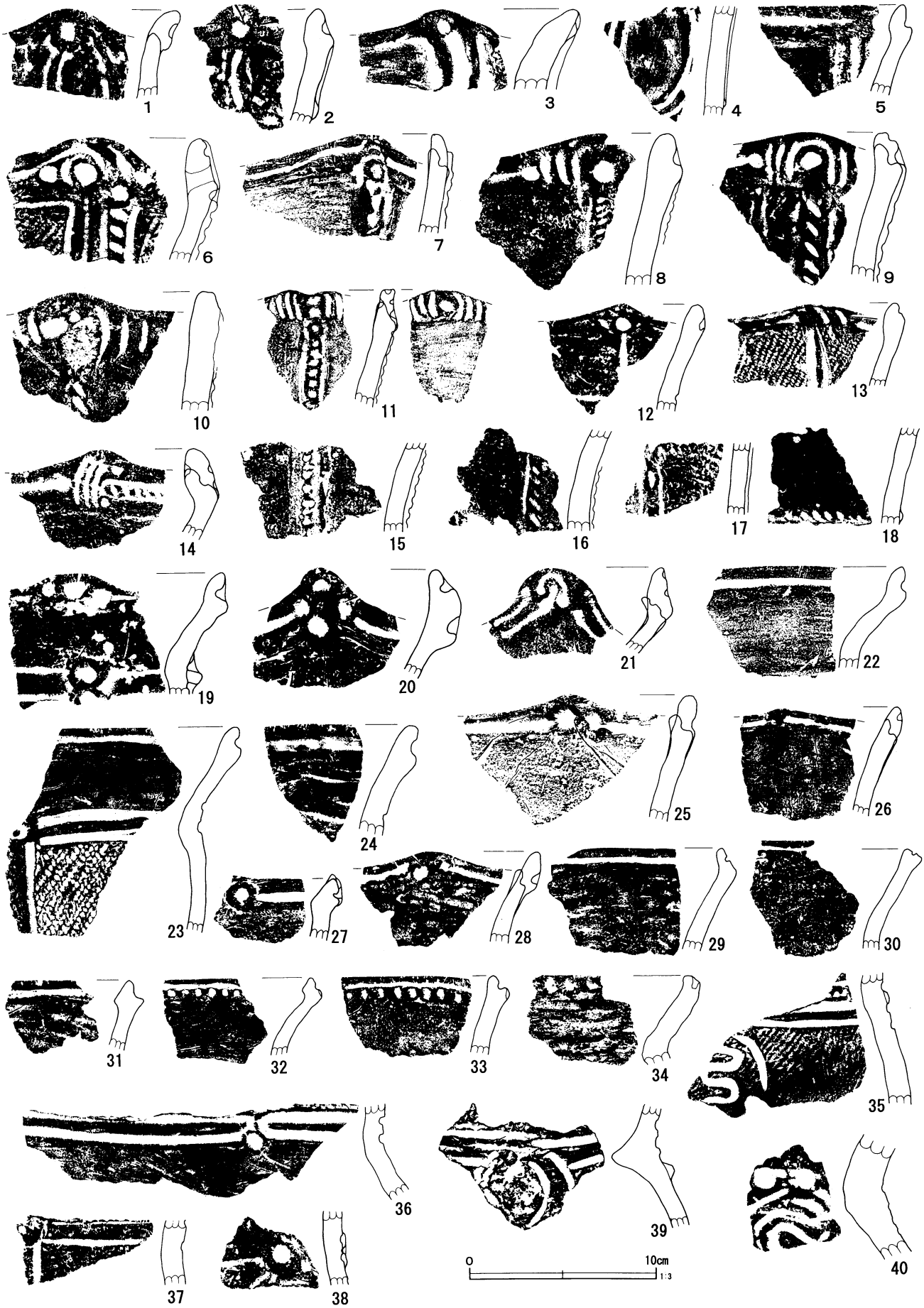
第87図34・35は口縁部の開き、裏面に沈線が廻るもので、この種の口縁部破片と思われるものである。

第２類（第86図19～34）

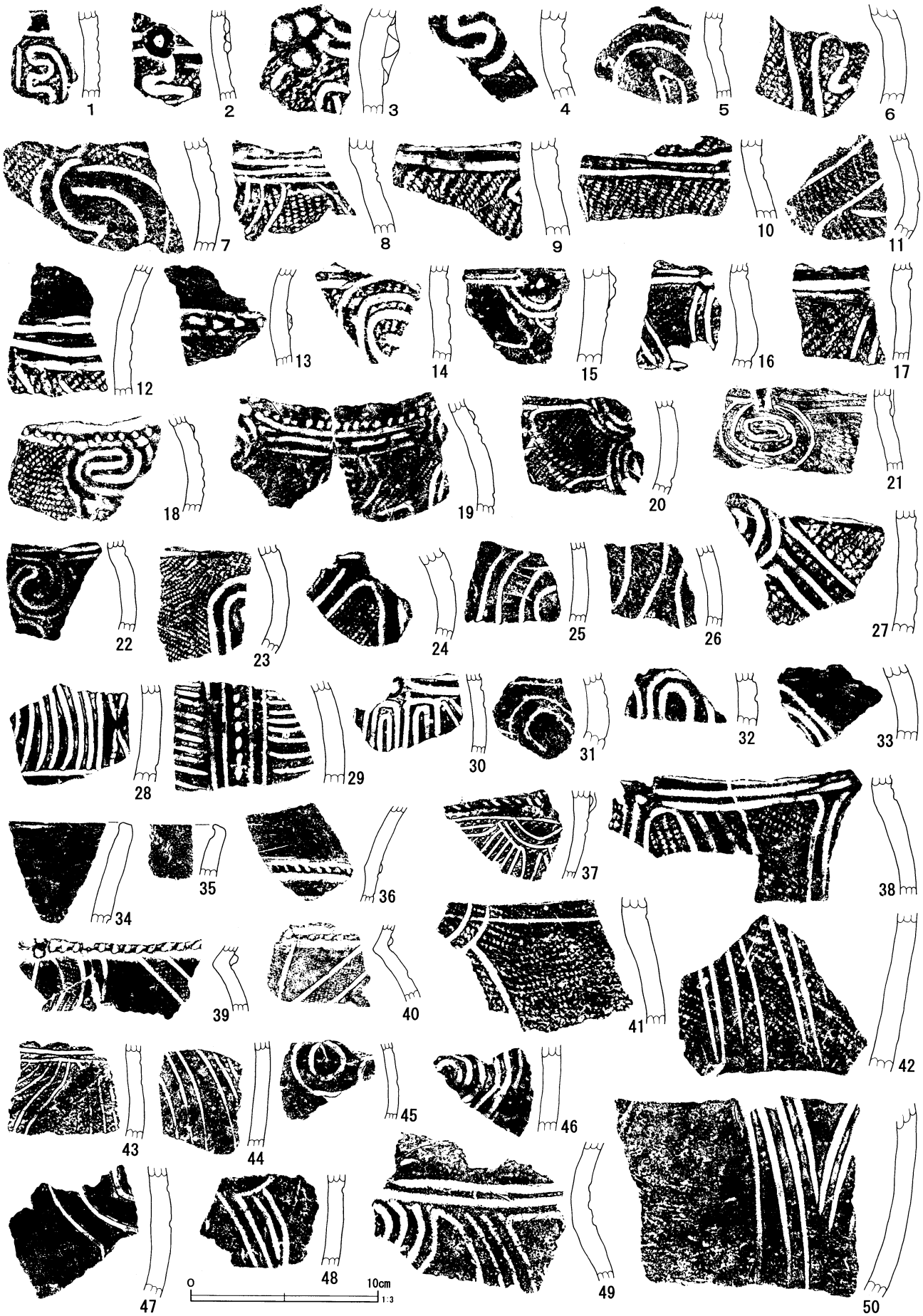
口縁部が肥厚外反して緩い波状縁を呈し、胴部が膨らみ、胴部区画から懸垂文を中心としたモチーフを施文する土器群である。頸部に垂下する隆帯や沈線は施文しない。

第１種（19～24）

口縁部は肥厚し、口縁部に沈線を廻らすことから二重口唇状を呈する。波状縁を呈するものは、波頂部に盲孔を伴う円形貼付文等を施文する。19は波頂部の中央に大きな盲孔、左右に小さい円孔を施文し、口縁部に盲孔を繋ぐ沈線を施文する。



第86図　グリッド出土土器（25）



第87図　グリッド出土土器（26）

胴部は２本沈線で区画し、波頂部下に対応する部分に大きな８字状貼付文を施文して、懸垂文の基点とする。20は波頂部に上下左右の４個の盲孔を施文し、21は盲孔を繋ぐ沈線で、中央の深い盲孔を取り囲んでいる。口縁部には２本の沈線を廻らす。22・24は肥厚する口縁部に沈線を廻らし、23は胴部を２本沈線で区画し、区画部に位置する円形刺突文を基点として２本沈線間を磨り消す懸垂文を垂下する。

第２種（25～34）

口縁部の肥厚が小さく、波状も低くなり、波頂部の盲孔加飾が衰退するなど、全体的に口縁部加飾が退化するものである。25・26・28は盲孔が小さくなり、27は口縁部に円形貼付文を施すのみのものとなる。また、32・33は口縁部に細かな刻みを施し、34は口唇上に刺突列を施している。

第３類（第86図35～40、第87図１～50）

Ｃ群土器の胴部破片を一括する。

第１種（第86図35～40、第87図１～27）

膨らむ胴下半部に、太沈線で懸垂文を中心としたモチーフを施文するものである。

ａ）胴部の区画沈線に施される８字状貼付文を基点として、蕨手状懸垂文を中心とする懸垂文を施文するものである（第86図35～40、第87図１～17）。蕨手状懸垂文は蛇行沈線に囲いを施す古相を帯びたもの（第86図35、第87図１・２）や、蛇行沈線が入り組み状を形成し始めるもの（第86図40、第87図３～７・14）がある。第86図37は直線的な懸垂文を、39は貼付文を取り囲む円形の平行沈線を施文しており、第87図３は貼付文に４個の盲孔を穿つ。８～13・15～17は構成が不明であるが曲線的な懸垂文を垂下する。第86図36～40、第87図４・５は地文縄文を施文せず、他は単節ＬＲ縄文を施文する。７は懸垂文部の地文を磨り消している。

ｂ）渦巻文を主とするモチーフを施文するものである（第87図18～27）。蕨手状懸垂文からの変化と思われる入り組み状渦巻文（18・21）や、上下左右に連なる渦巻文構成（19・20・22）、渦巻文を中心として放射状に垂下する懸垂文（23～26）、渦巻文を斜行沈線で連結するモチーフ（27）などがある。23・24・27は懸垂文を磨り消し、25・26は縄文を施文しないものである。

第２種（第87図28～33）

描線が多条になるものを一括する。いずれも地文に縄文を施文しないものであり、28～30は多条沈線の懸垂文や横位充填文を施文するもので、31は不明な部分が多いが、渦巻状のモチーフを描く。32・33は逆Ｕ字条の多条懸垂文を垂下するものと思われる。

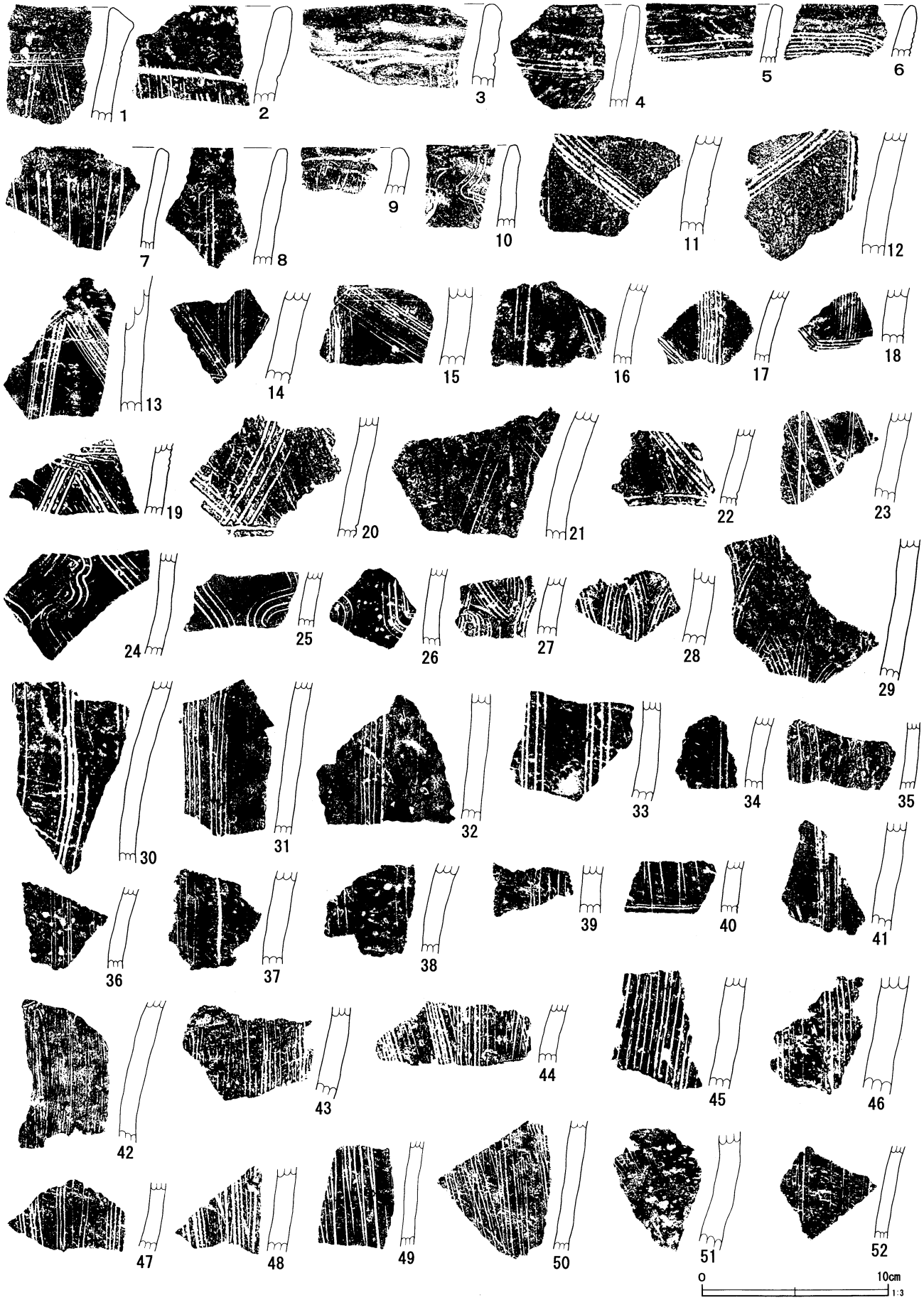
第３種（第87図34～50）

胴部区画文に施文される８字状貼付文等を基点として、多条の懸垂文を施文するものである。堀之内Ⅱ式段階に位置付けられる土器群である。

ａ）口縁部が大きく開き、器高の低い鉢形土器の胴部破片である（36・37）。36は体部の文様は不明であるが、37は胴部区画の隆帯上に施される貼付文を基点として、その下部に多条沈線の半円状モチーフを描き、そこから放射状の懸垂文を垂下するものである。

ｂ）胴部の括れが強く、胴部の張る器形の深鉢形土器で、磨消縄文でモチーフを描くものである（39・40）。39・40は同一個体の可能性が高く、刻みを施す隆帯で胴部を区画し、隆帯上の８字状貼付文を基点として、紡錘条の円形モチーフを磨消縄文で施文する。その他に、区画隆帯から直線状の磨消縄文を施文するものである。

ｃ）胴部が緩く括れる大型の土器で、体部に放射状の懸垂文を施文する土器群である(38・41～50)。体部の半円状モチーフを取り囲んで、対弧状の多条懸垂文を施文するものである。38・41・42は地文縄文を施文するもので、他は無地文である。原体は単節ＲＬである。



第88図　グリッド出土土器（27）

D群土器

称名寺式からの系譜を引く条線文のみを施文する土器で、胴部が若干括れ、口縁部が内湾気味に開く器形の深鉢形土器を一括する。

第1類（第88図1～6）

口縁部に幅狭な無文部を区画するものを一括する。2のみ沈線で区画し、他は条線で区画する。体部は条線を鋸歯状に施文するもの（1・4）、ランダムに垂下するもの（2）、間隔を空けて帯状に垂下するもの（3）などがある。1は口唇部が外削状の角頭状を呈し、称名寺式終末期の要素を持つ。他は丸頭状の口縁部が緩く開く器形で、胎土等から堀之内Ⅰ式でも古相を帯びている。

第2類（第88図7～10）

口縁部から直接条線文を施文するものを一括する。全面的に縦位に粗く施文するもの（6・9）、帯状に施文するもの（8）、蛇行条線を帯状に施文するもの（10）などがある。比較的器壁が薄く、整形などは堀之内Ⅰ式の新しい段階以降の特徴を持つものが多い。

第3類（第88図11～52）

D群土器の胴部破片を一括する。

第1種（11～23）

条線をモチーフ状に施文するものである。懸垂状と斜行状を組み合わせて肋骨文状を構成するもの（11～18）、鋸歯状に施文するもの（19～22）、格子目状に施文するもの（23）、蛇行状もしくは曲線状に施文するもの（24～29）などがある。24は条線文の菱形状区画内に蛇行条線を垂下するものである。曲線的なモチーフを施文するものは、器壁が薄く器面の丁寧な整形等から、堀之内Ⅰ式の新しい段階か、堀之内Ⅱ式に比定されるものと思われる。B群第5類第3種の中にも曲線的な条線施文土器が分類されているが、本種との識別は難しく、同種のものを分類している可能性もある。他の大半の土器群は比較的器壁の厚いもので、堀之内Ⅰ式に比定されるものと思われる。

第2種（30～52）

直線的な条線を施文するものである。帯状の条線をやや間隔を空け気味に垂下するもの（30～39・41）と、全面的に粗く施文するもの（42～52）がある。全面的に施文する土器群は器壁が薄く、新相を帯びる傾向にある。

E群土器

壺形土器、注口土器、浅鉢などの深鉢形土器以外の土器群を一括する。

第1類（第85図26～29・43）

頸部が強く括れ、胴部が大きく張る壺形を呈し、口縁部裏面に蓋受けの稜が付くものである。26は波状口縁を呈し、両側に円形の盲孔を持つ円形の透かしを設け、口縁部を沈線で連結する。頸部には低隆帯を垂下して楕円形の区画を施す。内面には、あまり強い稜を持たない。27は口縁部が無文帯となり、内面に強い稜を持つ。28は4単位で配置されると思われる把手である。29は口縁部を無文帯とし、頸部を隆帯で区画し、内面に突出した蓋受け状の稜を持つ。28・29は綱取式系の要素が強い。43は口縁が内傾し、体部が球形状を呈する壺形土器の口縁部破片である。

第2類（第85図30～40）

注口土器と思われる破片を一括する。30～38は胴部がソロバン玉状の、39・40は球形状の注口土器と思われる。

第1種（32・34）

堀之内Ⅰ式に比定される注口土器である。32・34は胴部を隆帯で区画し、頸部から刻み隆帯を垂下して文様帯を縦位区画するものである。34は胴部区画隆帯上にも刺突文を施す。32・34とも無地文上に沈線のモチーフを描くもので、32は渦巻文を横位に連結するモチーフ構成を採る。

第2種（30・31・33・35～40）

堀之内Ⅱ式に比定される注口土器である。30は地文に縄文を施文し、口縁部を刻み隆帯で区画し

て、体部の単節ＬＲ地文上に区画文を描いている。31・33は胴部を隆帯で区画し、31は上半部に、33は下半部に地文縄文単節ＬＲを施文する。

35～37は磨消縄文でモチーフを描き、38は多条沈線で斜位に連結するモチーフを描く。

39・40は胴部が球形に近いもので、39は多重沈線の渦巻文、40は条線で渦巻文を描くものと思われる。

第３類（第91図26・28）

ミニチュア土器である。26は深鉢形土器の底部破片であるが、縦位の沈線懸垂文の間に、蛇行沈線を配している。底径は5.2㎝、器高2.4㎝を測る。28は無文の小型の鉢である。

第４類（第85図41・42）

浅鉢を一括する。41は大きな筒状の把手を持ち、把手の２個の盲孔を繋いで、口唇部に沈線を廻らしている。42は口縁部内面に円形貼付文を施すもので、表面は無文である。

第５類（第85図44）

蓋である。円形というよりもやや楕円形を呈し、内面の湾曲する浅い椀状を呈する。長軸上に２穴対の円孔を穿ち、円孔の周りがやや円形貼付状に隆起する。この円孔を中心として浅い沈線で曲線状のモチーフを施文しており、見方によれば両生類の顔のようにも見える。

Ｆ群土器

縄文施文のみの土器群を一括する。

第１類（第89図１～７）

器壁が厚く、やや外反気味に開く器形の深鉢形土器で、外反が強いもの（１）、口唇部が先細り状のもの（２）、口唇部が角頭状のもの（３～５）、口唇部が丸頭状のもの（６・７）などがある。地文は節の大きな単節ＬＲを施文するもの（１・３・５～７）が多く、無節縄文も少量ある。４は無節Ｌをランダムに施文するものである。堀之内Ｉ式の古段階に比定されるものである。

第２類（８～10）

器壁がやや薄くなり、口縁部の外反もやや強くなる土器群で、器面の整形がやや丁寧になるものである。堀之内Ｉ式でも新しい段階に比定されるものである。

８・９は同一個体と思われ、角頭状の口縁部が外反する器形を呈し、地文に単節ＬＲを斜位に施文する。10は節の細かな単節ＬＲを横位施文する。

第３類（第89図11～28）

口縁部内面に沈線を廻らす土器群を一括する。

第１種（11・12）

口縁部が緩く外反気味に開き、口縁部内外面に沈線を廻らすものである。肥厚口唇部に沈線を廻らして頸部に縄文を施文するＡ群第３類の系統下にあり、その退化した土器と判断される。しかし、この種の土器は胴部に区画や他の文様を持たず、縄文のみ施文することから、Ｆ群として分類されるものである。11は単節ＲＬ、12無節Ｌを施文するもので、堀之内Ｉ式の新しい段階から、Ⅱ式にかけての時期に比定されよう。

第２種（13・15～19）

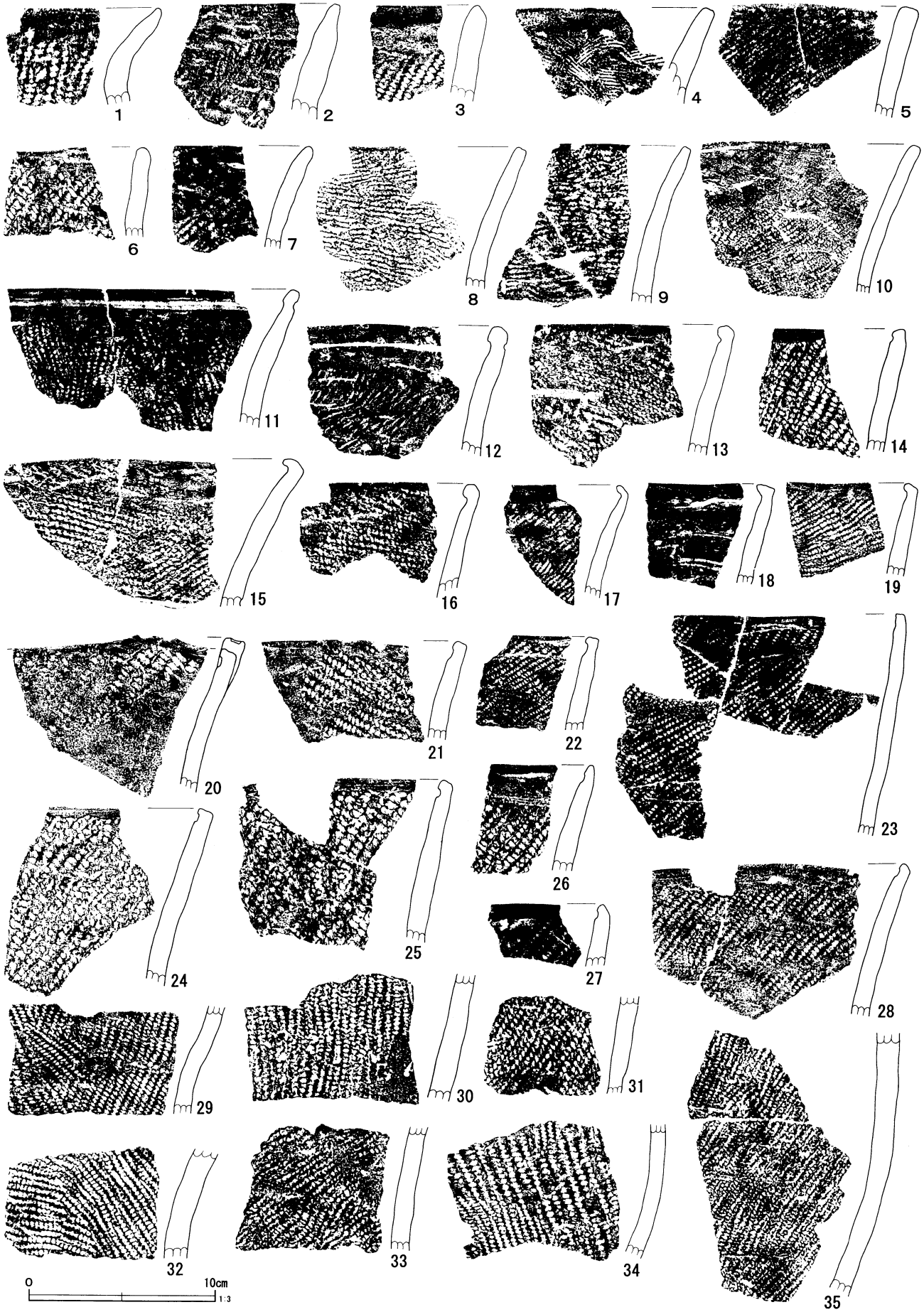
積み上げ整形の口縁部裏面に沈線を施文するもので、口縁部が直線的に開き、バケツ状の器形を呈するものが多い。15・17～19は口唇部の積み上げ整形部分が突出している。地文縄文は比較的節の小さいものが多く、13・15・16は単節ＲＬ、17～19が単節ＬＲを施文する。堀之内Ⅱ式の古段階のものが多く含まれるものと思われる。

第３種（14・20～28）

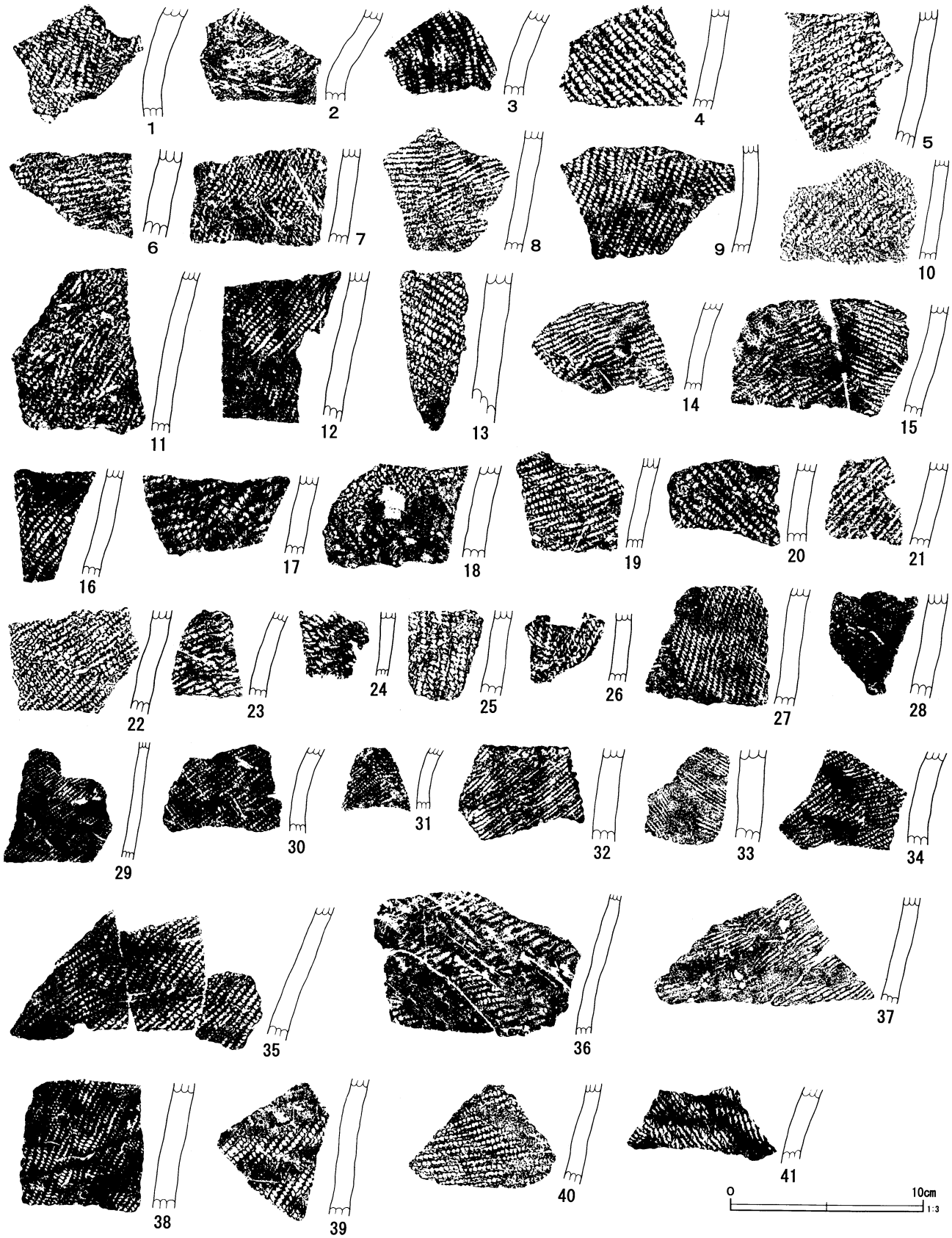
角頭上の口唇部裏面に、比較的幅広の沈線ないしは凹線の沈線を施文するもので、縄文の節が比較的大きくなるものが多い。地文縄文は殆どが単節ＬＲで、21はＲＬである。堀之内Ⅱ式の新段階のものを多く含むものと思われる。

第４種（第89図29～35、第90図１～41）

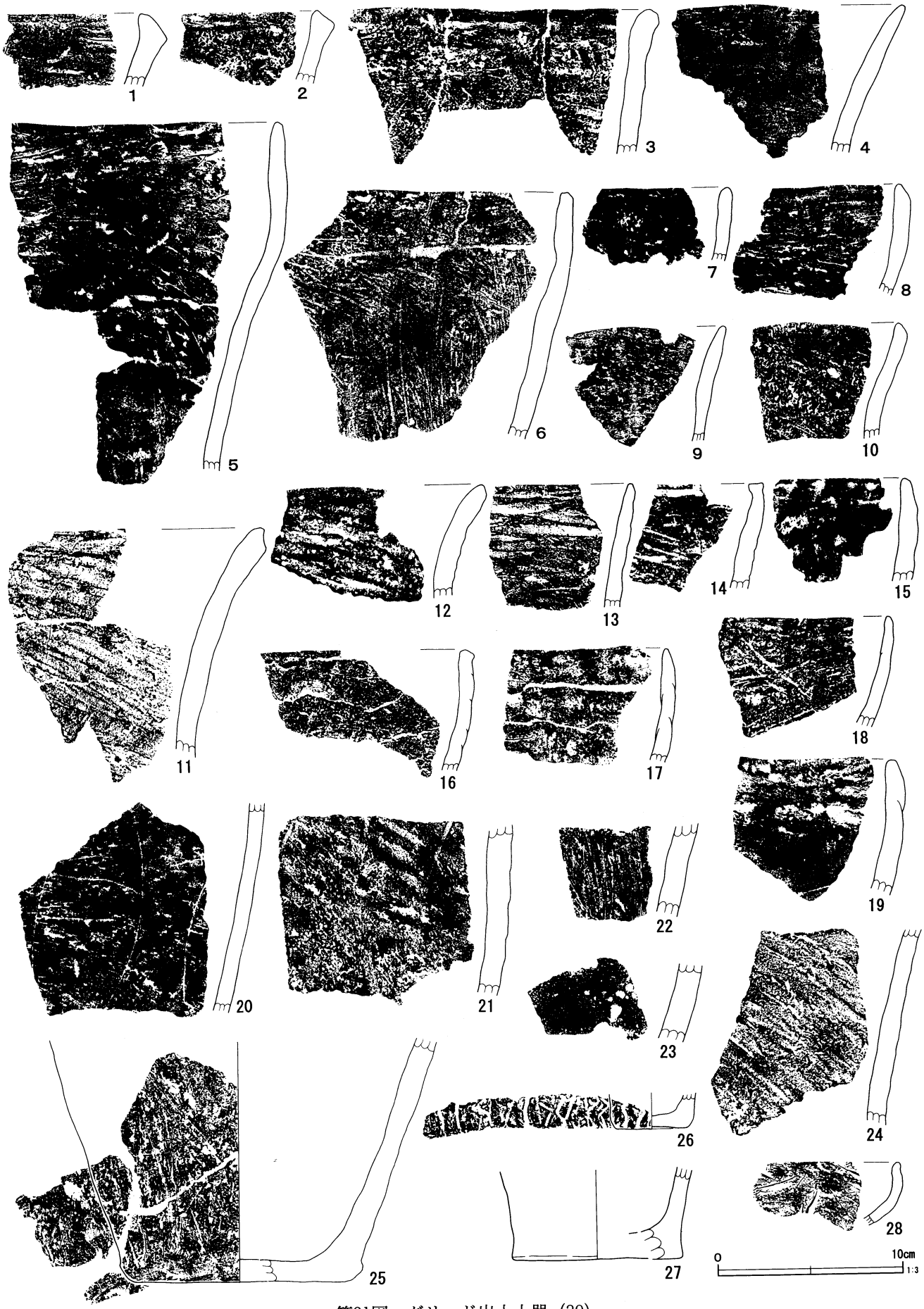
縄文のみ施文する胴部破片を一括する。第89図29～35、第90図１～10は縄文原体が比較的大きい



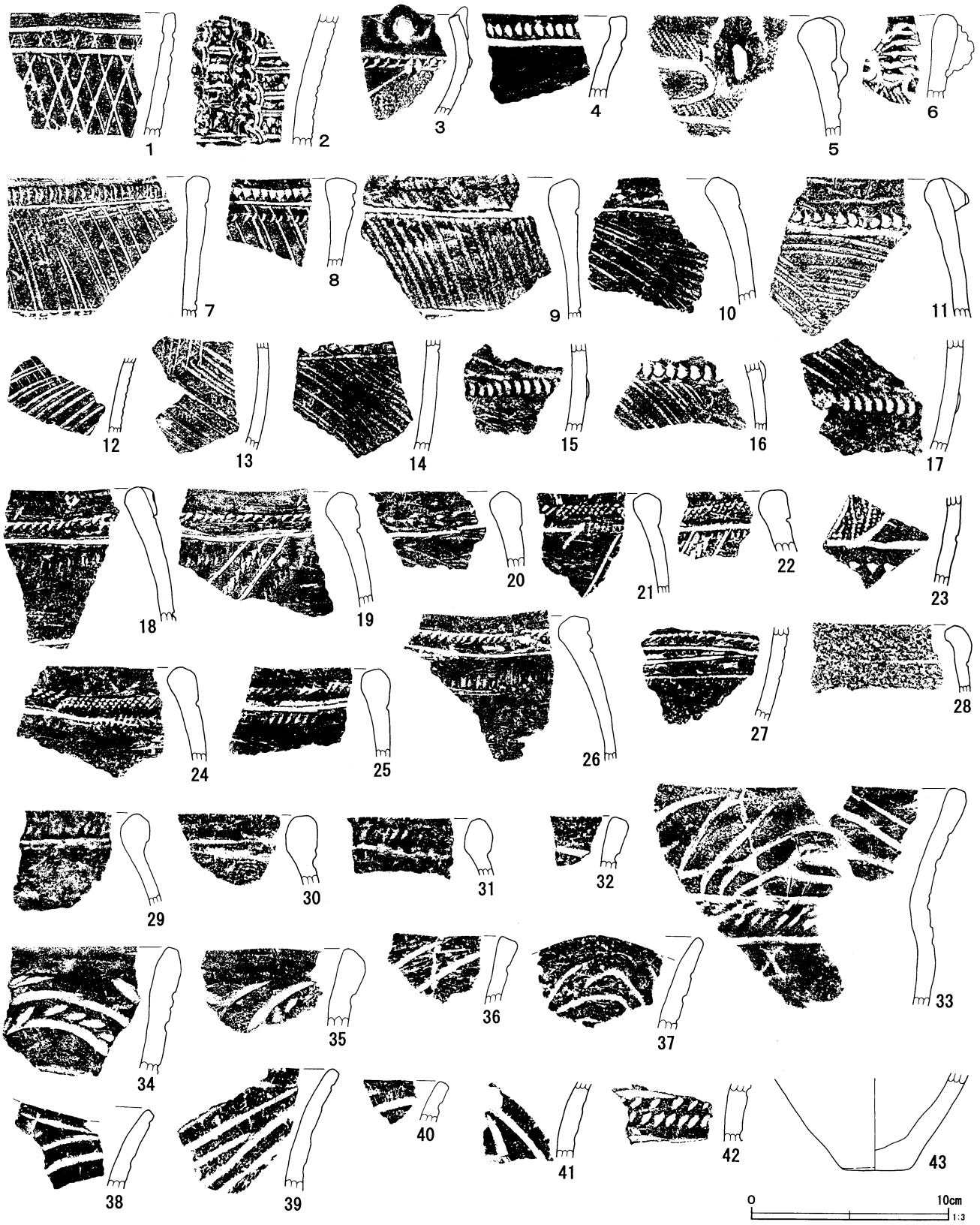
第89図　グリッド出土土器（28）



第90図　グリッド出土土器（29）



第91図　グリッド出土土器（30）



第92図　グリッド出土土器（31）

もので、器形に変化も見られる。地文は単節ＬＲが殆どで、施文方向を変えているものもある。

11～28は明瞭ではないが、やや縄文の節が小さくなる傾向にあり、原体は13・20が単節ＲＬ、他はＬＲである。12は付加状のようであるが、太細の撚り合わせ原体である。

29～34は節の細かな縄文を施文するもので、29～31は器壁も薄くなる。地文縄文は単節ＬＲが多く、32は無節Ｌ、33は無節Ｒである。

35～41は帯状にやや間隔を空けて縄文を施文するものである。原体は35・36・38～40は単節ＬＲ、37は無節Ｌ、41は無節Ｒである。

Ｇ群土器

無文土器を一括する。

第１類（第91図１～３）

肥厚する口縁部が外反するもので、１・２は外削状の肥厚口縁部が緩く外反する器形を呈し、器面はよく磨かれている。３は丸頭状の口縁部が肥厚してやや外反する器形である。

第２類（第91図４～10）

肥厚しない口縁部が、外反もしくは内湾しながら開く器形を呈するものである。器面は比較的良く整形されており、４・９・10は口縁部が外反、５～８は内湾しながら開く。

第３類（第91図11～14）

器面に横位から斜位の粗い整形を施す無文土器である。11・12は強く外反する器形を呈し、13は直線的に、14は内湾気味に開く器形を呈する。

第４類（第91図15～19）

内湾口縁が開く器形を呈し、輪積み痕を明瞭に残す、晩期の粗製無文土器を一括する。いずれも指頭整形痕を残し、輪積み痕が顕著である。

第５類（第65図５・６、第91図20～25・27）

無文の胴部破片と底部破片を一括する。胴部破片の20・22・23は器面の整形が丁寧で、21・24は粗い整形を施す。

底部は丸味を帯びるもの（第65図６、第91図25）と、やや張り出しているもの（第65図５、第91図27）がある。

第Ⅵ群土器

後期後半から晩期にかけての土器群を一括する。

第１類（第67図２、第92図１～４）

加曽利Ｂ式土器を一括する。１は格子目文を描く加曽利Ｂ１式で、２は平行沈線を縦位のコンパス文で区切るモチーフを持つ、Ｂ１式新段階の胴部破片である。３は突起の付く無文口縁部が内湾し、胴部が括れる加曽利Ｂ２式土器である。

第67図２、第92図４は同一個体であり、頸部で括れ、胴部に最大径を持つ加曽利Ｂ３式土器である。口縁部と頸部を刺突列で区画し、胴部に磨消縄文のレンズ状文を連結する。

第２類（第92図5～17）

後期安行式土器群を一括する。５・６は帯縄文系平縁の深鉢土器で、５は内傾する口縁部に縦位の刻みを持つ貼付文を施す。６は波状縁深鉢土器で横位の刻みを持つ貼付文を施す。いずれも安行２～３ａ式に位置付けられる。

口縁部に沈線を施文する紐線文系の土器群で、７・８安行１式、９～17は安行２～３ａ式に比定される。

第３類（第67図３、第92図18～43）

晩期安行式土器を一括する。18～27は地文沈線がなくなり、細かな刺突文を施文する紐線文系土器である。安行３ａ式に比定される。28～31は口縁部が肥厚するもので、３ｂ式と思われる。

第67図３は列点文を施さない安行３ｃ式で、内湾する口縁部に平行沈線の対弧文を描く。

第92図18～43は平縁と波状縁があるが、口縁部に弧線文や入り組み三叉文等を施文するもので、列点を施文するものは安行３ｃ式、列点のないものは安行3ｄ式に比定されよう。

第20表　グリッド出土遺物一覧表１

挿図	番号	グリッド	層位	図版
62	1	C3	Ⅲ	25-1
	2	G(-1)		25-2
	3	F0		25-3
	4	E0		25-4
	5	E0		25-5
	6	E1		25-6
	7	E0		
	8	E1		
	9	E0		
	10	G(-1)		25-7
	11	表採		
	12	E0		25-8
	13	E0		
	14	C1		25-9
	15	F4	Ⅲb	25-10
	16	D3		25-11
	17	F4		25-12
	18	C3		25-13
	19	B1	Ⅱb	
	20	A3		
	21	E3		25-14
	22	B3	Ⅱb	
	23	F3		
	24	F0		
	25	B2		
	26	B2	Ⅱb	
	27	B3	Ⅲb	
	28	C2	Ⅱ	
	29	C2	Ⅱb	
	30	B2		25-15
	31	C2	Ⅱ	25-16
	32	E4	Ⅲb	
	33	D2	Ⅱb	
	34	B2	Ⅲ	
	35	C4		
	36	B3	Ⅱb	
	37	B3	Ⅱb	
	38	B3	Ⅲb	
	39	B3	Ⅲb	
	40	B3	Ⅲb	
	41	D3	Ⅱb	
	42	B2	Ⅱ	
	43	B2		
	44	C2	Ⅱ	25-17
	45	B2	Ⅱb	
	46	B2	Ⅲ	
	47	B2	Ⅲ	
	48	B2		
	49	B2	Ⅲ	
	50	C2	Ⅱ	
	51	表採		25-18
	52	D4	Ⅲb	25-19
	53	E4		25-20
	54	表採		
	55	G(-1)		
	56	G0		25-21
	57	G(-1)		25-22
	58	G(-1)		25-23
	59	F0		
	60	A1	Ⅲa	25-24
	61	F1		
63	1	E3	Ⅲb	25-25
	2	E3	Ⅱ	25-26
	3	B2	Ⅲ	25-27
	4	C2	Ⅱb	25-28
	5	G1		25-29
	6	A3		
	7	B3	Ⅱb	
	8	C2	Ⅱ	

挿図	番号	グリッド	層位	図版
63	9	C2	Ⅲ	25-31
	10	D2	Ⅱb	25-36
	11	D2	Ⅱ	25-35
	12	G1		25-30
	13	G0		
	14	C2	Ⅱb	25-33
	15	C2	Ⅲa	
	16	B3	Ⅲb	25-32
	17	C1	Ⅱa	
	18	C1	Ⅱ	
	19	B3	Ⅲb	25-34
	20	D3	Ⅲa	
	21	B2	Ⅲ	
	22	C1		25-37
	23	G1		25-38
	24	C3	Ⅲ	25-40
	25	B2	Ⅲ	25-41
	26	表採		25-39
	27	D4	Ⅲb	25-42
	28	E4	Ⅲb	25-43
	29	E3	Ⅱb	25-44
	30	C2	Ⅲb	25-45
	31	B3	Ⅱb	
64	1	D4	Ⅲb	16-1
	2	D3	Ⅲb	16-2
65	1	D2	Ⅱb	16-3
	2	B3-42	Ⅱb	16-4
	3	B3	Ⅱb～Ⅲ	16-5
	4	E4	Ⅲa・b	
	5	E4	Ⅲa・b	
	6	C2・D2	Ⅱb	16-6
	7			17-1
66	1	C2・D2	Ⅱb	
	2	D4	Ⅲb	
	3	D4	Ⅲb	17-2
	4	E3・4	Ⅲb	17-3
	5	D4	Ⅲb	17-4
	6	B2-90	Ⅱb・Ⅲb	17-5
	7			
67	1	D3	Ⅲb	
	2	B2	Ⅲb	17-6
	3	F3		
68	1	E3	Ⅲ	26-1
	2	C1	Ⅱa	26-2
	3	表採		
	4	B1	Ⅰb	
	5	C2	Ⅲ	26-3
	6	B1	Ⅲ	
	7	C2	Ⅱ	26-4
	8	C2	Ⅲb	26-5
	9	A2		
	10	G0		
	11	C1	Ⅱ	26-6
	12	F3		26-7
	13	C1	Ⅱ	
	14	B3		26-8
	15	C1	Ⅱ	26-9
	16	B2	Ⅱb	
	17	D3	Ⅱb	26-10
	18	E4		
	19	F2		
	20	D3	Ⅱ	26-11
	21	表採		26-12
	22	D4	Ⅲb	
	23	D2	Ⅱb	26-13
	24	E3	Ⅲb	
	25	E2	Ⅲ	
	26	C2	Ⅲ	
	27	C4		

挿図	番号	グリッド	層位	図版
68	28	B3		
	29	表採		
	30	B4	Ⅲb	
	31	F3	Ⅱb	26-14
	32	B3	Ⅲ	
	33	B3	Ⅱb	26-16
	34	B3	Ⅲb	26-15
	35	E4	Ⅲb	26-17
	36	C2		26-18
	37	E4	Ⅲb	26-19
	38	D3	Ⅱb	
	39	D2	Ⅱb	
	40	C2	Ⅲ	
	41	B2	Ⅲa	
	42	C3		
69	1	C3	Ⅲ	26-20
	2	B3	Ⅱb	26-21
	3	D4	Ⅲb	26-22
	4	C2	Ⅱ	
	5	B3		26-23
	6	D4		
	7	F4		26-24
	8	B2		
	9	C2	Ⅲb	
	10	B3		26-25
	11	C2	Ⅱ	
	12	B3	Ⅱb	26-28
	13	C2	Ⅲb	26-29
	14	C1	Ⅱ	
	15	D2	Ⅱb	26-30
	16	C1	Ⅱ	26-26
	17	C2	Ⅱ	26-27
	18	B4		
	19	B2		
	20	C2	Ⅱb	
	21	D3	Ⅱ	
	22	C1	Ⅱa	
	23	B4		
	24	B2	Ⅲ	26-35
	25	F2		
	26	C4		26-34
	27	D4		26-31
	28	D3	Ⅱb	26-32
	29	C3	Ⅲ	
	30	D4	Ⅲb	
	31	B3		
	32	C2	Ⅱ	
	33	B3	Ⅲ	
	34	B4		26-33
	35	B2		
	36	C2	Ⅲb	
	37	B3	Ⅲ	
	38	C2	Ⅲb	
	39	E3	Ⅱb	26-37
	40	C2	Ⅱ	26-36
	41	C1	Ⅱa	
	42	C2	Ⅲb	26-38
	43	B3	Ⅲb	26-39
	44	B2	Ⅱ	
	45	B3	Ⅲb	
	46	C2	Ⅲ	
	47	C4		
	48	B3		
	49	B4		
	50	E3	Ⅲb	
	51	D4	Ⅱb	26-40
	52	C3		
70	1	D4	Ⅱb	27-1
	2	C4		27-2

第21表　グリッド出土遺物一覧表２

挿図	番号	グリッド	層位	図版
70	3	C1		27-3
	4	B2	Ⅲ	27-4
	5	E4	Ⅲb	27-5
	6	B2	Ⅲ	
	7	B2	Ⅲ	27-7
	8	D2	Ⅲ	
	9	C1	Ⅱa	
	10	C2	Ⅲa	
	11	C2	Ⅲb	27-6
	12	B3	Ⅲ	
	13	E4		
	14	F4	Ⅲb	
	15	G1		
	16	C1	Ⅱ	
	17	B3	Ⅲb	
	18	C2	Ⅱ	27-8
	19	B4		27-9
	20	F4	Ⅲb	
	21	C1	Ⅱ	27-11
	22	G1		27-10
	23	D4	Ⅲb	27-15
	24	B2		27-12
	25	C2	Ⅱ	
	26	B3	Ⅱb	
	27	C4	Ⅲ	
	28	C1	Ⅱa	
	29	B2	Ⅱ	27-14
	30	C2	Ⅲb	
	31	C2	Ⅱ	27-13
	32	C1	Ⅱ	
	33	B3	Ⅲ	
	34	C2	Ⅲ	
	35	B3	Ⅲb	
	36	E3		
	37	D3		
	38	C2	Ⅲ	
	39	B2	Ⅱ	
71	1	D4	Ⅲb	27-16
	2	B3	Ⅱb	27-17
	3	C3		27-18
	4	B3	Ⅱ	27-19
	5	E3	Ⅱb	27-20
	6	G0		
	7	A2	Ⅲ	
	8	C1	Ⅱ	
	9	D4		27-21
	10	C3	Ⅱb	27-22
	11	B2		
	12	B3	Ⅱb	27-23
	13	C2	Ⅲb	
	14	B2	Ⅱb	27-24
	15	C3		27-25
	16	B3	Ⅱb	
	17	C4	Ⅲb	
	18	C2	Ⅳb	
	19	D2	Ⅱb	
	20	B4		
	21	D4		27-26
	22	B3	Ⅲ	
	23	B3	Ⅱb	27-27
	24	B4	Ⅲb	
	25	C3		
	26	E3	Ⅱb	
	27	D4	Ⅲb	27-28
	28	B3	Ⅱ	
	29	B3	Ⅱ	
	30	D4	Ⅲb	
	31	A2	Ⅲ	
	32	B3	Ⅲ	

挿図	番号	グリッド	層位	図版
71	33	C2	Ⅲb	
	34	表採		
	35	A3	Ⅱb	27-29
	36	E4	Ⅲb	
	37	C4	Ⅲ	27-30
	38	B3	Ⅱb	28-1
	39	B3	Ⅱb	28-2
	40	B4		28-3
	41	D4	Ⅲb	28-4
	42	B2	Ⅱb	
	43	C3		28-5
72	1	B3		28-6
	2	A1	Ⅲ	28-7
	3	B2	Ⅳ	
	4	B3	Ⅲ	28-8
	5	F3	Ⅲb	28-9
	6	B3	Ⅲb	28-11
	7	B3	Ⅱb	28-10
	8	B3		28-12
	9	E4		28-13
	10	D3	Ⅱb	28-14
	11	C2	Ⅱ	
	12	F4		28-15
	13	D4	Ⅱb	28-16
	14	C4	Ⅲb	28-17
	15	B3	Ⅱb	28-18
	16	B3	Ⅲ	28-19
	17	B3	Ⅱb	28-20
	18	D4	Ⅲb	28-21
	19	D3	Ⅱb	28-22
	20	D4	Ⅲb	28-23
	21	D4		28-24
	22	D4		28-25
	23	D3	Ⅲb	28-26
	24	D3	Ⅱb	28-27
	25	E4	Ⅱb	28-31
	26	D4		28-32
	27	B4		28-28
	28	B3	Ⅲ	28-29
	29	E4	Ⅲa	28-30
	30	D4	Ⅲ	29-1
	31	B4		29-2
	32	B3	Ⅱb	29-3
	33	E4	Ⅲb	29-4
	34	B3	Ⅲ	29-6
	35	D4	Ⅲb	29-5
	36	D3	Ⅲa	29-7
	37	A3	Ⅲb	29-8
	38	B3	Ⅲb	29-9
	39	B3		
73	1	D3	Ⅲb	29-10
	2	F4	Ⅲb	29-11
	3	B3	Ⅱb	
	4	D4	Ⅲb	
	5	C3	Ⅱb	
	6	B3	Ⅲb	29-13
	7	B3	Ⅱb	29-14
	8	B3	Ⅱb	
	9	B3	Ⅱb	29-12
	10	B3	Ⅱb	29-15
	11	E3	Ⅱb	
	12	B3		29-17
	13	G (-1)		
	14	D4	Ⅲb	
	15	B2		29-16
	16	C3		
	17	E3	Ⅲb	29-18
	18	A3		29-19
	19	B3	Ⅱ	29-20

挿図	番号	グリッド	層位	図版
73	20	B3	Ⅱb	29-25
	21	B3	Ⅱ	29-21
	22	B3	Ⅲ	29-22
	23	E3	Ⅱb	29-23
	24	D4	Ⅲb	29-24
	25	E3	Ⅱb	29-26
	26	D3	Ⅲb	29-27
	27	C2	Ⅱb	29-28
	28	F4		
	29	E3	Ⅲa	29-31
	30	D3	Ⅱb	29-29
	31	B3	Ⅱb	
	32	B4	Ⅲb	29-32
	33	B3	Ⅲb	
	34	E3	Ⅲ	29-30
	35	E3	Ⅱ	29-33
	36	C2	Ⅱ	
	37	C4	Ⅲb	
	38	E3	Ⅲb	29-34
	39	D3	Ⅲb	29-35
	40	E3	Ⅲa	29-36
74	1	D2	Ⅱ	30-1
	2	B2	Ⅲ	30-2
	3	E4	Ⅲb	30-3
	4	D3	Ⅲb	30-4
	5	B3	Ⅱ	
	6	B3	Ⅱ	
	7	B3	Ⅱb	
	8	C3		
	9	B3	Ⅲ	
	10	E3		
	11	E3	Ⅱb	30-5
	12	B3	Ⅱb	30-7
	13	D4		30-10
	14	C2	Ⅱb	
	15	F3	Ⅲa	30-6
	16	C3		30-8
	17	D3	Ⅱb	30-11
	18	A3	Ⅱb	
	19	B2	Ⅱ	
	20	D4		
	21	D4		
	22	E4	Ⅲb	
	23	D4	Ⅲb	
	24	D3	Ⅲb	
	25	D3	Ⅱb	30-9
	26	D4		
	27	D2	Ⅱb	
	28	B3	Ⅲ	30-12
	29	D3	Ⅲb	
	30	B3	Ⅱb	
	31	C2		
	32	B2	Ⅲa	
	33	B3	Ⅲb	
	34	C3		
	35	D3	Ⅲa	30-13
	36	F3	Ⅲb	
	37	B2	Ⅳ	
	38	C2	Ⅱ	
	39	B4	Ⅲb	
	40	B3	Ⅲ	
	41	C3		30-14
	42	D4	Ⅲb	30-15
	43	B3	Ⅲb	30-16
	44	D4		30-17
	45	D2	Ⅱ	
	46	D3	Ⅲa	
	47	B2	Ⅱb	30-18
75	1	B2	Ⅱb	30-19

第22表　グリッド出土遺物一覧表３

挿図	番号	グリッド	層位	図版
75	2	F4		30-20
	3	D3	Ⅲa	
	4	D4		
	5	B4		
	6	表採		
	7	D3		
	8	D4	Ⅲb	
	9	B2	Ⅲ	
	10	B3		
	11	D2	Ⅲb	
	12	A3		30-22
	13	E3	Ⅱa	
	14	E3	Ⅱb	
	15	D3	Ⅲb	
	16	C3		
	17	B3	Ⅱb	
	18	B2		
	19	D2	Ⅲb	
	20	B3	Ⅲb	
	21	B3	Ⅱb	
	22	D4	Ⅲb	30-21
	23	B3	Ⅲ	
	24	B3	Ⅱ	
	25	A3	Ⅱb	
	26	C3		
	27	E4	Ⅲa	
	28	C3		30-23
	29	A3		
	30	G1		
	31	B4		
	32	B3		30-24
	33	E3	Ⅲ	30-25
76	1	C3		31-1
	2	B3	Ⅱb	31-2
	3	D3	Ⅲa	31-3
	4	D3	Ⅲb	
	5	E3	Ⅱb	31-4
	6	D3	Ⅲa	31-5
	7	D4		31-6
	8	B3	Ⅲb	31-7
	9	D3	Ⅲb	31-8
	10	D3	Ⅲa	31-9
	11	B3		31-10
	12	B2	Ⅲ	31-11
	13	B3	Ⅲb	31-12
	14	C3		31-13
	15	D3	Ⅱb	31-14
	16	B3	Ⅲb	
	17	B2		31-15
	18	B2	Ⅱa	
	19	C3	Ⅱb	31-16
	20	B2	Ⅱb	31-17
	21	B2		31-18
	22	F2		31-19
	23	E4	Ⅱb	31-20
	24	B3	Ⅱb	31-21
	25	D4	Ⅲb	31-22
	26	E3	Ⅱb	31-24
	27	E4	Ⅲb	
	28	B4		31-25
	29	C3		
	30	D4	Ⅲb	
	31	D4	Ⅲb	31-23
	32	D4	Ⅲb	31-26
	33	C3		31-28
	34	C2	Ⅲb	31-29
	35	表採		
	36	E4	Ⅲb	31-27
	37	D4	Ⅲb	
76	38	B3	Ⅱb	31-30
	39	B4	Ⅲb	31-32
	40	B3		31-31
	41	C3		
	42	B3	Ⅱb	31-33
	43	A3	Ⅱ	31-34
	44	D2	Ⅱb	31-35
	45	B3	Ⅱb	
	46	D3	Ⅱb	
	47	B4	Ⅲb	
	48	B2	Ⅲa	
	49	D4	Ⅲb	31-36
77	1	E4	Ⅲb	32-1
	2	E2	Ⅲ	32-2
	3	B3	Ⅲb	32-3
	4	D3	Ⅲa	32-4
	5	B3	Ⅲ	32-5
	6	B3	Ⅲb	32-6
	7	B3	Ⅲb	32-7
	8	B3	Ⅲb	32-8
	9	C3		32-9
	10	C4		32-10
	11	C2	Ⅱb	32-11
	12	D3	Ⅲb	32-12
	13	B2	Ⅱb	32-13
	14	B2	Ⅱb	32-14
	15	B3	Ⅱ	32-15
	16	A2	Ⅲ	
	17	D4	Ⅲb	32-16
	18	B2	Ⅲb	32-17
	19	B2	Ⅱa	32-18
	20	D3		32-19
	21	C4	Ⅲb	32-20
	22	F3	Ⅲb	32-21
	23	D3	Ⅲb	32-22
	24	C3		32-23
	25	B4	Ⅲb	32-24
	26	A2	Ⅲ	32-25
	27	D3	Ⅲa	
	28	C2		32-26
	29	B1	Ⅲ	32-27
	30	C4		
	31	D4	Ⅲb	32-34
	32	D4	Ⅲb	32-28
	33	B3	Ⅱ	32-29
	34	F4	Ⅲb	
	35	D4	Ⅲb	32-30
	36	D3	Ⅲb	
	37	B3	Ⅲb	
	38	D3	Ⅲb	
	39	B3	Ⅲ	
	40	B2	Ⅳ	
	41	B3	Ⅱ	
	42	D2	Ⅱb	32-31
	43	D4		32-32
	44	E4	Ⅲa	32-33
78	1	B3		33-1
	2	E3	Ⅱb	33-2
	3	D4	Ⅱb	
	4	B2	Ⅱb	
	5	B4		33-3
	6	E3	Ⅱb	33-4
	7	D3	Ⅱb	
	8	D2	Ⅲ	
	9	C2		
	10	D2	Ⅱb	
	11	F4		
	12	E4		33-5
	13	D3	Ⅱb	
78	14	D4	Ⅲb	
	15	D3		
	16	B2	Ⅱb	
	17	B4		
	18	C2	Ⅲa	
	19	D3	Ⅲb	33-7
	20	C2	Ⅲ	33-6
	21	D4		
	22	B1	Ⅱb	
	23	C3	Ⅲ	
	24	C4		
	25	C2	Ⅳb	
	26	E4		
	27	D3		33-8
	28	D2	Ⅱb	
	29	D3	Ⅲa	
	30	D2	Ⅱb	
	31	D3	Ⅲb	
	32	D3	Ⅱb	
	33	C2	Ⅳb	33-9
	34	D4	Ⅲb	33-10
	35	D4	Ⅲb	
	36	D4	Ⅲb	
	37	C2	Ⅲb	
	38	B4		
	39	B2	Ⅱb	
	40	A3	Ⅲb	
	41	E3	Ⅲ	
	42	D4		
	43	C2	Ⅱ	
	44	D4	Ⅲb	
	45	C2	Ⅱ	
	46	A3	Ⅱ	
	47	C4		
	48	B2	Ⅱb	
	49	C1	Ⅱa	
	50	G (-1)		33-11
	51	D3	Ⅲb	
	52	B2	Ⅱb	33-12
	53	C2	Ⅲ	
	54	C2	Ⅲ	33-13
79	1	B3	Ⅱb	33-14
	2	B3	Ⅱ	33-15
	3	D3		33-16
	4	E4	Ⅲa	33-17
	5	F4	Ⅲb	33-18
	6	F4	Ⅲb	33-19
	7	E3	Ⅱb	33-20
	8	C3	Ⅲ	33-21
	9	B3	Ⅱb	33-22
	10	D4	Ⅲb	
	11	E3	Ⅲb	33-23
	12	D3		33-24
	13	E3	Ⅲb	33-25
	14	A3	Ⅱ	33-27
	15	B2	Ⅲ	33-26
	16	A3	Ⅱb	33-30
	17	D4	Ⅲb	33-33
	18	D4	Ⅲb	33-31
	19	B2		33-32
	20	E4	Ⅲb	33-28
	21	D4	Ⅲb	33-29
	22	C2	Ⅲb	34-1
	23	E4		34-2
	24	D3	Ⅲb	34-3
	25	E3	Ⅱb	34-4
	26	D4	Ⅱb	
	27	C2		34-5
	28	C2	Ⅱ	34-6

第23表　グリッド出土遺物一覧表４

挿図	番号	グリッド	層位	図版
79	29	D4	Ⅱb	34-7
	30	E4	Ⅲb	34-8
	31	E3	Ⅱb	34-9
	32	D3	Ⅲb	34-10
	33	D3	Ⅱb	34-11
	34	E3		34-12
	35	D3	Ⅱb	34-13
	36	E3	Ⅲb	34-14
	37	B4		34-15
	38	B1		34-16
	39	D4	Ⅲb	34-17
	40	D4	Ⅱb	34-18
	41	E4		34-19
	42	D3	Ⅲa	34-20
	43	B4		34-21
	44	D4	Ⅱb	34-22
	45	C2	Ⅱ	34-23
80	1	A3	Ⅱ	34-24
	2	E4	Ⅲb	34-25
	3	E3	Ⅱb	
	4	E4	Ⅱb・Ⅲb	34-30
	5	D3	Ⅲb	34-26
	6	C2	Ⅲb	34-27
	7	E3		
	8	D3		34-28
	9	A3	Ⅱ	
	10	D3	Ⅱb	
	11	B2	Ⅲ	34-29
	12	D4	Ⅲb	34-31
	13	C4		
	14	C2	Ⅱ	
	15	B4		
	16	C2	Ⅲb	
	17	E2	Ⅲ	
	18	C2	Ⅱb	
	19	B2	Ⅱb	
	20	C3		
	21	B4	Ⅲb	34-32
	22	A3		
	23	C2	Ⅲ	34-34
	24	C2		
	25	B1		34-33
	26	D4	Ⅲb	
	27	B4	Ⅲb	
	28	C2	Ⅲ	
	29	D4	Ⅲb	
	30	C2		
	31	A3	Ⅱb	
	32	C2	Ⅲb	
	33	E2	Ⅲ	
	34	C2	Ⅲb	
	35	C4		
	36	D2	Ⅱb	
	37	F4	Ⅲb	
	38	D3	Ⅲb	
	39	B2	Ⅲ	
	40	C2	Ⅲa	
	41	E3	Ⅲa	
	42	E3	Ⅲa	34-35
	43	F4		34-36
	44	E3	Ⅲb	34-37
	45	E3	Ⅱb	34-38
	46	F4	Ⅲb	34-39
81	1	E3	Ⅱb	35-1
	2	C1	Ⅱa	35-2
	3	G1		35-3
	4	E0		35-4
	5	C2	Ⅱ	35-5
	6	D3	Ⅱb	35-6

挿図	番号	グリッド	層位	図版
81	7	B2	Ⅲ	
	8	A3		
	9	B2	Ⅱa	
	10	B4		
	11	D4	Ⅲb	
	12	D4	Ⅲb	35-7
	13	D3	Ⅲb	35-9
	14	B2	Ⅲ	35-10
	15	E4	Ⅱb	
	16	C4		
	17	D4	Ⅲb	
	18	D3	Ⅱb	
	19	C3	Ⅲb	35-8
	20	D3	Ⅲb	35-11
	21	C4	Ⅲb	35-12
	22	C1	Ⅱa	35-13
	23	E4		35-14
	24	C3	Ⅲ	35-15
	25	B2	Ⅲa	35-16
	26	A3	Ⅱ	35-17
	27	C2	Ⅲ	35-18
	28	D2	Ⅱb	35-19
	29	D4	Ⅲb	35-20
	30	C3	Ⅲ	
	31	D2	Ⅲb	35-21
	32	B3		35-22
	33	D2	Ⅲb	35-23
	34	F1		35-24
	35	B3	Ⅱ	
	36	D4		35-25
	37	E2	Ⅱb	35-26
	38	B4		35-27
	39	C2	Ⅱ	35-28
	40	B4		35-29
	41	B3	Ⅱ	35-30
	42	B4		35-31
	43	B3		35-32
	44	B2	Ⅲb	35-33
	45	C2	Ⅱ	35-35
	46	B3	Ⅲ	35-36
	47	C4		35-34
	48	D4	Ⅲb	35-37
	49	C4		35-38
82	1	D4		36-1
	2	B4		36-2
	3	D3	Ⅱb	36-3
	4	C2	Ⅲb	36-4
	5	C2		36-5
	6	B3	Ⅱb	36-6
	7	D3	Ⅲa	36-7
	8	B4		36-8
	9	E4	Ⅲa	36-9
	10	E4		36-11
	11	C3		36-10
	12	D4	Ⅲb	36-12
	13	E3	Ⅲ	
	14	C2	Ⅱb	
	15	D4	Ⅲb	
	16	B4		36-13
	17	B3		36-14
	18	B3	Ⅱb	
	19	D2	Ⅲ	
	20	E4	Ⅲb	
	21	F4	Ⅲb	
	22	D4	Ⅲb	
	23	D3	Ⅲb	36-15
	24	B4		36-16
	25	C4		36-17
	26	C2	Ⅱb	36-18

挿図	番号	グリッド	層位	図版
82	27	C2	Ⅱ	36-19
	28	C2		36-20
	29	B2	Ⅲ	36-21
	30	D4		36-22
	31	F3	Ⅲb	36-23
	32	B2	Ⅱb	36-24
	33	B3	Ⅱ	36-25
	34	E4	Ⅱb	36-26
	35	C2	Ⅱ	
	36	B3	Ⅱ	36-27
	37	D4		36-28
	38	D3		
	39	D3	Ⅱb	
	40	B2		
	41	D3	Ⅲb	
	42	C2	Ⅲb	
	43	B4	Ⅲb	
	44	B3		
	45	D2	Ⅲb	
	46	B2	Ⅳ	
	47	B2	Ⅲ	
	48	E3	Ⅲa	
	49	C2		
83	1	C3		36-29
	2	C2		36-33
	3	B3	Ⅲb	36-30
	4	D4	Ⅲb	36-31
	5	C2	Ⅱ	
	6	F3		36-32
	7	C2	Ⅲ	
	8	C1	Ⅱa	
	9	C2		
	10	B1	Ⅱb	
	11	E3	Ⅱb	
	12	B3	Ⅱb	
	13	C1	Ⅱa	
	14	C2	Ⅲb	
	15	B2	Ⅲ	36-34
	16	C1	Ⅱ	
	17	B3	Ⅱb	37-1
	18	B3		
	19	D4		37-2
	20	D3	Ⅲb	37-3
	21	B2		37-4
	22	E3	Ⅱ	37-5
	23	E4	Ⅲb	37-7
	24	F4	Ⅲb	37-6
	25	D2	Ⅱb	
	26	B3	Ⅲ	
	27	B3	Ⅲ	
	28	B3	Ⅲb	
	29	B3		
	30	C2		
	31	B2	Ⅱb	
	32	C4		37-9
	33	D4	Ⅲb	37-11
	34	E3	Ⅲ	37-8
	35	B1		
	36	C2	Ⅱ	
	37	E4	Ⅲa	37-10
	38	C4		
	39	D4	Ⅲb	37-12
	40	D4	Ⅱb	37-13
	41	B2	Ⅱb	
	42	E3	Ⅱ	
	43	C2	Ⅲb	
	44	C2	Ⅲ	
	45	B3	Ⅱ	37-14
	46	B2		37-15

第24表　グリッド出土遺物一覧表５

挿図	番号	グリッド	層位	図版
83	47	D3	Ⅲb	
	48	B2	Ⅲ	37-16
	49	E0		
84	1	C2	Ⅲ	37-17
	2	B3	Ⅲ	37-18
	3	D3	Ⅱb	37-19
	4	E3	Ⅱb	37-20
	5	E3	Ⅲb	37-21
	6	C2	Ⅲ	37-22
	7	E2	Ⅲ	37-23
	8	F4	Ⅲb	37-24
	9	C2	Ⅲ	37-25
	10	B1	Ⅱb	
	11	E4	Ⅲb	37-26
	12	D4	Ⅲb	37-27
	13	D2	Ⅱ	37-28
	14	E3	Ⅲb	37-29
	15	E4		37-34
	16	D2	Ⅱb	
	17	C3	Ⅲ	37-30
	18	D2	Ⅱ	37-31
	19	B1		37-32
	20	C2	Ⅱ	37-33
	21	D3	Ⅱb	
	22	D3	Ⅲb	38-1
	23	B2		38-2
	24	D4	Ⅱb	38-3
	25	B2	Ⅲ	38-4
	26	B1	Ⅱb・Ⅲ	38-5
	27	E3・4	Ⅲ	38-6
	28	D3	Ⅱb	38-7
	29	B2	Ⅲ	38-8
	30	D2	Ⅲb	38-9
	31	E4		38-14
	32	G (-1)		38-10
	33	B4		38-11
	34	B2	Ⅳ	38-13
	35	D3		38-16
	36	A2	Ⅲ	38-17
	37	E3		
	38	D2	Ⅲ	
	39	D3		38-15
	40	E3	Ⅱa	38-12
	41	C4	Ⅲb	
	42	B2	Ⅲ	38-19
	43	C4		
	44	B3	Ⅲb	
	45	C2	Ⅳb	38-18
	46	C3	Ⅲ	
	47	B2	Ⅱb	
85	1	C2	Ⅱ	38-20
	2	D3		38-21
	3	C2	Ⅳb	38-22
	4	D3	Ⅲa	38-23
	5	A3	Ⅱb	38-24
	6	D4	Ⅱb	
	7	D1	Ⅲb	
	8	B3	Ⅱb	
	9	B2	Ⅲ	
	10	D4		38-26
	11	E4	Ⅲb	38-28
	12	F4	Ⅲb	38-27
	13	C2	Ⅱ	
	14	A3		38-25
	15	B2	Ⅲ	
	16	C2	Ⅱ	38-31
	17	C2	Ⅱ・Ⅲb	38-30
	18	C2	Ⅱ	
	19	C2	Ⅲ	

挿図	番号	グリッド	層位	図版
85	20	D4	Ⅱb	38-29
	21	B4	Ⅲb	38-32
	22	E3	Ⅱ	38-33
	23	B3		38-34
	24	A3	Ⅲb	38-35
	25	D3	Ⅲa	38-36
	26	E4	Ⅲb	39-1
	27	B3	Ⅱ	39-2
	28	C2	Ⅱb	39-3
	29	D3	Ⅲa・b	39-4
	30	D3	Ⅱb	39-5
	31	B2		39-6
	32	B3	Ⅲb	39-7
	33	F2		39-8
	34	B3		39-10
	35	D4	Ⅲb	39-11
	36	B2		
	37	F4		39-9
	38	F3	Ⅲb	
	39	C2	Ⅱb	39-12
	40	F4		39-13
	41	B2		39-14
	42	B2	Ⅱb	39-15
	43	B2	Ⅲ	
	44	E3	Ⅱb	39-16
86	1	E4	Ⅲb	39-17
	2	B2		39-18
	3	G1		39-19
	4	E3		39-20
	5	D3		
	6	C3		39-21
	7	D4		39-22
	8	B3	Ⅱb	39-23
	9	B3		39-24
	10	B3	Ⅲ	39-25
	11	D4		39-26
	12	D4	Ⅲb	39-27
	13	E4		39-28
	14	E3	Ⅱb	
	15	E3	Ⅱb	39-29
	16	B3	Ⅱb	39-30
	17	C2		
	18	C2	Ⅳb	
	19	B2		40-1
	20	B2	Ⅱb	40-2
	21	G (-1)		40-3
	22	G (-1)		40-4
	23	D4		40-5
	24	B3		40-6
	25	E3	Ⅲa	40-7
	26	D3	Ⅲb	40-8
	27	D2	Ⅲb	40-9
	28	C2	Ⅲ	40-10
	29	C4		40-11
	30	B2	Ⅱb	40-12
	31	D3	Ⅲa	40-13
	32	E3	Ⅲb	40-14
	33	B2	Ⅲ	40-15
	34	B3	Ⅲb	40-16
	35	D4		40-17
	36	D3	Ⅲb	
	37	B2	Ⅳ	
	38	B3	Ⅱb	
	39	B2	Ⅲ	40-18
	40	C2	Ⅲ	
87	1	D3	Ⅱb	
	2	B3	Ⅱb	40-19
	3	B3	Ⅲ	40-20
	4	B3		40-21

挿図	番号	グリッド	層位	図版
87	5	F4		
	6	B4		
	7	B2	Ⅲ	40-22
	8	D2	Ⅱ	40-23
	9	B3	Ⅱ	
	10	B3	Ⅱ	40-24
	11	B3	Ⅲb	
	12	C2	Ⅲ	
	13	B3	Ⅲ	
	14	B2		
	15	C3	Ⅲ	40-25
	16	C3		40-26
	17	A3	Ⅱb	
	18	D3	Ⅲa	40-27
	19	B3	Ⅱ	40-28
	20	B3	Ⅱb	40-29
	21	D3	Ⅲa	40-30
	22	C2	Ⅲb	40-31
	23	D4		40-32
	24	B3	Ⅱb	40-33
	25	B2	Ⅳ	40-34
	26	F3	Ⅲb	
	27	D4	Ⅲb	40-35
	28	B3		41-1
	29	E2		41-2
	30	D4	Ⅲb	41-3
	31	E1	Ⅱa	41-4
	32	D3		41-5
	33	E3	Ⅱa	41-6
	34	C2	Ⅲ	41-7
	35	D3		41-8
	36	C2	Ⅱ	41-9
	37	E3	Ⅲ	41-10
	38	D4		41-12
	39	F4	Ⅲb	41-13
	40	E4	Ⅲb	41-11
	41	B3	Ⅱb	
	42	B4		
	43	B3	Ⅱb	41-14
	44	E4	Ⅲb	41-15
	45	C2	Ⅲ	
	46	E3	Ⅲb	
	47	C1	Ⅱ	
	48	B3	Ⅱ	
	49	D4	Ⅲb	41-16
	50	D3	Ⅲb	41-17
88	1	G (-1)		41-18
	2	C1	Ⅱa	41-19
	3	E4	Ⅲb	41-20
	4	C3		41-21
	5	C2		41-22
	6	B2	Ⅱ	
	7	D3	Ⅱb	41-23
	8	C2		41-24
	9	D3		41-25
	10	E3	Ⅱb	41-26
	11	D4	Ⅲb	41-27
	12	D4	Ⅲb	41-28
	13	B3		
	14	C2	Ⅱ	
	15	C3		
	16	E3	Ⅲa	
	17	B3	Ⅲb	
	18	E2	Ⅱb	
	19	B2		41-29
	20	C2	Ⅱ	41-30
	21	B2	Ⅲ	
	22	C2	Ⅱ	
	23	E4		

第25表　グリッド出土遺物一覧表６

挿図	番号	グリッド	層位	図版
88	24	F4		41-31
	25	E4	Ⅱb	41-32
	26	B4		
	27	D3		41-33
	28	B2		
	29	B2		
	30	D4		
	31	B2	Ⅳ	
	32	E3	Ⅲb	41-34
	33	D3	Ⅲb	41-35
	34	B3	Ⅱ	
	35	B2	Ⅳ	
	36	A2	Ⅲ	
	37	B3	Ⅱ	
	38	B3	Ⅱ	41-36
	39	B3	Ⅱb	
	40	B4		
	41	C2		
	42	B4		
	43	B2	Ⅱb	
	44	F4		
	45	B3	Ⅱ	
	46	C3	Ⅱb	
	47	B3	Ⅲ	
	48	C1	Ⅱ	
	49	D3	Ⅱb	41-37
	50	B3	Ⅲ	41-38
	51	C3	Ⅱ	
	52	B4	Ⅲb	41-39
89	1	B3	Ⅲ	42-1
	2	B1		42-2
	3	D3		42-3
	4	B2	Ⅲ	42-4
	5	C2	Ⅳb	42-5
	6	D2	Ⅱ	42-6
	7	C2	Ⅲ	42-7
	8	E3	Ⅱb	42-8
	9	D3	Ⅲa	
	10	E4	Ⅲb	
	11	E2･3	Ⅲ	
	12	E2	Ⅲ	
	13	D3	Ⅱb	42-9
	14	C3	Ⅲ	
	15	B2	Ⅲ	
	16	B3	Ⅱb	
	17	D3		
	18	B3		
	19	B2	Ⅳ	
	20	E4	Ⅲb	42-11
	21	E3	Ⅲb	
	22	B3	Ⅲb	
	23	C3	Ⅱb	
	24	E4	Ⅲb	42-10
	25	D3	Ⅲa	42-12
	26	E2	Ⅱb	42-13
	27	B3		
	28	D4		42-14
	29	E2	Ⅲ	42-16
	30	D4	Ⅲb	42-17
	31	B3	Ⅲb	
	32	C3		42-18
	33	D4	Ⅲb	42-19
	34	E3	Ⅲb	
	35	D4	Ⅲb	42-15
90	1	B3	Ⅲ	
	2	表採		
	3	C2		
	4	B2	Ⅲb	

挿図	番号	グリッド	層位	図版
90	5	D2	Ⅱb	
	6	D2	Ⅲb	
	7	C4		
	8	C1	Ⅱ	
	9	E3	Ⅲb	
	10	E4		
	11	D4	Ⅲb	42-20
	12	C2	Ⅲa	
	13	B2	Ⅲ	
	14	B3	Ⅲ	
	15	B2	Ⅱ	
	16	C2	Ⅲb	
	17	B4	Ⅲb	
	18	B2	Ⅲ	
	19	C3	Ⅱb	
	20	B2	Ⅲa	
	21	E0		
	22	D2	Ⅱb	42-21
	23	D3		
	24	E0		
	25	D3		
	26	B2	Ⅲa	42-22
	27	B3	Ⅱb	
	28	C3	Ⅲb	
	29	C2	Ⅲb	42-23
	30	E4	Ⅲb	
	31	C1		
	32	B3	Ⅱb	
	33	B2	Ⅲ	
	34	A3	Ⅲb	
	35	C3		42-24
	36	B1		
	37	D3		42-25
	38	B3		
	39	A1	Ⅲa	42-26
	40	D2	Ⅱb	
	41	B4		42-27
91	1	C2		43-1
	2	C1	Ⅱ	43-2
	3	B2		43-3
	4	E3		
	5	B3		43-5
	6	D4		
	7	B3	Ⅲ	
	8	B3		
	9	B2	Ⅲ	
	10	B2	Ⅲ	43-4
	11	D4	Ⅲb	43-6
	12	B3	Ⅱb	
	13	A3	Ⅲ	
	14	B3	Ⅲb	
	15	C2		
	16	C1	Ⅱ	43-7
	17	F4		43-8
	18	C2		43-9
	19	C2		43-10
	20	E3	Ⅲb	
	21	B2	Ⅳ	
	22	C3	Ⅲ	
	23	D3		
	24	E4	Ⅲa	
	25	F3		
	26	B2		
	27	D2	Ⅲb	
	28	E4	Ⅱb	
92	1	E3	Ⅱb	43-11
	2	B3	Ⅲb	43-12
	3	E4	Ⅲb	43-13

挿図	番号	グリッド	層位	図版
92	4	B2		43-14
	5	E0		43-15
	6	E4		43-16
	7	E3	Ⅱb	43-17
	8	B3	Ⅲ	
	9	E4	Ⅲa	43-18
	10	B3	Ⅱb	
	11	D2	Ⅱb	43-19
	12	B4		
	13	E3	Ⅱb	
	14	B3	Ⅱb	
	15	B3	Ⅱb	
	16	E3	Ⅱb	43-24
	17	B3	Ⅱb	
	18	C3	Ⅲ	43-21
	19	D3		
	20	B2	Ⅱ	
	21	A3	Ⅱ	
	22	D2	Ⅱb	
	23	D2	Ⅱb	
	24	C2		
	25	B3	Ⅱb	
	26	C1		43-30
	27	C2	Ⅱ	
	28	E0		
	29	D3	Ⅱb	
	30	表採		
	31	E3	Ⅱ	
	32	B2		
	33	B2		43-27
	34	B2	Ⅲ	43-22
	35	B3	Ⅱb	43-25
	36	B2	Ⅱb	
	37	A3	Ⅱb	43-23
	38	A3	Ⅲb	
	39	B1	Ⅱb	43-26
	40	A1	Ⅲa	
	41	A3	Ⅱb	
	42	B2	Ⅲ	
	43	C3	Ⅲ	

（2）石器

石鏃（1～3）

1は平基有茎鏃である。茎部の先端を欠損する。2は基部の抉りが深い、小形の石鏃である。左脚の端部は衝撃剥離と思われる剥離が観察できる。3は右側を欠損する。基端部は緩い抉りが入ると思われるが、平基に近い大形の石鏃である。

石錐（4）

剥片を折断し、下端が尖る様に整形している。明瞭な調整加工はみられないが、石錐の未製品と思われる。

磨製石斧（5）

中形の定角式磨製石斧である。刃縁は直刃に近く、両凸刃で鎬は明確でない。

打製石斧（6～12）

6～11はいわゆる分銅形の打製石斧である。7・11は基部の抉りが深く、刃部と基端部が対称形になっている。7は刃縁及び基端が細かい調整加工によって円形に仕上げている。11は正面に自然面を大きく残し、刃縁側のみに細かい調整加工がみられる。8～10は基部の抉りが浅く、9・10は刃縁に最大幅がきて円刃を呈し、基端部はコの字状になっている。8は正面に大きく自然面を残し、10は正面及び裏面の一部に自然面を残している。12は上半部及び刃部を大きく欠損するため、全体の形状は不明であるが、両側縁に丁寧な調整加工が施されており、大形の短冊状になると思われる。

礫器（13・14）

13・14とも片刃の礫器である。13は亜角礫を素材に、裏面の平坦面から薄い部分に急角度の連続した剥離を施し、刃縁は直線状になっている。14は扁平な楕円礫を素材とし、端部に裏面方向から剥離が施されている。

磨石・敲石・凹石（15～27・29）

15・16・20は扁平の楕円礫を素材とし、正面及び裏面の平坦面に磨耗痕がみられる。また、15は両面、16・20は正面に浅い凹みがある。側面は16・20に擦痕状の条線、16は明確な敲打痕が観察できる。17は破損品で全体の形状は不明であるが、側面の敲打痕から16に近いものと思われる。

18・19は隅丸長方形の礫を素材に、複数の面に凹みを有している。19は正面及び裏面に深い凹みがあり、側縁に浅い凹みがみられる。21は円形に近い礫を素材に、側面に敲打痕が明瞭である。

22は横断面が方形に近い棒状礫を素材とし、下端部に敲打痕・擦痕が観察され、下位方向からの衝撃による剥離が入っている。基部は正面に線状の傷、裏面に浅い凹みがみられる。

23は上半部を欠損している。下端部に敲打痕及び下からの加撃による剥離面がみられる。

24～27は円形に近い礫を素材に、正面及び裏面があまり平坦にならず凹みを有しないものである。

25は上半部を欠損する。下端面は複数の磨耗面が観察でき、24～26・27とは異なる使われ方をしたのかもしれない。

29は横断面が三角形になっている。下半部を欠損するため、全体の形状は不明である。

砥石（33・34）

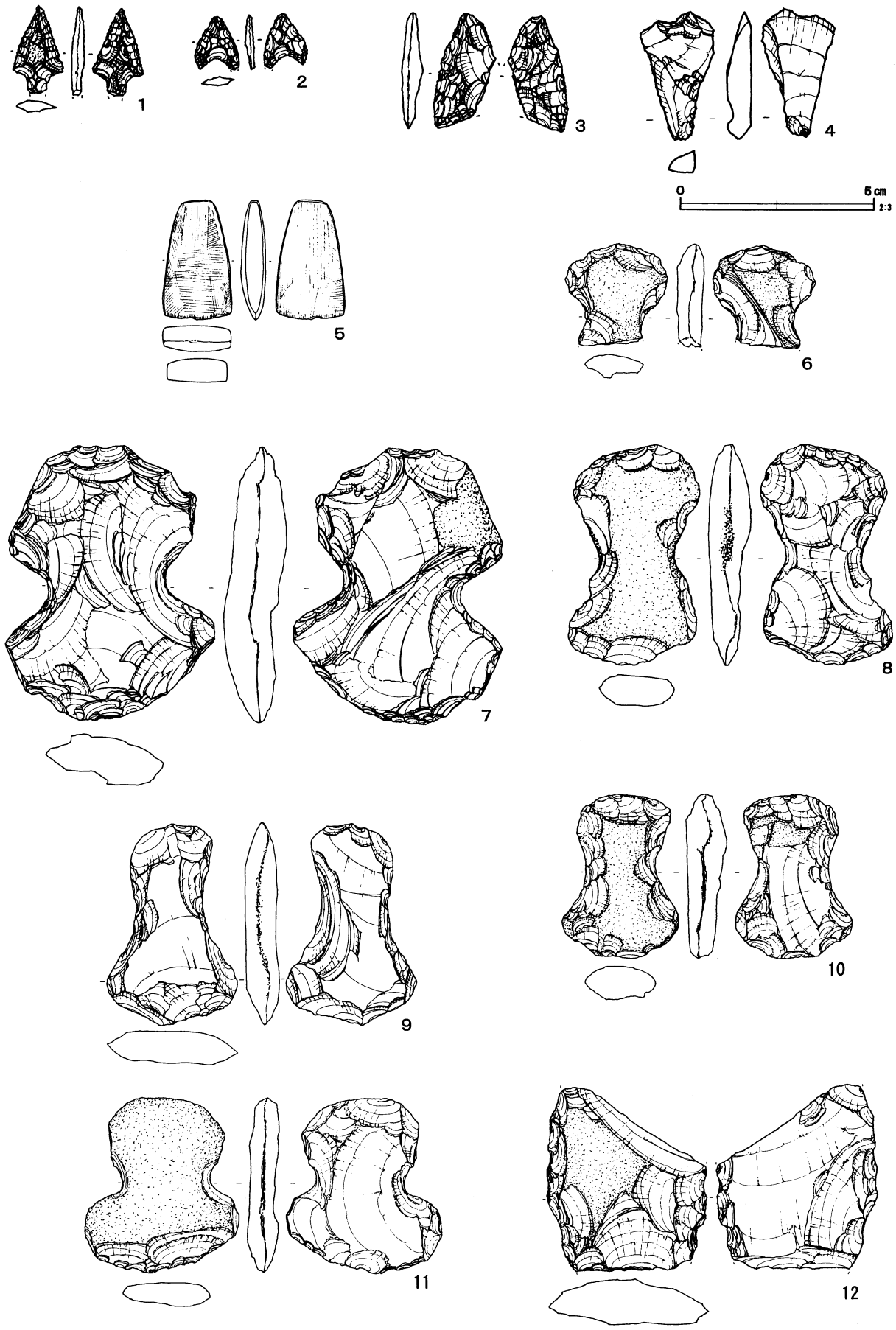
器面の荒い扁平礫が用いられ、側縁が磨耗によって石包丁状になっている。

石剣（35）

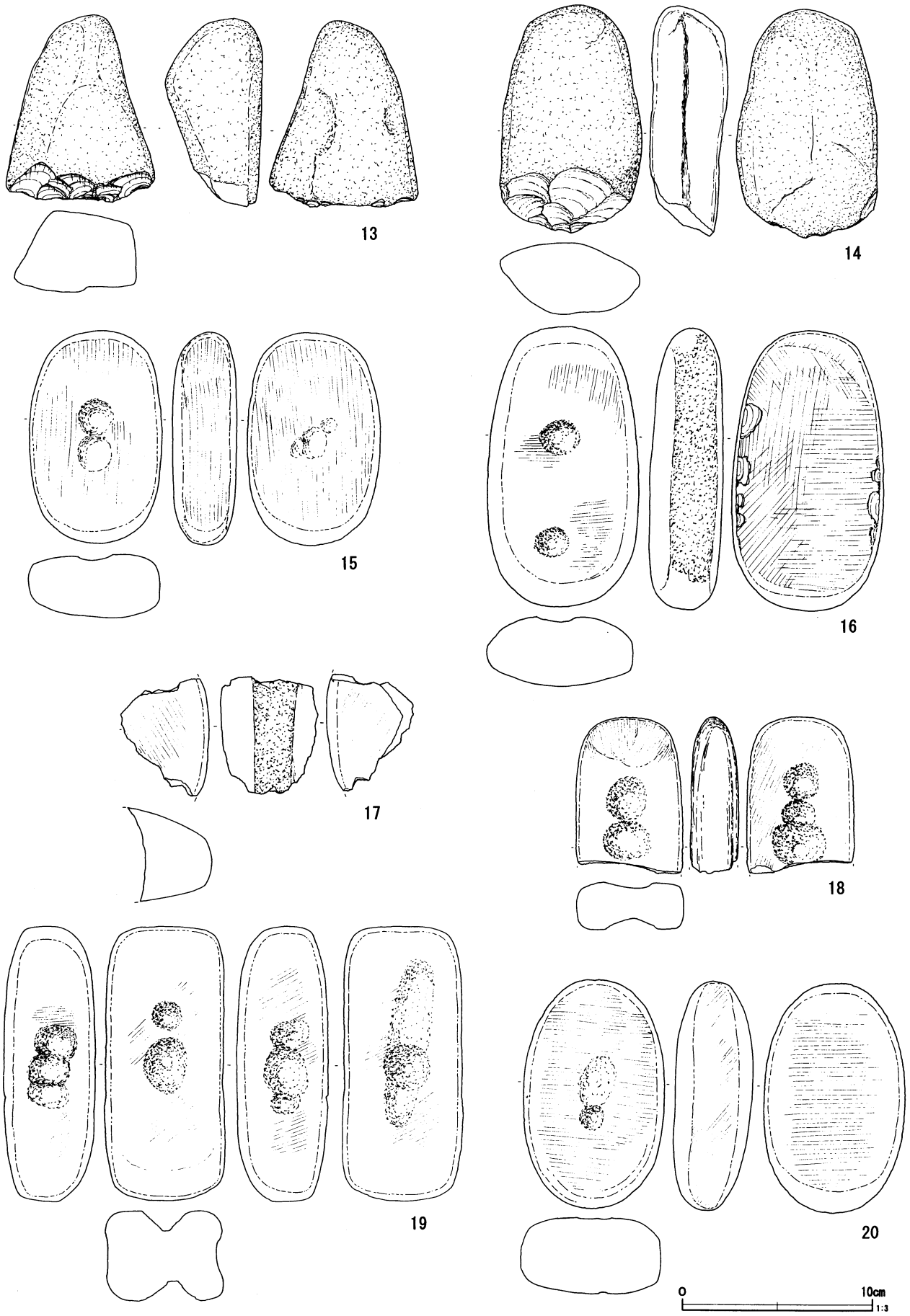
両端部を欠損している。扁平で側縁に稜を有することから、石剣と考えられる。

石皿（28・30・31・36～41）

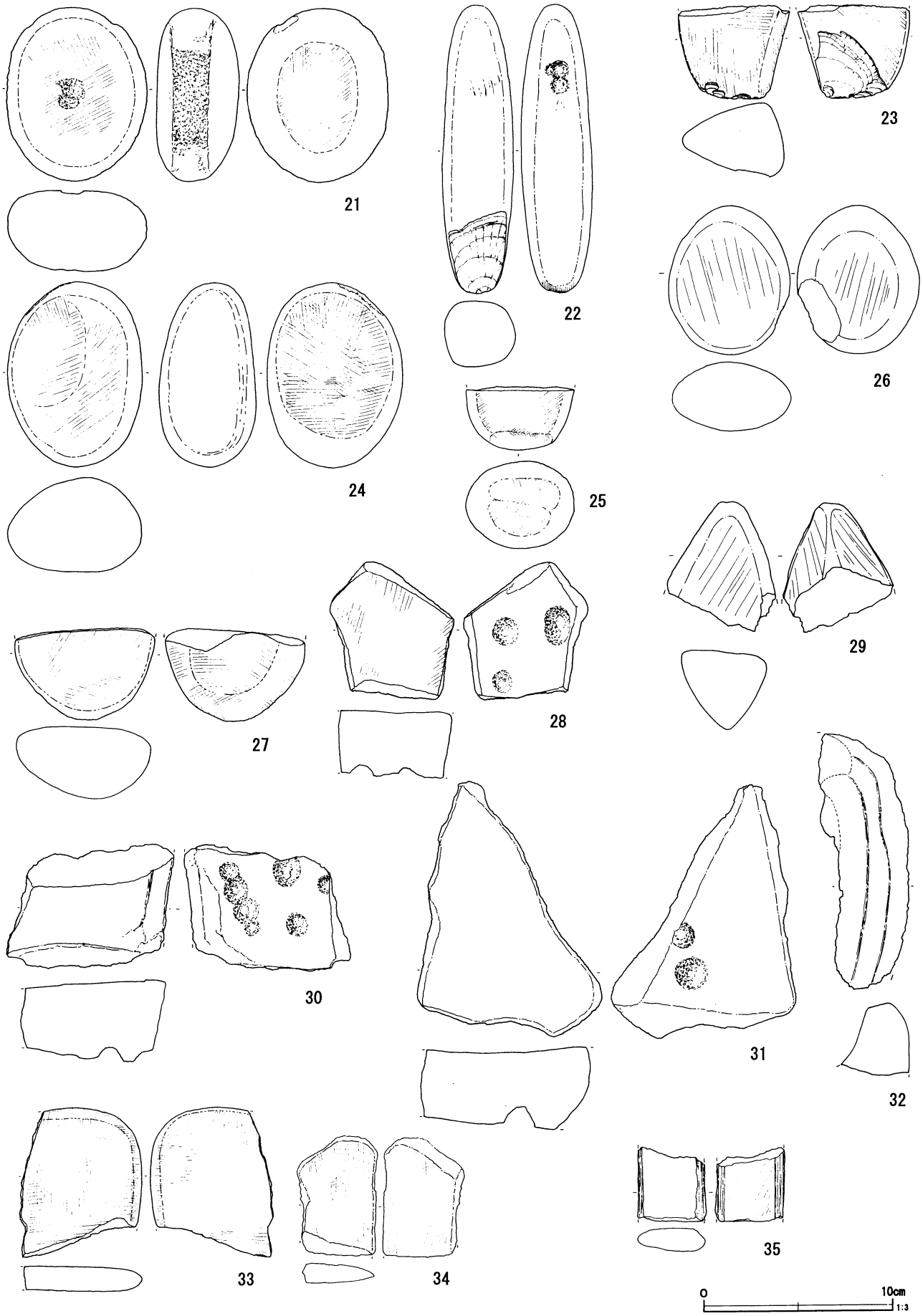
石皿は全て破損品で、全体の形状が想定できるのは36だけである。36は縁で囲まれた皿部は緩く外湾し、手前の部分で括れ後は直線になる。脚は現状では1ヶ所しか残っていないが、2ヶ所又は3ヶ所あったと思われる。次に、各部位の特徴をみると、36・38は脚付の石皿である。32・36・37・38・40・41は明瞭な縁がみられる。特に32・41は縁の高さがあり、皿面を容器の様に囲んでいる。裏面に深い凹みを有するものが多く、41は側面にも凹みがみられる。



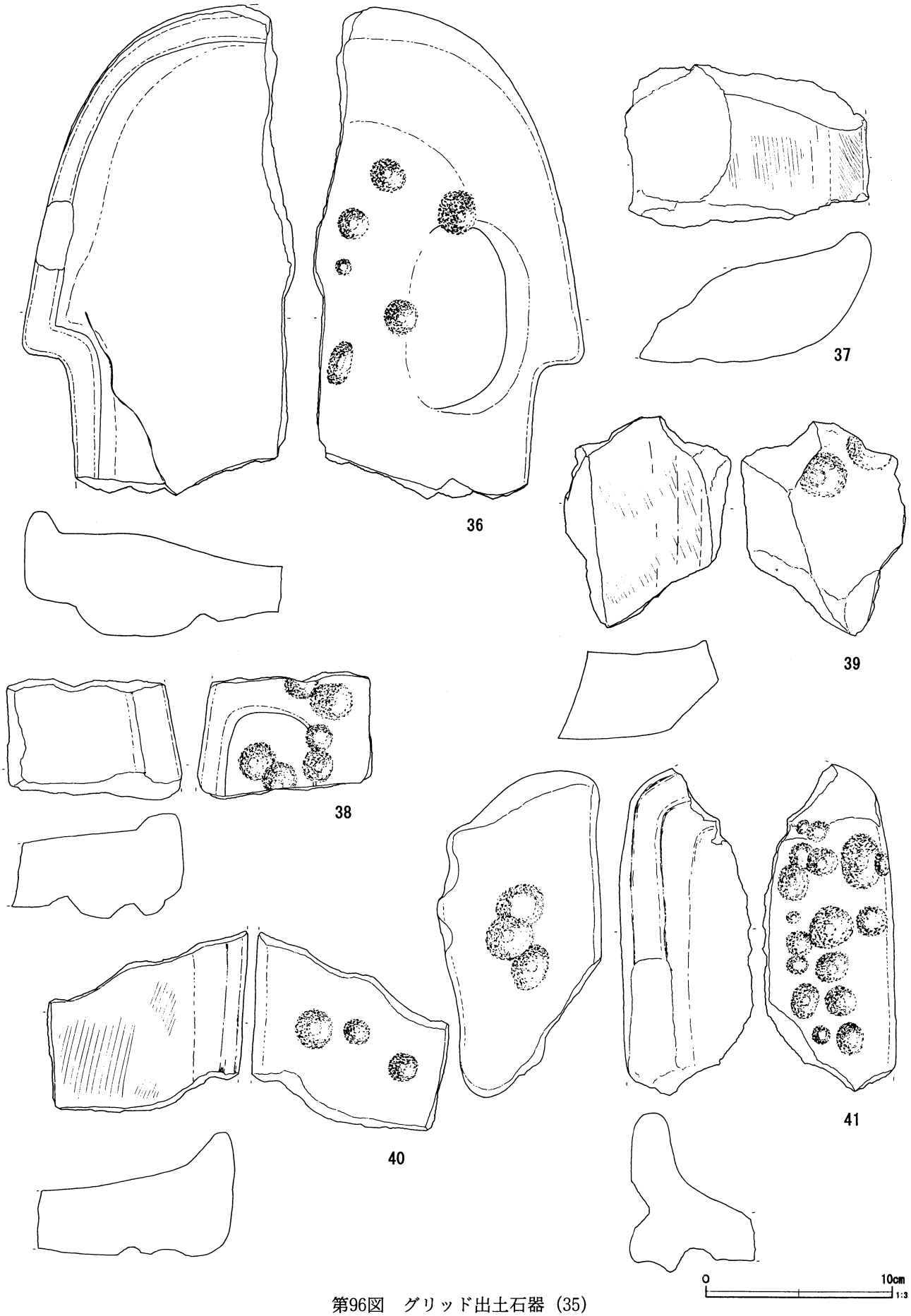
第93図　グリッド出土石器（32）



第94図　グリッド出土石器（33）



第95図　グリッド出土石器（34）



第96図　グリッド出土石器（35）

第26表　グリッド出土石器観察表(第93～96図)

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	出土位置	備考
1	石鏃	2.2	1.3	0.4	0.8	チャート	B3	
2	石鏃	1.4	1.1	0.2	0.3	チャート	D4Ⅲb谷	
3	石鏃	3.0	1.6	0.5	2.0	チャート	B2-93Ⅲ	未製品か？
4	石錐	3.3	1.9	0.6	3.6	黒曜石	G1	
5	磨製石斧	6.1	3.5	1.3	49.7	蛇紋岩	B3-71Ⅱb	定角式
6	打製石斧	5.3	5.3	1.4	45.4	ホルンフェルス	B2-ZAT	
7	打製石斧	14.0	10.7	3.2	457.0	ホルンフェルス	E3Ⅲb谷	
8	打製石斧	11.3	6.7	2.2	168.6	砂岩	D4Ⅲb谷	
9	打製石斧	10.3	6.7	1.7	132.2	ホルンフェルス	G0	
10	打製石斧	8.4	6.0	2.2	106.4	安山岩	B2-82ⅢaNo.2	
11	打製石斧	9.0	8.0	1.6	127.3	ホルンフェルス	B2-62Ⅲ	
12	打製石斧	9.4	8.3	2.2	226.6	頁岩	C2Ⅲb	
13	礫器	9.8	7.8	5.1	434.0	砂岩	D4埋没谷Ⅲb	
14	打製石斧	11.9	7.5	4.1	516.2	ホルンフェルス	D4谷	
15	磨石＋凹石	11.1	7.0	3.4	434.7	安山岩	D4谷	
16	敲石＋磨石＋凹石	14.6	8.0	3.8	768.9	安山岩	D4谷	
17	磨石＋敲石	6.1	4.1	5.0	140.7	安山岩	E3-28Ⅱ	
18	磨石＋凹石	8.2	5.6	2.5	195.4	安山岩	E4-36Ⅲb	
19	磨石＋凹石	14.3	6.4	4.8	613.9	安山岩	D4谷	
20	磨石＋凹石	11.9	7.4	4.1	604.3	安山岩	D4Ⅱb谷	
21	敲石＋磨石＋凹石	9.2	7.4	4.3	418.3	安山岩	D4Ⅲb谷	
22	敲石	15.2	3.3	3.5	346.7	緑色岩	A3-6、A3-67No.6	
23	敲石	4.9	5.9	4.1	143.4	安山岩	B3-1Ⅱ	
24	磨石	9.8	7.1	5.2	564.7	安山岩	B3-93Ⅱb	
25	磨石	3.4	5.7	4.6	132.3	砂岩	D4埋没谷Ⅲb	
26	磨石	7.9	6.4	3.6	246.9	安山岩	E1 Pit1	
27	磨石	4.9	7.4	3.8	142.7	安山岩	C2-48	
28	石皿＋凹石	7.3	6.6	3.8	192.6	安山岩	D4谷	
29	磨石	6.8	5.8	4.7	145.0	砂岩	F0	
30	石皿＋凹石	6.6	8.8	4.5	278.4	安山岩	D4谷	
31	石皿＋凹石	13.3	9.7	4.6	541.4	安山岩	D3-30Ⅲb谷	
32	石皿	13.5	4.7	4.2	226.3	安山岩	D4谷	
33	砥石	7.9	6.5	1.4	109.9	安山岩	A3-39Ⅱ	
34	砥石	6.3	4.2	1.2	39.4	安山岩	C1	
35	石剣	4.0	3.6	1.3	30.2	絹雲母片岩	F0	
36	石皿＋凹石	26.5	14.6	58.2	1909.0	安山岩	D4谷	脚付
37	石皿	8.6	13.1	6.3	740.3	安山岩	E2Ⅲ	
38	石皿＋凹石	6.7	9.4	5.3	360.2	安山岩	D4谷	脚付
39	石皿＋凹石	11.4	8.8	5.1	569.4	安山岩	B2-30Ⅱb	
40	石皿＋凹石	10.1	10.5	6.0	587.8	安山岩	B2-90No.3、Ⅲb	
41	石皿＋凹石	17.5	9.0	7.0	820.4	安山岩	1号埋甕周辺	

（3）古墳時代の土器

第１次調査区の北側、Ｂ・Ｃ２グリッドを中心にして古墳時代前期の土師器が出土している。

１は壺の肩部の破片で、外面に単節ＲＬ－Ｓ字状結節－単節ＬＲの羽状縄文が施される。外面全体が赤彩される。上位に径５㎜の穿孔が施され、補修孔と考えられる。

２は小型の壺もしくは鉢の胴部下半の破片である。底部が大きく、胴部は直立気味に立ち上がる。胴部外面に刷毛目が施される。底部の外周にバリ状の粘土のはみ出しが見られる。底面は木口状工具によりナデられているが、凹凸がある。

３は鉢としたが、器形は甕と同様である。器肉が厚く、内外面とも木口状工具によるナデにより平滑に仕上げられ、赤彩される。胴部下位の粘土帯の接合部分で下位が剥落している。

４～７は壺の口縁部である。４・５は直口縁で、頸部から直線的に開くものである。４は口縁部の上位が直立気味に立ち上がる。内面に上位を立ち上げた際に付いたと思われる指頭の凹みが残る。６は複合口縁で、大きく開く口縁端部の外側に粘土帯を貼付することにより複合部を作り出している。複合部の下半は強くナデられ、段になっている。７は端部の外側に粘土を少量貼付することにより口唇部を肥厚させるものである。端部を摘まむようにナデており、若干角がある。

８～17は壺の底部である。器面が荒れているものが多い。底径には大中小がある。径10㎝前後の大型のもの（10・12・13・15）で、15を除きいずれも肉厚の底部が突出するものである。外面の調整は刷毛目、もしくは木口状工具によるナデが施される。15は器肉が薄く、外面全体にヘラ磨きが施され、他の資料と様相を異にしている。12の底部には木葉痕が残る。中型のもの（９・16）は径６～７㎝前後で、内外面に刷毛目が施される。９は器肉が薄く、16は厚めである。９の外面にはヘラ磨きが施され、赤彩される。16の底面は不規則なヘラ磨きが施され、平滑に仕上げられている。小型のもの（８・11・14・17）は径５～６㎝前後で、個体差が大きい。17は底部が突出せず、肉厚で長胴気味になると考えられる。

18～21は高坏である。19には丁寧なヘラ磨きが施される。18は接合部で、径が大きめである。ホゾ接合である。胎土に小礫を多く含む。外側から径１㎝の透穴が３箇所開けられている。20・21は脚部である。端部が20は若干内湾し、21は外側に開く。両者ともホゾ接合である。20は外側から４箇所穿孔が施され、21の外面は赤彩される。

22は鉢である。胎土は精選されている。外面には横方向のヘラ磨きが施されている。

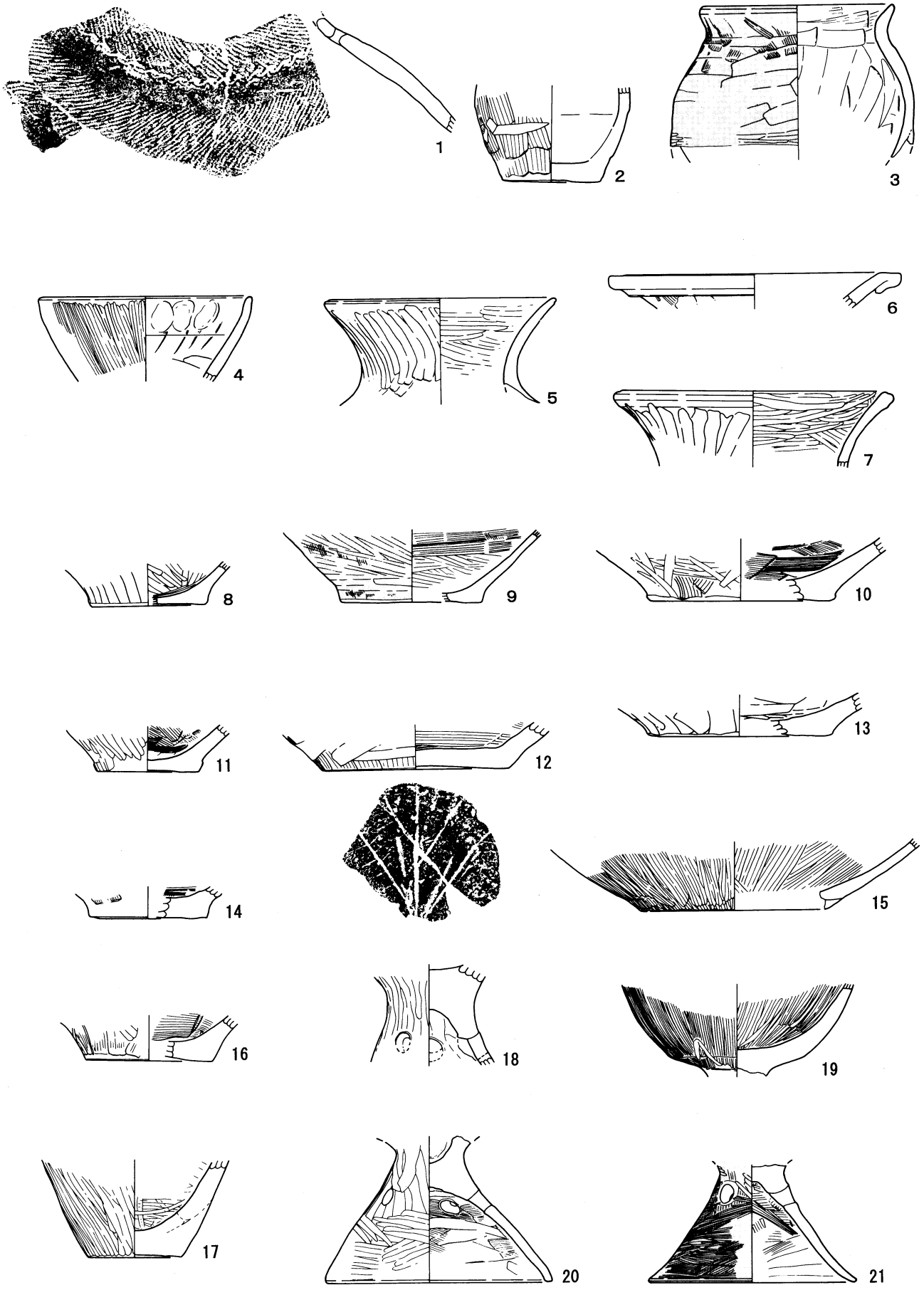
23・24・27は甕の口縁部と胴部である。23は小型の口縁部で、頸部から直線的に立ち気味に開き、端部は丸く収められている。24・27は大型の口縁部で、頸部から「く」の字状に開く。直線的で短く、端部に面を持つ。24は内外面とも２次加熱を受け、赤変している。

25～29は台付甕の胴部と脚台部の接合部である。いずれもホゾ接合である。25・28は甕の内面に煤が付着する。

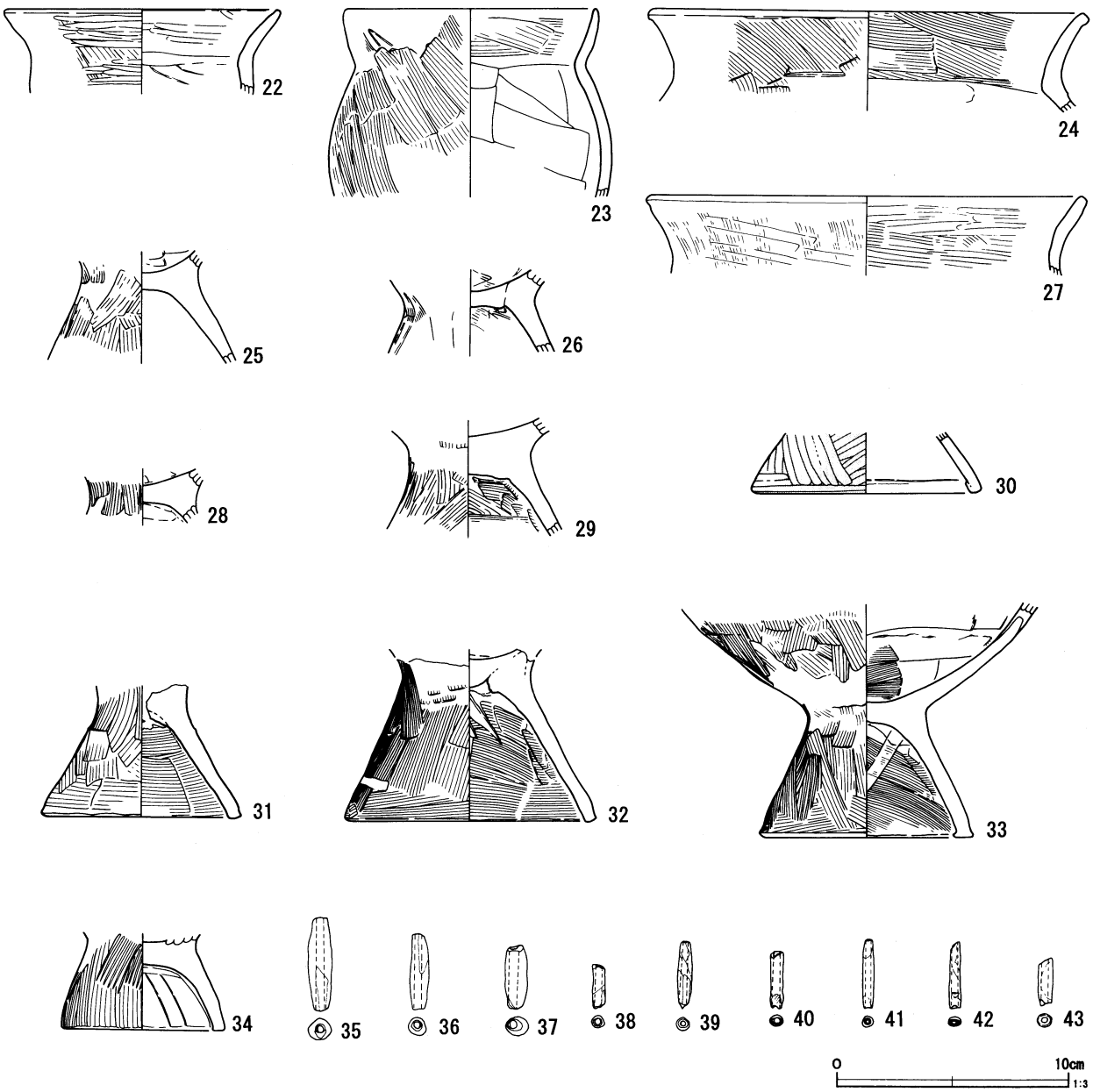
30は高坏の脚部である。外面全体にヘラ磨きが施され、赤彩される。内面は端部が折り返し状になり、面を持つ。

31～34は台付甕の脚台部で、大小がある。32・33はやや大型で、いずれもホゾ接合である。内外面とも刷毛目が施される。33は内外面に煤が付着する。31は中型で「ハ」の字状に開くものである。ホゾ接合で、ヘソが明瞭である。内外面とも刷毛目が施されている。34は小型で、高さがなくズングリとした印象を受けるもので、端部が若干内湾するものである。外面に刷毛目、内面に木口状工具によるナデが施され、内外面に煤が付着している。

35～43は土錘である。大型のもの（35～37）は、径が0.8～1.1㎝と太く、それ以外の小型のものは



第97図　グリッド出土土器（36）



第98図　グリッド出土土器（37）

0.5～0.6cmと細い。いずれも、孔径は0.25～0.4cmとほぼ同一である。外面は平滑で光沢がある。全体に凹凸があり、棒状のものに粘土を巻きつけて製作したと考えられる。35は内面に棒を引き抜いた際に付いたと考えられる縦方向の擦痕が見られる。

第27表　グリッド出土土器観察表（第97・98図）

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	残存(%)	焼成	色調	出土位置	備考	図版
1	土師器	壺	—	—	—	A·E·H	20	普通	浅黄	D2-47Ⅱb	赤彩:にぶい赤褐	
2	土師器	小型甕	—	(5.2)	(5.2)	G·I	20	普通	にぶい黄橙	B2		
3	土師器	鉢	10.1	(8.2)	—	H·I	50	普通	にぶい黄橙	C2-46Ⅱ	赤彩:にぶい赤褐	
4	土師器	壺	(11.2)	(4.5)	—	A·G·H	15	普通	にぶい黄橙	C3-Ⅲ		
5	土師器	壺	12.0	(5.6)	—	E·H·I	50	普通	にぶい橙	C2-1Ⅱ·C2-56Ⅱ·C2-58Ⅱ		
6	土師器	壺	(15.4)	(1.9)	—	H·I	5	普通	にぶい黄橙	C2-25Ⅱ		
7	土師器	壺	(14.9)	(4.0)	—	A·E·G·H·I	10	良好	にぶい黄橙	C2-56Ⅱ·C2-76Ⅱ		
8	土師器	壺	—	(2.3)	(6.0)	A·C·E·H·I	25	普通	にぶい黄橙	C2-6		
9	土師器	甕	—	(3.8)	(7.6)	A·E	30	普通	淡褐色	E4-28Ⅲa	赤彩	
10	土師器	壺	—	(3.3)	(10.1)	C·E·H·I	20	普通	淡黄	C3-21Ⅲ		
11	土師器	壺	—	(2.5)	5.5	C·H·I	60	普通	にぶい黄橙	C2-82ⅡB·C2-72Ⅱ		
12	土師器	壺	—	(2.4)	(10.0)	A·E·G	60	普通	にぶい黄橙	D2-68Ⅱb	底部木葉痕	
13	土師器	壺	—	(3.7)	(10.0)	A·H·I	30	普通	にぶい黄橙	D2-87Ⅲb·D2-97Ⅲb		
14	土師器	壺	—	(1.7)	(6.3)	E·G	10	普通	浅黄D2-45Ⅱ			
15	土師器	壺	—	(2.2)	(9.9)	A·C·I	20	良好	にぶい黄橙	D2-68Ⅱb		
16	土師器	壺	—	(2.5)	(7.1)	E	25	普通	橙	B2-17Ⅲ		
17	土師器	壺	—	(5.6)	(5.0)	G·H·I	20	普通	にぶい黄橙	C2-71Ⅱb		
18	土師器	高坏	—	(5.3)	—	G·H·I·L	90	普通	にぶい黄橙	C2-56Ⅱ	三方透	
19	土師器	高坏	—	(4.9)	—	E·I	30	普通	浅黄橙	C2-49Ⅱ·C2-66		
20	土師器	高坏	—	(7.8)	(12.0)	G·H·I	25	普通	にぶい黄橙	C2-71Ⅲ		
21	土師器	高坏	—	(6.3)	(11.1)	H·I	25	普通	浅黄橙	B2-9Ⅲ·B2-19Ⅲ	三方透:赤彩:にぶい赤褐	
22	土師器	鉢	(11.7)	(3.6)	—	G·H	10	良好	にぶい黄橙	C2-71Ⅱb		
23	土師器	台付甕	(11.3)	(8.3)	—	I	15	普通	にぶい黄橙	B2-55Ⅲ		
24	土師器	甕	(18.6)	(4.3)	—	E·G·H·I	10	普通	にぶい橙	C2-72Ⅱ·C2-81		
25	土師器	台付甕	—	(5.1)	—	E·L	80	普通	にぶい黄橙	B2-6Ⅲ		
26	土師器	台付甕	—	(3.9)	—	I·L	50	普通	浅黄	B2-96Ⅲa		
27	土師器	甕	(19.0)	(3.4)	—	A·E	20	普通	淡褐色	E4-37Ⅲb·E3-38Ⅲa		
28	土師器	台付甕	—	(2.5)	—	C·L	80	普通	明赤褐	B2-37Ⅲ		
29	土師器	台付甕	—	(5.2)	—	E·H	75	良好	浅黄	B2-60·B2-69		
30	土師器	高坏	—	(3.1)	(10.0)	A	20	良好	褐色	E4-54Ⅱb	赤彩	
31	土師器	台付甕	—	(5.9)	(9.0)	A·H·I	25	良好	灰白	C2-Ⅲ		
32	土師器	台付甕	—	(7.4)	10.9	G·H·I	80	良好	にぶい黄橙	C3-Ⅲ		
33	土師器	台付甕	—	(10.1)	9.2	G·H·I	80	普通	にぶい黄橙	D2-Ⅲb		
34	土師器	台付甕	—	(4.2)	6.9	B·F	80	良好	にぶい黄橙	SD3		
35	土製品	土錘	孔径:0.35cm	長:4.0cm	径:1.1cm	重:3.0g	95	良好	にぶい褐	B3-47Ⅱb		47-1
36	土製品	土錘	孔径:0.3cm	長:3.3cm	径:0.8cm	重:1.5g	100	普通	橙	B3-77Ⅱb		47-2
37	土製品	土錘	孔径:0.4cm	長:3.8cm	径:1.0cm	重:1.9g	90	良好	灰黄褐	B2-67Ⅲ		47-3
38	土製品	土錘	孔径:0.3cm	長:(1.9)cm	径:0.6cm	重:0.5g	90	良好	にぶい黄褐	B2-58Ⅲ		47-4
39	土製品	土錘	孔径:0.25cm	長:2.9cm	径:0.6cm	重:0.7g	95	良好	褐	B2-58Ⅲ		47-5
40	土製品	土錘	孔径:0.4cm	長:2.5cm	径:0.5cm	重:0.5g	90	良好	灰黄褐	B2-67Ⅲ		47-6
41	土製品	土錘	孔径:0.2cm	長:3.0cm	径:0.5cm	重:0.8g	95	良好	褐灰	B2-77Ⅳ		47-7
42	土製品	土錘	孔径:0.25cm	長:2.9cm	径:0.5cm	重:0.7g	90	良好	灰褐	B2-77Ⅳ		47-8
43	土製品	土錘	孔径:0.25cm	長:(2.1)cm	径:0.6cm	重:0.8g	70	良好	灰黄褐	B2-54		47-9

V　調査のまとめ

1．縄文時代

（1）遺構について

九宮１遺跡では中期末葉の住居跡１軒、九宮２遺跡では後期前葉の住居跡３軒、埋甕６基、それぞれの遺跡で確実な縄文時代の土壙が数基以上検出された。

九宮１遺跡の第１号住居跡は２ヶ所の地床炉とピット多数が検出されていることから、建て替えの住居跡として２軒にカウントするほうが適切と思われる。炉の新旧関係は明瞭ではないが、出土遺物から炉２の方が新しいと判断され、炉２が重複する第25号土壙より新しいことから、それぞれの関係が注目される。つまり、第１号住居跡の廃絶後、何らかの理由で住居内に土壙を設け、その後さらにその土壙の開口部に炉を設けて新たに住居跡を構築したということになる。縄文時代中期の住居廃絶後に土壙を設けることはあまり注目されていないが、類例が比較的多く、特に中央部付近の炉周辺に設けることが多い。また、炉と重複することも多い。

そこで、この土壙の性格を検討する必要が生じてくる。住居廃絶後、住居内の床面に、もしくは埋没過程で覆土中に土壙を設ける行為は、縄文時代前期後半から類例が増え、中期末葉にまで確認されている。この重複関係が偶然の場合もあるが、あえて住居跡の炉を壊しながら土壙を設けていると考えられる場合がある。同じ大宮台地中央の東縁辺上で、九宮１遺跡からそれほど離れていない伊奈町戸崎前遺跡（金子1997）では、第36号住居跡内で覆土堆積後、炉の直上から炉を壊すかのように第272号土壙が構築されていた。しかも、多くの復元可能な土器を伴い、土壙覆土は分層が不可能なものであった。また、同様な例はほぼ同じ地域の菖蒲町神ノ木２遺跡（上野2008）でも確認されている。戸崎前遺跡の第272号土壙の場合は、墓壙である可能性が高く、住居跡のまだ埋まりきっていない覆土中より構築することから、一種の屋内埋葬と捉えることが可能となろう。

この様に、住居内の中央部付近に構築されている土壙が、ある種の屋内埋葬の一種であるとすれば、九宮１遺跡第１号住居跡の建て替えにも当てはめて考えることができる。第１号住居跡は床面が現存するのみであるため、覆土からの確認は不可能であるが、住居跡廃絶後第25号土壙が構築されたとすれば、次の様な推測が成り立つ。

先ず、第１号住居跡の居住者に何らかの理由で死者が生じ、禁忌のためか住居を廃絶する行為が行われた。廃絶に伴って住居内に土壙墓を構築する。その後、何年か経ってこの居住者の構成員か、あるいは一部の構成員がこの地に戻り、同じ場所に住居を構築した。この場合、住居は完全に埋まった状況ではなく、上屋が残る状況も想定される。再帰した構成員は、少したまった住居内の土、もしくは家の中を片付け、新たな家を構築する。その際、炉や柱の位置を少しずらしながら設計し、炉の位置も以前に設置した土壙墓を意識しながら決定していることが想像される。

また、再び戻ってきた構成員であるが、全く前人と関係のない別人の可能性もある。しかし、ほぼ同じ位置に住居跡を構築し、土壙との関係も意識されていることから、その間の時間を推測するのは不可能であるにせよ、少なくとも同一型式内の細分で１段階か、型式変換期の１型式差以内に建て替えを行っていることから、建て替え前の居住者か、もしくはこの場所を熟知しているその子孫である可能性が高いものと思われる。

九宮１遺跡は中期末葉の事例であったが、九宮２遺跡でも後期前葉で類似した事例が検出された。九宮２遺跡では埋甕が６基検出されており、その

中で称名寺式終末から堀之内Ⅰ式の初頭にかけての埋甕１～埋甕３が台地上で比較的まとまりをもって埋設されており、堀之内Ⅰ式古段階の埋甕４～埋甕６が台地の斜面部にまとまって埋設されていた。しかも、埋甕４～埋甕６はほぼ同時期と思われる第５号住居跡内で、住居が廃絶された後に埋設されていた。

偶然の一致の可能性もあるが、また、第６号住居跡が斜面地に構築されて浸食を受けており詳細が不明であるとしても、中期の屋内埋葬と類似する現象であるものと理解される。時期的につながらない要素ではあるが、この地域に脈々として受け継がれてきた地域的な伝統的行為なのか、あるいは前期から後期にかけて系統的かつ普遍的に見られる行為なのかについは、類似現象の存在を指摘するとともに、資料の増加をもって今後検討していきたいと思っている。

（２）縄文土器について

ここでは、九宮２遺跡出土の後期土器群についてまとめて置きたい。

九宮２遺跡の後期の土器群は第Ⅳ群と第Ⅴ群、第Ⅵ群第１類～第２類に分類され、概ね第Ⅳ群が称名寺式、第Ⅴ群が堀之内式、第Ⅵ群第１類が加曽利Ｂ式、第Ⅵ群第２類が後期安行式である。

第Ⅳ群の称名寺式土器は、第１類の縄文系土器群の中にやや古い一群、第３類の無地文系土器群中にやや新しく堀之内式に下るものを含む可能性が高いが、およそⅡ式に比定される。縄文系の土器群が称名寺Ⅱ式に残存することは、モチーフ等の関係からでも明らかで、むしろ、称名寺式第７段階に位置付けられる刺突文を施文しない無文系の土器群が、どこまで下るかが問題となろう。その点に関しては、ほぼ同じ地域に存在する伊奈町戸崎前遺跡（金子1997）で詳細に触れたことがある。本遺跡の埋甕１は口縁部幅狭文様帯の確立、胴部モチーフの下端開放等から、明らかな堀之内Ⅰ式確立期に位置付けられるものである。胴部文様は称名寺式からの系統性が明瞭で、モチーフ自体では称名寺式と区分が難しい。特に、東関東地方においては称名寺Ⅱ式系の遺制が弱く、東北南部の綱取式の南下で西関東との状況が異なり、複雑な様相を呈している。両地域の中間的な大宮台地では、称名寺式終末と堀之内Ⅰ式の線引きが難しい状況となっている。その中にあって、系統的要素は異なるものの、桶川市後谷遺跡第4次第２号土壙出土土器（村田・藤沼2008）、及び戸崎前遺跡第44号土壙出土土器（金子1997）は、本遺跡埋甕１及び埋甕３－１などと合わせて、両者を識別する際の良い基準となろう。

第Ⅴ群土器は堀之内式土器である。分類の項でも述べたが、器形及び土器群の系統性を主眼としたため、いわゆる堀之内Ⅰ式とⅡ式が合わさった分類となっている。ここで改めてそれらの分類を整理すると、

Ａ群…縄文を地文に施文する系統の土器群
Ｂ群…縄文を施文しない無地文系統の土器群
Ｃ群…茂沢類型・小仙塚類系の器群
Ｄ群…条線文を施文する系統の土器群
Ｅ群…壺・注口・浅鉢・蓋などの系統の土器群
Ｆ群…縄文のみ施文する系統の土器群
Ｇ群…無文系統の土器群

となり、それぞれの系統は器形の変化、描線の種類、モチーフの変化、磨消縄文の採用などで細分される。

Ａ群は頸部が括れて口縁部が開く第１類、直線的な器形の第２類、括れる頸部に縄文を施文する第３類、第１～３類の胴部破片である第４類、バケツ形で磨消縄文を持つ第５類、第５類の胴部破片である第６類に分かれる。さらに各類は、描線の太さや、描線の本数で細分される。太沈線の１本書き文様から、多条沈線化へ、さらに細沈線化への変化が窺える。描線の変化とモチーフの変化を組み合わせると、太沈線施文の蕨手状懸垂文を

主体とする土器群は堀之内Ⅰ式でも古段階の様相を持つものとして認識される。

また、類似の文様構成で、描出沈線が３～４本へと多条化する土器群は、口縁部の肥厚が小さくなり、器壁も薄くなるなど新しい様相を持つものと捉えることができる。さらに、器面を埋めるようにモチーフが多条化した土器群は、より新しくなる可能性がある。これらの土器群は、堀之内Ⅰ式の範疇でとらえられるが、磨消縄文によるモチーフ構成の採用を以って、堀之内Ⅱ式への変化と型式学的に捉えることが出来る。しかし、地文に縄文を施文する土器群は、堀之内Ⅱ式まで残存することから、磨消縄文の有無のみをメルクマールにするのではなく、器形や土器造りの変化、モチーフの変化などが重要な要素となる。特に、東関東地域に属する大宮台地東縁部では、地文縄文が系統的に残ることから、堀之内Ⅰ新式とⅡ式古段階の線引きが難しくなる。

堀之内Ⅱ式については、おおよそが第５類・第６類として分類したものに相当する。口縁部に隆起線を廻らすもの、隆起線が複数になるもの、隆起線のないもの等のバラエティーがある。これ等の土器群は口唇部の造りの変化や、内面文様帯の形成等を基準として変化の方向性を型式学的に追うことが可能である。口唇部付近の裏面沈線の作出変化を型式学的に辿ると、堀之内Ⅰ式終末期に見られる口唇部貼付隆帯の平坦化が、口唇部の積み上げ成形を助長する。従って、内面沈線は口唇部の積み上げ整形に巻き込まれるような凹線状の形態を呈し、口縁の角頭状化に伴い断面カマボコ状の沈線へと変化する傾向が窺える。この変化に伴って、胴部の文様帯の幅狭横帯化や一帯化が進む傾向にある。さらに、内面沈線は多条の細沈線化するものも現れ、沈線間に細かな刻みを施すものも現れる。この刻みを持つ内面条線は幅狭な文様帯を構成し、さらに加飾的な口縁部変化や、円形突起などと相俟って、加曽利Ｂ式へと変遷する様子が窺える。

また、Ｂ類は地文に縄文のないものを対象とするが、ほぼＡ類と同様な基準での分類が可能であり、描線の変化もＡ類における変化と同様に捉えることができる。従って、Ａ類とＢ類はほぼ並存する土器群として捉えることが可能となり、量の多寡はあるものの、相互補完的に存在していたものと想像される。

Ｃ群は綱取式系や称名寺式茂沢類型、堀之内式小仙塚類型等の系統性を帯びる土器群で、基本的にはＡ・Ｂ類の変化と呼応する。

Ｄ群の条線文系土器群も称名寺式段階からの系統性を帯び、堀之内Ⅱ式まで、条線文の要素は加曽利Ｂ式まで系統が辿れる。初期の段階は帯状施文か、斜格子目状のモチーフを採るが、終末では蛇行状の施文や地文状施文へと変化する。

従って、第Ⅴ群土器は以下のように分類され、

堀之内Ⅰ式古段階

Ａ－１－１・Ａ－２－１・Ａ－３－１・Ａ－４－１・Ｂ－１－１・Ｂ－２－１・Ｂ－３－１・Ｃ－１－１・Ｃ－１－２・Ｃ－２－１・Ｃ－３－１・Ｄ－１・Ｄ－２・Ｆ－１・Ｇ－１

堀之内Ⅰ式新段階

Ａ－１－２・Ａ－２－２・Ａ－３－２・Ａ－４－２・Ｂ－１－２・Ｂ－２－２・Ｂ－３－２・Ｃ－１－３・Ｃ－２－２・Ｃ－３－２・Ｆ－２・Ｆ－２

堀之内Ⅱ式段階

Ａ－５－１～４・Ａ－６・Ｂ－４－１～３・Ｂ－５－１～３・Ｃ－１－４・Ｆ－３－１～４

と概して編年付けられる。

近隣地域では、堀之内Ⅰ式古段階で伊奈町戸崎前遺跡、Ⅰ式新段階で旧庄和町の神明貝塚（柳田他1970）、Ⅱ式段階で騎西町修理山遺跡（吉田1995）から、それぞれ良好な土器群が出土している。紙面の都合もあり、これらの土器群との比較にいては後日検討したい。

2．古墳時代

九宮遺跡からは、古墳時代前期の竪穴住居跡２軒と祭祀跡が検出されている。

本書の冒頭で掲げた分布図のように、菖蒲町周辺の古墳時代前期の遺跡は、白岡町の白岡を中心とする箇所、蓮田市の黒浜、関山を中心とする箇所、伊奈町の小針を中心とする箇所に分布している。特に白岡町皿沼、正福院貝塚は本遺跡にほぼ連続する台地上に立地し、本遺跡との有機的な関係が予想される。本来ならば、そうした遺跡群との関係性について明らかにすべきなのだろうが、ここでは時間的な制約もあるため、今後の検討のために、出土土器の位置付けと祭祀跡について、若干のまとめを行うことにしたい。

（1）出土土器について

本遺跡の出土土器（第99図）は、直線的な口縁部と、球形胴の壺、端部が丸く直線的な口縁部で、「く」の字状の頸部を呈し、脚台部が小さめの台付甕、坏部が浅く、直線的に開く脚部をもつ高坏、器受部の大きな器台によって構成されている。細部を見ると壺の肩部文様帯には１段と２段があり、台付甕の口縁部には面取りが見られるものとそうでないもの、高坏の脚端部が若干内湾するものと外反するものがある。また、各住居跡はいずれも軸方向が異なっている。こうした点から、将来的には細分できる可能性もあるが、壺・甕といった主要器種で全形を知り得るものがないため、現段階では一括して考えておく。

周辺遺跡の出土土器については、蓮田市久台遺跡の方形周溝墓出土土器を、隣接するささら遺跡の資料と合わせて古新の２段階に分け、新段階を橋本勉氏によって３段階に分けられた伊奈町戸崎前遺跡の２段階に対応するものとした（第100図、福田2007）。古段階は直線的な口縁部と縦長の胴部、頸部がやや緩やかで、肩部文様帯が２段となる壺、口縁端部が面取りされ、頸部の括れが弱く、やや縦長の胴部と大きめでどっしりとした感のある脚台部を持つ台付甕が特徴である。新段階は、口縁部が直線的で、頸部が「く」の字状に屈曲し、球形胴を呈するズングリした感のある壺、口縁部が直線的で、端部があまり面を持たず、球形胴を呈し、高さがやや低い小型の脚台部の台付甕が特徴である。

本遺跡の出土土器は、この新段階の資料に対応する可能性が高い。遺跡近隣で、同様の段階の土器は、白岡町皿沼遺跡９・10号住居跡（鈴木ほか1983）、入耕地遺跡１号住居跡（註１）から出土している（第100図）。また、白岡町正福院貝塚（奥野1994）や宮代町山崎山遺跡（註２）などではこれに続く時期のものと考えられる資料が知られている。このように、久台・ささら古段階→九宮－久台・ささら新段階－戸崎前２段階－入耕地・茶屋→正福院貝塚－山崎山といった、おおまかな順序が考えられる。

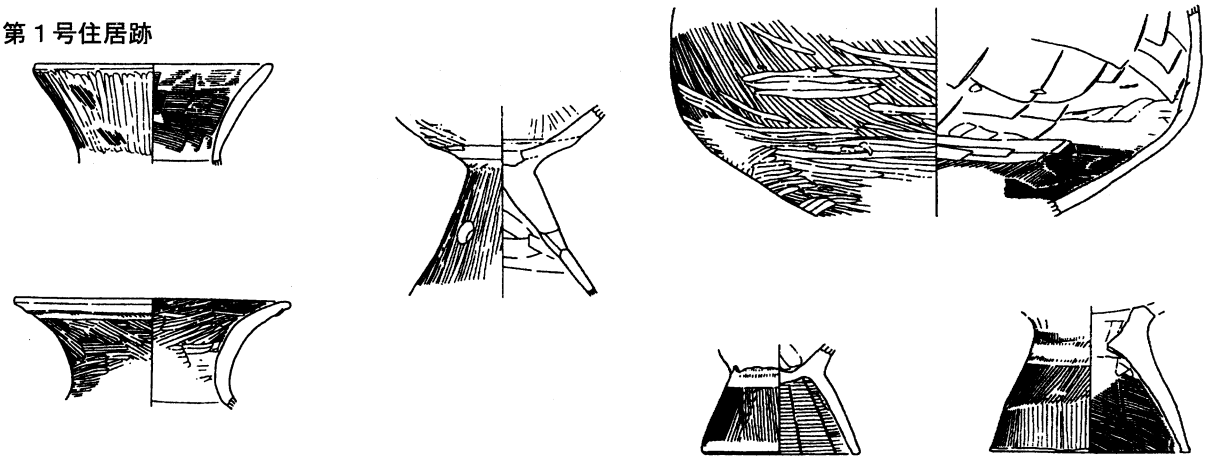
遺構については、皿沼遺跡からは竪穴建物跡２軒、入耕地遺跡からは竪穴建物跡２軒が、正福院貝塚からは方形周溝墓１基が検出されている。皿沼遺跡の竪穴建物跡は、隅丸正方形のものと長方形のものがあり、本遺跡の様相と類似する。また蓮田市域や伊奈町域では、ささら遺跡や向原遺跡などで同時期の大規模な集落跡が知られている。今後、それらと合わせて改めて位置づけを行いたい。

（2）祭祀跡について

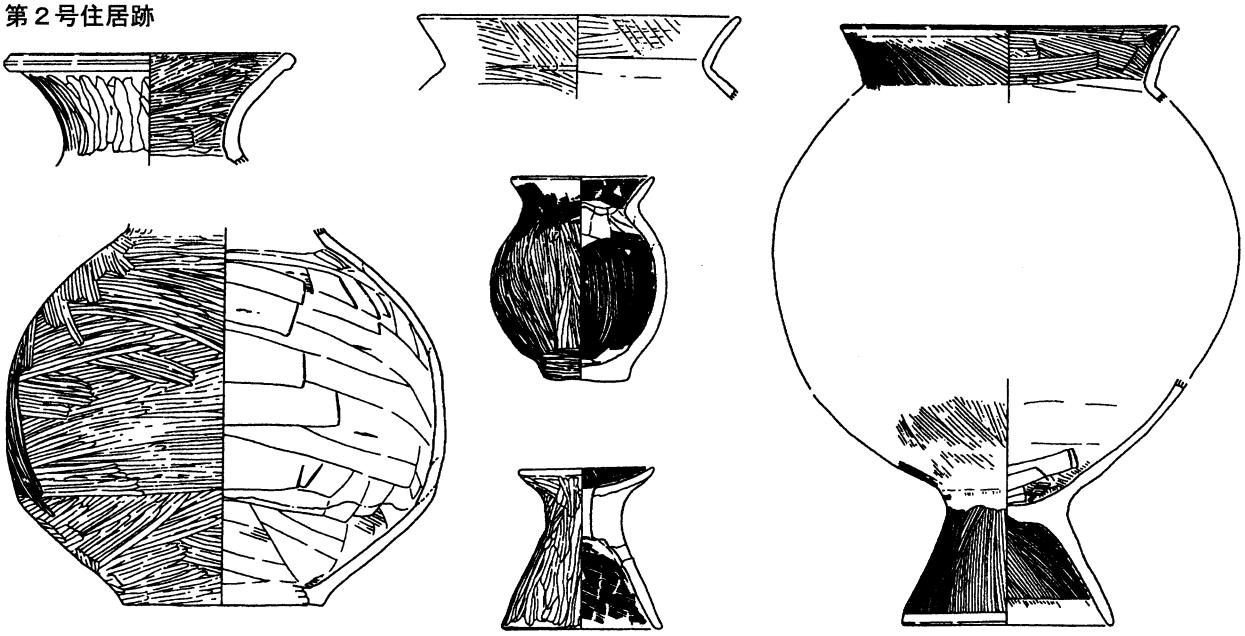
祭祀跡からは、ミニチュアの壺８点と甕１点が出土している。祭祀の対象となるようなものや、出土状況の規則性は認められないが、こうしたミニチュア土器が集中して出土する様相は、祭祀的な廃棄の可能性を感じさせるものである。

本遺跡のようなミニチュア壺については、比田井克仁氏により集成と編年、解釈が行われている

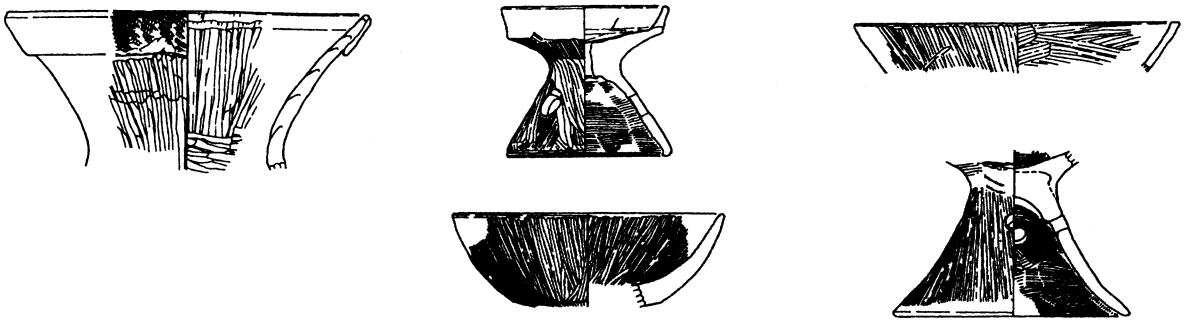
第１号住居跡



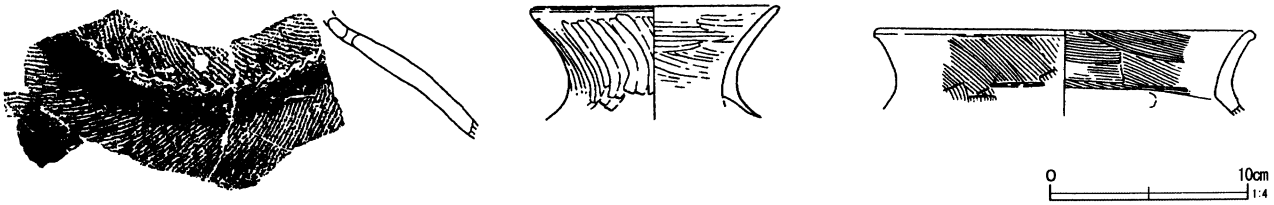
第２号住居跡



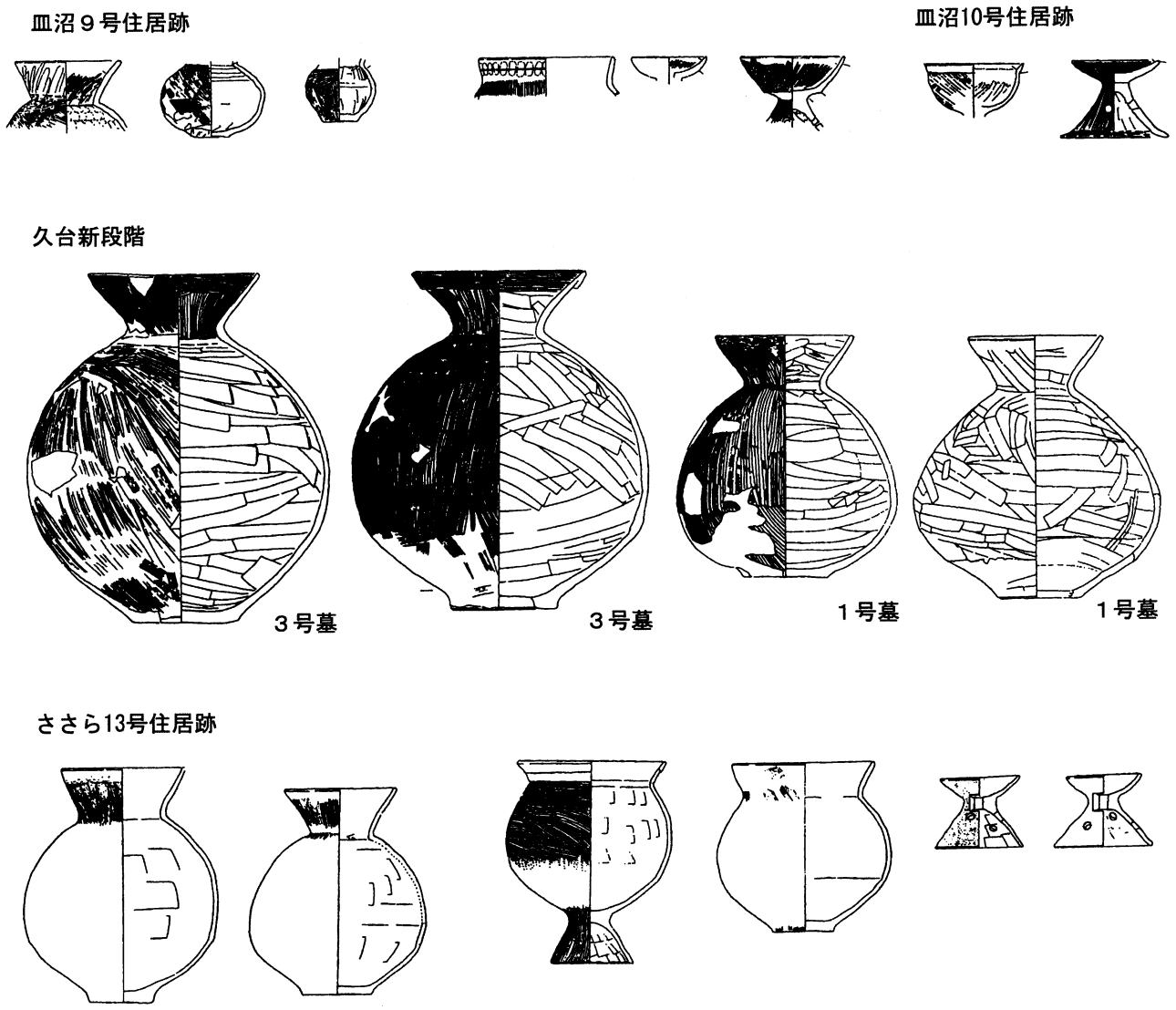
第４号住居跡



グリッド



第99図　九宮２遺跡出土の古墳時代の土器

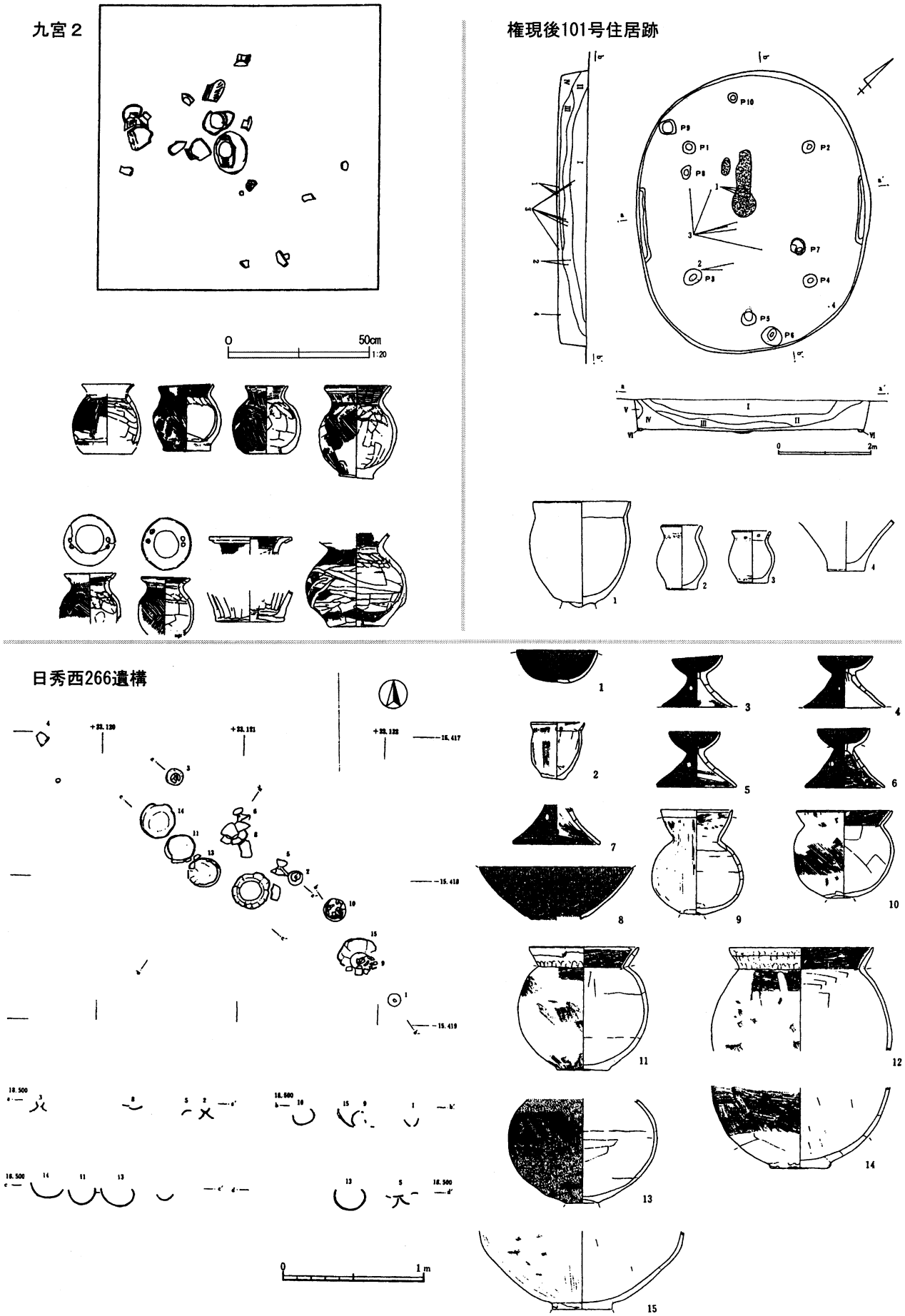


第100図　九宮２遺跡周辺の同時期の資料（各報告書より転載Ｓ＝１：８）

(比田井1993)。それによれば、出土遺構は住居跡に限られており、性格としては屋内祭祀に用いられたものと考えられている。こうしたミニチュア壺は、出土例が増えた現在でも、基本的には住居跡から出土するもののようである。本遺跡出土例は、氏の編年の古墳時代１（新）段階に相当するものと思われる。

また、古墳時代前期では、「纒向型」に代表されるような祭祀土壙や、平岩俊哉氏が挙げる樹木、河川・湧水等の水辺の祭祀などが知られている（平岩2001)。しかし、それらはその対象物が明らかであるか、土壙のような埋納遺構を伴っており、本例とは合致しない。このように確認面、というより地面に直接祭祀に使用した器物を放棄する例は、県内では川越市御伊勢原遺跡２号祭祀跡などで見られるが、時期は100年以上も隔たりのある古墳時代中期のものである。本遺跡のような様相は一般的なものとは言い難い。

管見に触れる限りでは、土器の廃棄が確認面で行われているという点で、本遺跡に類する例は千葉県我孫子市日秀西遺跡（第101・102図、上野1980) 266遺構で知られるのみである。266遺構は、調査区の北西側にあたる斜面の頂部に位置し、そのすぐ下に同時期の062・066号の２軒の住居跡がある。北側に器台や鉢といった小型器種が北西－南東方向に並べられた状態で出土し、その南側から壺・甕がやはり並べられた状態で出土している。報告書では、２軒の住居跡とセットとなる祭祀遺



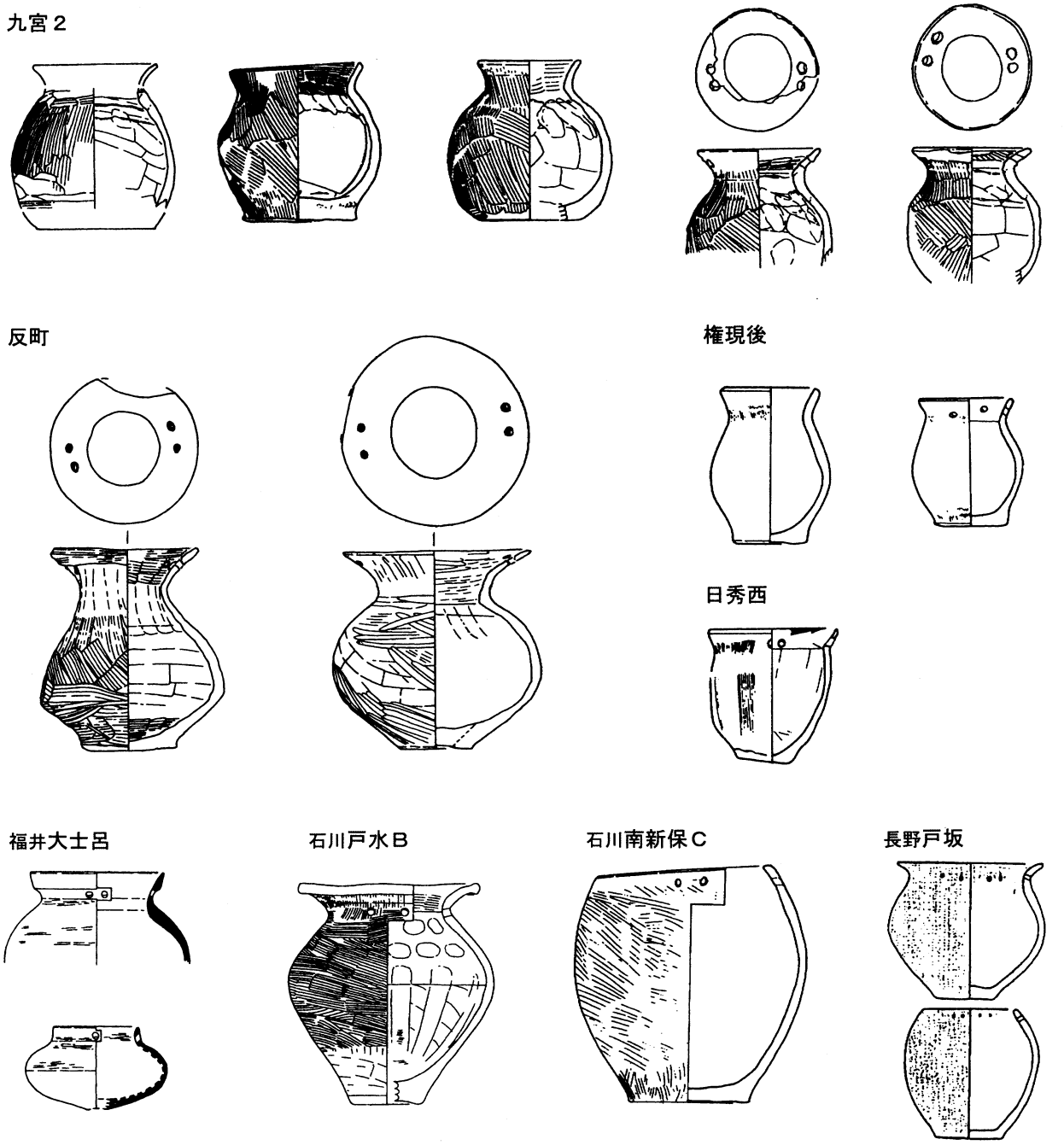
第101図　ミニチュア壺を用いた祭祀遺構の例（各報告書より転載Ｓ＝１：４）

構として評価されている。日秀西例は、時期的には本遺跡とほぼ同時期のものと考えられるが、出土土状況や器種構成、立地など異なる部分もあり、俄かに同様の例とは言い切れない部分もある。更に類例の蓄積が必要と考えられる。

一方、本遺跡例と同様に口縁部の対称となる位置に小孔が穿たれたミニチュア壺が出土おり、注目される。

（3）口縁部に穿孔のあるミニチュア土器について

本遺跡の祭祀跡出土のミニチュア壺には、口縁部に対称となる位置に２つ一組の小孔が穿たれているものが２個体ある。近隣でこのような穿孔が施されている例は、現在管見に触れる限りで、先の日秀西266、千葉県八千代市権現後遺跡101号住居跡（第101・102図、阪田1984）埼玉県東松山市反町遺跡48号溝跡（第102図、註3）出土例



第102図　各遺跡のミニチュア壺（各報告書より転載Ｓ＝１：４）

が知られるのみである。いずれも頸部のある壺形のミニチュアである。前二者は一つの孔が対称位置に穿たれているもので、反町例は本遺跡同様に２つの孔が対になるものである。こうした口縁部に小孔が穿たれている土器は、東海地方でも静岡県静岡市長崎遺跡などで、一つだけ穿孔のあるものが弥生時代後期段階にごくまれに見られるが、古墳時代前期にはまずみられなくなる（註４）。一方、北陸地方では弥生時代中期から古墳時代前期にかけて、壺の口縁部や無頸壺の口縁部に一定程度の割合で施され、それと組み合わせになる、やはり２つの孔が対になるように穿たれた蓋形土器が知られている（第102図、註５）。反町遺跡例から、当初東海地方の系譜を引くものと考えたが、むしろ北陸地方の影響を引く「蓋をつけるための」小孔が穿たれたものと考えた方が妥当であろう。筆者が現在確認している範囲では、現在のところ福井、富山、石川の北陸各県、長野県（註６）、群馬県でも認められ、移入された経路を窺わせる分布を示している。

こうした穿孔のあるミニチュア土器が、祭祀用の道具立てであるとするならば、当然のことながらその中に何かを入れて、蓋をして使用したものと考えられる。こうした器の使用方法が北陸の意匠を借りて行われたのである。この方法が、埼玉県の中央部－西部－千葉県北西部－千葉県手賀沼にまで広がっていたことが具体的に示された意義は大きい。また、権現後例は住居内祭祀、九宮、日秀西例が土器の廃棄、反町例が水辺の祭祀に使用されたものと推定されるため、そうしたスタイル、対象の異なる祭祀において横断的に使用されている点も古墳時代前期の祭祀のあり方を考える上で重要な示唆を与えるものと考えられる。逆に、このような小孔が穿たれた土器は、今後祭祀用のものとして扱ってもよいであろう。反町例は、土器の形そのものは、東海地方東遠江系統の壺を模したものである。この土器は、水辺の祭祀用に、中に何かを入れて使用するために小孔を穿ち、東海地方の土器を模して特別にあつらえた土器なのである。

本遺跡出土例は、分布論的に埼玉県域と千葉県域をつなぐものであり、その祭祀のあり方と合わせて提起する問題は、古墳時代前期の関東地方の集落内祭祀全体に及ぶ大きなものである。今後、類例の収集を進め再論する事にしたい。

以上、九宮遺跡の古墳時代前期の出土土器と祭祀跡について若干のまとめを行った。調査で検出された遺構や遺物は決して多くはないが、皿沼遺跡、入耕地遺跡や正福院貝塚といった本遺跡との有機的な相互関係がある遺跡との関係や、県東部全体を見渡した出土土器や遺構の位置付け、祭祀跡の評価など提起された課題は多い。再考を期し、ひとまず稿を閉じることにしたい。

註１　白岡町教育委員会により、６回の調査が行われている。第１地点と第３地点の調査で、古墳時代前期の竪穴建物跡４棟が検出されている。奥野麦生氏の御厚意により筆者実測。

註２　宮代町教育委員会により、４回の調査が行われている。平成２年度の調査で古墳時代前期の竪穴建物跡７棟、鍛冶工房跡１棟が検出されている。青木秀雄氏の御厚意により佐藤康二氏と筆者実測。

註３　埼玉県埋蔵文化財調査事業団により平成17・18年度調査。弥生時代中期から鎌倉時代の遺構・遺物が大量に検出されている。ミニチュア壺が出土しているＳＤ48は弥生時代から中世の都幾川の流路跡の一つと考えられている。

註４　松井一明氏にご教示いただいた。

註５　北陸地方の類例と様相については、赤澤徳明氏に、多大なご教示をいただいた。

註６　長野県佐久市戸坂遺跡の資料については、『東日本弥生時代後期の土器編年』より転載した。原典未見。

引用・参考文献

伊藤雅文2002『南新保Ｃ遺跡』石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター

上野純司1980『千葉県我孫子市日秀西遺跡発掘調査報告書』千葉県教育委員会・（財）千葉県文化財センター

上野真由美　2008「神ノ木２遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第349集

阪田正一1984『八千代市権現後遺跡』住宅・都市整備公団首都圏都市開発本部・（財）千葉県文化財センター

奥野麦生1994『正福院貝塚』白岡町遺跡調査会報告書第２集白岡町教育委員会

金子直行　1997「戸崎前遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第187集

騎西町教育委員会1983『騎西町遺跡分布調査報告書』埋蔵文化財調査報告書第２集

久喜市史編さん室1987『久喜市の遺跡－遺跡分布調査報告書－』久喜市史調査報告書第７集

埼玉県1975『土地分類基本調査　鴻巣５万分の１国土調査』

埼玉県1986『新編　埼玉県史　別編３』自然

埼玉県1993『中川水系　総論・自然』中川水系総合調査報告書１

埼玉県1993『中川水系　Ⅲ　人文』中川水系総合調査報告書２

塩野博2004『埼玉の古墳　北埼玉・南埼玉・北葛飾』　さいたま出版会

白岡町1964『白岡町史　通史編　上巻』

鈴木敏昭・青木秀雄・青木美代子・西井幸雄・小島糸子1983『皿沼遺跡発掘調査報告書』白岡町教育委員会

橋本　勉1999『戸崎前Ⅱ／薬師堂根Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第218集

蓮田市教育委員会2002『蓮田市史　通史編Ⅰ』

東日本埋蔵文化財研究会2000『東日本弥生時代後期の土器編年』

比田井克仁2001「第５章第１節　集落内部における紐帯の強化」『関東における古墳出現期の変革』Ｐ258～286　雄山閣出版

平岩俊哉1996「古墳時代集落祭祀の一考察」『研究紀要第12号』P17～36（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

平岩俊哉2001「古墳時代集落祭祀とその周辺」『日本考古学の基礎研究』Ｐ215～231茨城大学人文学部考古学研究室

福田　聖2007「Ｖまとめ３．古墳時代について」『久台遺跡Ⅲ』P324～327　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第339集

藤原高志1983『ささら・帆立・馬込新屋敷・馬込大原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第24集

本多達哉・赤澤徳明・青木元邦・岡崎友子1995『大土呂遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第30集福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

本田秀生・岩瀬由美・中尾克彦・西田郁乃2004『金沢市　戸水Ｂ遺跡』石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター

村田章人・藤沼昌泰　2007「後谷遺跡第４次調査報告書」桶川市教育委員会

柳田敏司他　1970「神明貝塚」庄和町文化財調査報告第２集

吉田　稔　1995「修理山遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第158集